

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第194集

梅ノ木沢遺跡 I

(縄文時代以降編)

第二東名No.143-2地点、CR35地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町-3

2008

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第194集

梅ノ木沢遺跡 I

(縄文時代以降編)

第二東名No.143-2地点、CR35地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町-3

2008

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路（第二東海自動車道）は、現在の東名高速道路の混雑解消を目的として建設が計画された、横浜市と名古屋市を結ぶ延長約300kmの高速道路です。静岡県東部地域では、富士市、沼津市、長泉町、裾野市、御殿場市を縦横断し、ちょうど愛鷹山を半周するように道路計画が策定されました。

一方、この愛鷹山南麓は古くから旧石器時代～弥生時代の遺跡が集中する地域として知られており、道路建設予定地内の事前調査が進むにつれて、緊急発掘調査の必要性が増してきました。そこでこれらの遺跡の記録保存のため、静岡県教育委員会の指導のもと、富士市教育委員会、沼津市教育委員会、当財団によって平成9年から発掘調査が開始されました。これらの遺跡発掘調査は事業者をはじめ、多くの方々の協力の中で進められ、現在大きな成果を挙げようとしています。また、発掘調査は一部区間において現在も継続中であります。

さて、梅ノ木沢遺跡は平成12年から発掘調査を始めた遺跡で、長泉町と裾野市の行政区間に位置します。深い谷の中の遺跡からは、縄文時代～旧石器時代の遺物が大変多く出土しました。特に旧石器時代の石斧の集中出土は当時新聞にも発表され、多くの見学者が遺跡を訪れました。この遺跡に対しての関心が非常に高い中で、調査の都合上8年が経過した本年度、本報告をすることが出来ることになったことは、当研究所にいたしましても大変な喜びであります。

2本の沢が流れ、風を避ける日当たりの良い開析谷の中は、発掘調査中も冬には木枯らしを遮り、夏には林を渡る涼やかな風が汗を冷やしてくれました。当時の景観を思い浮かべると、このような土地に人々が好んで集った理由もわかるような気がいたします。本書を皮切りに都合3冊にわたって、当遺跡の報告がなされますが、そのような独特な地理的環境を思い浮かべながらこれらの報告書に目を通していただければ幸いです。

最後になりましたが、事業主体者である中日本高速道路株式会社をはじめとして、発掘調査や資料整理に御協力いただいた皆様方に心より御礼申し上げます。

平成20年9月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 清水 哲

例 言

- 1 本書は静岡県駿東郡長泉町東野字八分平83-6他に所在する梅ノ木沢遺跡（第二東名No143-2地点、CR35地点）の報告書である。
- 2 発掘調査は平成12年度に実施した確認調査の結果を受け、平成13年度第二東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、日本道路公団建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成13年4月から平成15年2月まで実施した。
- 3 資料整理は平成17年4月から実施し、本書は縄文時代早期～奈良・平安時代以降の遺構・遺物を所収した。
- 4 調査担当者は以下のとおりである。

確認調査	平成12年度	調査研究員	岩名建太郎	白鳥直樹	
本調査	平成13年度	調査研究員	岩名建太郎	白鳥直樹	鈴木秀樹
		主任技術員	青嶋邦夫		
	平成14年度	調査研究員	白鳥直樹	主任技術員	青嶋邦夫
資料整理	平成17年度	調査研究員	山下忠男	高野穂多果	
	平成18年度	調査研究員	高野穂多果		
	平成19年度	係長	笹原千賀子		
	平成20年度	係長	笹原千賀子		
- 5 現地調査では、調査補助業務を株式会社シン技術コンサルに、掘削業務を株式会社集組に委託した。
- 6 石器実測の一部を株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 7 石器石材の同定は、当研究所技術員森嶋富士夫が行った。
- 8 出土黒曜石の産地同定は独立行政法人沼津工業高等専門学校教授望月明彦氏に委託した。
なお、分析結果については「梅ノ木沢遺跡Ⅱ」に掲載する。
- 9 本書の執筆は当研究所職員が分担して行った。執筆分担は以下のとおりである。

笹原千賀子	第1章第2節、第II章、第III章第1節1、第2・3節、第VII章
岩名建太郎	第IV章～第VI章
及川 司	第I章第1節
鈴木望江	第III章第1節2～4
- 10 本書の編集は、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 11 遺物は全て静岡県教育委員会が保管している。

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺物・遺構等の位置を表す国土座標値は、すべて日本測地系による。
- 2 調査区の方眼設定は、上記日本測地系（平面直角座標第Ⅷ系）の軸線を基準に、国家座標（X, Y）= (-92510.000, 35100.000) を原点（A, 0）とし、南から北方向へA-AK、西から東方向へ0-19までの10m方眼を設定し、グリッドと称して用いた。
- 3 出土遺物は、それぞれに5桁の遺物番号を付し、上記国土座標と標高値を付して取り上げた。
- 4 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 5 土層名は、本報告第Ⅱ章第2節の基本土層柱状図に表示した名称・記号を使用する。
- 6 本文中の記載に関する略号・略語は特に指定のない限り、以下のとおりである。

火山性噴出物一覧

火山・テラフ名	記号	火山・テラフ名	記号
砂沢スコリア	SNZ	新嵐スコリア	NSC
天城カワゴ平	Kgp	船長丹沢	AT

黒澤石産地一覧

略号	産地	略号	産地	略号	産地
STHG	白滝	八号沢群 HGGs	岩黒	月山群 WOBd	ブドウ沢群
STKY		黒龍の沢群 HGIN		今野川群 WOMS	牧ヶ沢群
KSMm	上土幌	三股群 NTKT	新津	金津群 WOTM	高松沢群
ODAZ	覆戸	安住群 SBIY	新発田	板石群 TSTY	冷山群
AKTS	旭川	薄砂台群 THAY	高取山	甘藷沢群 TSHG	藤科
AKSK		帯光台群 THNH		七尋が群 TSSB	双子山群
NYHK	名寄	布川群 WDTY		黒山群 HINAY	戸ノ湯群
STSD	新十津川	須川群 WDKB		小瀬沢群 HNHJ	畑香群
AIMK	水井川	血川群 WDTK		土屋嶺北群 HNKI	黒野嶺群
TUTI	豊浦	豊泉群 WDTN	前田 (WD)	土屋嶺西群 HNKJ	殿治原群
KDDK	木造	出来島群 WDTM		土屋嶺南群 HNKT	上多賀群
HUHM	彦浦	八雲山群 WDIY		美壽ライト群 AGKT	天城
OGKS		金ヶ崎群 WDHT		古峠群 OKHM	柏峠群
OGWM	男勝	藍本群 KZOB		黒陸島群 OKMJ	久見群
SWFD	諏訪	黒ヶ台群 KZSN	神津島	砂輪崎群 OKMT	箕浦群
					柳群

「産地」とは個別図法によって推定された産地。個別分析と結果が異なるときは*をつけて示す。

推定結果一覧表は「橋ノ木沢遺跡目」に掲載する。

石材一覧

和名	英名	標準資料略号	和名	英名	標準資料略号
玄武岩	basalt	Ba	緑色凝灰岩	green tuff	GT
玄武岩 (多孔質)	vesicular basalt	VBa	頁岩	shale	Sh
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAn	珉質頁岩	siliceous shale	SSh
輝石安山岩	pyroxene andesite	An (Py)	砂岩 (粗粒)	fine-grained sandstone	FSS
安山岩 (多孔質)	vesicular andesite	VA	粗粒斑レイ岩	fine-grained gabbro	FG
黒曜石	obsidian	Ob	輝綠岩	dabase	Dia
チャート	chert	Ch	ひん岩	porphyry	Fo
硬質細粒凝灰岩	hard fine-grained tuff	HFT	ホルンフェルス	hornfels	Hor
珉質粘板岩	siliceous slate	SSI	滑石	talc	Ta

Py:輝石

目次

序
例言
凡例

第I章	調査に至る経緯	
第1節	長泉町内における埋蔵文化財の取り扱い経緯	1
第2節	長泉町内における調査の概要	2
第3節	梅ノ木沢遺跡の調査の概要	4
第II章	梅ノ木沢遺跡の概要	
第1節	地理的・歴史的環境	7
第2節	遺跡の地形と土層堆積状況	11
第III章	縄文時代の遺構と遺物	
第1節	遺構と遺構出土の遺物	16
第2節	遺構外出土の土器	57
第3節	遺構外出土の石器	116
第IV章	弥生・古墳時代の遺構と遺物	
第1節	遺構	144
第2節	弥生・古墳時代の包含層の遺物	145
第V章	奈良・平安時代の遺構と遺物	
第1節	遺構とそれに伴う遺物	150
第2節	奈良時代の包含層の遺物	158
第VI章	中近世とその他の時代の遺構と遺物	
第1節	遺構とそれに伴う遺物	159
第VII章	調査の成果と課題	173

写真図版

挿図目次

第1図	長泉町内の第二東関連調査地点	5	第40図	土坑(9)	52
第2図	富士火山の地形・地質の概略	7	第41図	土坑(10)	53
第3図	周辺の遺跡	9	第42図	土坑内出土遺物	54
第4図	遺跡の現地形と調査区	10	第43図	炉跡	54
第5図	基本土層柱状図	12	第44図	出土土器分類別重量比	57
第6図	土層断面図	13	第45図	包含層出土土器分類別出土状況(1)	57
第7図	住居跡検出状況概念図	15	第46図	包含層出土土器分類別出土状況(2)	58
第8図	1号住居跡と出土遺物	17	第47図	第I群土器出土状況	59
第9図	2号住居跡遺物出土状況	18	第48図	第I群土器(1)	61
第10図	2号住居跡出土遺物	19	第49図	第I群土器(2)	62
第11図	3号住居跡と出土遺物	22	第50図	第II群土器出土状況(a～e類)	63
第12図	3号住居跡出土遺物	23	第51図	第II群a類土器(1)	66
第13図	4号住居跡遺物出土状況	24	第52図	第II群a類土器(2)	67
第14図	4号住居跡出土遺物	25	第53図	第II群a類土器(3)	68
第15図	5号住居跡と出土遺物	26	第54図	第II群a類土器(4)	69
第16図	6号住居跡と出土遺物	27	第55図	第II群b類土器(1)	70
第17図	6号住居跡出土遺物	28	第56図	第II群b類土器(2)	71
第18図	7号住居跡と出土遺物	29	第57図	第II群b類土器(3)	72
第19図	7号住居跡出土遺物	30	第58図	第II群b類土器(4)	73
第20図	8号住居跡と出土遺物	31	第59図	第II群c・d類土器	75
第21図	9号住居跡遺物出土状況	32	第60図	第II群e類土器	76
第22図	9号住居跡出土遺物	33	第61図	第II群土器出土状況(f～h類)	77
第23図	10号住居跡遺物出土状況	34	第62図	第II群f～h類土器	78
第24図	10号住居跡出土遺物	35	第63図	第III群土器出土状況	79
第25図	11号住居跡遺物出土状況	36	第64図	第III群a類土器	79
第26図	礫の出土状況と土坑を伴う集石	37	第65図	第III群b類土器	80
第27図	土坑検出状況概念図	38	第66図	第IV群土器出土状況(c類以外)	81
第28図	集石(1)	41	第67図	第IV群土器出土状況(c類 深鉢)	82
第29図	集石(2)	42	第68図	第IV群土器出土状況(c類 浅鉢)	83
第30図	集石(3)	43	第69図	第IV群a・b・c類土器	86
第31図	集石内出土遺物	43	第70図	第IV群c類土器(1)	87
第32図	土坑(1)	44	第71図	第IV群c類土器(2)	88
第33図	土坑(2)	45	第72図	第IV群c類土器(3)	89
第34図	土坑(3)	46	第73図	第IV群c類土器(4)	90
第35図	土坑(4)	47	第74図	第IV群c類土器(5)	91
第36図	土坑(5)	48	第75図	第IV群c類土器(6)	92
第37図	土坑(6)	49	第76図	第IV群c類土器(7)	93
第38図	土坑(7)	50	第77図	第IV群c類土器(8)	94
第39図	土坑(8)	51	第78図	第IV群c・d類土器	95

第79図	第IV群 d 類土器	96	第111図	敲石・磨石類(8)	138
第80図	第IV群 e 類土器	97	第112図	敲石・磨石類(9)	139
第81図	第IV群 e・f 類土器	98	第113図	台石・石皿類(1)	140
第82図	第V群土器出土状況	99	第114図	台石・石皿類(2)	141
第83図	第V群土器	101	第115図	台石・石皿類(3)	142
第84図	第VI群土器出土状況	102	第116図	弥生・古墳時代の遺構配置と地形	144
第85図	第VI群 a 類土器	104	第117図	12号住居跡	145
第86図	第VI群 b 類土器(1)	105	第118図	弥生・古墳時代の包含層遺物(1)	146
第87図	第VI群 b 類土器(2)	106	第119図	弥生・古墳時代の包含層遺物(2)	147
第88図	第VI群 b 類土器(3)	107	第120図	弥生・古墳時代の包含層遺物(3)	148
第89図	第VI群 b 類土器(4)	108	第121図	奈良・平安時代の遺構配置と地形	150
第90図	第VI群 b 類土器(5)	109	第122図	13号住居跡	153
第91図	第VI群土器底部ほか	110	第123図	13号住居跡竈と出土土器	153
第92図	石器出土状況図	117	第124図	14号住居跡と竈実測図	154
第93図	石鏃(1)	118	第125図	15号住居跡と出土遺物	155
第94図	石鏃(2)	119	第126図	16号住居跡と竈実測図	156
第95図	石鏃(3)	120	第127図	17号住居跡	157
第96図	石錐・スクレイパー	121	第128図	奈良時代の遺物	158
第97図	スクレイパー・楔形石器	123	第129図	中近世その他の時代の遺構配置	159
第98図	石ヒ(1)	124	第130図	溝状道路遺構跡と出土遺物	161
第99図	石ヒ(2)	125	第131図	掘立柱建物跡と柵列	162
第100図	石ヒ・磨製石斧	126	第132図	柵列	163
第101図	打製石斧	127	第133図	円形土坑(1)	164
第102図	打製石斧・石鏃	128	第134図	円形土坑(2)	165
第103図	礫器	129	第135図	円形土坑(3)	166
第104図	敲石・磨石類(1)	131	第136図	円形土坑(4)	167
第105図	敲石・磨石類(2)	132	第137図	小土坑	168
第106図	敲石・磨石類(3)	133	第138図	18号住居跡・溝状遺構	169
第107図	敲石・磨石類(4)	134	第139図	焼土集中地点	170
第108図	敲石・磨石類(5)	135	第140図	平面長方形の土坑と出土遺物	171
第109図	敲石・磨石類(6)	136	第141図	土器の出土状況とグループ化	174
第110図	敲石・磨石類(7)	137	第142図	各接合グループに含まれる代表的な土器	175

挿表目次

表1	第二東名沼津工区組織および構成	3	表7	縄文時代集石計測表	55
表2	長泉地区の発掘調査の概要	3	表8	縄文時代土坑計測表	55
表3	調査工程	6	表9	縄文時代炉跡計測表	55
表4	周辺の遺跡	8	表10	遺構出土土器観察表	56
表5	縄文時代の遺構一覧表	16	表11	遺構出土土器計測表	56
表6	縄文時代住居跡計測表	55	表12	縄文時代包含層出土土器観察表	111

表13	縄文時代包含層出土土器集計表	…	116	表19	奈良・平安時代住居跡計測表	…	152
表14	縄文時代包含層出土土器計測表	…	143	表20	奈良時代包含層出土遺物観察表	…	158
表15	弥生・古墳時代出土遺物観察表(1)	…	149	表21	土坑計測表	…	167
表16	弥生・古墳時代出土遺物観察表(2)	…	149	表22	中近世その他の時代出土遺物観察表	…	167
表17	弥生・古墳時代住居跡計測表	…	149	表23	各個体別土器出土状況総括表	…	174
表18	奈良・平安時代遺構出土遺物観察表	…	152				

写真図版目次

図版 1	1号住居跡	32号土坑
	2号住居跡	51号土坑
図版 2	5号住居跡	59号土坑
	7号住居跡	図版 9 13・14号住居跡
図版 3	8号住居跡	16・17号住居跡
	9号住居跡	図版10 15号住居跡
図版 4	10号住居跡	溝状道路遺構
	11号住居跡	図版11 掘立柱建物跡
図版 5	9号住居跡石囲炉	円形土坑 (64号～69号)
	10号住居跡石囲炉	図版12 1号住居跡出土土器
	11号住居跡石囲炉	住居跡出土石鏃
	9号住居跡土器出土状況 (40)	2号住居跡出土土器
	第II群土器出土状況 (109)	3号住居跡出土土器
	4号住居跡土器出土状況 (18)	図版13 4号住居跡出土土器
図版 6	1号集石	6号住居跡出土土器
	2号集石	図版14 8号住居跡出土土器
	3号集石	7号住居跡出土土器
	4号集石	図版15 10号住居跡出土土器
	13号集石	5号住居跡出土土器
	14号集石	9号住居跡出土土器
図版 7	1号土坑	10号住居跡出土石斧
	5号土坑	9号住居跡出土陰石
	11号土坑	図版16 第I群d類土器
	13号土坑	第I群b・c類土器
	15号土坑	図版17 第II群a類土器(1)
	22号土坑	第II群a類土器(2)
	24号土坑	図版18 第II群a類土器(3)
	29号土坑	図版19 第II群b類土器(1)
図版 8	14号土坑	図版20 第II群b類土器(2)
	21号土坑	第II群b類土器(3)
	45号土坑	図版21 第II群c類土器
	31号土坑	第II群d・f～h類土器

- 図版22 第III群 a 類土器
 第III群 b 類土器
 第II群 e 類土器
- 図版23 第IV群 f 類土器
 第IV群 a 類土器
 第IV群 b・c 類土器
- 図版24 第IV群 c 類土器 (1)
 第IV群 c 類土器 (2)
- 図版25 第IV群 c 類土器 (3)
 第IV群 c 類土器 (4)
- 図版26 第IV群 c 類土器 (5)
 第IV群 c 類土器 (6)
- 図版27 第IV群 c 類土器 (7)
- 図版28 第IV群 e 類土器
 第IV群 d 類土器
- 図版29 第V群 a 類土器 (1)
 第V群 a 類土器 (2)
 第V群 b・c 類土器
- 図版30 第VI群 a 類土器 (1)
 第VI群 a 類土器 (2)
 第VI群 b 類土器 (1)
- 図版31 第VI群 b 類土器 (2・外面)
 第VI群 b 類土器 (2・内面)
- 図版32 第VI群 b 類土器 (3)
 第VI群 b 類土器 (4・注口土器)
 第VI群 a 類土器
- 図版33 第VI群 b 類土器
 第VI群 b 類土器底部網代痕
- 図版34 石斧・石匕
 石鏃・石錐・スクレイパー類
- 図版35 蔽石・磨石
 台石・石皿
- 図版36 13号住居跡出土土器 (1)
 13号住居跡出土土器 (2)
 13号住居跡竈出土土器
 包含層出土土器
 石鏃
 刀子形

第1章 調査に至る経緯

第1節 長泉町内における埋蔵文化財の取り扱いの経緯

昭和62年東名・名神高速道路の混雑緩和の対策として、道路審議会において、第二東名・第二名神高速道路の建設が建議された。

平成元年、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、神奈川県横浜市から愛知県東海市に至る第二東名高速道路（以下、第二東名）が計画された。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置し、静岡県教育委員会文化課（以下、文化課）もこの協議に参加した。

平成3年、第二東名の基本計画については文化財を含む環境調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図り、9月24日、静岡県の長泉町から引佐町（現浜松市、以下同じ）に至る都市計画の決定が告示された。

平成4年、環境調査と並行して埋蔵文化財の分布状況も把握された。第二東名建設に係る調査の指示を受けた日本道路公団（現中日本高速道路株式会社、以下同じ）は、2月17日付けで文化庁にこれを知るとともに、5月11日付けで日本道路公団東京第一建設局長（以下、建設局長）から静岡県教育委員会教育長宛（以下、県教育長）に、第二東名建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査が依頼された。また、8月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長（以下、事務所長）から県教育長宛に、「第二東名自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」が照会された。これを受けて県教育委員会は、9月29日に関係市町村教育委員会の関係者を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を設けるとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在について、当該市町教育委員会に照会し、当該教育委員会から回答を得た。

平成5年、県教育委員会はこの回答をもとに協議を行い、結果を3月18日付けで県教育長から事務所長宛に回答した。この時点で調査対象箇所は136箇所、調査対象面積は1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間（第12次区間）については、11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局及び静岡県土木部高速道路建設課、県教育委員会文化課（以下、文化課）で、埋蔵文化財調査の進め方を協議した。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について検討するとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、当研究所）に委託することが確認された。しかし、短期間に膨大な調査を行うための体制作りが課題となった。

平成6年、文化課が調査対象箇所の状況を調査するとともに、前年度に告示されたパーキングエリア、サービスエリア建設予定地内の踏査を当該市町教育委員会に依頼した。その結果、調査対象地は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となった。

一方、長泉町から御殿場驛門の13.4km（第13次区間）については、平成6年に埋蔵文化財の所在の有無に関する照会が出され、市町教育委員会によって踏査が行われた。同区間については平成9年に施行命令が出されている。

平成7年、路線の一部で境界杭が打設され、埋蔵文化財調査の開始に見通しが出てきた。こうした中で、日本道路公団静岡建設所と文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議することとなり、12月13日に第1回会議が行われた。

平成8年、第二東名に係る埋蔵文化財調査に向けて建設局と県教育委員会は、9月24日付けで埋蔵文

化財の取り扱いに関する確認書を締結した。さらに調査実施機関である当財団を加えた三者は、9月25日付けで第二東名に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について定めた協定書を締結し、年度内に調査を始めることとなった。

確認調査の結果を受け、平成9年度に本格的に県内各地で発掘調査を開始した。これ以降、原則として第二東名の本線、サービスエリア、パーキングエリア、廃土処分場については、当財団が調査を実施、工事用道路、取り付け道路部分については当該市町教育委員会が対応することとし、現在（平成20年）に至っている。

長泉町における第二東名調査区間は第12次区間、第13次区間に分かれており、都合2回に分けて遺跡の踏査が行われているほか、この他に工事用道路建設に伴って個別に踏査、確認調査が行われた。この結果、平成11年から地点数にして9地点、遺跡数にして8遺跡の本調査が行われ、現在も進行中である（表2参照）。

第2節 長泉町内における調査の概要

1 現地調査の体制

長泉地区の調査は、平成9年度から確認調査を実施し、本調査は平成11年から概ね上遺跡を皮切りに開始され、現在も部分的に行っている。

調査は、長泉町内に設けた事務所を基点として文化課の調査指導のもと文化財保護法第92条によって行われた。調査体制は別表に示すとおりであるが、広大な面積を短期間で調査を終了させるために、測量作業や掘削作業を委託事業として外注した。

また、現地調査を優先する方針が出される中で、膨大な遺構・遺物を効率よく整理し、混乱を回避するために、基礎的な整理作業（遺物洗浄・注記）を基礎整理棟にて一括して行うこととなった。

2 確認調査の方法

古期富士、新期富士の火山灰が厚く堆積する愛鷹山麓は、多いところで10以上の文化層が一遺跡で確認されることがある。文化層の枚数は調査の期間等に大きく影響を与えるため、確認調査において下層の状況を知ることは非常に重要である。また、長泉町の第二東名建設予定地付近は、下層の調査例が少なく、周辺の遺跡の状況から、予定地の内容を予想することが困難であるため、今回の調査においては確認調査の重要度はさらに増した。

そのような中、確認調査の方法としては調査区全体に10×10mのグリッドを設定し、1グリッドに対して1箇所の試掘坑（3×3m）を設定する全域のサンプリング方式をとり、原則として表土以外は人力で掘削し、遺構・遺物の状態を確認した。

なお、旧石器時代の包含層が深く法令上垂直に掘削することが不可能な場所については、5×5mのテストピットに犬走りを設け、十分な安全対策を取った上で下層の調査を実施した例もある。この場合十分な調査面積を確保することが難しく、遺跡の内容を確認することは不可能になるため、文化課の指導により本調査内で下層の内容確認のためのテストピット調査を実施している場合もある。

3 本調査の方法

高速度路線のみならず、工事用道路や工事用廃土処理場を含めた今回の発掘調査対象地は非常に広大なものとなった。このため、本来であれば同一遺跡内を一括して調査を行うことが最適であるが、用地交渉、工事の進捗状況に応じて調査を進めていく必要性が生じた。特に、工事用道路や橋脚部分につ

表1 第二東名沿津工区組織および構成

	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
所長	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	斉藤 忠	清水 哲
副所長	山下 晃	山下 晃	山下 晃	象田英夫	象田英夫	象田英夫	—	—	—	—
常務理事	伊藤友雄	伊藤友雄	象田徳幸	象田徳幸	象田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫	清水 哲	清水 哲
事務局長	—	—	—	—	—	—	—	—	—	清水 哲
事務局長(仮) 次長	—	—	—	—	—	—	—	—	大場正夫 佐野五十二 及川 司	大場正夫 及川 司 稲葉保幸
総務部 (旧一般事務課)	総務部長	伊藤友雄	伊藤友雄	象田徳幸	象田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫	—	—
	総務部次長	—	—	—	—	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	—
	総務課長	杉本敏雄	杉本敏雄	木杉昭一	木杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫
	経理部門長	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	—	—
	担当	総務係長 田中重代	稲葉保幸 田中重代	稲葉保幸 山本広子	稲葉保幸 山本広子	稲葉保幸 山本広子	稲葉保幸 佐藤美奈子	稲葉保幸 佐藤美奈子	稲葉保幸 佐藤美奈子	稲葉保幸 佐藤美奈子
	会計係長	大石高二	大橋 薫	大橋 薫	大橋 薫	野島尚紀	野島尚紀	野島尚紀	石川和枝	杉山有枝
調査研究部 (旧一般調査課)	部長	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	石川基久	石川基久	—	—
	調査研究部次長	佐野五十三	及川 司	及川 司	栗野克巳 中嶋徳夫 佐野五十三	栗野克巳 中嶋徳夫 佐野五十三	栗野克巳 中嶋徳夫 佐野五十三	栗野克巳 中嶋徳夫 佐野五十三	佐野五十三 及川 司 佐野五十三	—
	資料課長	佐野五十三	大石 塚	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	—	—	—
	調査課長	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	調査研究一課長	及川 司	及川 司	及川 司	中嶋徳夫	中嶋徳夫	中嶋徳夫	中嶋徳夫	—	—
	調査研究二課長	遠藤善和	藤原修二	藤原修二	佐野五十三	佐野五十三	佐野五十三	佐野五十三	—	—
	調査研究三課長	—	—	坂塚晴夫	藤原修二	足立順司	足立順司	—	—	—
	調査研究四課長	—	—	—	—	足立順司	—	—	—	—
	保存地理室長	—	—	西尾太二	西尾太二	西尾太二	西尾太二	西尾太二	西尾太二	西尾太二
	事業係長	—	—	—	—	—	—	—	—	—
事業担当	—	—	—	—	—	—	—	中鉢京子	中鉢京子	

表2 長泉地区の発掘調査の概要

地点名 (No.)	遺跡名	確認調査	本調査	本調査対象 面積 (㎡)				
1	笹塚上	その1	平成10年1月～3月	I期	平成11年4月～平成12年3月	14,495		
		その2	平成12年1月、2月	II期 III期 IV期	平成12年4月～6月 平成12年5月～6月 平成13年11月～12月	4,045 4,040 207		
2	西山	平成11年10月～11月	平成12年1月～3月	3,920				
140	向田A	平成13年3月	平成13年4月～平成14年2月	9,000				
141	細尾	その1	平成12年7月～8月	I期	平成13年1月～平成13年3月	6,902		
		その2	平成12年11月	II期	平成13年4月～平成14年3月	10,798		
		その3	平成13年2月～3月	—	—	—		
141-2	八分平B	その1	平成13年12月～平成14年1月	I期 II期	平成13年4月～7月 平成14年1月～7月	1,500 4,000		
142	富上石	その1	平成12年11月～平成13年1月	I期	平成13年10月～平成14年3月	7,100		
		その2	平成13年2月～3月	II期	平成14年4月～平成15年3月	10,775		
		その3	平成13年7月～8月	III期	平成15年4月～平成16年3月	14,973		
		その4	平成14年4月～7月	IV期 V期 VI期	平成16年4月～平成17年1月 平成19年11月～平成20年3月 調査中	15,168 2,855		
143	京野	その1	平成12年10月～平成13年3月	I期	平成13年12月～平成14年3月	3,308		
		その2	平成14年8月～9月	II期 III期 IV期 V期	平成14年9月～平成15年3月 平成15年4月～平成16年3月 平成16年4月～平成17年3月 平成19年9月～平成19年11月	6,759 13,475 9,792 851		
		本調査は各遺跡単位で実施						
		CR35	京野/梅ノ木沢	その1	平成12年9月～平成13年3月	I期	平成13年4月～平成14年3月	3,175
		143-2	梅ノ木沢	その1	平成12年9月～平成13年3月	II期	平成14年4月～平成15年2月	5,150

いては早急に工事を進める必要性が高まったため、文化課の調整によって工事工程にあわせた工区を設定して調査を実施し、終了した時点で工事側へと引き渡していく方式を取った。よって、同一遺跡内であっても、複数期における調査が漸続して行われる結果となった。

このような中で、図面等の整合性を得るために遺物や遺構については国家座標（日本測地系）を用いて測量を行い、後日貼り合わせる作業を行っている。また、遺跡の全景においても俯瞰写真はデジタルによる合成作業を行った。

4 資料整理の方法

資料整理は、現地の調査がほぼ終了した平成17年度から本格的に着手した。ただし、発掘調査から最大で9年が経過した遺跡も存在し、調査担当者が人事異動によって当組織に在籍しないものが大半である。遺構の検討などは、当時の調査者の所見を最大限生かしつつ、遺物の情報等を合わせた上で資料整理担当者の責任のもと再構成する作業を進めた。

またこの間に、国土地理院において国家座標の日本測地系から世界測地系への移行が行われたが、作業の混乱を避ける必要性から、当調査における報告は全て日本測地系に統一して行うこととする。

更に、現地調査中は発掘地点名（№）で遺跡を呼称してきたが、調査終了後、結果を受けて長泉町教育委員会と文化課との協議の結果、地形、遺跡の内容等により新規に遺跡の範囲、あるいは名称の変更が行われた。よって報告はこの遺跡名で行う。地点名と遺跡名の対応関係は表2のとおりである。

第3節 梅ノ木沢遺跡の調査の概要

1 調査の経緯

梅ノ木沢遺跡は、本線及び工事用道路建設工事に伴って、現地踏査の結果新たに発見された遺跡である。調査に先立って行われた周辺の踏査において、対象地内に遺物の散布が見られた為に、建設局、長泉町教育委員会、文化課と協議の結果、平成12年度に当研究所が確認調査を実施した。この確認調査の結果古代～旧石器時代の遺物が多数検出され、翌平成13年4月から本調査を実施した。

なお、調査段階では本線部分143-2地点と工事用道路CR35地点の2地点に分けて調査を実施したが、調査の結果、地形や遺跡の性格等からCR35地点を2分割し、梅ノ木沢遺跡と東野遺跡として登録し報告することとした。

2 現地調査の方法と経過

確認調査は平成12年10月より隣接する№143地点とあわせて実施した。その結果、東西グリッドAGライン以北においては耕作等の影響により縄文時代以降の包含層が失われていること、また、南部分は開折作用によって休場層以下旧石器時代の包含層が失われ、旧梅ノ木沢の河床が露出するが、他の部分については良好な形で遺跡が保存されていることが判明した。

この結果を受け、平成13年4月より本調査を実施した。調査は、表土・攪乱土を重機によって除去した後、休場層まで全面調査を行った。またこの時点で約10mごとにテストピットを設定し、確認調査の際に安全上問題があって実施できなかった下層遺物の有無を確認した後、遺物・遺構を検出した地区、層位を重機によって拡張し、人力によって精査する作業を行った。

この調査の過程で、BBVにおいて局部増製石斧が複数まとまって出土し、極めて重要な遺構が残っている可能性が高くなった。これにより調査を慎重に進める必要性が高まり、建設局と文化課との協議の結果、当該地に建設を予定していた工事用道路（CR36）を調査区の南半部に迂回させて建設をする



第1図 長泉町内の第二東名調査調査地点

こととなった。本発掘調査はその後建設工事工程との調整の中で進められ、平成15年3月に全ての調査を終了した。

3 資料整理の方法と経過

本遺跡の資料整理は、現地調査優先の方針の中で、調査終了後2年間掘え置かれ平成17年度に再開した。調査時に一部の遺物の洗浄、注記作業等が終了していたが、発掘調査により重要かつ膨大な遺物・遺構が検出されていたため、基礎整理作業からの再開となった。

報告書の構成は、遺跡全体の性格を考え、古代～縄文時代早期までの成果をまとめたもの1冊（「梅ノ木沢遺跡Ⅰ」）、旧石器時代・縄文時代草創期を中心としたもの2冊（「梅ノ木沢遺跡Ⅱ」・「梅ノ木沢遺跡Ⅲ」）、の全3分冊とすることとし、平成17年・18年度は縄文時代以降の出土遺物の図化作業と、注記、図面整理などの基礎整理作業を中心に行った。平成19年度はこれらの成果に基づき、縄文時代の遺構を中心とした検討作業を行った。また、旧石器時代の遺物の接合作業なども開始している。

縄文時代以降の遺構図面については、調査時に委託業務として部分図を作成しており、これをもとにIllustratorで編集し作成した。遺物の分布図は、この遺構図に遺物のドットマップを重ねる形で作成している。

黒曜石の産地同定については、独立行政法人沼津工業高等専門学校教授望月明彦氏により、旧石器時代の出土遺物を中心に分析が行われている。分析の成果については、旧石器時代編に掲載する予定である。また、年代測定等の自然化学分析についても同様に次号以降に報告する。

さて当遺跡では、整理作業を行っていく段階で、調査時に住居跡や土坑等の可能性があるとして注意された落ち込みに関して、再度1基ごとの遺物垂直分布・接合状態、土層堆積状況等を検討した。その結果、直下の遺構に対してレンズ状堆積を示していない遺物の検出状況や、床直上の遺物と考えられていたものが、一定のレベルを保ったまま住居外へ分布接合するような状況が明らかになってきた。また、明らかに地割れによる落ち込みも複数確認された。よって当時の調査担当者の了解の下、調査時に明らかに遺構として認識できた5基の住居跡と、整理段階で写真、出土遺物等の分布と矛盾のなかった遺構のみを報告することとした。よって、調査中に行われてきた遺跡の内容に関する発表と、当報告に違いが生じているが、最終的な成果はこの報告書にある。これによって、写真資料と図面に整合が取れない遺構等の記載が生じているが、この場合は図面情報を優先としたい。

なお、現地での所見については、今後の再検討の可能性もあるため、遺物出土地点のデータを含め全ての資料を教育委員会にて保管することとした。

表3 調査工程

	H22年度	H13年度	H14年度	H15年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度
発掘調査	発掘調査								
		本調査							
資料整理				基礎整理	基礎整理				
						縄文時代整理作業			
									旧石器整理作業

第Ⅱ章 梅ノ木沢遺跡の概要

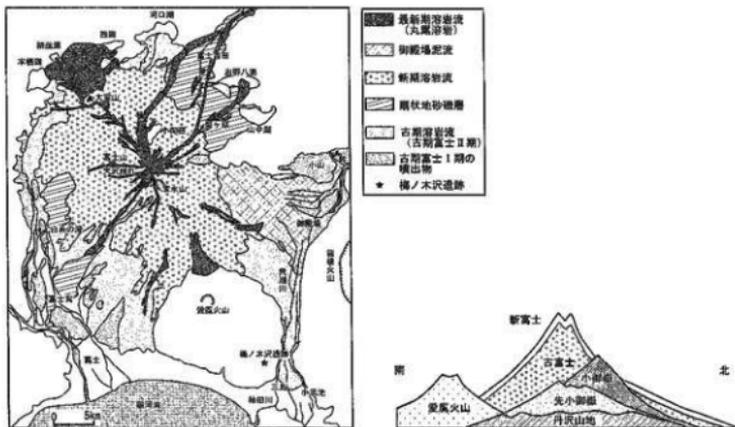
第1節 地理的・歴史的環境

本遺跡が所在する長泉町は北側を裾野市、西側を沼津市、南側を清水町に接し、北西に富士山を望み、町のほぼ中央を黄瀬川が東西に流れる。

黄瀬川を挟んで北側の愛鷹山南麓は、富士山を起源とするテフラが厚く積もる地域であり、愛鷹ローム層と呼ばれている。人類遺跡が残されているローム層は上部ローム層と呼ばれ、関東ローム層の立川ローム層と対比されている。このローム層の層厚は地形によって異なるが、沼津市や長泉町の西側では3～6mもあり、ローム層形成の主たる要因である富士山の火山活動が、人類の歴史に及ぼした影響は少なくないことが容易に想像できる。

さて、この富士山は複数の火山体が積み重なり、崩落を繰り返して現在の形になっているようで、上部ローム層の起源は古富士火山とされている。古富士火山の活動についてはいろいろと意見が分かれるところであるが、遺跡に直接関わるここでは、約25,000年前以降に古富士泥流と呼ばれる泥流が多発したとされている。この泥流の分布は富士宮や小山町にあり、愛鷹山南東部には直接の被害はなかったようである。この後、大規模な溶岩の噴出を伴う噴火があったのは更新世末～完新世初期のことで、およそ17,000年前以降のこととなる。この溶岩は数回にわたって噴出しているが、愛鷹山に阻まれて西は芝川町から吉原へ注ぎ、東側は裾野、御殿場から黄瀬川を南下して三島を通過、狩野川を遡って静岡山地によって南下を阻まれる。溶岩流（芝川溶岩）の直上には、縄文時代草創期の集落遺跡として著名な芝川町の大鹿窪遺跡が立地する。

爆発的噴火中断期に形成されたのが腐食質の火山灰土である富士黒土層で、少量ずつ降り積もる火山灰が温暖化した気候の影響で腐食土化したものであると言われており、縄文時代早期～前期の遺跡が包蔵される。その後、約2,900年前に富士山の大規模な山体崩壊によって起った御殿場泥流は、愛鷹山と箱根火山の間を流下し、沼津・三島に注ぎ込んだ。現在平野部には、前述の溶岩流を覆うようにこの泥



第2図 富士山の地形・地質の概略 (2006町田洋他を一部改変)

流が堆積している。

沼津市～長泉町にかけて広がる愛鷹山南麓の丘陵地は、前述の溶岩や泥流の被覆を受けていないため、表土下に愛鷹ローム層が厚く堆積し、旧石器時代～弥生時代の遺跡が集中する地域となる。旧石器時代の遺跡についてはその記述を第2分冊目に譲るとして、縄文時代以降の町内の遺跡を概観する。

縄文時代草創期の遺物は、槍先形尖頭器や有舌尖頭器が池田B遺跡、鉄平遺跡等の丘陵地の遺跡で出土しているが、土器の出土は報告されていない。ただ、細尾遺跡において草創期の押圧縄文系の土器が採集されているようだが詳細は不明である。早期は、燃糸文土器・押型文土器が平畦遺跡、陣場上遺跡などで出土しているほか、下吉井式、木鳥式の住居跡が桜畑上遺跡、池田B遺跡、鉄平遺跡、中奉遺跡などで検出されている。また、県立がんセンター建設に伴って調査が行われた東野II橋下遺跡では、関山、神ノ木、有尾、上ノ坊式土器がまとまって出土し、同時期の住居跡を11基検出した。

中期になると桜畑上遺跡、八反田後遺跡などで勝坂式期の集落が検出されており、未報告であるが桜畑上遺跡では環状集落も確認されている。後・晩期では遺跡の数自体の減少が見られ、住居跡の検出はないが追平B遺跡において清水天王山式の上器が出土している。

さて、愛鷹山麓には弥生時代末～古墳時代初頭の集落が集中するが、町内を流れる桃沢川を境に西側への展開を殆ど見せないのが特徴となっている。そのため長泉町での弥生時代集落遺跡は上野遺跡のみであり、黄瀬川段丘上でも大平遺跡で竅穴住居1基を検出しているのみである。また、古墳時代の集落に至っては、桜畑上遺跡で竅穴住居2基が検出されるに留まっている。

御殿場泥流を開析してつくられた黄瀬川扇状地の段丘上には、古墳群や奈良・平安時代の集落が分布する。古墳時代の遺跡は、かつて「土狩五百塚」と呼ばれたように、現在の御殿場線から東海道線沿線部周辺の地域に、数多くの横穴式石室墓が存在していた。しかし、近年の開発行為によって現在ではその殆どが姿を消している。その中で平成15年から調査された原分古墳からは、金銅製の馬具や象嵌が施された太刀などの副葬品が出土しており家型石棺も確認された。現在この古墳は隣地に復原移築されている。また、前述のとおり当該期の集落遺跡の検出はない。

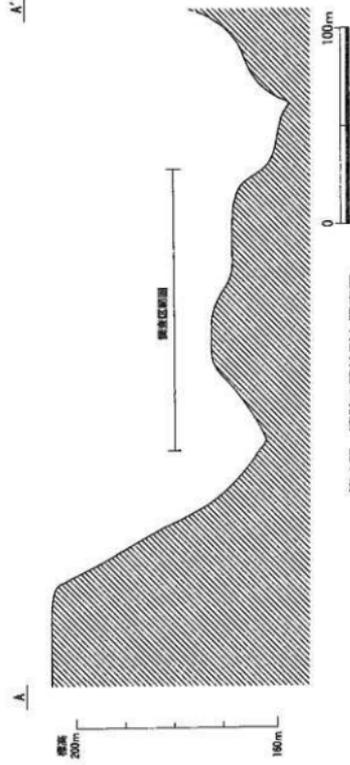
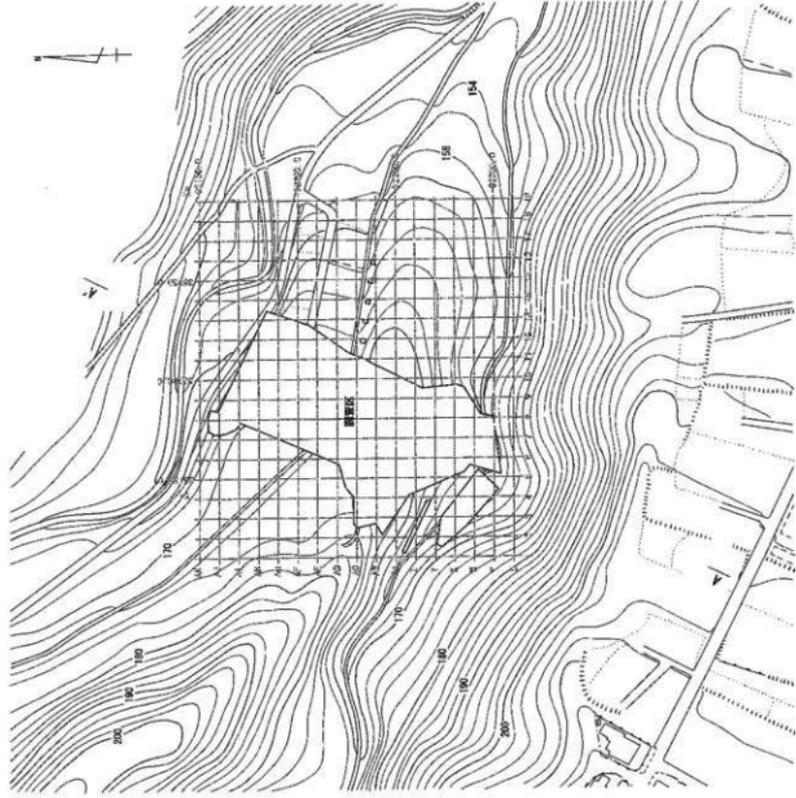
奈良・平安時代の遺跡には、黄瀬川扇状地上の天神原遺跡や的場遺跡があり、住居跡や独立柱建物跡を検出している。特に天神原遺跡からは、墨書土器や須恵器硯などが出土しており、東約1kmに位置する伊豆国同分寺へのルート上の遺跡として注目されている。

表4 周辺の遺跡

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳
★	柳ノ木沢遺跡	○	○	○	○		18	茶木原遺跡	○	○		
1	池田B遺跡	○	○			○	19	上山地石遺跡				
2	鉄平遺跡		○				20	上松沢平遺跡		○		
3	平畦遺跡	○	○				21	寺林遺跡	○	○		
4	陣場上遺跡	○	○				22	寺林南遺跡		○		
5	桜畑上遺跡	○	○		○		23	桜畑下遺跡		○		
6	中奉遺跡	○	○				24	柏原遺跡	○	○		
7	東野II橋下遺跡		○				25	清水跡北遺跡				○
8	八反田後遺跡		○				26	土手原南遺跡			○	
9	追平B遺跡	○	○				27	上ノ敷古墳群				○
10	上野遺跡	○	○	○		○	28	尾尻遺跡		○		
11	大平遺跡			○			29	下土狩古墳群				○
12	原分古墳				○		30	的場古墳群				○
13	天神原遺跡					○	31	野台南遺跡	○	○		
14	的場遺跡					○	32	イタク木遺跡	○	○		
15	竹原遺跡					○	33	野台遺跡	○	○		
16	柳ノ木平遺跡		○				34	西願寺遺跡	○	○		
17	柏葉沢遺跡	○	○									



第3図 周辺の遺跡 (1/25,000 表4と対応)



第4図 遺跡の現地形と調査区

第2節 遺跡の地形と土層堆積状況

1 地形の概要

梅ノ木沢遺跡は、現在は南側に流れる小川によって開析され（休場層降灰直前）、低い尾根状を呈するが、上部ローム堆積以前に梅ノ木沢川によって開析された沢の段丘上に立地していると考えられる。よって、遺跡を挟んだ兩岸の尾根最上部は標高約200m程度で、縄文時代の集落を検出した平坦部分は標高約175mと比高差が約25mあるにもかかわらず、上部ローム層はほぼ水平な堆積を示している。また南側については、休場層が堆積する直前の約1万数千年前に、沢によって再び開析されているようで、確認調査の際には休場層の下で河床礫層を確認している（W-4グリッド付近）。

遺跡の土層堆積については、資料整理を進めていく段階で10層（FB層）から18層（YLL層）において混乱が生じていることが判明した。調査地内に何段階かの開析と断層が認められ、土層の不整合があることが判明したためである。しかし現段階では如何ともし難く、修正も不可能なため、本報告書では遺物の出土層位等を含めて現地の見所をそのまま使用し一覧表として掲載する。

2 基本層序

梅ノ木沢遺跡の土層堆積は、基本的に愛鷹・箱根基本層序の中で理解することができる。以下に上層よりその特徴を記載する。

1層は表土である。黒色土で締りがない。部分的に表土直下に同じく黒色土のやや締りのある土層を確認できた場所もあるようである（2層）。この層からは古墳時代～奈良時代の土器が出土している。

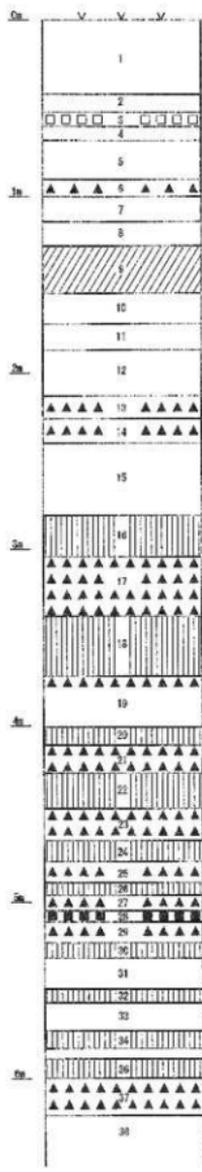
3層は新期スコリア層と呼ばれる層で、黄褐色・赤褐色スコリアを含む。4層は砂沢スコリアと考えられる赤褐色スコリアを含む黄褐色土である。5層はカワゴバミスと考えられる白色バミスが多く含む暗褐色土で、現地指導を受けた山梨学院大学上杉陽教授によれば、伊勢原土方（バミス）を下部を含む。主に縄文時代後期～中期の土器を包含していた。9層は暗褐色土で、所謂富士黒土層（FB）と呼ばれている。谷部においてはスコリアが少なく粘性の少ない上層と、赤色スコリアを含み粘性がある下層に分層することが可能である。早期の土器を包含する。以下10層の漸移層を挟んでローム層となる。

11層～15層は褐色土で、休場層に相当する。通常休場層はそれに含まれるスコリアの量からYLU、YLM、YLLの3層に分層されてきたが、当遺跡では13層、14層でスコリア層が検出されたため、上からYL1～YL5と仮に番号を付して報告する。草創期の槍先形尖頭器が出土しているほか、旧石器時代のナイフ形石器等も出土している。

16層～18層はスコリア質土で、褐色のブロック状に含まれるスコリア層（SC1）によってBB0とBB1に分層できる。19層の褐色土はニセローム層で、スコリアの含有量が多い上層（NLa）と少ない下層（NLb）に分層することができる。下層にATのパッチを含む。

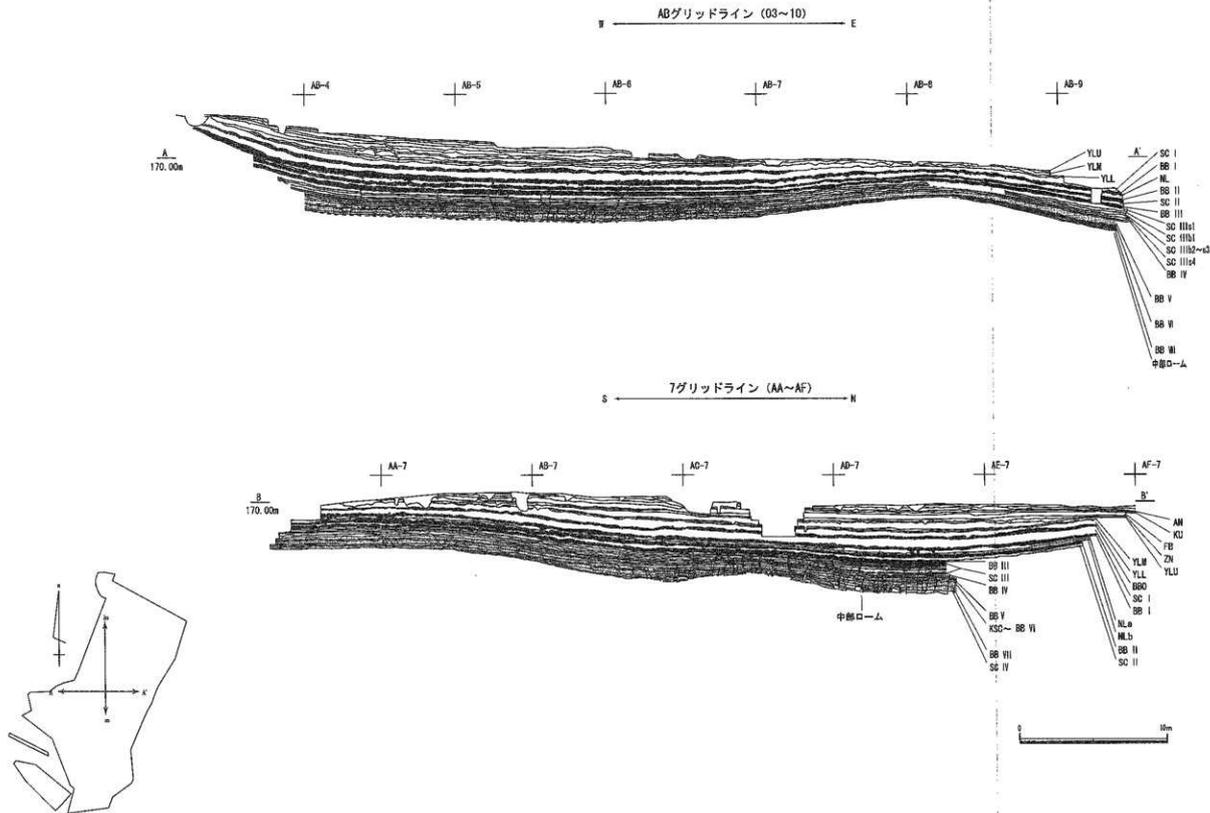
23層～29層は第Ⅲスコリア帯と呼ばれるスコリア質土である。21層以上のスコリア層に比べ黒色～赤色の直径約5mmのスコリアが増え、黒褐色のラビリを含む。SCⅢb1、SCⅢb2と呼ばれる2枚の黒色帯もロームというよりはむしろスコリア層に近く、SCⅢs4と呼ばれるスコリア層は場所によってはスコップの刃も通さない非常に硬いスコリア集中層となる。

30層～36層は暗褐色土である。通常黒色帯とスコリア層が互層となるが、当遺跡では黒色の発色が殆どなく、スコリア層によって分層した。よって第Ⅴ黒色帯～第Ⅶ黒色帯については、相当層と記載したい。37層は暗褐色土で赤褐色スコリア、黒褐色ラビリを含む。部分的に非常に硬いスコリアのブロックを含むことがあるが、このスコリア層が第Ⅳスコリア層と呼ばれているものかどうかは不明である。



番号	層序	広業・材料名・標準寸法と略号	色別記号	貼付	張り	書名	
1	(灰土)		10YR2/2	裏	中平直	断熱用白色スクリアを含む。貫通上ブロックをわずかに含む。	
2	黒色土		10YR2/7	断	直	断熱用白色スクリアを含む。	
3	緑色土		10YR4/5	断	直	断熱用スクリアと等量程度の白色パミスを含む。貫通スクリア、断熱用白色スクリアを含む。	
4	黄褐色土		7.5YR4/3	断	直	赤褐色スクリア(緑土スクリア)を含む。褐色ラブリを多く含む。	
5	黄褐色土		10YR4/4	中平直	直	カリゴパミスと等量程度の白色パミスを多く含む。断熱用白色スクリアを含む。断熱用白色スクリアをわずかに含む。	
6	黄褐色土		7.5YR4/4	中平直	直	赤褐色スクリアを含む。	
7	断熱色土	断熱色土層	AN	10YR3/4	中平直	赤褐色スクリアをわずかに含む。	
8	断熱色土	断熱土層	KU	7.5YR4/6	直	赤褐色スクリアをわずかに含む。	
9	断熱色土	断熱土層	FB	7.5YR3/4	直	赤褐色スクリアをわずかに含む。	
10	断熱色土	断熱層	ZN	7.5YR4/6	断	赤褐色スクリアを含む。	
11	断熱色土	断熱層	YLU	7.5YR3/6	断	ローム質土。断熱色スクリアを含む。	
12	断熱色土	断熱層	YLD	7.5YR3/6	断	赤褐色スクリアを含む。断熱色スクリアをわずかに含む。	
13	断熱色土	断熱層	YLS	7.5YR3/6	断	断熱色スクリア質土。赤褐色スクリアを少量に含む。	
14	断熱色土	断熱層	YLA	7.5YR4/6	断	断熱色スクリア質土。断熱色、赤褐色スクリアを少量に含む。	
15	断熱色土	断熱層	YLS	7.5YR4/6	断	断熱色スクリアを含む。断熱色スクリアをわずかに含む。断熱色スクリアを含む。	
16	断熱色土	断熱層	BGS	7.5YR3/4	断	断熱色スクリア、断熱色スクリアを含む。	
17	断熱色土	第1スクリア層	SC I	7.5YR3/4	全直	スクリア質土。断熱色スクリア、赤褐色ラブリを含む。断熱色ラブリを多く含む。	
18	断熱色土	第1断熱層	BI I	7.5YR3/4	断	断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
19	断熱色土	ニセローム層	NL	10YR3/8	断	中平直	赤褐色スクリア、断熱色ラブリ、断熱色ラブリを含む。1層はローム質。
20	断熱色土	第2断熱層	BB I	7.5YR4/6	断	赤褐色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
21	断熱色土	第2スクリア層	SC II	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色スクリアを多く含む。断熱色ラブリを多く含む。	
22	断熱色土	第2断熱層	BI II	7.5YR3/4	断	明赤褐色スクリアを含む。断熱色ラブリをわずかに含む。	
23	断熱色土	第2スクリア層	SC III 1	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色スクリアを多く含む。断熱色ラブリを含む。白色パミス、断熱色ラブリをわずかに含む。	
24	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III b 1	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。白色パミスを含む。	
25	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III c 2	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色スクリア、断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
26	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III b 2	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色ラブリ、断熱色スクリアを含む。白色パミスをわずかに含む。	
27	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III c 3	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色ラブリを多く含む。断熱色スクリアを含む。白色パミスをわずかに含む。	
28	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III c 4	7.5YR3/6	断	スクリア質土。断熱色ラブリ、赤褐色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
29	断熱色土	断熱色スクリア層	SC III c 5	7.5YR4/6	断	スクリア質土。断熱色ラブリ、断熱色スクリア、断熱色スクリアを含む。	
30	断熱色土	断熱色スクリア層	BIV	7.5YR4/6	中平直	断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
31	断熱色土	スクリア層		7.5YR4/6	中平直	スクリア質土。断熱色ラブリを多く含む。断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
32	断熱色土	断熱色スクリア層	BEV	7.5YR4/6	断	断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。	
33	断熱色土	スクリア層		7.5YR4/6	中平直	スクリア質土。断熱色スクリア、断熱色ラブリ、断熱色スクリアを含む。	
34	断熱色土	断熱色スクリア層	BEVI	7.5YR4/6	中平直	断熱色スクリア、断熱色スクリアを含む。断熱色ラブリをわずかに含む。	
35	断熱色土	スクリア層		7.5YR4/6	中平直	スクリア質土。断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。断熱色スクリアをわずかに含む。	
36	断熱色土	断熱色スクリア層	BEVI	7.5YR4/6	中平直	断熱色スクリア、断熱色ラブリを含む。断熱色スクリアをわずかに含む。	
37	断熱色土	スクリア層		7.5YR4/6	中平直	スクリア質土。断熱色スクリア、断熱色ラブリを多く含む。	
38	断熱色土	中間ローム層		7.5YR3/8	断	ローム質土。断熱色スクリアを含む。断熱色ラブリをわずかに含む。	

第5図 基本土層柱状図

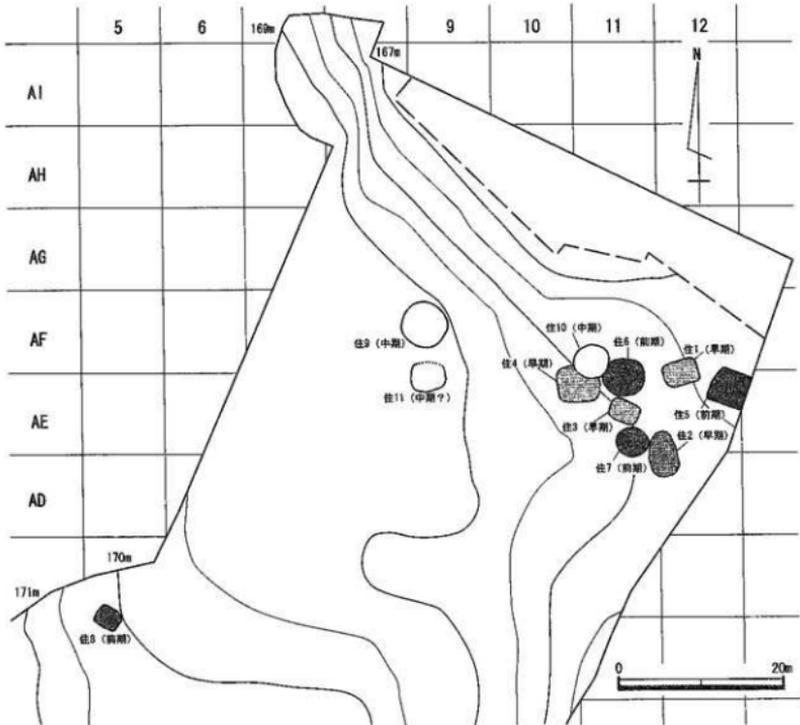


第6図 土層断面図

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物は4層～9層（FB）において検出されている。概ね9層（FB）では早期の遺物、8層（KU）では前期、6層では前期～中期、5層、4層からは後期の遺物が出土しているが、傾斜の強い調査区でもあり、層位をもって遺物・遺構の時期を決定するまでには至らない。

よって本報告は遺構と遺構出土の遺物を第1節で述べ、包含層出土の土器については時期別に分類し、出土地点のドットマップとともに記載する。石器については時期の特定が困難なため、器種別に分類して報告する。



第7図 住居跡検出状況概念図

第1節 遺構と遺構出土の遺物

覆土や出土遺物より、縄文時代の遺構と考えられるものは表5のとおりである。

本来であれば、時期ごとに遺構分布図を作成し、集落の変遷を提示した上で報告するのが望ましいが、集石、炉跡、土坑は時期を特定することが困難であるため、ここでは遺構の種類ごとに分布図を作成し、覆土の状況等で分類して報告する。

表5 縄文時代の遺構一覧表

種別	竪穴住居跡	集石	炉跡	土坑
検出数	11	19	2	63

1 竪穴住居跡

早期後半条痕文系の土器を伴う住居4基、早期末～前期初頭の住居跡2基、前期後半の住居跡2基、中期後半の住居2基、時期不明のもの1基が検出された。各時代とも調査区中央の埋没谷を挟んで、南北の台地部分に立地する。

なお、調査時には30基以上の住居跡を想定したが、住居プランの認定が非常に困難で曖昧であったという調査担当者の見解もあり、資料整理の段階で遺物の分布等を再検討した。

検討した内容は、(1) 覆土中の遺物の接合状況や分布状況は遺構に対応しているか。(2) 地割れや倒木痕等の自然遺構と誤認していないか。の2点である。

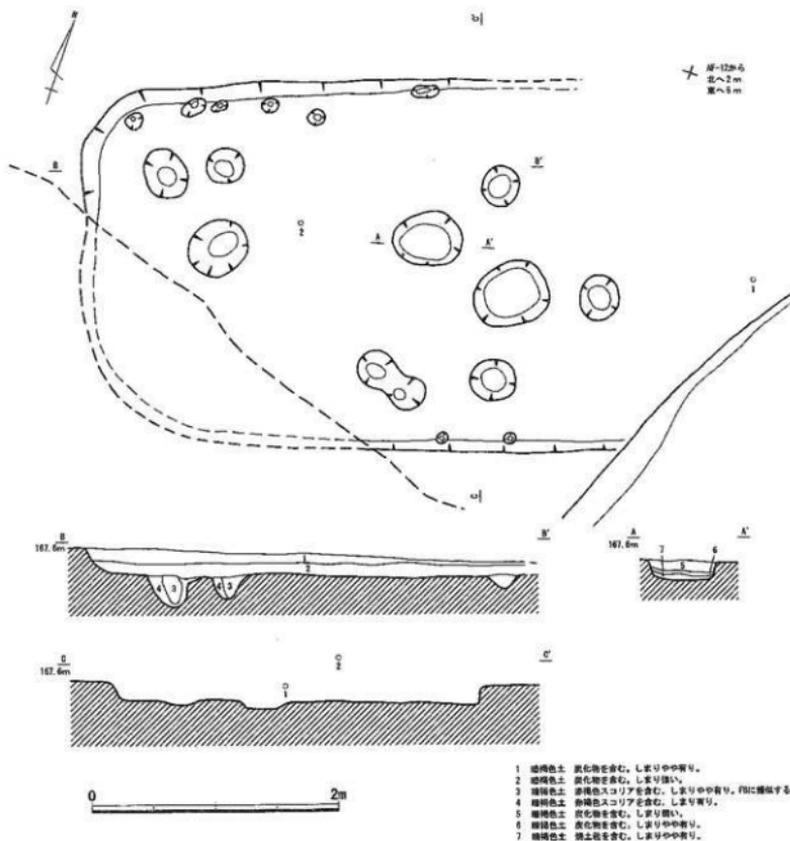
この結果、遺物が複数の遺構に、しかも遺構壁を貫いて水平に分布している状況や、明らかに地面のクラックを遺構と誤認しているものが混じっていることが判明した。これらの検証の手続きを経て以下の11基を住居跡として報告する。

(1) 1号住居跡（早期）

AE12グリッド付近で検出した。東側の角を5号住居跡で壊され、またその北と南側を後世の攪乱により失っているため、全体形は明らかではないが長方形～長楕円を呈すると考えられる。調査時の土層観察からは貼り床の痕跡はないが、明確な地床炉が掘方面に掘り込まれており、柱穴の検出も掘方面において行っていることから、掘方のレベルをほぼ生活面として考えたい。住居内のピットは8基検出され柱穴となる。また、壁際に小ピットも検出されている。これら柱穴は深さ約0.2mで、9層 (FB) に類似した暗褐色土を覆土とする。

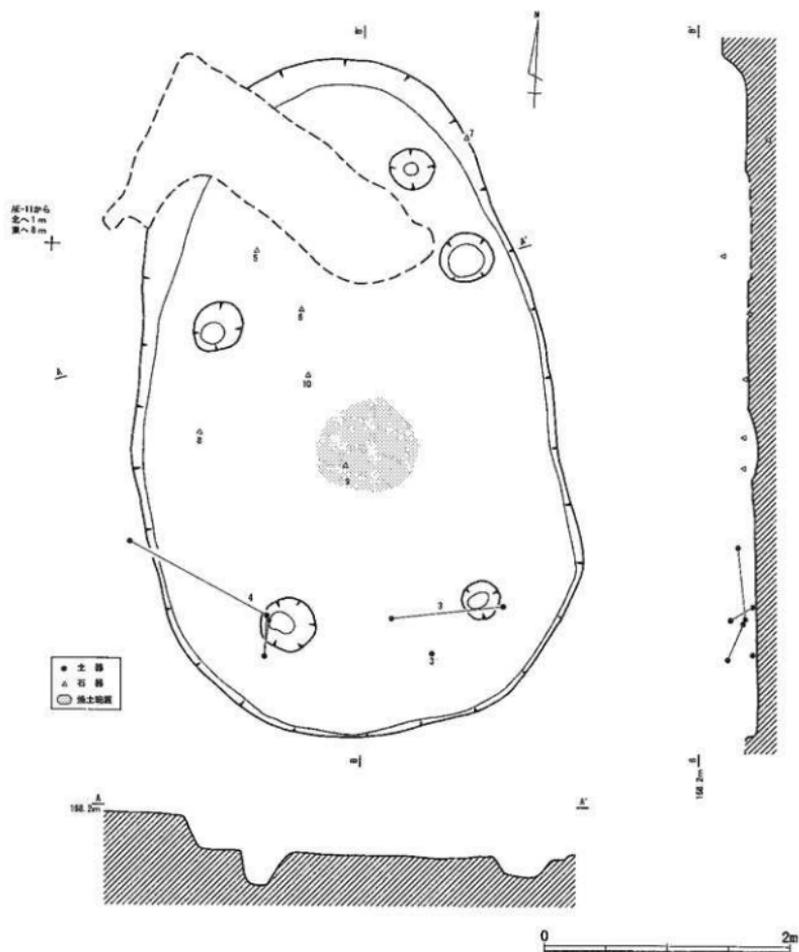
出土遺物は、住居跡覆土中より絡条体圧痕文を施した土器の口縁部が2点出土している。1は胎土に繊維を多く含み、色調は暗褐色で、原体の撚りはR、軸を強く押圧しやや回転させている。口唇部にも同一原体によるものと考えられる押圧が観察できる。口縁部はやや薄くなり外湾する。2は胎土に繊維を含み、色調は橙色で原体は不明である。口縁部はほぼ直立する。この2点の土器は、ともに覆土中より出土しているが、口縁部の作り方や胎土がかなり異なる。

住居跡の時期はこれら覆土中の遺物より、早期後半と考えられる。なお、この住居跡の上面からは木島式土器が出土しているが（土器分布図参照）、当住居跡に対する落ち込みは皆無である。



0 10cm

第8図 1号住居跡と出土遺物

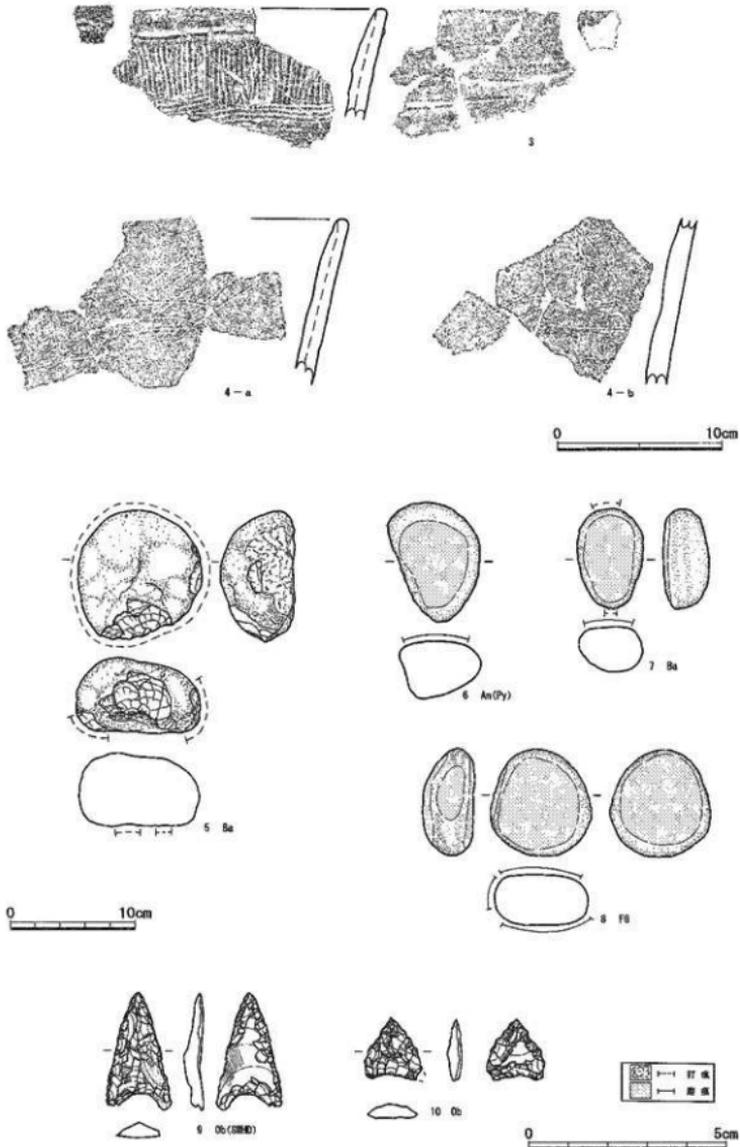


第9図 2号住居跡遺物出土状況

(2) 2号住居跡 (早期)

AD12グリッド付近で検出した。一部を後世の擾乱で破壊されているが、長軸5.52m、短軸3.48mの楕円形を呈する。中央に炉跡と考えられる焼土粒の集中地点がある。柱穴は5基確認された。床の状態などの詳細は不明。

出土遺物は、野島式土器の他に、石鏃2点、敲・磨石類4点が出土している。土器は2個体が出土しており、3は胎土に繊維と白色岩片を含み、色調は暗赤褐色を呈する。口縁部に細線線を貼り、その下に縦方向の沈線を施したのち横方向の沈線によって口縁部を区画する。内面にはヘラ状の工具による



第10図 2号住居跡出土遺物

横方向の調整痕が観察できる。口縁部はやや薄くなり外湾する。4は胎土に繊維と白色岩片を含み、色調は明褐色を呈する。文様は口縁部に4～5本単位の沈線をジグザグに施したのち、横方向に沈線を施し口縁部を区画する。2点とも縦方向に面的な粘土の接合痕が観察できる。

石鏝は2点とも黒曜石製で、裏面に素材剥片の主要剥離面を残す。5は敲石で縁辺部に敲打によると考えられる潰れと剝離が観察できる。6～8は扁平な礫を使った敲・磨石で、7は端部に打痕が観察できる。

この住居跡は出土遺物より、早期後半の野島式期のものと考えられる。

(3) 3号住居跡（早期末）

AE11グリッドで検出した。住居跡の形状は攪乱等の影響で不明であるが、一部掘込みが残存しており、貼床を確認している（第11図土層6の上面）。炉は地床炉であるが、検出が遅く、掘方を掘削している際に発見したため、3号住居跡に伴うかどうかは正確には不明である。しかし、柱穴の並びから考えて当該住居のものとして判断しここに報告した。炉の覆土には焼土粒、炭化物を含むが多くはなく、炉床状の硬化面はない。柱穴は8基検出し、床面からの深さは0.2～0.3mである。

出土遺物は覆土中より石鏝が1点、早期後半のものと考えられる無文の土器が3個体、絡条体圧痕文を施した土器が3個体出土している。

石鏝は黒曜石製で平坦な基部を持ち、先端部が欠損する。12は胎土に繊維を含み、色調は褐色を呈する。口唇部は外湾し、口唇部外面をナデにより平坦に調整する。無文。13は胎土に繊維、白色粒子を含み、色調は褐色を呈する。内外面には横方向の条痕が観察できる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。

14～17は覆土中の出土であるが、住居跡外出土のものとして広く接合したため、埋没過程での流れ込みと考えられる。14は胎土に繊維と白色粒子を含み、色調は黄褐色を呈する。口縁部に細隆線を貼付し、その下部に軸に網目状に巻きつけた縄文原体を押圧する。15は胎土に繊維を含み、色調は橙色を呈する。縦方向に細隆線を貼付し、その間を充填するようにLの絡条体圧痕文を付ける。胴部下半は無文だが、裏面には横方向の条痕が観察できる。16は胎土に繊維を含み、色調は褐色を呈する。口唇部は内面と外面から同時に成ることによって山形に成形している。外面の絡条体圧痕文は原体は不明であるが、軸の圧痕が一部に残る。17は底部で、胎土に繊維と白色粒子を含む。この他覆土中より出土している（119）に関しては、2片が住居跡内で出土しているが、他の多数の破片が包含層からの出土となっているため、第2節で報告する。

以上この住居跡覆土から出土している遺物を報告したが、確実に同時期と考えられる遺物は、12、13のみである。

(4) 4号住居跡（早期）

AE11グリッド付近で検出した。住居の形状は北西部分を失っているが、隅丸方形を呈し、短軸4.16mを測る。検出時には覆土の殆どが失われていたが、遺物の出土状況や残された覆土の状態より、第13図土層3上面が床面であった可能性が高い。炉は地床炉で、覆土には焼土粒、炭化物を含むが多くはなく、炉床状の硬化面はない。また、柱穴は11基検出している。

出土遺物は、覆土中より土器が2個体と石鏝2点が出土した。18は口縁部に杯状の突起を持ち、波状口縁となる。また、口唇部には刻目を施し、胴部は無文である。条痕は内面は顕著であるが、外面は上半部には殆ど調整がみられず、下半部に縦方向の条痕が観察できる。19は底部のみの出土であるが、18と非常に類似しており、外面に縦方向の条痕が観察できる。この2点の土器は胎土に繊維と白色粒子を含み、器形も非常によく類似している。杯状の突起の状態や無文の器面から、茅山上層式土器と考えら

れる。20はホルンフェルス製の石鏃で、風化が著しく調整は観察できない。21は黒曜石製の石鏃の未製品と考えられる剥片である。

遺物は覆土中の出土であるが、ほぼ住居跡の内部に限られた分布を示しており、この住居跡に所属する遺物と考えていいであろう。

(5) 5号住居跡（前期初頭）

AE12グリッドで検出した。東側が調査区外に延びていることから詳細は不明であるが、方形を呈していたものと考えられ、残存する1辺の長さは4.28mである。貼床は確認できず、壁の縁辺では三角堆積も観察できることから、掘方上面が生活面であった可能性が高い。また、明確な炉跡は確認できなかったが、住居跡の北西角に掘方上面にて焼土の集中地点を検出したので、図上でスクリーンで示した。地床炉である可能性が高い。柱穴は壁面から約0.8m離れた地点で、6基を確認した。掘込みの深さは約0.2mで非常に浅い。

出土遺物は、覆土中より木島式土器が2個体出土している。22は2本一対の工具により口縁部端部に連続的に刺突を施す。器面は内外面とも横方向に連続した指頭圧痕により凹凸が激しい。胎土は砂質で、直径2～5mmの石英粒を多量に含む。23は口縁部を折り返し、断面四角形の工具により連続的に刺突を施す。胎土は砂質で、22に比べ大変均質である。なお、これらの遺物は同一個体が住居跡の外からも出土していることから（接合状態で図化）、流れ込みである可能性もある。

(6) 6号住居跡（前期初頭）

AE11グリッドで検出した。長軸4.32m、短軸3.84mの不定形な円形を呈し、柱穴を5基検出し、床面は第16図土層2上面であった可能性が高い。炉は地床炉で覆土には焼土粒、炭化物を含むが多くはなく、炉床状の硬化面はない。

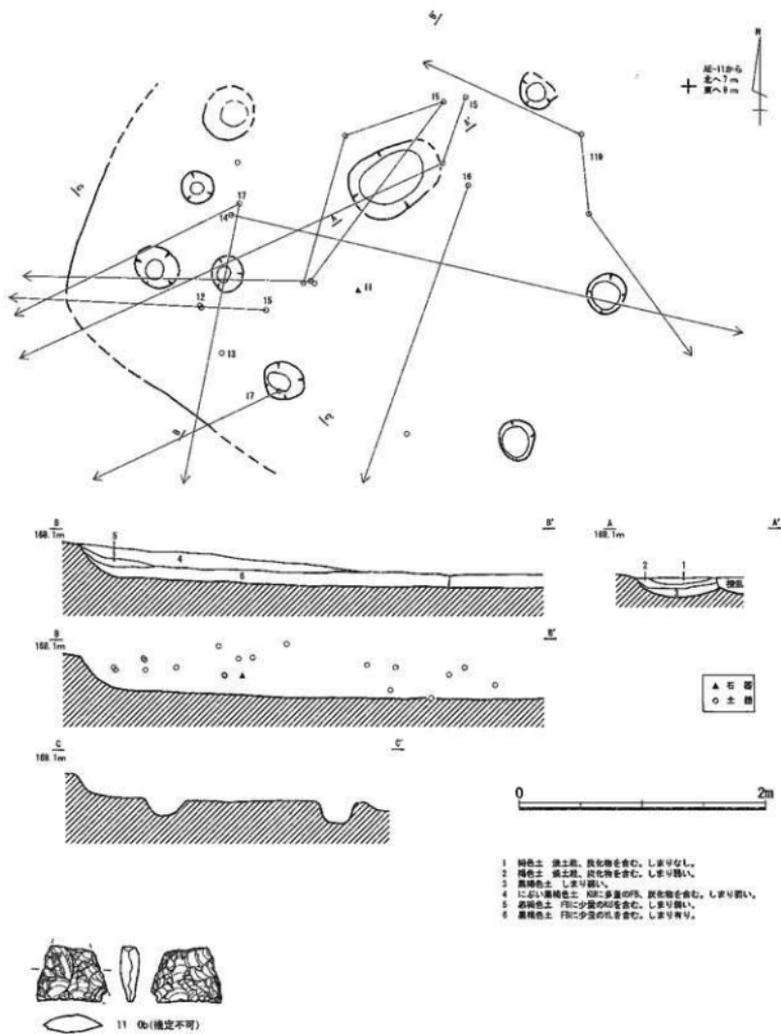
出土遺物は、下吉井式土器が2個体出土している。24は口縁部と頸部に廻らせた低い陸帯上に貝殻腹縁による押圧を加え、文様帯を区画しその内側に波状の沈線を描く。器面の調整は外面は擦痕が、内面には頸部より下に条痕文が観察できる。25は地文状に残した条痕の上から棒状工具による押し引きで波状の沈線を描くものである。26～28は無文の土器で、外面は横方向の擦痕が、内面下部には条痕文が観察できる。24、25と同時期の遺物と考えられる。これらの土器は覆土中の出土であるが、接合関係が住居跡内で完結するため、この住居跡の土器と考えられる。

この他に、石鏃の欠損品1点と、敲石4点、石皿・台石が2点出土している。

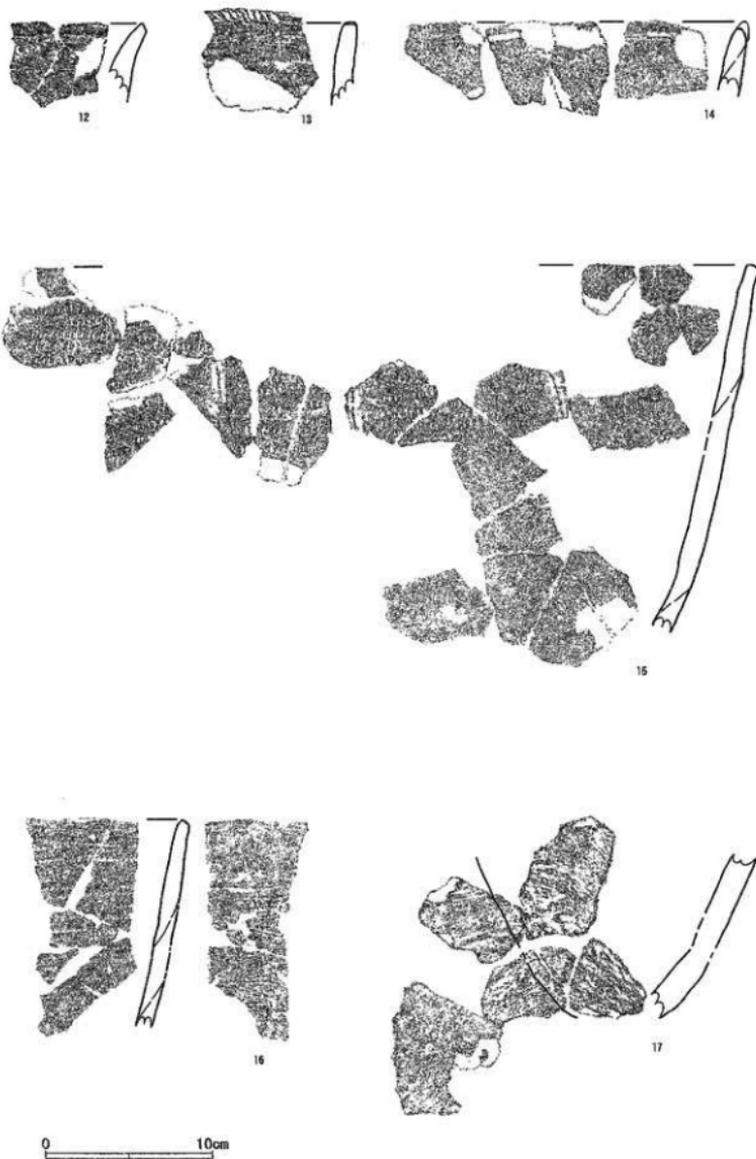
(7) 7号住居跡（前期後半）

AE11グリッド付近で検出した。住居のプランは検出できなかったが、焼土の集中地点の周辺に柱穴と考えられる小ピットが8基検出でき、遺物の集中地点とも分布が重なるため、ここに住居跡として報告する。柱穴が検出された範囲には炭化物粒が集中して分布していたという調査者の所見もある。

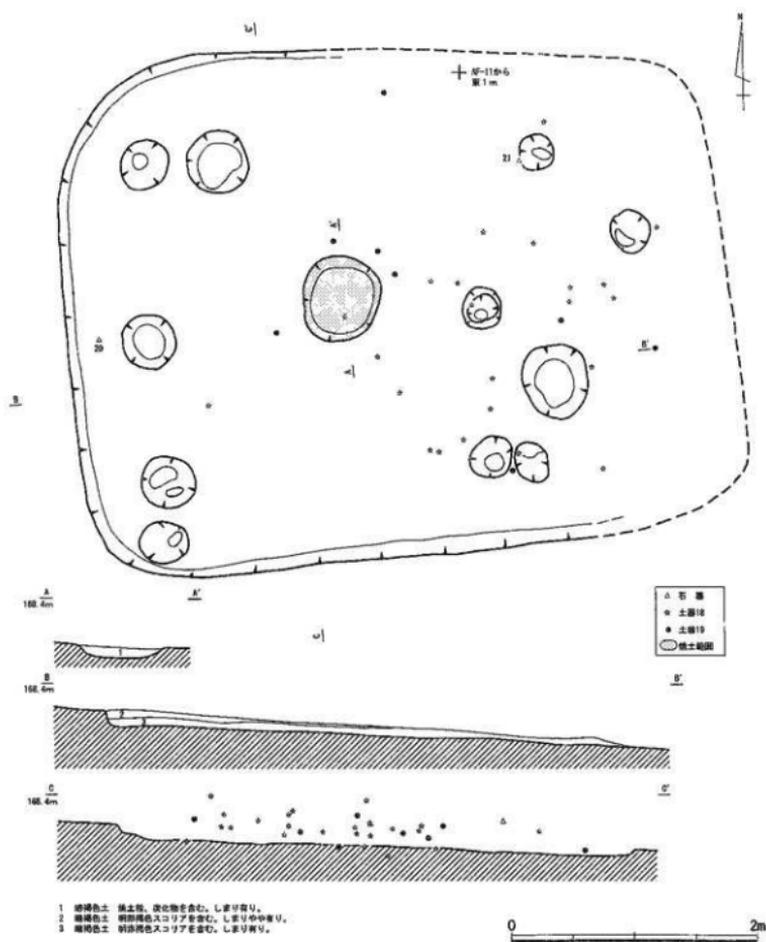
出土遺物は、諸磯b式土器2個体である。どちらもRLの縄文を地文として半截竹管によって平行沈線や木の葉文様を描くものである。



第11図 3号住居跡と出土遺物



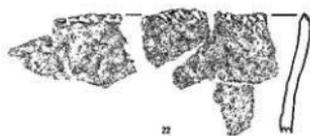
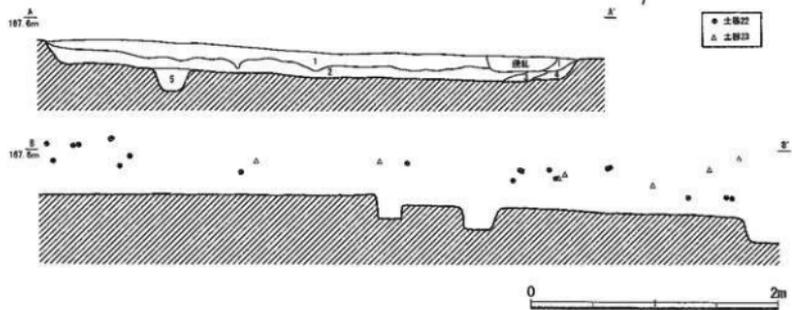
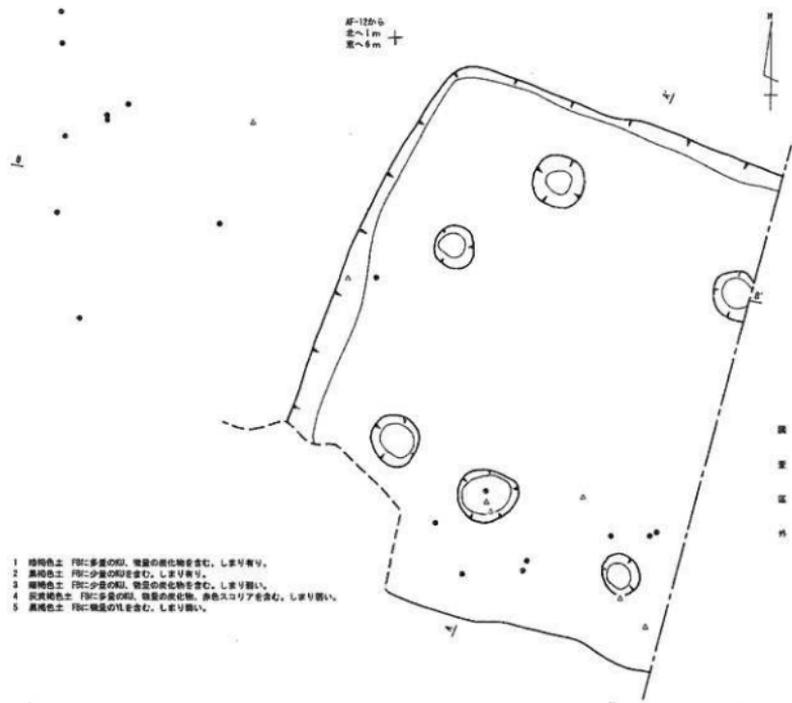
第12図 3号住居跡出土遺物



第13図 4号住居跡遺物出土状況

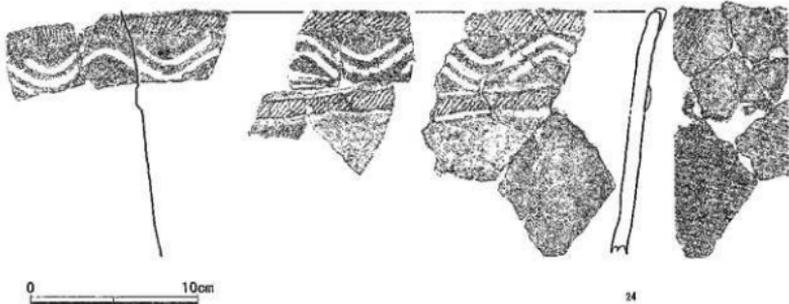
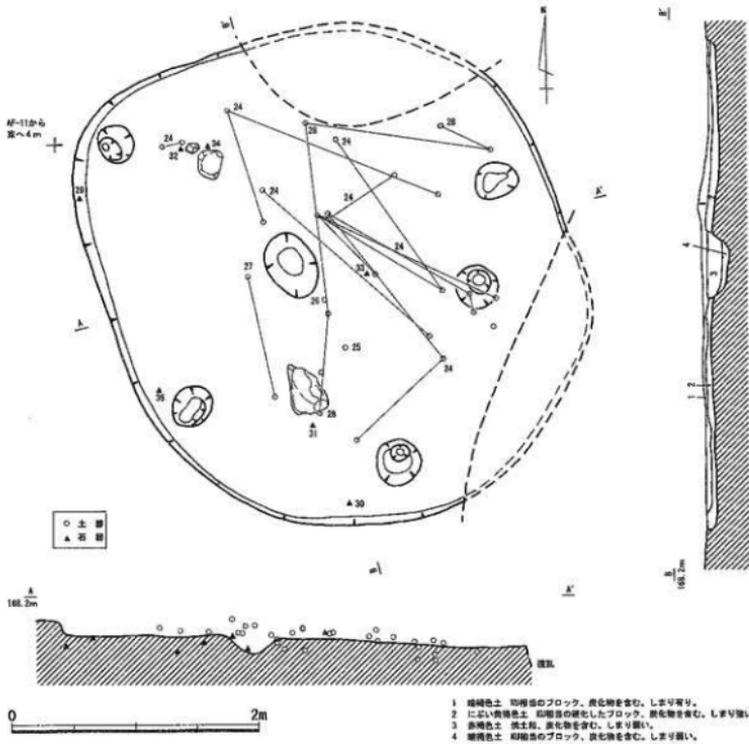


第14図 4号住居跡出土遺物

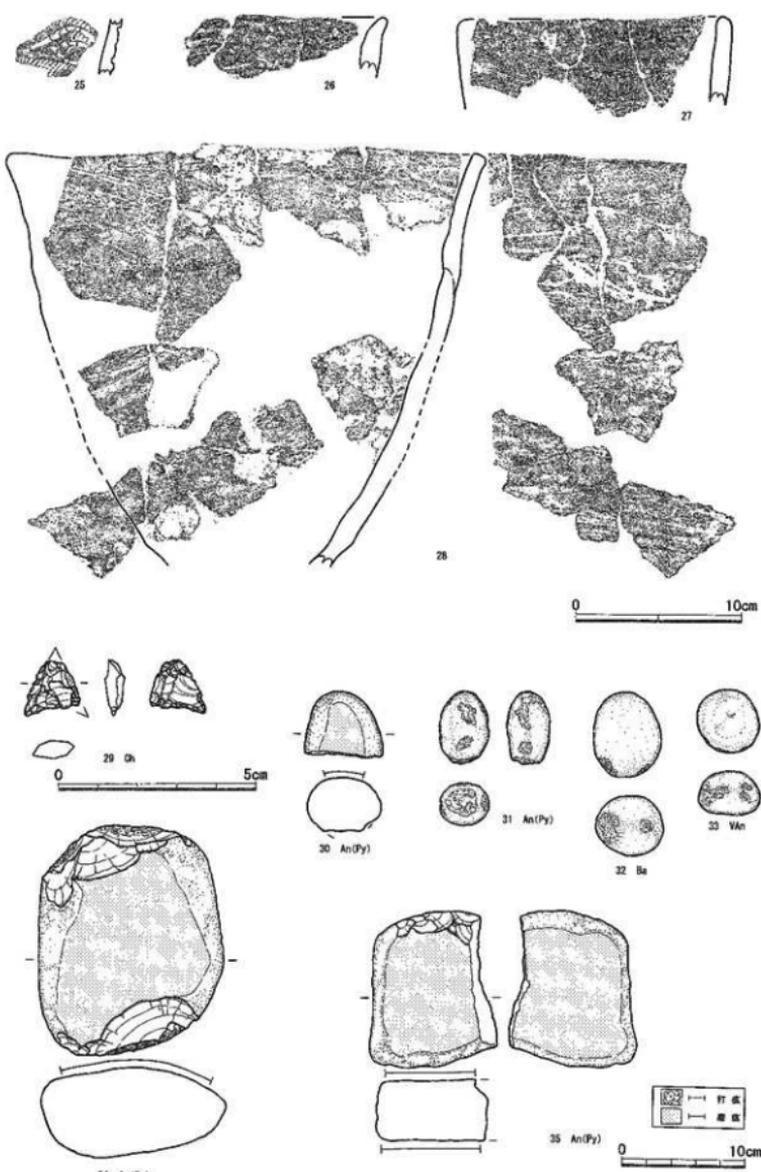


0 10cm

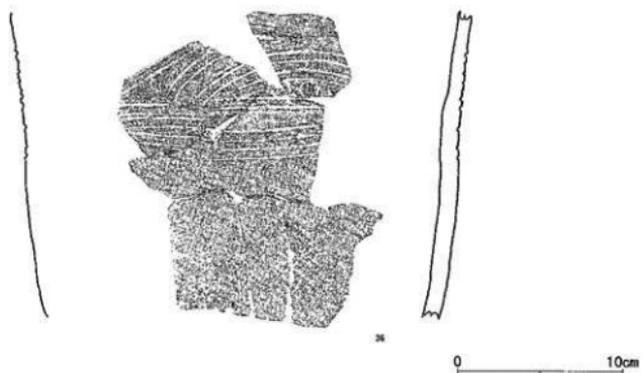
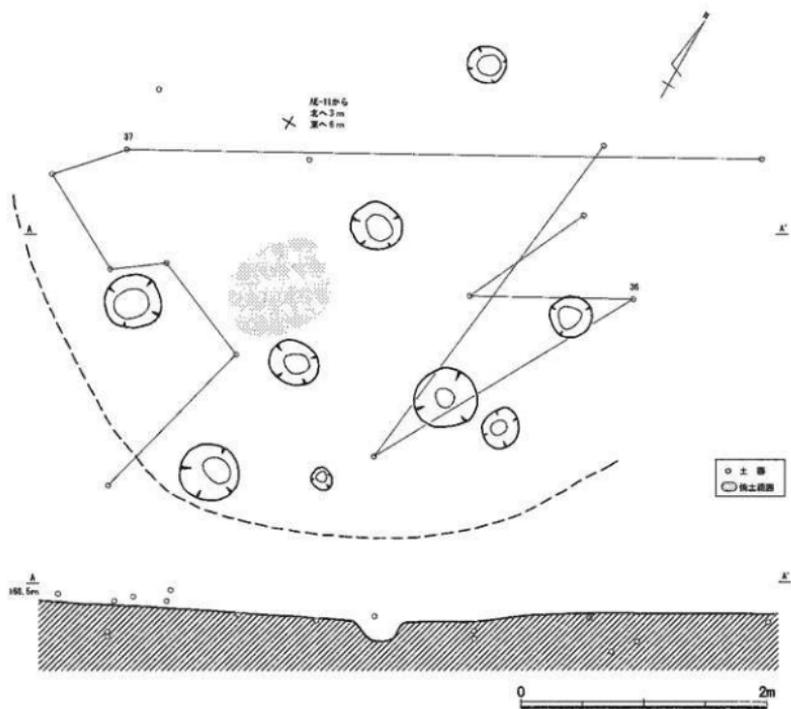
第15図 5号住居跡と出土遺物



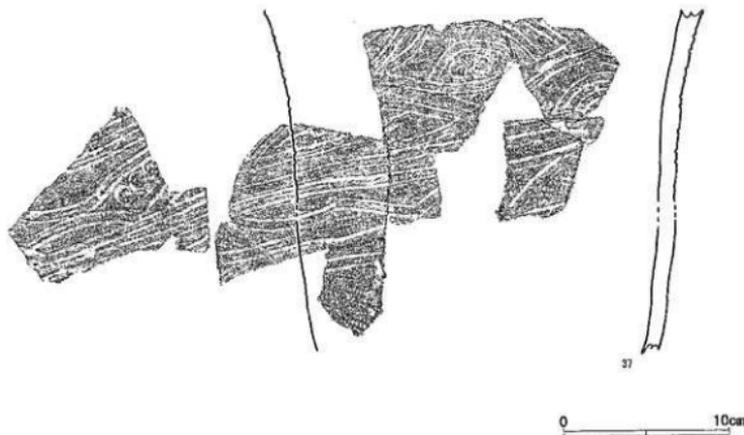
第16図 6号住居跡と出土遺物



第17图 6号住居跡出土遺物



第18図 7号住居跡と出土遺物



第19図 7号住居跡出土遺物

(8) 8号住居跡(前期後半)

AB5グリッド付近で検出した。長軸3.04m、短軸2.4mの長方形を呈し、北半分は掘方みの検出であったが、南半分に関しては、明確な貼床を検出している(第20図土層2上面)。炉は地床炉で、焼土粒、炭化物の集中地点として検出した。また、柱穴に関しては主柱穴になるような比較的しっかりしたピットを5基検出しているが、他は直径0.1~0.25mの小穴である。

床面より、諸磯b式土器が出土した。RLの縄文を地文として、半截竹管によって押しきを施した深鉢である。床面からは台石も出土している。

(9) 9号住居跡(中期後半)

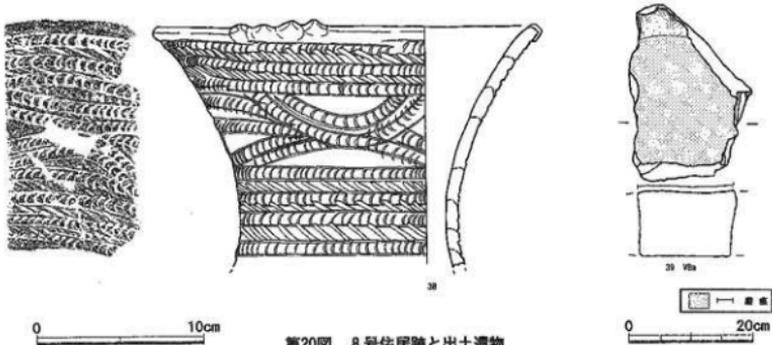
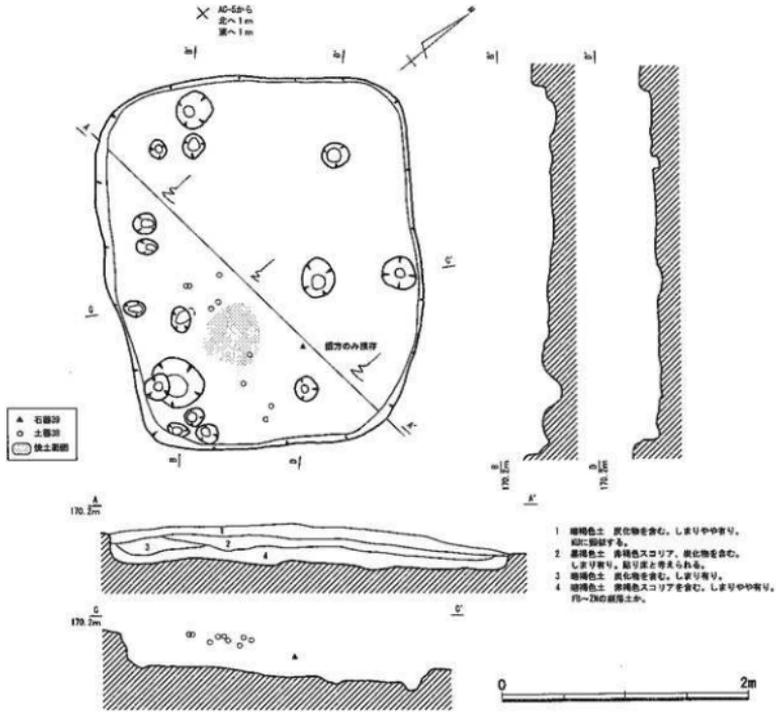
AF9グリッドで検出した。壁溝は長軸3.88m、短軸3.64mの長方形を呈するが、周辺には炭化物が面的に散布し、変色する部分がある(破線指示)。住居跡自体の平面プランは円形になる可能性が高い。

炉は石囲炉で、扁平な垂角礫を方形に組み、各コーナーに拳大の円礫を添えることで固定したものである。土層からは約0.8mの方形の穴を浅く掘り、炉石を設置した後埋め戻し、石を固定している状態が観察できる。炉の内部覆土は最下層に焼土堆積層がある他は灰や焼土の混入は少ない。

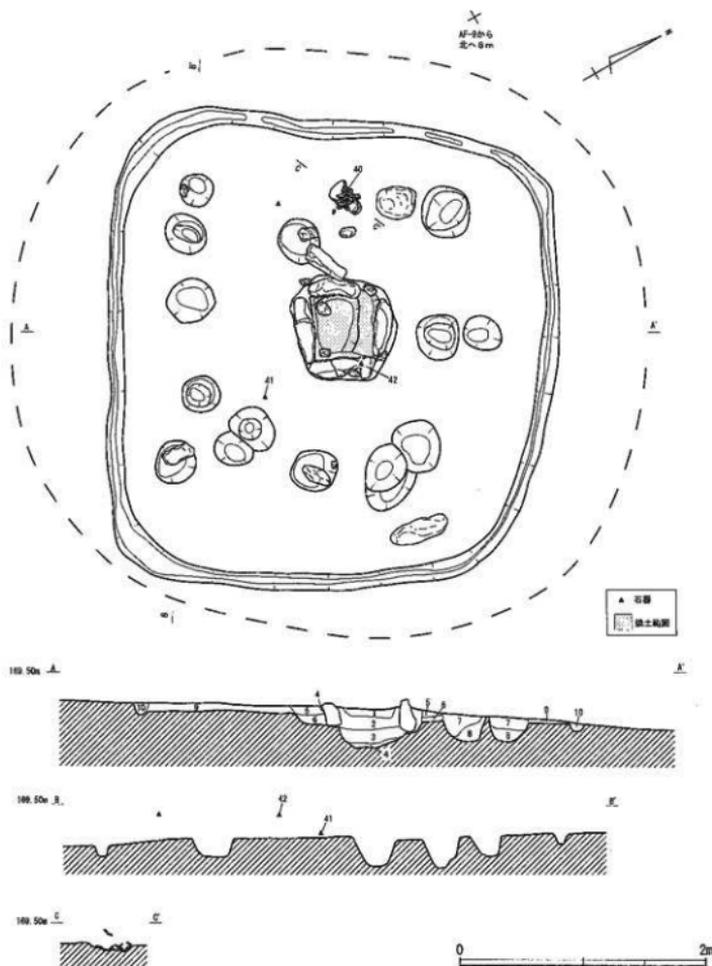
床は貼床は確認できなかったが、炭化物が面的に広がるので(第21図土層9上面)が生活面と考えられる。柱穴は14基検出し、深さは床面から約0.3mを計る。

出土遺物は、床直上で曾利Ⅲ式並行と思われる土器がほぼ完形で出土している(40)。当初埋藏とも考えたが、人為的に埋納された形跡がなく、横倒れに破砕していることから、床直上遺物として扱った。文様は縦方向の条線とそれを頸部で区画する沈線によってなっており、焼きは悪く全体的に粗雑な印象を受ける。

この他に礫石器が2点出土している。41は扁平な円形の敲石で、上面と縁辺部に打痕が観察できる。42は陰石と考えているものである。円礫の上面には約1cmの刻目と、その下に敲打によって凹を作り、凹の内側には横方向の擦痕が観察できる。また、この凹部分の周辺は付着物によって赤褐色に変色している。

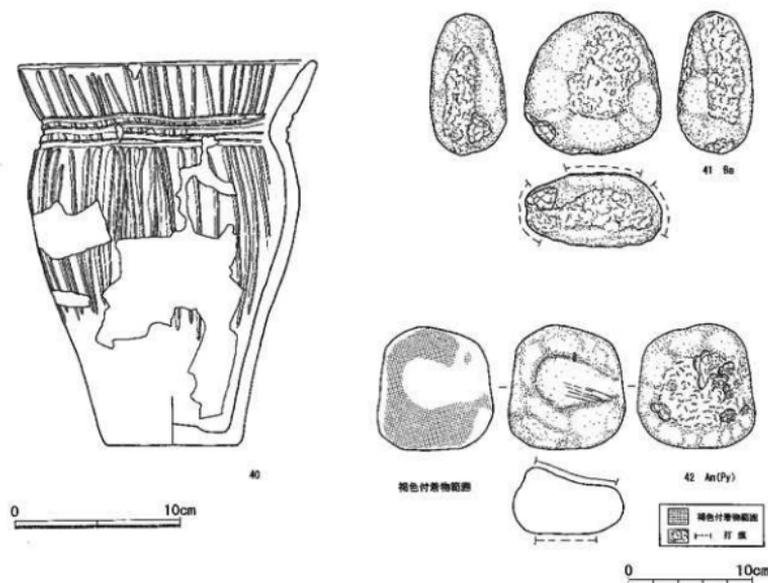


第20図 8号住居跡と出土遺物



- 1 KDPを含む黄褐色砂質土・黄褐色土・暗褐色土の遺土。
- 2 煉土・赤土を多量に含む、硬化した灰ブロック（10cm厚）を含む黄褐色土。
- 3 煉土塊層・煉土ブロックを多量に含む黄褐色土、固くしめる。
- 4 伊達層前は、膨脹してブロック状に破砕口とれるような状況を呈する。
- 5 灰土より暗褐色から灰褐色に暗化している。
- 6 床底を若干含む、KDP・灰ブロックを含む暗褐色土。
- 7 灰ブロック・黄褐色土ブロックを含むにがい黄褐色土。
- 8 硬化した灰ブロックを多く含む黄褐色土。
- 9 床底を若干含む、硬化した灰ブロックが床面の黄褐色土に暗褐色土が混じる。
- 10 6に類似。
- 11 床底を若干含む、黄褐色土ブロックを多く含む黄褐色土。

第21図 9号住居跡遺物出土状況



第22図 9号住居跡出土遺物

(10) 10号住居跡 (中期後半)

AF10グリッドで検出した。長軸4.36m、短軸4.12mの不定形な円形を呈する。住居跡内、床面に扁平な礫がほぼ円形に配置されている。柱穴の配置とほぼ重なるのが特徴である。床は貼床で、柱穴(7基)が配置されている範囲の内側は特に硬くしまる。

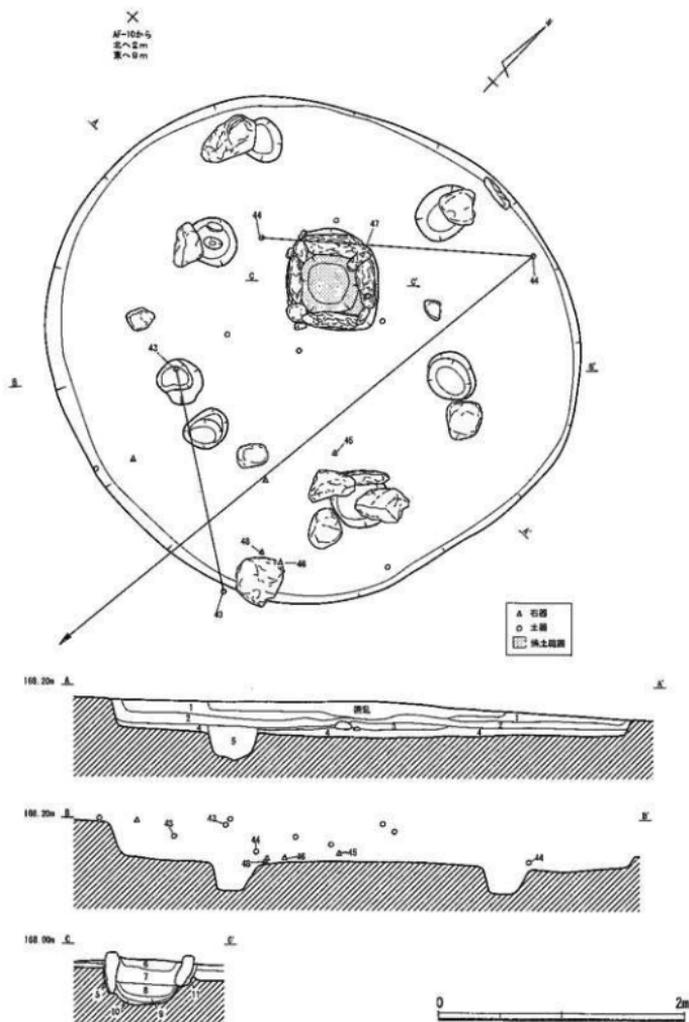
炉は石囲炉で、扁平な垂角礫を方形に組み、各コーナーに拳大の円礫を添えることで固定したものである。掘方は石の設置範囲ぎりぎりの大きさで、9号住居跡とは異なる。内部覆土は土層8、9に焼土堆積層がある他は焼土の混入は少なく、8上面が非常に平坦に整えられていることから、灰等の掻き出し行為後の状況を示している可能性がある。

遺物は覆土中より曾利Ⅰ～Ⅱ式の土器片が2点出土している。43は条線を地文として、頸部に浮線文を配する。44は条線を地文として、隆帯による懸垂文を施している。45は磨製石斧である。基部を折損し、刃部には打痕と打撃による剝離が観察できる。また、折れた剝離の端部にも潰れが生じていることから、現在の形状になった後も使われていた可能性がある。46、47は磨石である。扁平な楕円形の円礫を使用しており、46は上・下面に打痕が観察できる。48は台石(石皿)である。住居跡の南側に壁にもたれかかるように検出した。磨面は僅かに凹んでいる。

出土遺物より中期後半の遺構と考えられる。

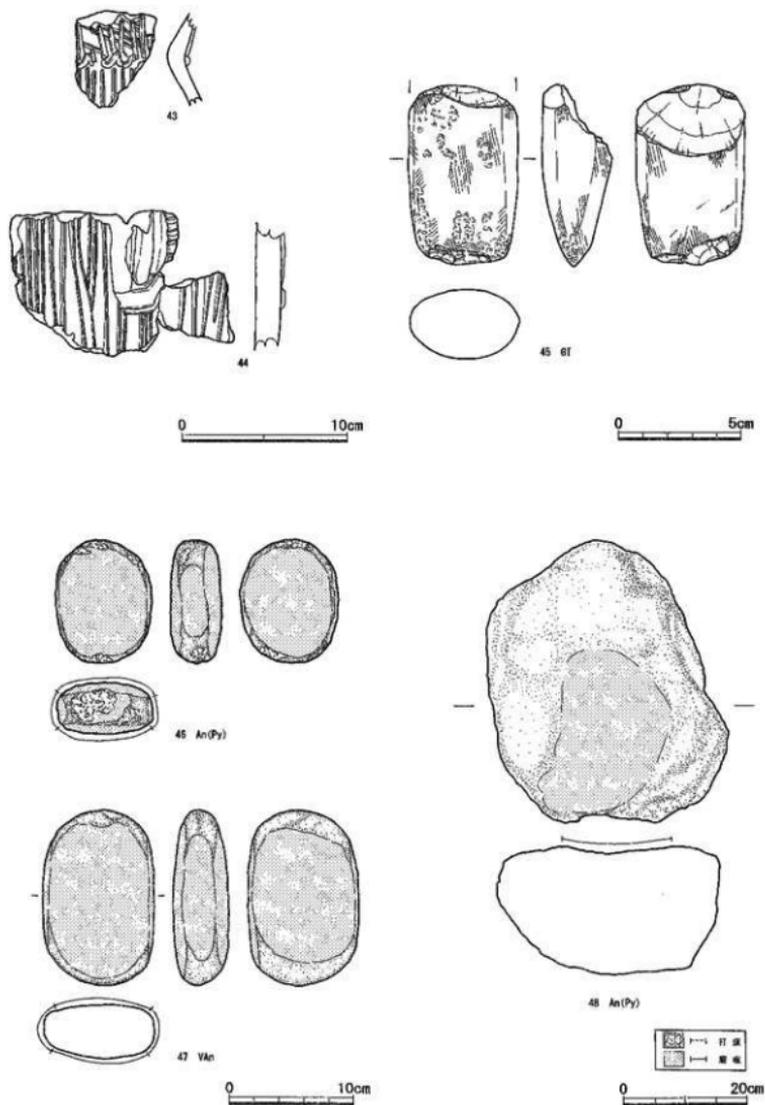
(11) 11号住居跡 (時期不明)

AE9グリッドで検出した。長軸4.04mの不定形な円形～隅丸方形を呈する。床面は判然としなかったが、(第25図土層2)の中にあると考えられる。多少の上下はあるが、土層2内では扁平な礫が検出



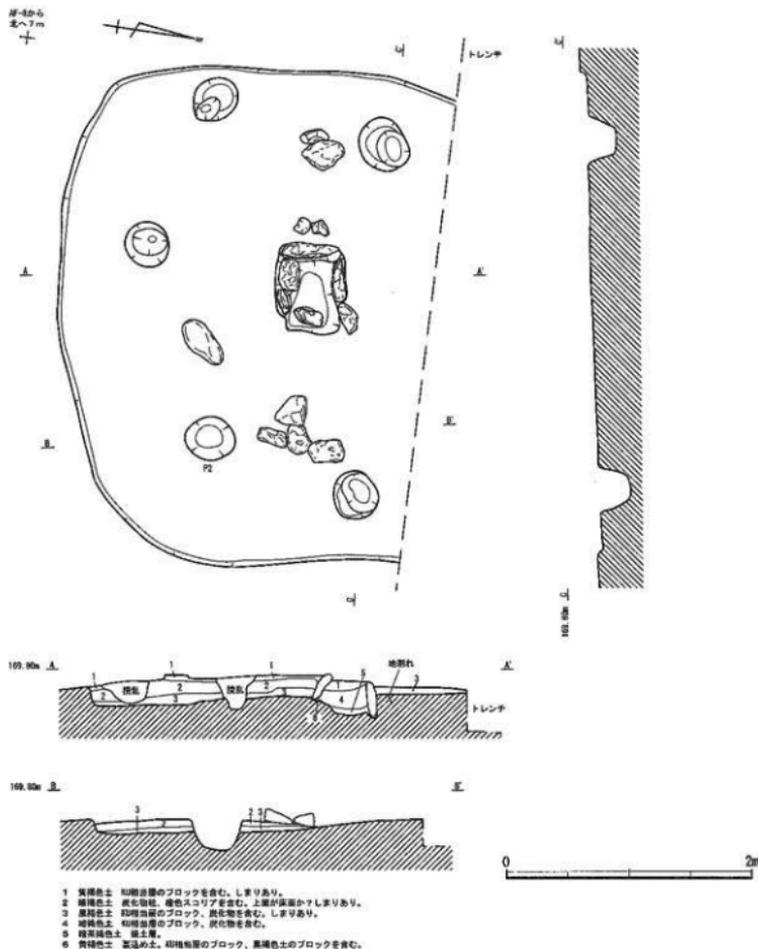
- 1 木炭を含み、灰層を多く含む黄褐色土。しまりなし。
- 2 木炭を含み、粒粒・斑した粘土を多く含む黄褐色土。しまりややあり。
- 3 木炭を多く含む黄褐色土（黄褐色斑）しまりややあり。
- 4 灰り厚。灰ブロック・黄褐色土ブロックを含む黄褐色土。硬くしまり、粘性強い。
- 5 木炭を若干含み、灰ブロック・黄褐色土コアを含む黄褐色土。しまりあり。
- 6 木炭を若干含み、粒粒を多く含む黄褐色土。
- 7 木炭を含み、灰層を多く含む黄褐色土。
- 8 焼土層厚。粒粒した粘土を多く含む黄褐色土。
- 9 木炭を多量に含む黄褐色土。
- 10 灰により硬化した黄褐色土。
- 11 黄褐色土。灰ブロック・黄褐色土ブロックを含む黄褐色土。

第23図 10号住居跡遺物出土状況



第24図 10号住居跡出土遺物

されている。この礎は全て柱穴5基の内側に配置される。炉は石囲炉で、扁平な垂角礎を方形に組み、各コーナーに準大の円礎を添えることで固定したものである。東側が壊れている。掘方は石の設置範囲ぎりぎりの大きさで、10号住居跡と類似する。内部覆土は5が焼土層である他は、覆土に焼土の混入は少ない。出土遺物がないたため、時期の確定は不可能であるが、石囲炉の形態や柱穴の配置、床面直上に配された礎の存在など、10号住居跡と非常によく似ている。包含層の遺物の分布状況を見ても、後期以降の遺物が住居跡の範囲に分布しないことから、中期後半の住居跡と考えている。

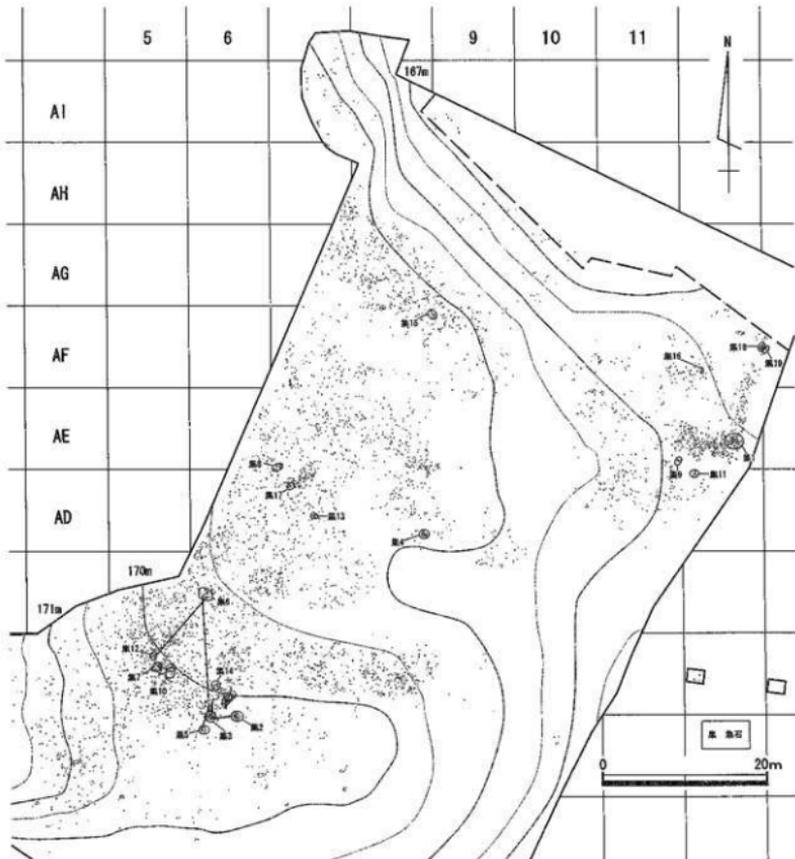


第25図 11号住居跡遺物出土状況

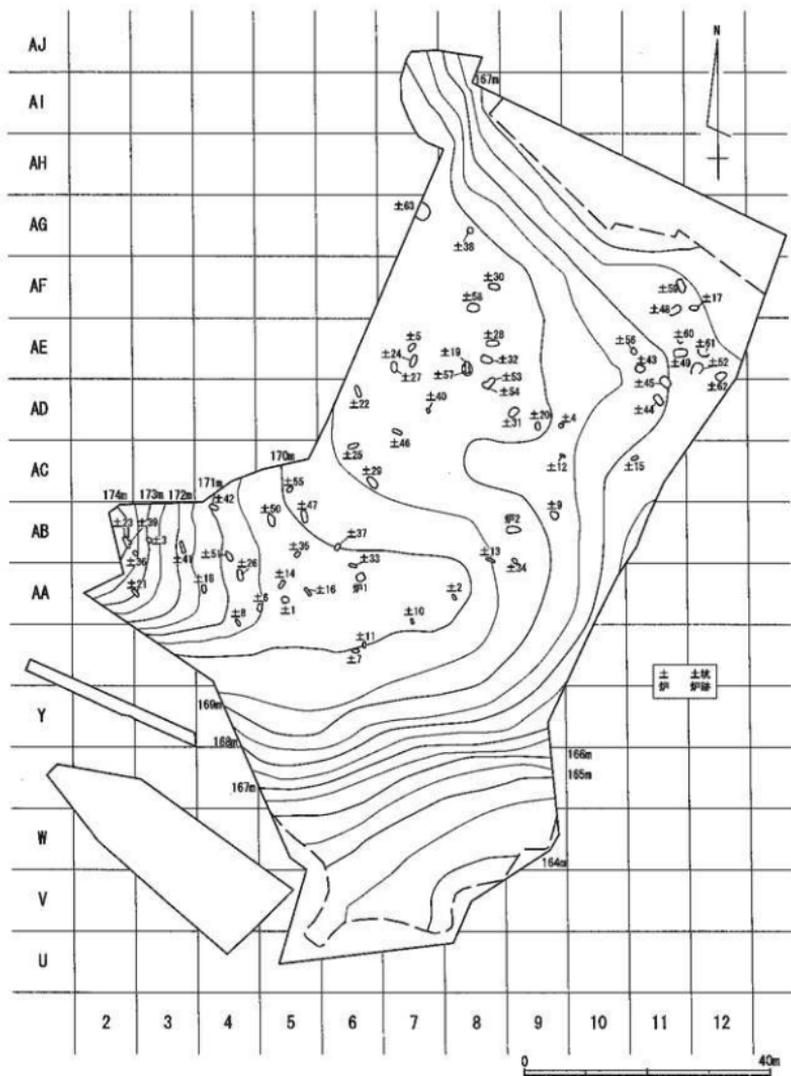
2 集石

調査区内の栗色土層、富士黒土層には、平坦部を中心に礫が広く密に分布している。調査に当たっては礫を全点ドット化し、肉眼的に集中している部分を個別図化しているが、統一性に欠け複数の時期の重なりを示している可能性が高いため、礫の出土状況を第26図で示した。この中から、礫の集中地点に土坑が伴う19基を個別に集石として図化し以下に報告する。

なお、集石内からの出土遺物は少ないが、調査区全体の遺物出土層位・分布などから、土坑を伴うものに関しては縄文早期に属する可能性が高い。



第26図 礫の出土状況と土坑を伴う集石



第27図 土坑検出状況概念図

集石内から出土した礫は、表7の赤化比率の割合からわかるようにほとんどのものが受熱により赤化している。また土坑覆土には炭化物、焼土粒が多くみられる。

その中でも、4号集石は74個の礫からなり、土坑覆土は焼土粒、炭化物を多く含み、熱によってロームが硬化した層が存在する。これは数回にわたりこの集石が使用された結果と思われる。一方8号集石、14号集石の土坑覆土からは、焼土粒は検出されず炭化物を少し含む程度だが、すべての礫は赤化し、半分以上の礫にススの付着が観察される。

また、各集石内から出土した礫の重さは、最小10g未満から最大3,740gのものがあり、個数も4個から111個と様々である。使用時の破碎を考慮に入れたとしても一概に調理施設としてひとつくりにするのではなく、場や用途が複数あったと考えるのが自然であろう。

集石間礫の接合は19基中、AB6グリッドからAC6グリッド付近で検出された2号集石、3号集石間、3号集石、6号集石間、6号集石、12号集石間での3つの接合関係が認められた。

出土遺物は早期後半の土器4点と磨・敲石類4点である。1号集石から出土している49は口縁部の外面に単節Rの絡条体底痕を横方向に施し、内面には条痕文が観察される。50は外面に原体不明であるが横方向に条線が観察される。51は外面に条痕による調整がみられる。9号集石からは52の無文土器が1点出土している。1号集石出土の53は、両面、側面に磨痕と側面の一部に打痕が観察される。2号集石出土の54は両面、左側面に磨痕と上部に打痕が観察される。4号集石出土の55は扁平な円形の磨石で上面に打痕が観察される。これら3点には受熱による赤化が観察できる。15号集石出土の56は、両面に磨痕と縁辺部に打痕が観察される。受熱による赤化はみられない。

3 土坑

63基が検出された。調査区の中でも谷によって区切られた南北の尾根上の平坦地に分布する。

全ての土坑覆土は人為的な埋没状態ではなく自然堆積土によるもので、これらの中に墓壙が含まれる可能性は低い。

遺物は、縄文早期後半の土器が5基の土坑より計14点出土している。個々の遺物については後述する。この他、遺物が出土していない57基の土坑については明らかに複数の時期のものが混在しているが、覆土情報のみで明確な時期を決定することは不可能である。よって、時期が異なる可能性がある12層類似土層(YL)を覆土に持つものと、縄文時代の遺物包含層である9層(FB)以上を覆土に持つものに分類し報告する。

I群 12層類似土(YL)を覆土に持つもの

II群 9層(FB)以上を覆土に持つもの

(1) I群

これらは、縄文時代草創期～旧石器時代に属する可能性がある。底部に小穴が1基ある1号、小穴が複数基ある2号、または小穴がない3、4号など、形状にはバラエティーがある。小穴を逆茂木痕とするのであれば、底部に小穴があるものに関しては陥穴としての機能が考えられる。

(2) II群

遺構覆土に5層～9層(FB)を含むものである。縄文時代早期以降のものと考えられる。これらは、土坑壁面の崩落が激しく、平面形態は使用当時の形状を残していないものが多い。よって、底部施設について分類した後、小穴がないものに関しては底部形状でさらに分類し報告する。

- 1類 底部小穴が1基あるもの
- 2類 底部小穴が複数基あるもの
- 3類 底部小穴がないもの
 - A 底部平面の形状が長楕円形から方形を呈するもの
 - B 底部平面の形状が円形から不正形を呈するもの

II-1類-A 5号～9号が該当する。小穴はほぼ中央に残されている。

II-2類-A 10号～32号が該当する。

10号～12号は底部平面積が比較的小さい。19号は底部平面中央部に窪みを持ち、断面形は糸巻状を呈する。28号～32号は他に比べ底部平面積が広い。また28号、30号、32号は調査区北側の平坦地に並ぶ。遺物は15号覆土内より無文土器が出土している。

II-3類 33号～63号が該当する。

-A 33号から42号が該当する。33号から40号は底部平面積が比較的小さい。41号は調査区南側斜面中央部に位置し3類-Aの中では底部平面の形状が細長く大きめの土坑である。

-B 43号～63号が該当する。44号から46号は検出面より底部平面積が小さく段差がある。47号から52号は他に比べ底部平面積が広い。55号、56号は底部平面の形状が円形で小さく、57号、58号は底部平面の形状が円形の大きい土坑である。60号から63号は攪乱等により全体を検出できなかった。出土遺物は43号覆土内より無文土器3点、44号覆土内より清水柳E類土器1点が出土している。

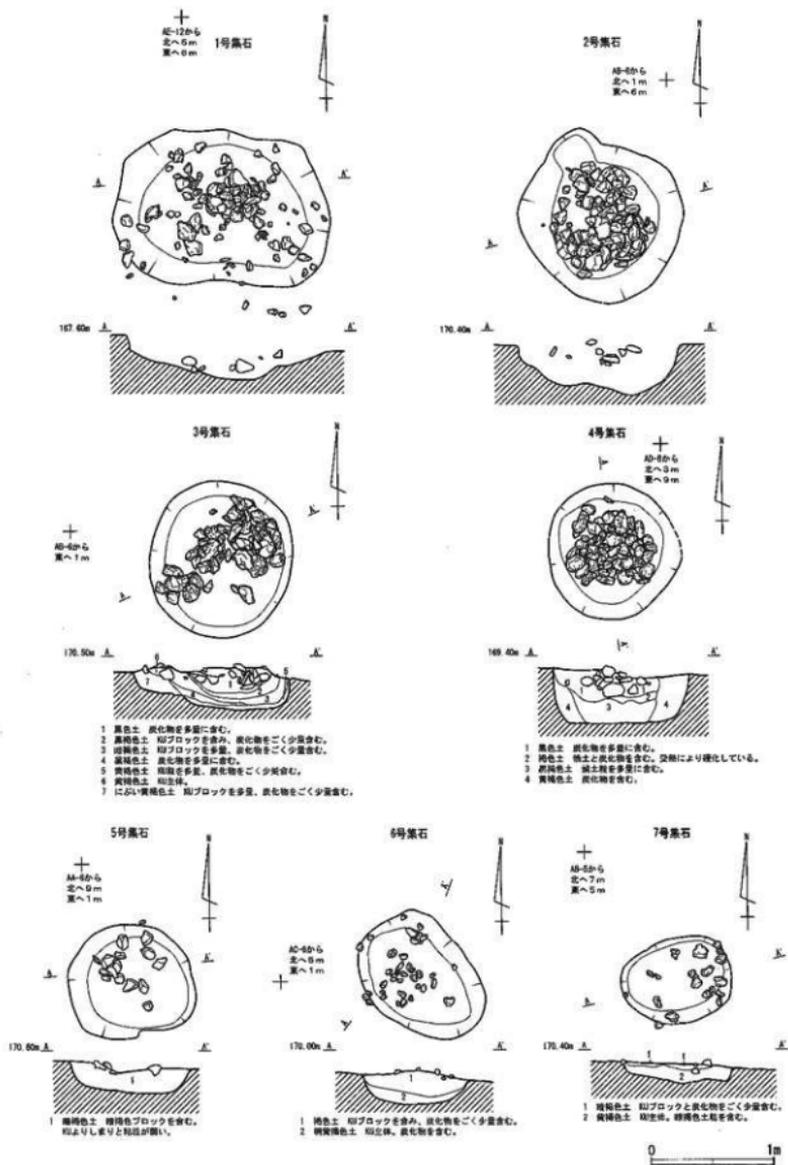
以上より、小穴を有する土坑は、長楕円形から方形の底部形状を必要条件としていることがわかる。調査区内169mの等高線に沿うような形で、台地の張り出し部分の縁辺部に並ぶように分布するのが特徴である。また、小穴を持たない土坑は、大きさや平面形状にバラつきがあり、異なる機能を持ったものが混在していると考えられる。

(3) 出土遺物

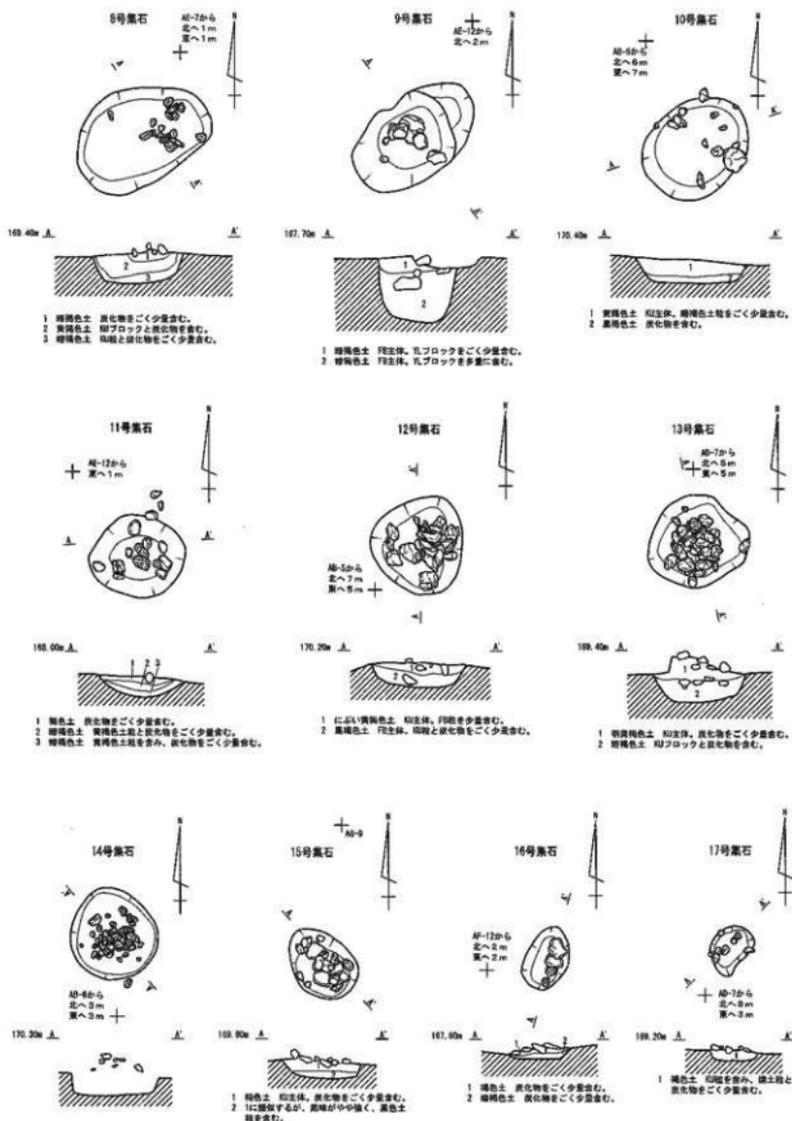
清水柳E類土器2点、無文の土器8点が出土している。63、64は外面に原体Rの絡条体瓦痕文を施文し、64には口唇部にも同一原体と思われる絡条体瓦痕文の施文が観察される。また57～62、65、66は無文土器である。これらの土器は胎土に繊維を含み早期後半に属する。文様の詳細は観察表参照。

4 炉跡

2基が検出された。1号はAA6グリッド北側に位置し、形態は円形を呈している。土坑内の中心部に焼土塊が確認され、焼土塊の下には被熱により硬化した層を持つ。2号はAB9グリッド西側に位置している。形態は楕円形を呈し、断面皿状の浅い窪みの端に焼土塊と炭化物の集中がみられる。遺物は出土していない。

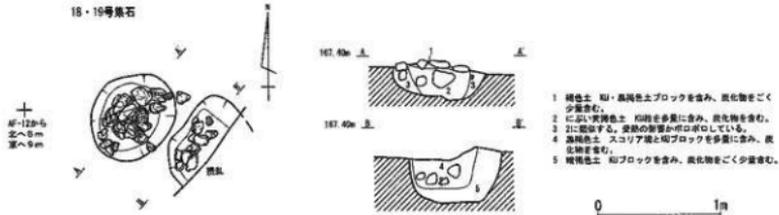


第28図 集石 (1)

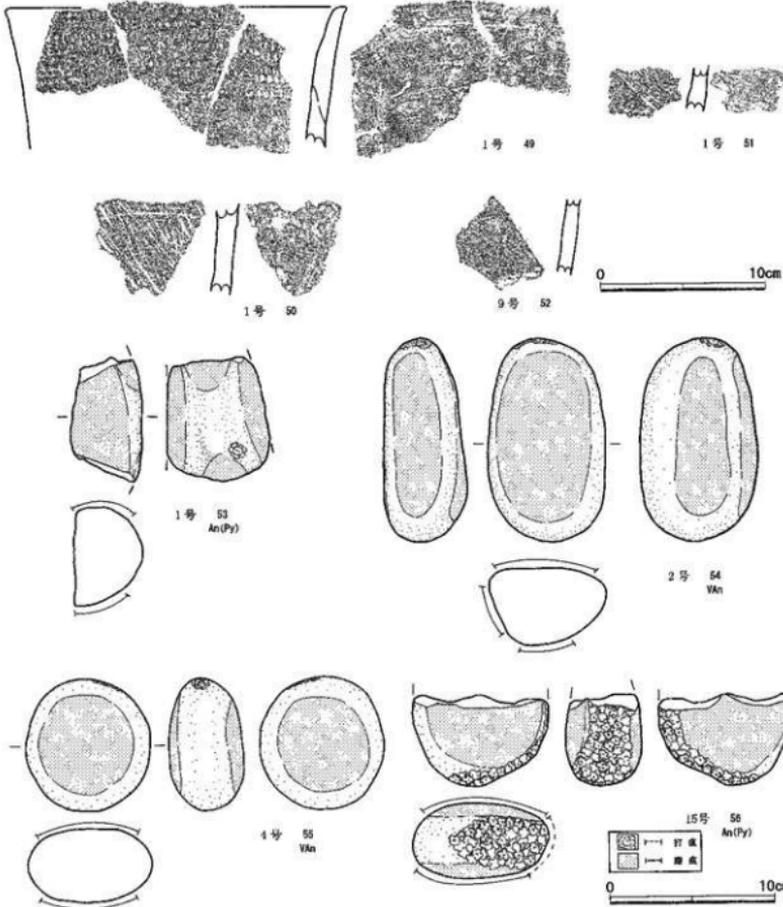


0 1m

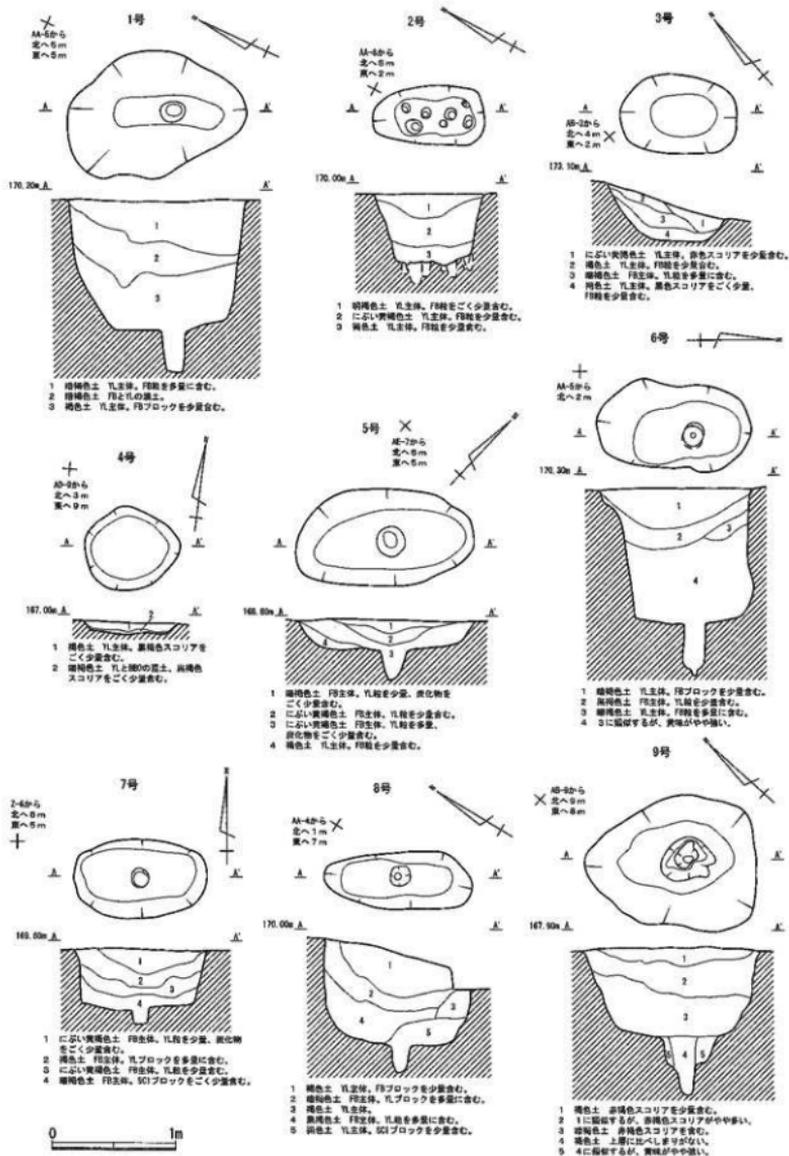
第29図 集石(2)



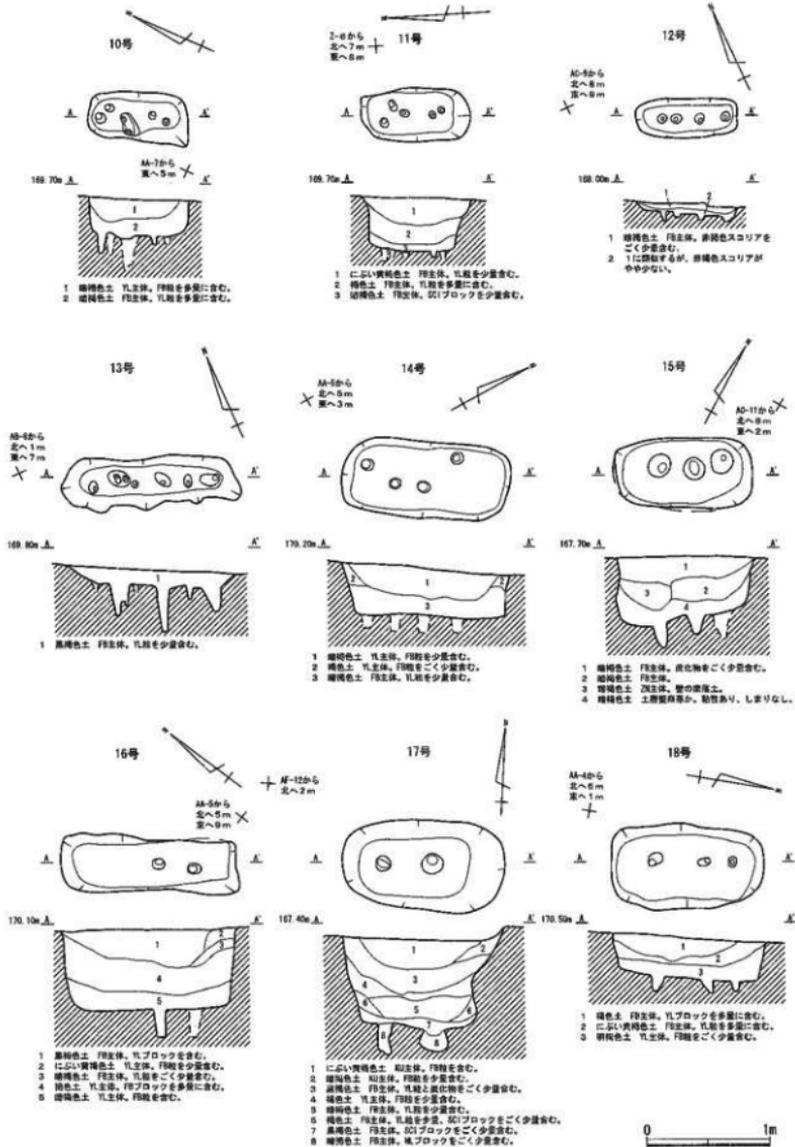
第30図 集石(3)



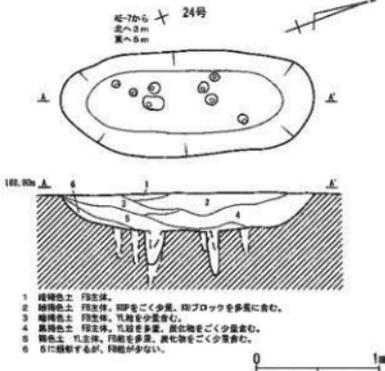
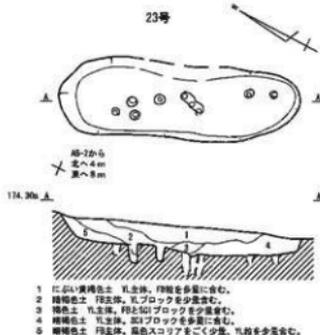
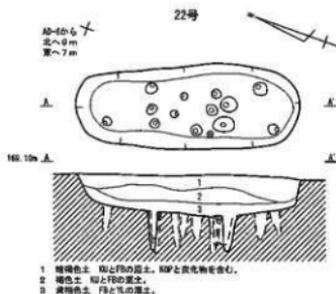
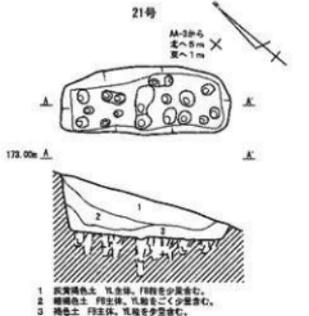
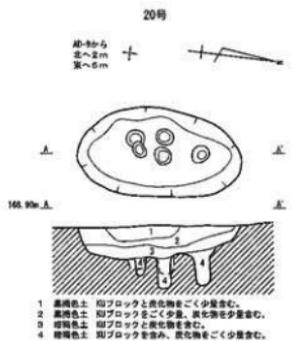
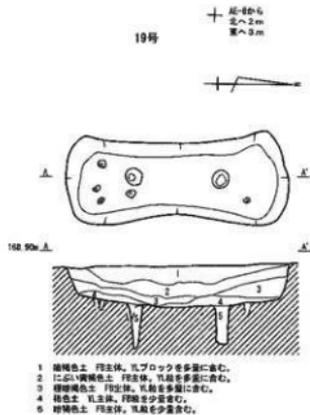
第31図 集石内出土遺物



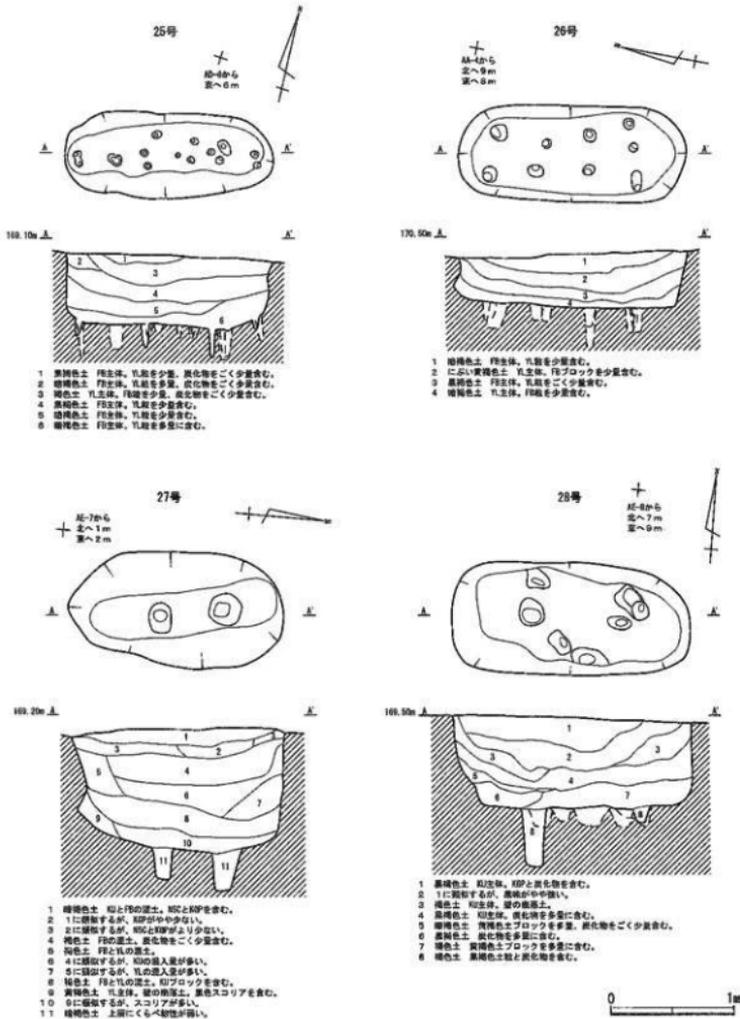
第32図 土坑(1)



第33図 土坑(2)



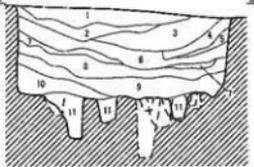
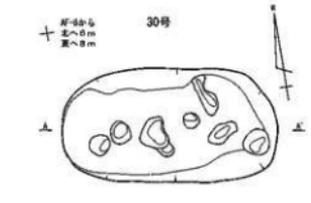
第34図 土坑(3)



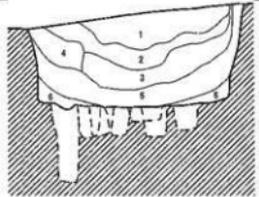
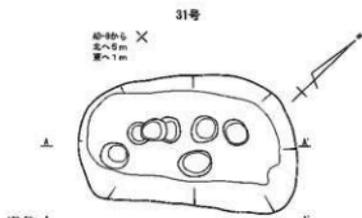
第35図 土坑(4)



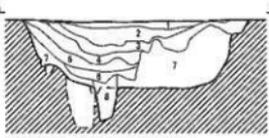
- 1 黒褐色土 砂主様、丸粒を多数に含む。
- 2 暗褐色土 砂主様、丸粒を含む。
- 3 暗褐色土 丸主様、円筒を少量含む。
- 4 暗褐色土 砂主様、丸ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 丸主様、円筒を多数に含む。
- 6 黒褐色土 砂主様、丸粒をごく少量含む。
- 7 黒土 砂主様、丸粒をごく少量含む。
- 8 褐色土 丸主様、円筒を少量含む。



- 1 黒褐色土 砂主様、丸粒と炭化物を含む。
- 2 におい黄褐色土 砂主様、丸粒をごく少量含む、炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 丸粒をごく少量、炭化物を多数に含む。
- 4 暗褐色土 炭化物をごく少量含む。
- 5 黄褐色土 砂主様、圓の黒腐土。
- 6 暗褐色土 炭褐色土ブロックを多数に含む、炭化物を含む。
- 7 におい黄褐色土 黄褐色土ブロックを多数に含む。
- 8 黒褐色土 黄褐色土ブロックと炭化物を多数に含む。
- 9 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多数に含む、炭化物を含む。
- 10 におい黄褐色土 黄褐色土ブロックを多数に含む。
- 11 におい黄褐色土 黒褐色・黄褐色土ブロック、炭化物を含む。



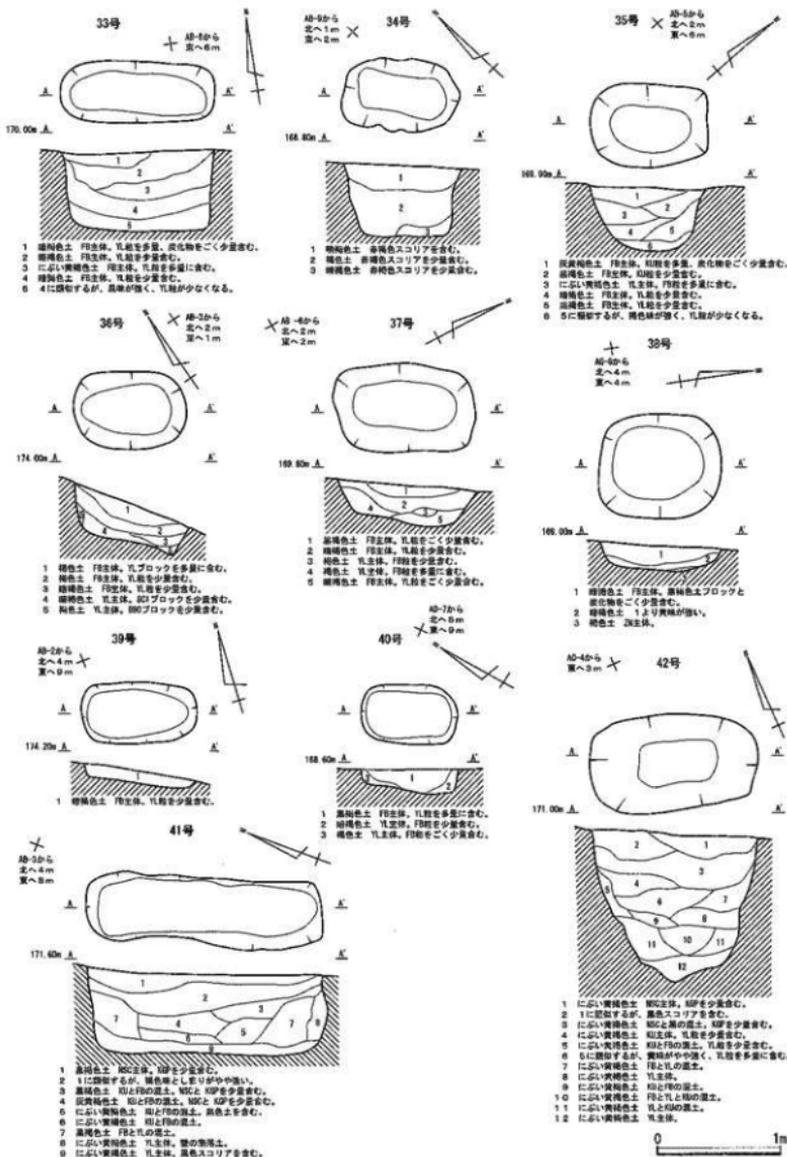
- 1 黒褐色土 砂、黄褐色土粒を含む、炭化物を多数に含む。
- 2 暗褐色土 砂をごく少量含む、黄褐色土ブロックと炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 炭化物をごく少量含む。
- 4 におい黄褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む、炭化物をごく少量含む。
- 6 におい黄褐色土 炭の黒腐土。



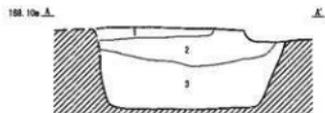
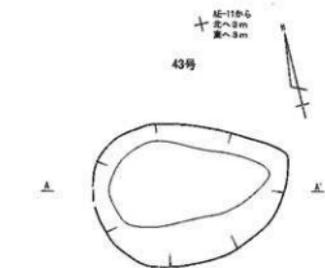
- 1 におい黄褐色土 砂、炭化物をごく少量含む。
- 2 暗褐色土 砂、炭化物をごく少量含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を多数に含む。
- 4 褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 5 におい黄褐色土 黄褐色土ブロックを多数に含む。
- 6 黒褐色土 炭化物を多数に含む。
- 7 砂に凝結するが、黄褐色土が、しまりも強い。
- 8 黒褐色土 炭化物を多数に含む。



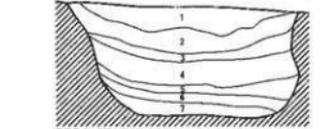
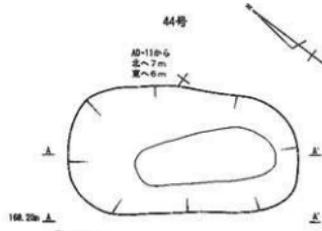
第36図 土坑(5)



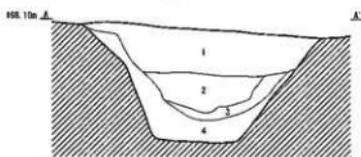
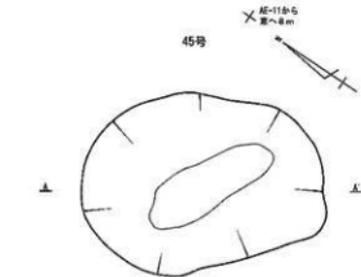
第37図 土坑 (6)



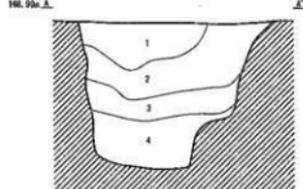
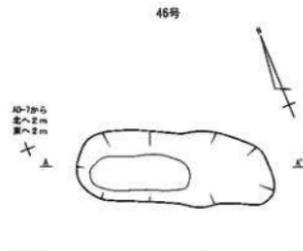
- 1 濃い黄褐色土 腐植土ブロックを多量に含む。炭化物を含む。
- 2 濃い黄褐色土 腐植土ブロックを多量。炭化物をごく少量含む。
- 3 黄褐色土 腐植土ブロックを含む。炭化物をごく少量含む。



- 1 黄褐色土 砂礫と炭化物を含む。
- 2 褐色土 砂礫をごく少量。炭化物を少量含む。
- 3 腐植土 褐色スクリヤ、砂礫、炭化物をごく少量含む。
- 4 腐植土 褐色スクリヤ。炭化物をごく少量含む。
- 5 褐色土 褐色スクリヤ。炭化物をごく少量含む。
- 6 腐植土 褐色スクリヤ。炭化物をごく少量含む。
- 7 褐色土 褐色スクリヤをごく少量含む。



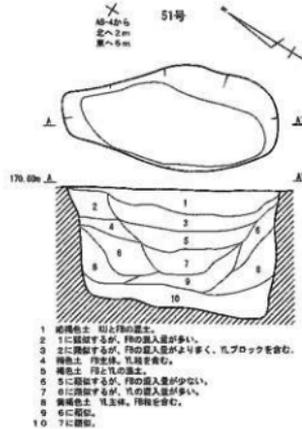
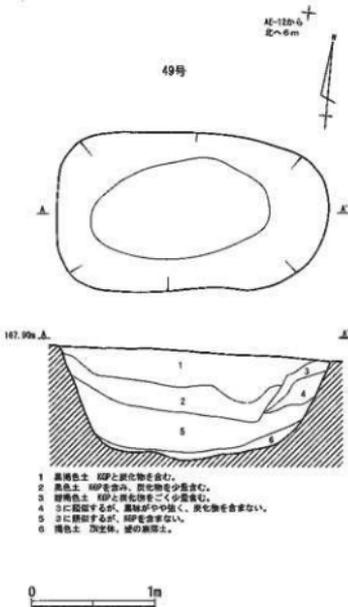
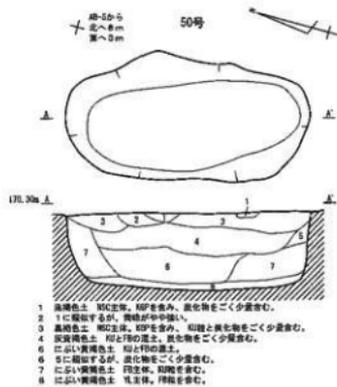
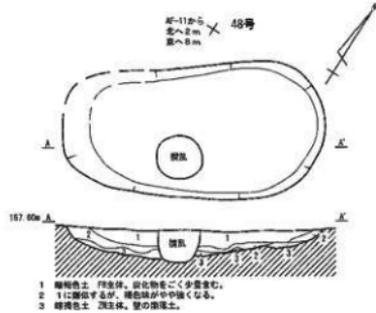
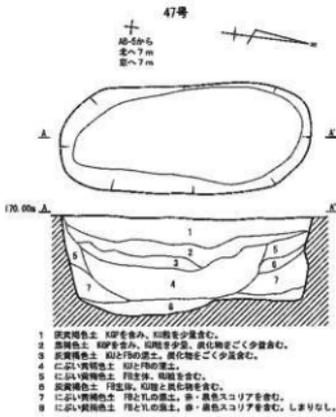
- 1 黄褐色土 砂礫。炭化物をごく少量含む。
- 2 1に類似するが、腐植土がやや多くなる。
- 3 腐植土。砂礫。炭化物をごく少量含む。
- 4 2に類似するが、腐植土がやや多くなる。



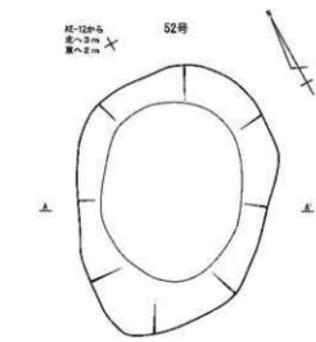
- 1 濃い黄褐色土 粘土質。腐植土多量に含む。
- 2 腐植土 砂礫。炭化物多量に含む。
- 3 2に類似するが、粘土ブロック状に含むようになる。
- 4 褐色土 粘土質。砂礫をごく少量含む。



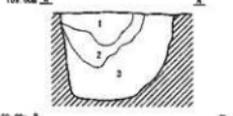
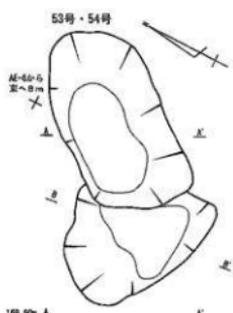
第38圖 土坑(7)



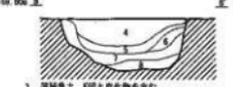
第39図 土坑(8)



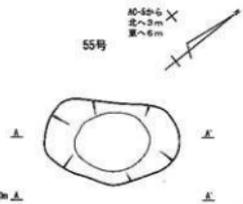
- 1 暗褐色土 砂主様。瓦ブロックを少量、炭化物をごく少量含む。
- 2 褐色土 瓦主様。砂を多く少量含む。
- 3 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。
- 4 暗褐色土 砂主様。瓦を多量。瓦ブロックを少量含む。
- 6 褐色土 瓦主様。瓦ブロックを少量含む。



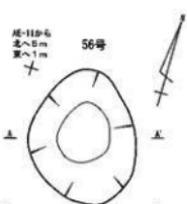
- 1 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。
- 2 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。
- 3 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。



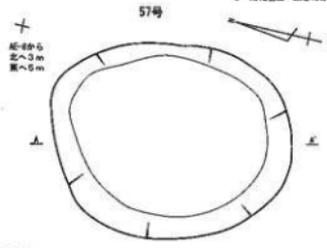
- 3 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。
- 2 灰褐色土 砂主様。炭化物を多く少量含む。
- 4 暗褐色土 砂主様。瓦を多量に含む。
- 5 に近い黄褐色土 黒褐色土ブロックを多量、炭化物を多く少量含む。
- 6 暗褐色土 砂主様。炭化物を多く少量含む。
- 7 灰褐色土 炭化物を多く少量含む。
- 8 暗褐色土 炭化物を多く少量含む。



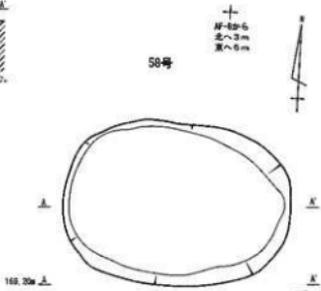
- 1 に近い黄褐色土 砂主様。瓦を少量含む。
- 2 暗褐色土 砂主様。瓦を少量含む。
- 3 褐色土 瓦主様。砂を少量含む。



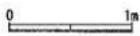
- 1 暗褐色土 砂主様。炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 砂主様。
- 3 暗褐色土 砂と瓦の混土。



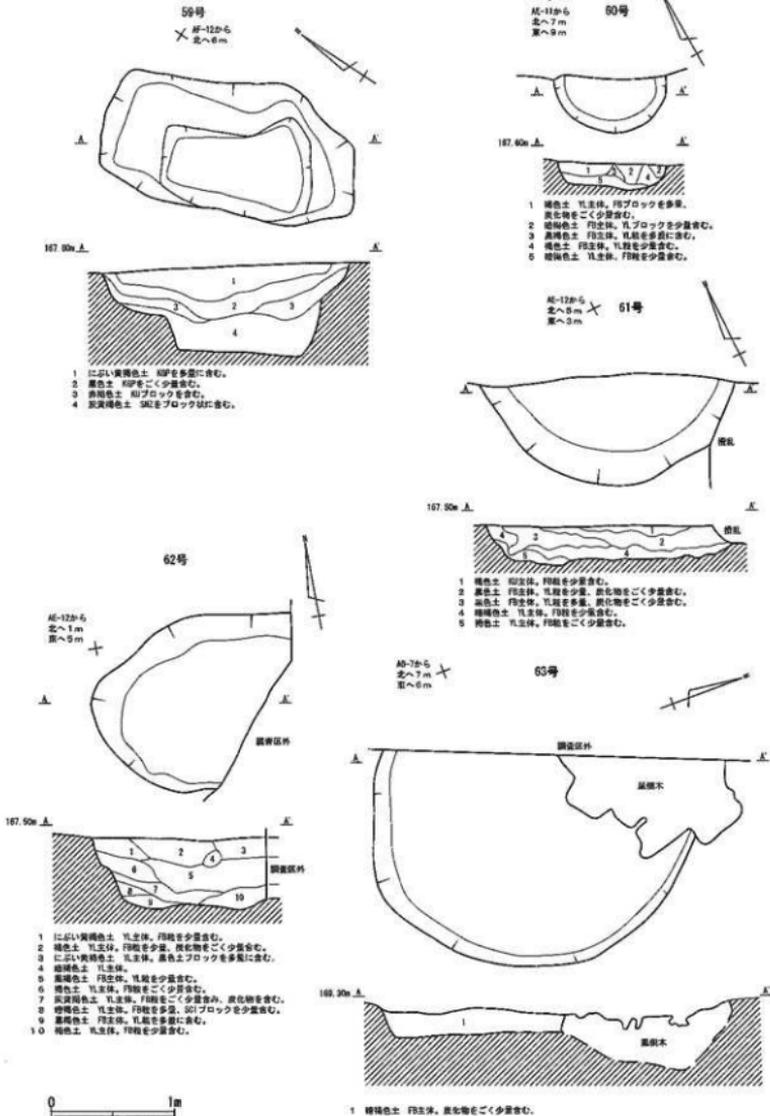
- 1 暗褐色土 砂主様。炭化物を多く少量含む。
- 2 暗褐色土 砂主様。
- 3 褐色土 瓦主様。炭化物を多く少量含む。



- 1 暗褐色土 砂主様。炭化物を多く少量含む。
- 2 暗褐色土 炭化物を多量に含む。砂質で粘性がない。
- 3 に近い黄褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 赤褐色スリアを多量に含む。



第40図 土坑(9)



第41図 土坑(10)

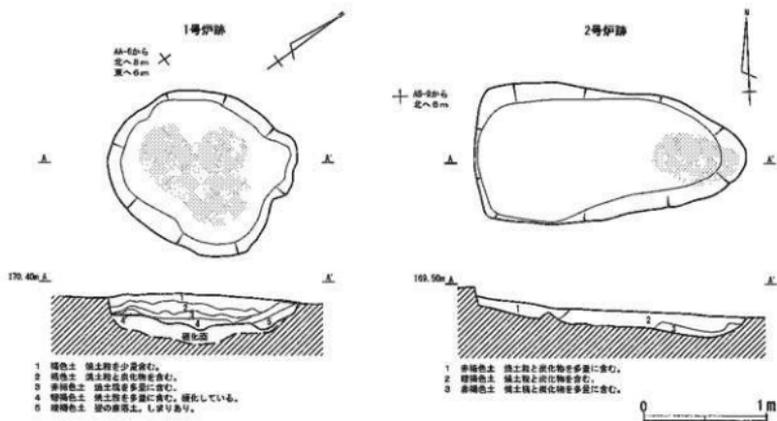
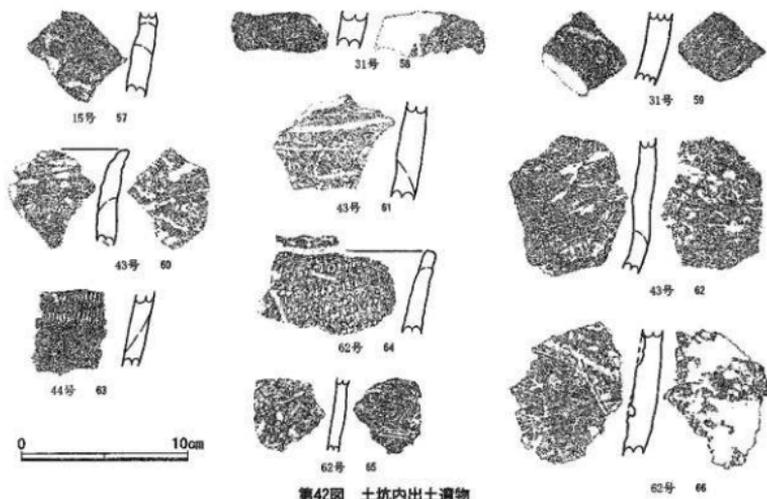


表6 縄文時代住居跡計測表

住居番号	長径(m)	短径(m)	住居番号	長径(m)	短径(m)	住居番号	長径(m)	短径(m)
1号	-	3.04	5号	4.28	-	9号	3.88	3.64
2号	5.92	3.48	6号	4.32	3.94	10号	4.36	4.12
3号	-	-	7号	5.92	-	11号	4.04	-
4号	-	4.16	8号	3.04	2.4			

表7 縄文時代集石計測表

集石番号	検出面層位	土坑		検数	非化比率	総合	集石番号	検出面層位	土坑		検数	非化比率	総合
		長径(m)	短径(m)						長径(m)	短径(m)			
1号	9	1.8	1.36	111	86%		11号	9	0.8	0.72	17	47%	
2号	8上	1.48	1.4	100	95%	3号	12号	9	0.82	0.76	27	96%	6号
3号	8上	1.32	1.2	59	93%	2・6号	13号	8	0.88	0.74	44	70%	
4号	8上	1.12	1.12	74	76%		14号	8上	0.76	0.72	49	100%	
5号	8上	1.08	1	16	94%		15号	8	0.64	0.48	16	88%	
6号	8上	1.16	0.88	53	100%	3・12号	16号	9	0.54	0.36	4	100%	
7号	8上	0.92	0.72	25	96%		17号	8上	0.44	0.32	16	88%	
8号	8上	1.16	0.8	28	100%		18号	9	0.76	0.64	44	96%	
9号	9下	1.12	0.64	7	71%		19号	9	(0.76)	(0.34)	12	75%	
10号	8上	1.14	0.74	16	88%								

表8 縄文時代土坑計測表

土坑番号	検出面			底部平面		検出面層位	覆土に含まれる主な層位	遺残木本数	土坑番号	検出面			底部平面		検出面層位	覆土に含まれる主な層位	遺残木本数
	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長径(m)	短径(m)					長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長径(m)	短径(m)			
1号	1.49	1.05	1.05	0.88	0.24	15	11	1	33号	1.27	0.50	0.68	1.12	0.32	11	9	0
2号	0.90	0.48	0.55	0.62	0.30	17	11	7	34号	0.97	0.61	0.62	0.72	0.34	11	9	0
3号	0.97	0.63	0.47	0.44	0.34	15	11	0	35号	0.97	0.68	0.55	0.68	0.38	11	9	0
4号	0.78	0.72	0.10	0.64	0.52	16	12	0	36号	0.93	0.63	0.58	0.74	0.42	17	9	0
5号	1.45	0.78	0.28	1.26	0.48	11	9	1	37号	1.15	0.73	0.40	0.84	0.44	11	9	0
6号	1.26	0.74	1.10	0.84	0.44	11	9	1	38号	1.00	0.87	0.23	0.76	0.72	10	9	0
7号	1.08	0.64	0.51	0.94	0.42	17	9	1	39号	0.95	0.50	0.20	0.82	0.40	17	9	0
8号	1.19	0.47	0.76	0.90	0.36	12	9	1	40号	0.80	0.48	0.19	0.72	0.38	11	9	0
9号	1.40	1.10	0.74	0.96	0.60	11	9	1	41号	1.90	0.60	0.60	1.80	0.64	11	8	0
10号	0.80	0.40	0.29	0.72	0.37	17	9	6	42号	1.40	0.80	1.28	0.64	0.32	9	8	0
11号	0.88	0.43	0.43	0.70	0.35	17	9	5	43号	1.35	1.15	0.63	1.34	0.72	9	8	0
12号	0.82	0.32	0.10	0.72	0.24	12	9	4	44号	1.89	1.04	0.94	1.10	0.44	9	8	0
13号	1.50	0.45	1.30	1.16	0.24	17	9	7	45号	2.00	1.50	0.95	1.16	0.40	10	9	0
14号	1.37	0.62	0.41	1.63	0.50	11	9	4	46号	1.60	0.62	1.20	0.80	0.28	11	9	0
15号	1.12	0.58	0.58	1.00	0.72	9	9	3	47号	2.04	0.90	0.80	1.88	0.80	9	8	0
16号	1.40	0.46	0.65	1.86	0.34	11	9	2	48号	2.14	1.21	0.24	1.92	0.80	9	9	0
17号	1.32	0.76	0.75	0.92	0.68	9	9	2	49号	2.20	1.30	0.90	1.88	1.02	9	7	0
18号	1.25	0.66	0.31	1.12	0.54	15	9	3	50号	2.00	1.00	0.62	1.76	0.72	9	3・8	0
19号	1.84	0.88	0.35	1.64	0.64	10	9	7	51号	1.80	0.80	1.08	1.56	0.64	10	9	0
20号	1.30	0.70	0.25	1.18	0.58	10	9	5	52号	2.26	1.64	0.40	1.48	1.14	10	9	0
21号	1.38	0.55	0.46	1.24	0.46	17	9	18	53号	1.50	0.88	0.74	0.96	0.48	8	5	0
22号	1.84	0.70	0.30	1.68	0.52	10	9	14	54号	1.20	1.00	0.42	(0.72)	(0.60)	8	5	0
23号	1.96	0.65	0.20	1.76	0.68	17	9	9	55号	1.10	0.67	0.27	0.62	0.48	11	9	0
24号	2.08	0.85	0.33	1.60	0.52	11	9	8	56号	1.10	0.80	0.34	0.52	0.44	10	9	0
25号	1.73	0.70	0.63	1.60	0.44	11	9	14	57号	2.00	1.60	0.90	1.64	1.32	8	7	0
26号	1.18	0.70	0.40	1.06	0.68	11	9	0	58号	1.80	1.35	0.45	1.76	1.20	8	7	0
27号	1.80	0.90	1.00	1.56	0.36	9	8	2	59号	2.10	1.00	0.74	1.12	0.72	6	5	0
28号	1.90	0.90	0.75	1.88	0.76	8	6	7	60号	(0.92)	(0.42)	0.24	(0.76)	(0.34)	9	9	0
29号	2.15	1.15	0.50	1.92	0.84	10	9	18	61号	(2.08)	(0.90)	0.32	(0.72)	(0.64)	10	9	0
30号	1.80	0.90	0.70	1.72	0.76	8	5	8	62号	(1.64)	1.40	0.60	(1.4)	(1.08)	10	9	0
31号	1.80	1.00	0.85	1.56	0.76	8	7	7	63号	(1.64)	(1.48)	0.24	(2.4)	(1.68)	9	8	0
32号	1.80	1.10	0.64	1.20	0.64	8	7	2									

表9 縄文時代伊跡計測表

伊跡番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	伊跡番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1号	1.4	1.3	0.3	2号	0.75	0.65	0.15

表10 遺構出土土器調査表

図版番号	遺構番号	分類	色別 (Hue)	胎土	線條	捺痕	文様・透孔等
1	1号作灰	IIa	7.5YR3/4	石灰多、炭石少、白色粒子	有	良	I層部 外面にRの継条体を回転し押圧。
2	1号作灰	IIa	7.5YR7/6	石灰多、炭石、白色粒子	有	良	外面に厚皮不明の継条体圧痕、内面に捺痕。
3	2号作灰	IIb	5YR3/4	石灰多、炭石、輝石、白色粒子	有	良	I層部に細線條を貼付、外面に縦状の溝状体による波線、内面にへう状工具による波線。
4	2号作灰	IIb	7.5YR6/6	石灰、炭石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色粒子	有	良	口縁部に線條、捺痕の波線。
12	3号作灰	IIa	7.5YR4/4	石灰多、炭石少、白色粒子、黒色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕。
13	3号作灰	IIa	7.5YR5/6	石灰、炭石、白色粒子	有	良	I層部に細皮あり、外面内面に捺痕。
14	3号作灰	IIa	2.5YR5/4	石灰多、炭石、輝石、白色粒子	有	良	I層部に細線條を貼付、Rを軸に扇状に巻き押し。
15	3号作灰	IIa	7.5YR6/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、白色粒子	有	良	外面に縦状に細線條を貼付、Lの継条体圧痕、内面に捺痕。
16	3号作灰	IIa	7.5YR4/4	石灰、炭石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色粒子	有	良	外面に厚皮不明の継条体圧痕、内面に捺痕。
17	3号作灰	IIe	7.5YR6/6	石灰、炭石、輝石、白色粒子、黒色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕あり、捺痕。
18	4号作灰	II	5YR6/6	石灰、炭石、輝石、白色粒子、赤色粒子少、白色粒子	有	良	波状口縁、口縁部に扇状、無文、外面内面に捺痕。
19	4号作灰	II	5YR6/6	石灰、炭石少、輝石、白色粒子、黒色粒子、白色粒子	有	良	外面に縦状の捺痕あり、底線。
22	5号作灰	IIb	10YR4/5	石灰多、炭石、白色粒子多、白色粒子多、赤質	無	良	口唇部に横状あり、全体に線條の透した指痕が横。
23	5号作灰	IIb	10YR5/6	輝石、白色粒子、黒色粒子	有	良	折り出し口縁、外面に工具による透線網あり、筒内面の細線。
24	6号作灰	IIa	5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、白色粒子	有	良	口縁部に線條を貼付後後段旋回による押圧を施文、波状の波線、内面に捺痕。
25	6号作灰	II	5YR3/6	石灰、炭石、白色粒子、黒色粒子、白色粒子	無	良	外面に厚皮貼付後波線、押圧による波状の波線。
26	6号作灰	III	7.5YR5/4	石灰、炭石、輝石、白色粒子	無	良	厚文、外面に捺痕、内面に捺痕。
27	6号作灰	III	5YR5/6	石灰、炭石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面に捺痕、内面に捺痕。
28	6号作灰	III	5YR5/6	石灰、炭石、白色粒子、赤色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面に捺痕、内面に捺痕。
7号作灰	IVc	5YR5/6	石灰多、炭石、線條	無	良	波状に引の縄文、半截作管による平行波線文。	
7号作灰	IVc	5YR5/6	石灰多、炭石、線條	無	良	波状に引の縄文、半截作管による平行波線文。	
8号作灰	IVc	5YR5/6	石灰、炭石、線條	無	良	口唇部に4等位の突起、Rの縄文、平行波線文+厚皮文、外面にスス付。	
9号作灰	V	7.5YR3/3	石灰、炭石、白色粒子多、白色粒子多	無	不	良	口縁から胴部に横状工具による波状の波線、頸部に横状の波線。
43号作灰	Vc	5YR4/8	石灰、炭石、線條、白色粒子	無	良	無	複合状線を口縁部から筒内面へ、頸部から胴部に縦状に施文、胴部にさうめん状押痕。
44号作灰	V	10YR5/8	石灰、炭石、輝石、白色粒子	無	良	無	線條工具による波状の波線、短みのある扇状波線。
11号作灰	IIa	10YR6/8	石灰、炭石、輝石少、白色粒子、白色粒子	有	良	外面にRの継条体圧痕、内面に捺痕。	
10号作灰	II	5YR4/6	石灰、炭石、白色粒子、赤色粒子	有	良	外面に厚皮不明の継条、内面に捺痕。	
11号作灰	II	5YR4/4	石灰、炭石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色粒子	無	良	外面内面に捺痕。	
9号作灰	II	10YR5/3	石灰、炭石、白色粒子	無	良	無文。	
15号土坑	II	7.5YR6/6	石灰、炭石、輝石、白色粒子、白色粒子	有	良	無文。	
31号土坑	II	7.5YR6/8	石灰、炭石、輝石、白色粒子、白色粒子	有	良	無文、内面に捺痕。	
31号土坑	II	7.5YR6/8	石灰、炭石、輝石多、白色粒子、白色粒子	有	良	無文、内面に捺痕。	
43号土坑	II	5YR4/6	石灰多、炭石、白色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕。	
43号土坑	II	5YR5/6	石灰、炭石、白色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕。	
43号土坑	II	2.5YR4/6	石灰多、炭石、輝石少、白色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕。	
44号土坑	IIa	5YR6/8	石灰、炭石、輝石、白色粒子	有	良	外面にRの継条体圧痕。	
42号土坑	IIa	7.5YR5/6	石灰多、炭石、輝石	有	良	口唇部とI層部に外面にRの継条体圧痕。	
42号土坑	II	2.5YR4/8	石灰多、炭石少、白色粒子	有	良	無文、内面に捺痕。	
42号土坑	II	5YR5/6	石灰、炭石、白色粒子、白色粒子	有	良	無文、外面内面に捺痕あり、外面にスス付。	

表11 遺構出土土器調査表

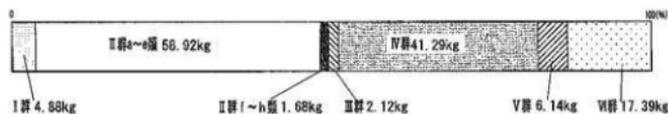
図版番号	遺構名	石材名	O b 原産地	器種名	鉢大径 (mm)	底大径 (mm)	底厚 (mm)	重量 (g)	図版番号	遺構名	石材名	O b 原産地	器種名	鉢大径 (mm)	底大径 (mm)	底厚 (mm)	重量 (g)
5	2号作灰	Ba	—	甌形甌	103.0	100.9	62.3	795.6	34	6号作灰	An(Py)	—	台形等	186	150	75	2540
6	2号作灰	An(Py)	—	甌形甌	97.9	65.8	47.5	391.2	35	6号作灰	An(Py)	—	台形等	127	130	53	1180
7	2号作灰	Ba	—	甌形甌	81.6	53.9	37.2	187.2	39	8号作灰	VBa	—	台形等	288	189	112	6500
8	2号作灰	FG	—	甌形甌	87.5	81.6	41.7	447.4	41	9号作灰	Ba	—	甌形甌	114.7	110.4	59.3	931.8
9	2号作灰	Ob	SWID	石甌	30.0	16.7	5.1	1.4	42	9号作灰	An(Py)	—	甌形	72.3	64.6	55.8	655.6
10	2号作灰	Ob	—	石甌	115.3	114.6	6.6	0.7	45	10号作灰	OT	—	甌形石甌	77.3	64.6	55.8	1135.4
11	3号作灰	Ob	—	石甌	114.3	117.8	5.0	1.2	46	10号作灰	An(Py)	—	甌形甌	100.4	78.6	41.4	525.2
20	4号作灰	Hor	—	石甌	126.5	119.6	6.0	2.1	47	10号作灰	VAn	—	甌形甌	142.6	89.4	43.1	795.6
21	4号作灰	Ob	—	石甌	32.0	28.8	9.8	4.6	48	10号作灰	An(Py)	—	台形等	491	395	241	9000
29	6号作灰	Ch	—	石甌	116.1	113.7	4.4	0.7	51	1号作灰	An(Py)	—	甌形甌	73.4	67.5	61.6	649.0
30	6号作灰	An(Py)	—	甌形甌	53.2	65.5	43.9	171.3	54	2号作灰	VAn	—	甌形甌	124.0	71.9	50.8	574.2
31	5号作灰	An(Py)	—	甌形甌	58.1	49.4	35.0	115.3	55	4号作灰	VAn	—	甌形甌	80.5	74.8	48.5	348.3
32	6号作灰	Ba	—	甌形甌	70.7	53.8	48.8	261.6	56	15号作灰	An(Py)	—	甌形甌	58.4	61.9	66.1	292.0
33	6号作灰	VAn	—	甌形甌	82.0	66.5	36.6	99.9									

第2節 遺構外出土の土器

9層(FB)～3層の包含層からは、7,759点の土器が出土した。この点数は、現地での取り上げ遺物番号によっているが、接合等作業によって個体数が変化していることから、全体の出土量を点数で示すことが困難である。そのため、全体を概観するために重量を計り、以下の基準で時期ごとに分類し作成したのが第44図である。

これによると、総重量は132.42kgで、第II群(早期後半)が約46%、第IV群(前期)が約31%を占める。特に早期後半の清水柳E類、野島式土器が出土量的には当遺跡の中心となる。

群ごとの大まかな出土状況は第45・46図に示すとおりである。これによると、第I群は調査区の西北の端に出土しており、遺跡の中心は調査区外に広がる可能性がある。第II群は谷部を除いて丘陵の稜線に沿う形で出土しており、住居跡が検出されたAE11グリッド付近に特に遺物が集中する。第III群は個体数も少なく調査区の北半分に集中する。後述するが、類毎各個体毎に集中して出土しているのが特徴である。第IV群は他群とは異なり南の丘陵上に集中する。住居跡が検出されている地区である。第V群は住居跡が3基検出されているにも関わらず、出土遺物量が少なく、尾根上に分布する。第VI群は、第IV群の分布範囲に重なるが、そのほとんどが粗製土器の集中域となる。これらの分布図から、遺跡内で時期ごとの占地に特徴があることがわかる。



第44図 出土土器分類別重量比



第45図 包含層出土土器分類別出土状況(1)

1 分類

第Ⅰ群 早期前半 押型文土器群とそれに伴うもの

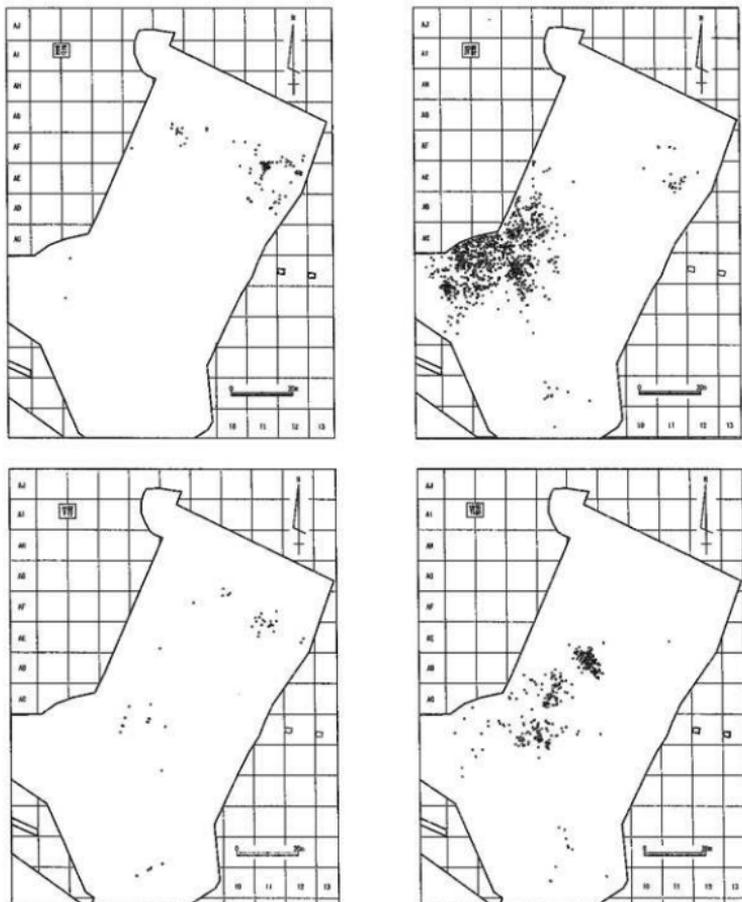
第Ⅱ群 早期後半の土器群

第Ⅲ群 早期末～前期初頭の土器群

第Ⅳ群 前期の土器群

第Ⅴ群 中期の土器群

第Ⅵ群 後期の土器群



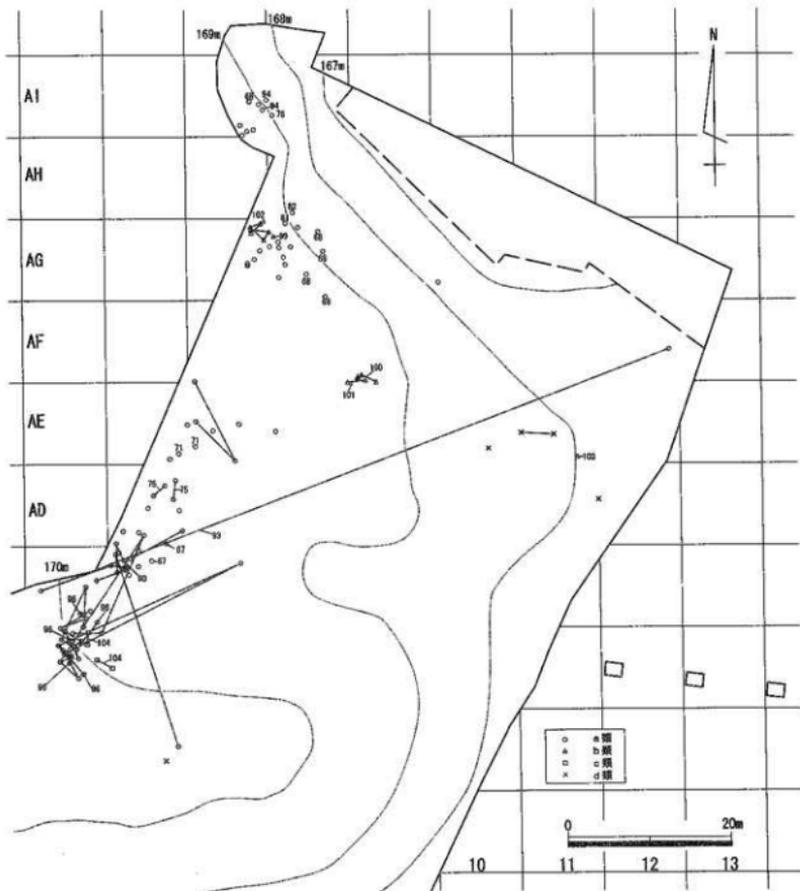
第46図 包含層出土土器分類別出土状況(2)

2 第1群土器

押型文土器の後半期に属する土器群を当群とした。

(1) a類 押型文土器

山形文、格子目文、異種文、楕円文があるが、いずれも器面に横方向あるいは斜方向に密接に施するもので、後半期の押型文土器である。出土点数は少ないが、調査区の北西縁辺部に集中して出土しており、分布の中心は調査区外に広がるものと考えられる。出土層位は9層 (FB) と8層 (KU) が中心となる。胎土には繊維が入るものと入らないものがあるため、押型文に関してのみ繊維が入るものの断面図にドットを付して表した。



第47図 第1群土器出土状況

67は山形文で、振幅の比較的狭い原体を横方向に施す。1個体のみの出土であった。

68～73は格子目文である。9個体出土し、中には格子の細かなものと粗いものがある。70を除いて胎土は非常に良く似ている。赤褐色を呈し、白色のデイスサイト粒を多量に含み、繊維を含まないのが特徴である。70はやや大きめの格子目文で、胎土に雲母、石英を多く含み全体的に砂質で、器面は灰褐色を呈する。

74～76は2種類以上の原体を使用している異種押型文で、3個体出土した。74は山形と楕円の組み合わせである。75は縄文と楕円で、小破片のため定かではないが、縄文を施した後に重ねて楕円文を施文している。76は山形文と楕円文の組み合わせで、山形文施文後に楕円文を横位に施す。格子目文、楕円文より器厚が薄い。

77～98は楕円文を施すもので約20個体が出土した。77～90は胎土に繊維をほとんど含まないので、砂質で雲母を含み、施される楕円も小さなものが多い。91～98は胎土に繊維を含むもので、特に96は多量の繊維を含む。また、全体的に器厚は厚く楕円は粗大である。内面に沈線があるものはない。

(2) b類 撚糸文土器

99～102は複節の撚糸文土器である。4個体出土しているが、全て原体LRの撚糸を施文するものである。出土状況は個体毎に集中しており、99と102、100と101は同一個体の可能性が高い。いずれも走行方向は乱れており、102のように交差するようなものもある。また、99の口縁部内面には外面と同じ原体による帯状の施文が観察できる。胎土はどの個体も少量の繊維と、白色のデイスサイト粒を含む。

103は口縁部の破片で、絡条体圧痕文を施すものである。口縁部は外湾し、外面には半置半転状の押し痕と内面には口縁部に圧痕文が施される。胎土には少量の繊維、デイスサイト粒、輝石、石英、長石を含み砂質である。第Ⅱ群の絡条体圧痕文より器厚が薄く、口縁部の作り出しが異なる。単体での出土である。

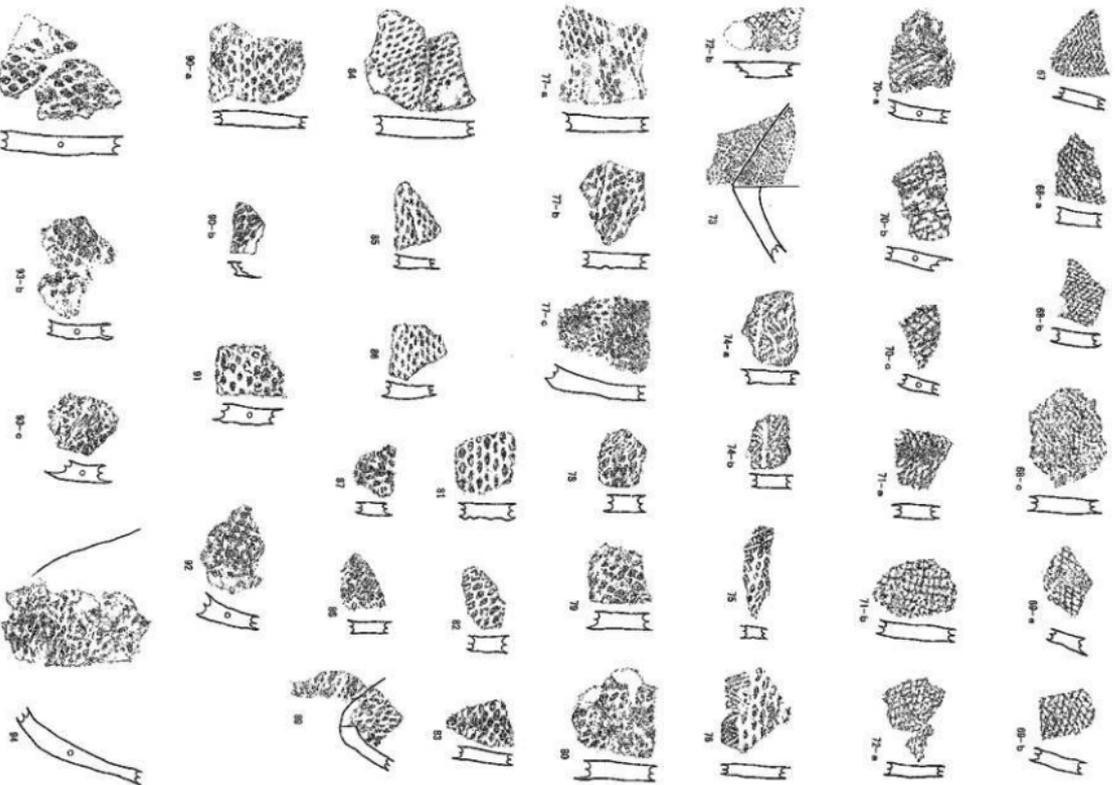
(3) c類 縄文土器

104は輪積痕を器面に残し、その上に縄文を縦方向に施文するもので、口縁部は縄文施文後、ナデによって無文化されている。胎土には少量の繊維を含み砂質である。この土器の分類については、縄文の施文方向は横方向であり、分布も押型文とは異なるため、Ⅲ群の可能性もある。

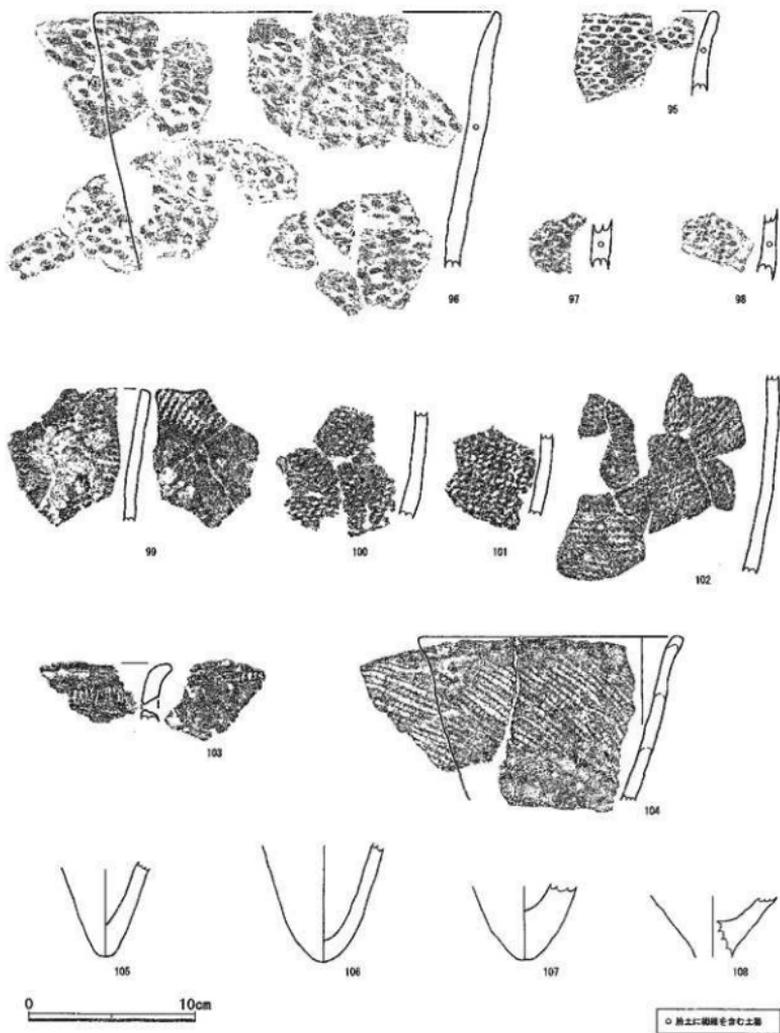
(4) d類 その他

105～108はⅠ群土器の底部と考えられるものである。105は胎土に繊維を含まず砂質で、ケズリ痕のような縦方向の調整が見られる。106～108は胎土に少量の繊維を含む。

d類は底部破片の中で比較的薄手で、繊維をあまり含まず、底部形状が鋭角なものを分類したが、出土位置は第Ⅱ群と重なるため、早期後半の土器群に含まれる可能性もある。



第48図 第1群土器(1)



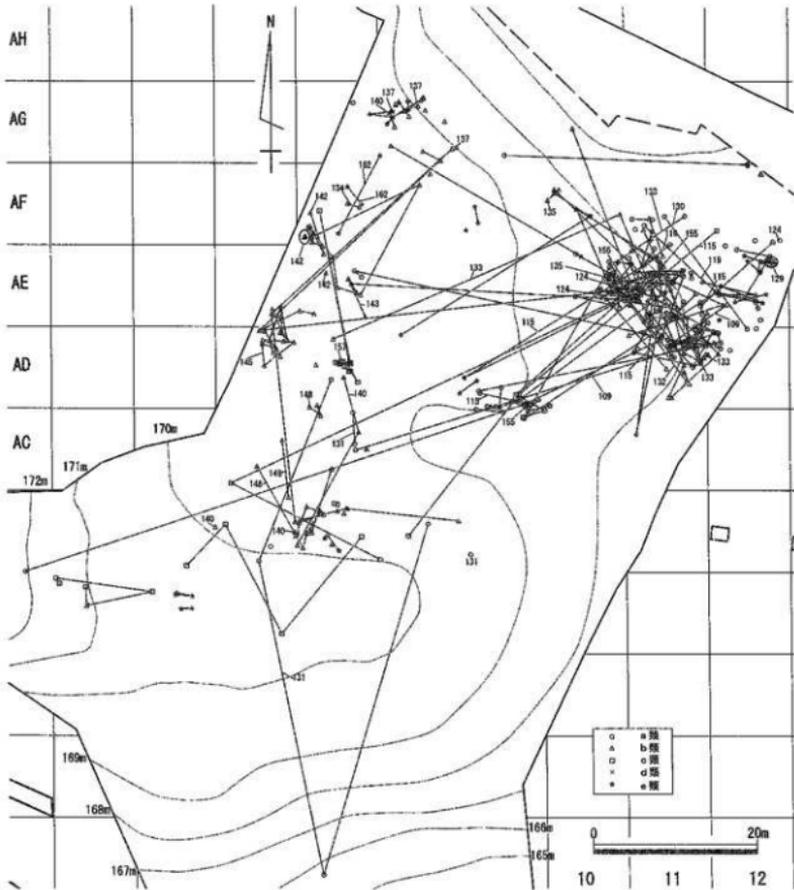
第49図 第1群土器(2)

3 第Ⅱ群土器

早期後半の条痕文系土器を当群とし、さらに以下のように分類した。

これらは調査区の北側の、主に尾根上に分布する。また、a類は一部b類の分布と重なり、c類はa類、b類の分布範囲に包括される。f～h類は個体数が少ないためか同一個体がそれぞれまとまって調査区内に分布する。出土層位は9層 (FB) ～8層 (KU) である。

- a類 清水柳E類土器
- b類 野島式土器
- c類 鶴ヶ島台式土器
- d類 茅山下層式土器



第50図 第Ⅱ群土器出土状況 (a～e類)

- e類 a～d類に伴う無文・糸痕文土器
f類 柏畑式土器
g類 上ノ山式土器
h類 打越式土器

(1) a類 清水柳E類土器

絡条体圧痕文を施すものを当類とした。これらは、その文様構成からさらに3種にわけて報告する。

ア a類1種 絡条体圧痕文+細隆起線文 (109～114)

109は口縁部と胴部に横方向の細隆起線文を貼付し、これを連結するように縦方向にも細隆起線文を施したもので、方形の区画内に絡条体圧痕文を充填したものである。しかし、この圧痕文は全ての区画に充填しているものではなく、破片から推察するに少なくとも2区画が無文となっている。また、横方向の細隆起線文上には絡条体圧痕文を施すが、縦方向の区画上にはない。器面の調整は、僅かに横方向のナデが観察できるのみである。

111～114は口縁部と胴部に横方向の細隆起線文を貼付することで、口縁部文様帯を区画し、その内側には絡条体圧痕文を施すものである。111は口唇部より縦方向の短い細隆起線文を貼付する。112は同じく細隆起線文を貼付しているが、絡条体の軸の圧痕が明確に観察できる。軸は非常に細いが深く押されており、施文時の潰れ等が観察できないことから、棒状というよりへら状の工具に縄を巻きつけたものと考えられる。以上3個体では、細隆起線文上に絡条体が押圧される。

114は111～113と同じく、細隆起線文によって口縁部文様帯を区画するものであるが、細隆起線文上に押圧文を施さず、上下をナデによって調整することで、断面を三角形に成形している。また、絡条体をやや回転させて押圧しているのが特徴である。

イ a類2種 絡条体圧痕文のみ (115～126)

外面上半部に絡条体圧痕文を施すものである。文様帯を区画する沈線や隆帯はないが、文様は胴部上半に限られる。また、1種では器面の調整痕が殆ど観察できなかったが、2種では内面に横方向の擦痕が観察できるものがある(観察表参照)。また、116、119、123では内面に条痕が観察できる。

116は、口唇部に胴部と同じ原体による押圧が認められる。125は112と非常によく似た原体を使用しており、絡条体の軸の押圧痕が残る。

ウ a類3種 斜方向の絡条体圧痕文 (127～131)

1種、2種は口縁部に対して平行に絡条体圧痕文が施文されていたが、3種は斜方向に施文するものを分類した。

127は表面が剝落しており不鮮明であるが、一部斜方向の押圧が観察でき、格子目状のモチーフも観察できる。口縁部には浅い刻目を施す。また、内面に糸痕調整がある。

129は2～3cmの原体を押圧するごとに方向を変えているもので、明確なモチーフがあるわけではないが、結果的に菱形状の文様が作られる。口唇部には胴部施文と同一体による押圧を施す。130は絡条体を若干回転させながら押圧するもので、軸の回転によって器面に凹凸が付く。

131は絡条体圧痕文によってユニオンフラッグ状に施文したのち、竹管状の工具によって2本一對の沈線と同様の文様を描くものである。文様帯下半部には口縁に平行する押圧が3段ほど施され、文様帯を区画する。おそらくこの下は無文になると思われる。口唇部には胴部施文と同様の原体による押圧があるが、不規則でこれもまた斜方向に施す。

(2) b類 野島式土器

胴部上半に細隆起線や沈線、刺突で三角形や菱形などの文様を描くものを当類とし、文様構成からさらに4種にわけて報告する。

ア b類1種 沈線文+細隆起線文 (132、133)

132は口縁部に細隆起線文を1条廻らせ、2本単位の竹管状工具による胴部の沈線文によって口縁部文様帯を区画したのち、同様の工具によって格子目状の沈線を施文するものである。細隆起線文によって口縁部文様帯を横方向に区画した後、さらに縦方向に細隆起線文を貼付し、沈線で対角線上に区切り、内部に沈線による格子目文を施文する。破片資料のため口縁部文様帯内部の無文部と施文部の関係は明らかではないが、恐らく細隆起線文によって作られた方形の区画を対角線上に2分割して施文部と無文部が存在すると思われる。

イ b類2種 刺突+細隆起線文 (134)

胴部に貼付した2本の細隆起線文(一部剥落)によって口縁部文様帯を区画し、文様帯内部を竹管状工具による刺突で充填する。接合状況からこの文様帯には無文部が存在することがわかる。

ウ b類3種 沈線 (135、136)

2本一對の竹管状工具による沈線で文様を描くものである。135は波状口縁を呈し、数本単位の縦区画の中に矢羽〜格子状の文様を描くものである。口唇部には刻目がある。136は小破片により文様のモチーフは判然としなが、135同様、縦と斜方向の沈線が施される。

エ b類4種 沈線による文様区画内充填 (137~152)

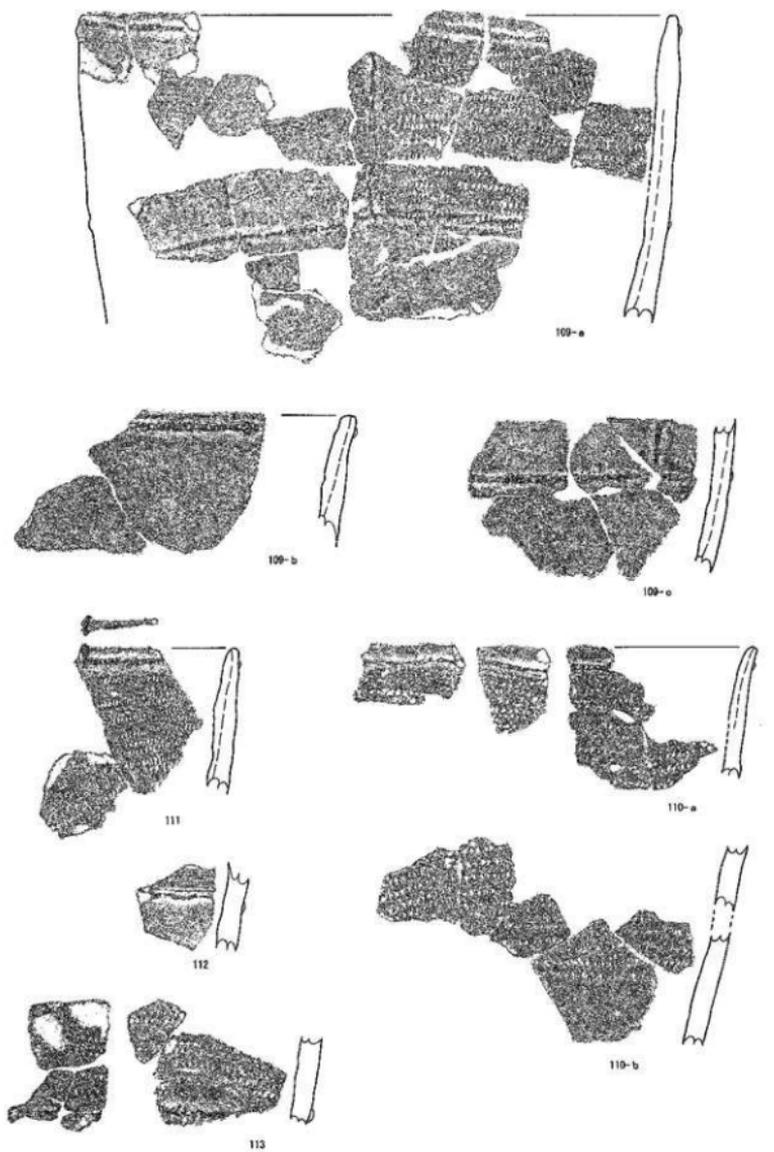
口縁部の文様帯内をさらに幾何学文様に分割し、その中を沈線で充填するものである。文様帯と無文部の境に屈曲部を設けるか、隆帯を施して明確に区画する。文様帯を分割する沈線等の施文方法によって、以下のように分類することができる。

137~139は幅のあるヘラ状工具で施した浅い沈線間を細い沈線で充填していくものである。137は波状口縁を呈し、口唇部には刻目が施される。また胴部の隆帯上には同様の工具による刺突がある。区画文と充填文は、基本的には区画文が先に描かれているが、何度か描きなおしているようで、前後関係は明確ではない。138は斜方向の集合沈線間をナデで区画し文様を表しているが、この土器もまた、区画を埋める沈線とナデの施文順序の関係は明確ではない。139は137と類似する。

140、141は平行する2本の沈線で三角形をイメージする文様を配し、沈線で充填したものである。胴部には屈曲部を有する。

142~152は1~複数本の沈線で区画した内部を、沈線で充填するものである。142~145は斜めあるいは縦方向の区画を主としているが、147は横方向に沈線で区画された4段の文様帯の中を、沈線で充填する。148、151、152は狭い口縁部文様帯を沈線で区画するものである。148のように文様帯内部に無文部を残すものもある。

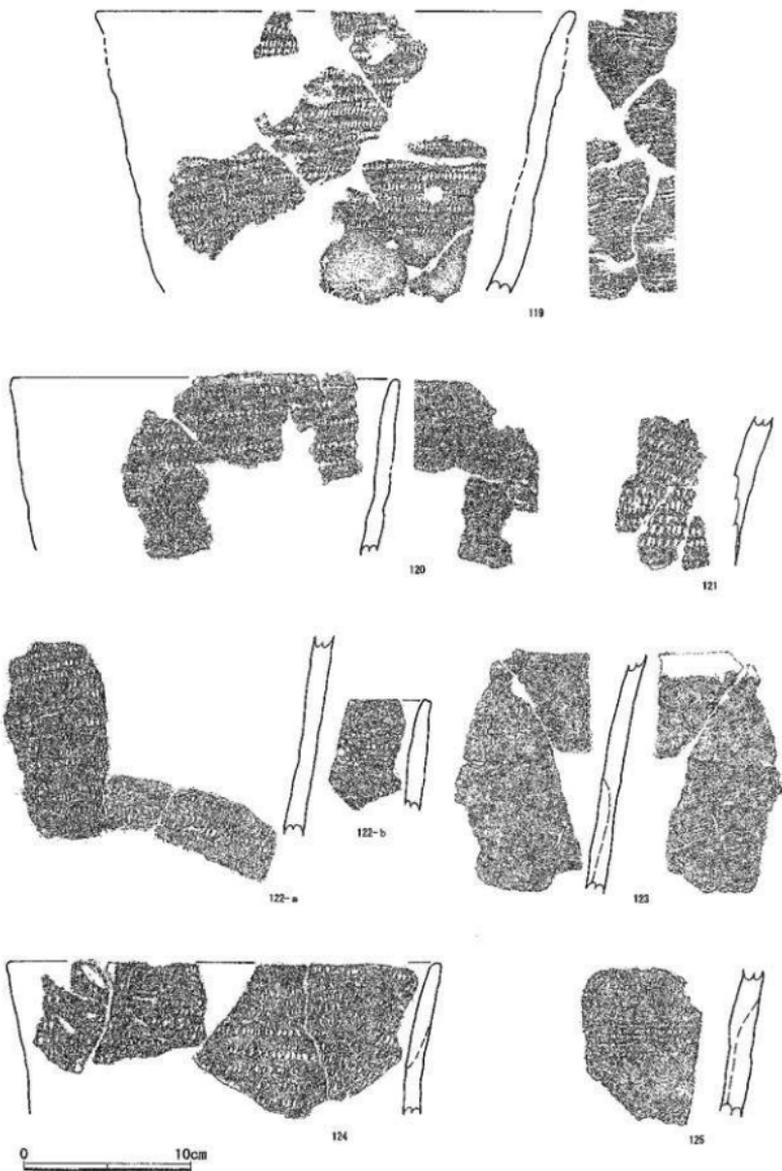
以上のようにb類土器は細隆起線文、刺突、沈線といった要素によって文様帯を作る。また、137~147のように口縁部文様帯が広いものは、口縁部の形状が平縁と波状の両方が存在し、口唇部に刻目が入る。一方口縁部文様帯が狭い148~152においては、口縁部は平坦で、口唇部に刻目が入るものはない。



第51圖 第II群a類土器(1)

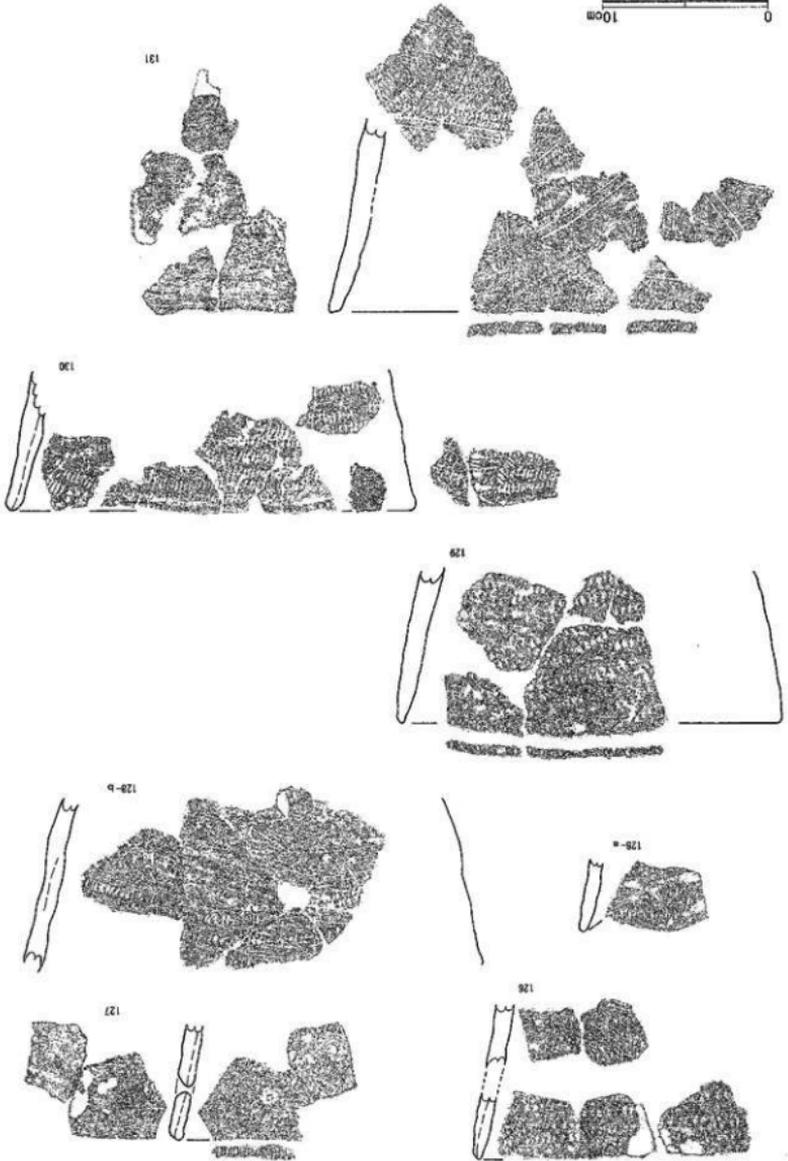


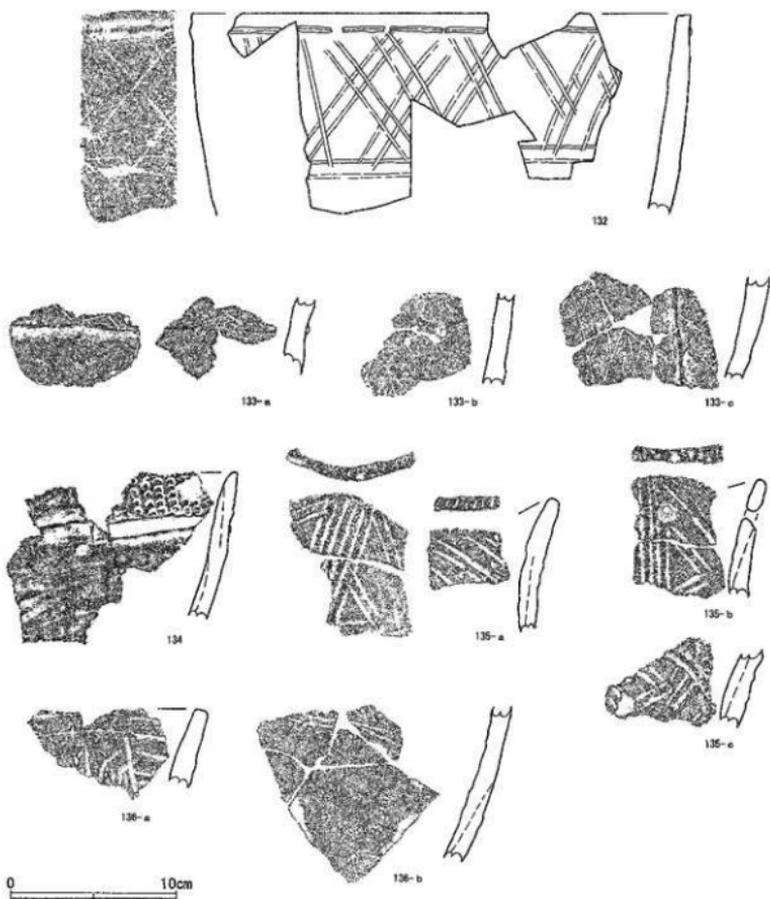
第52図 第II群a類土器(2)



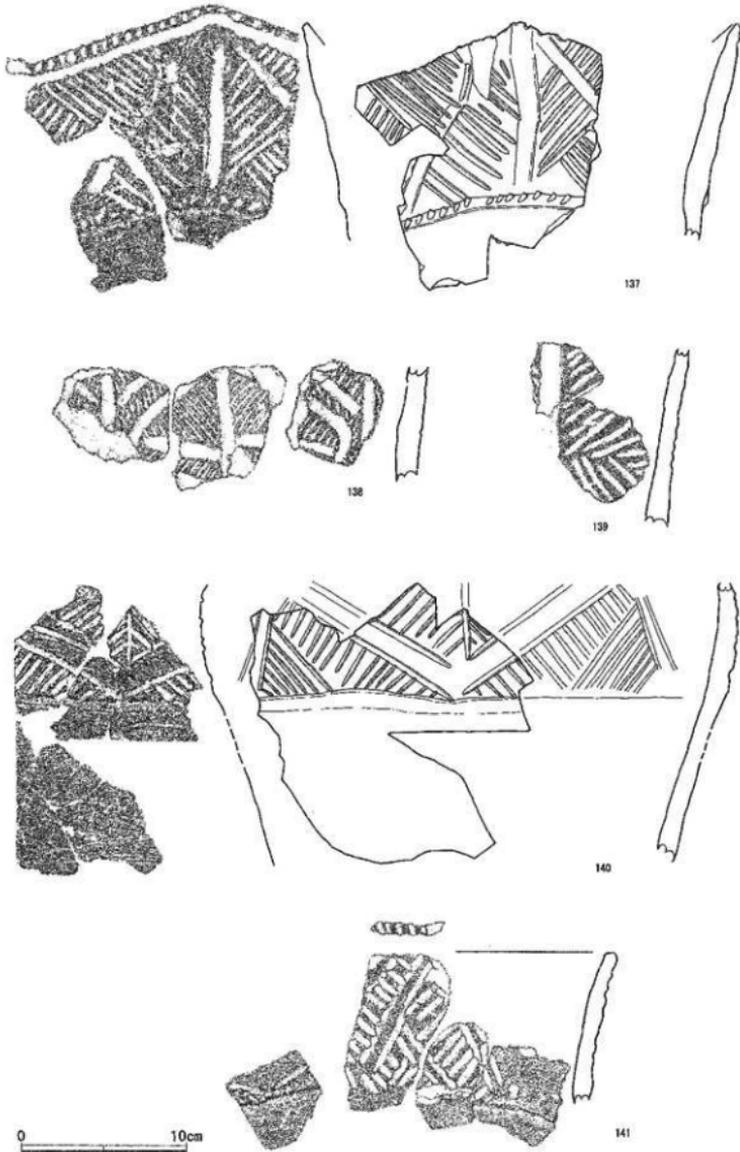
第53圖 第II群a類土器(3)

新54圖 新II群の出土器(4)

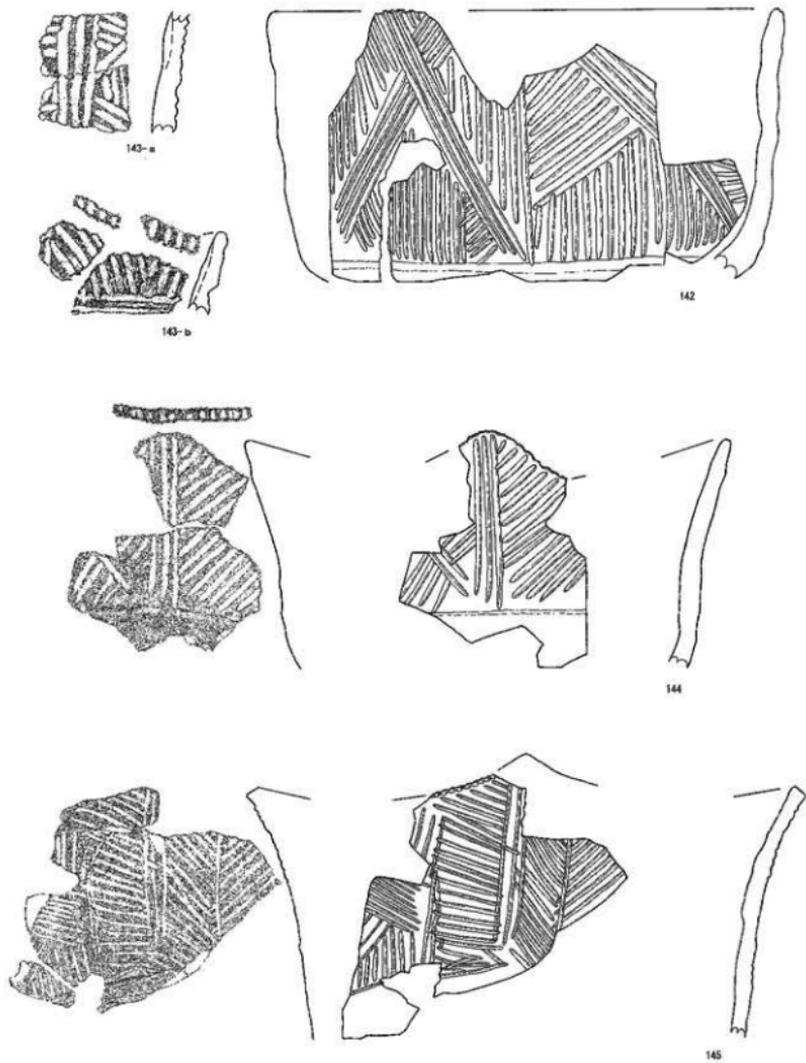




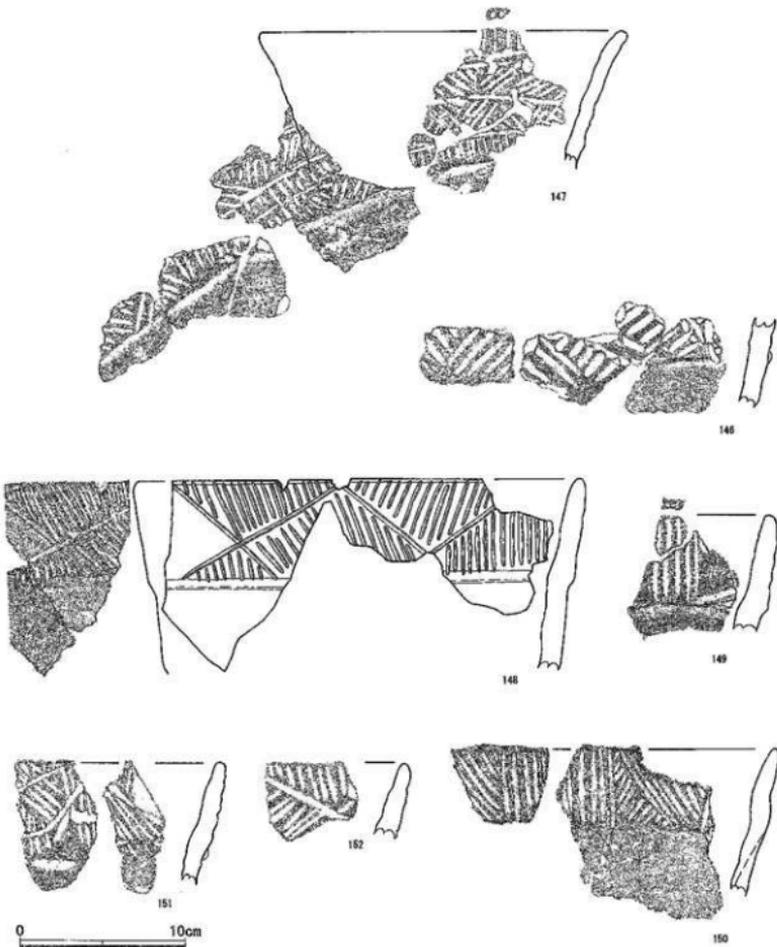
第55圖 第II群b類土器(1)



第56図 第II群b類土器(2)



第57图 第II群b類土器(3)



第58図 第II群b類土器(4)

(3) c類 鶏ヶ島台式土器

三角形や菱形に区画した沈線等の交点に刺突を施すものを当類とした。

153は同一個体と考えられる土器片で、太い沈線で区画し、同じ原体の平行沈線で内部を充填するものである。交点に施される刺突は少なく、規則的ではない。無文部や内面には条痕が残る。

154は太い隆帯が垂下するもので、隆帯上には刻みが見られる。

155は細い沈線によって区画されるもので、区画内を刺突に近い押引文によって充填する。口縁部は波状を呈する。156は細い沈線で区画された文線帯内部を太い沈線で充填するものもある。破片資料で全体のモチーフは明らかではないが、区画内を刺突によって充填しているものもあり、接合はしていないが胎土の状態と使用している工具が類似していることから、同一個体として掲載した。155、156とも内面には条痕による調整が観察できる。

157、158は細隆起線文による区画の内部を太い沈線や刺突によって充填したものである。細隆起線による無文部は、充填文を施したのちに、指ナデによって無文部がトレースされ、僅かに凹面となっている。内面には条痕が残る。

当類は、b類に比べ器厚が薄くなり、胎土は砂質で繊維の混入も少なくなる。また、a類、b類に殆ど観察できなかった条痕が壁面に明確に残る。

文様は野島式からの流れが見られるが、胎土をはじめとして、輪積みの方法や調整も異なり、生地調整技術が違う印象を受ける。

(4) d類 茅山下層式土器 (159、160)

攪乱土中より2個体が出土した。繊維は含むがやや薄手の胎土に、明確な条痕調整と、へら状工具により刻目を施す。

(5) e類 a～d類に伴う無文・条痕文土器

161は胎土にやや繊維が入るが、全体的に砂質で、内面に擦痕を残すものである。162は胎土に多量の繊維を含むもので、口唇部には竹管状の工具によるものと考えられる刺突を施す。器体製作時の粘土の貼り付け方法がa類、b類と類似する。

164～170は無文の底部であるが、その胎土からおそらくa類、b類の一部であると考えられる。胎土に繊維とデイスサイト粒を多量に含み、底から約3cmの高さに環状の凹みが観察できるものがある。削れているわけではないので、使用時のものとは考えられず、恐らく土器を製作する際に用いた、環状の土器台のアタリ部分であろう。

171、172は条痕が施されるものである。171は外面が縦方向に内面がやや斜め方向に条痕が施される。

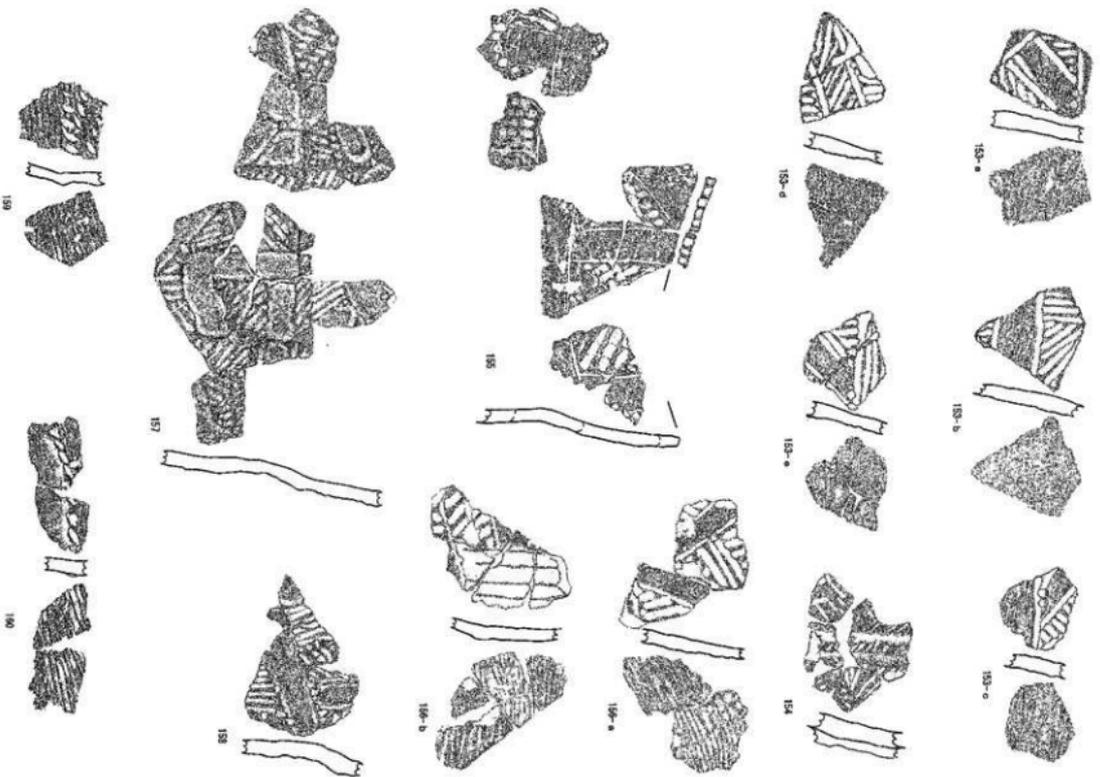
172は口縁部の一部であるが、外面には横方向に条痕が残る。この条痕は非常に明瞭で、調整というよりも文様の必要要素が強いように思われる。条痕の残り方はh類と類似するが、胎土が異なる。

(6) f類 粕畑式土器

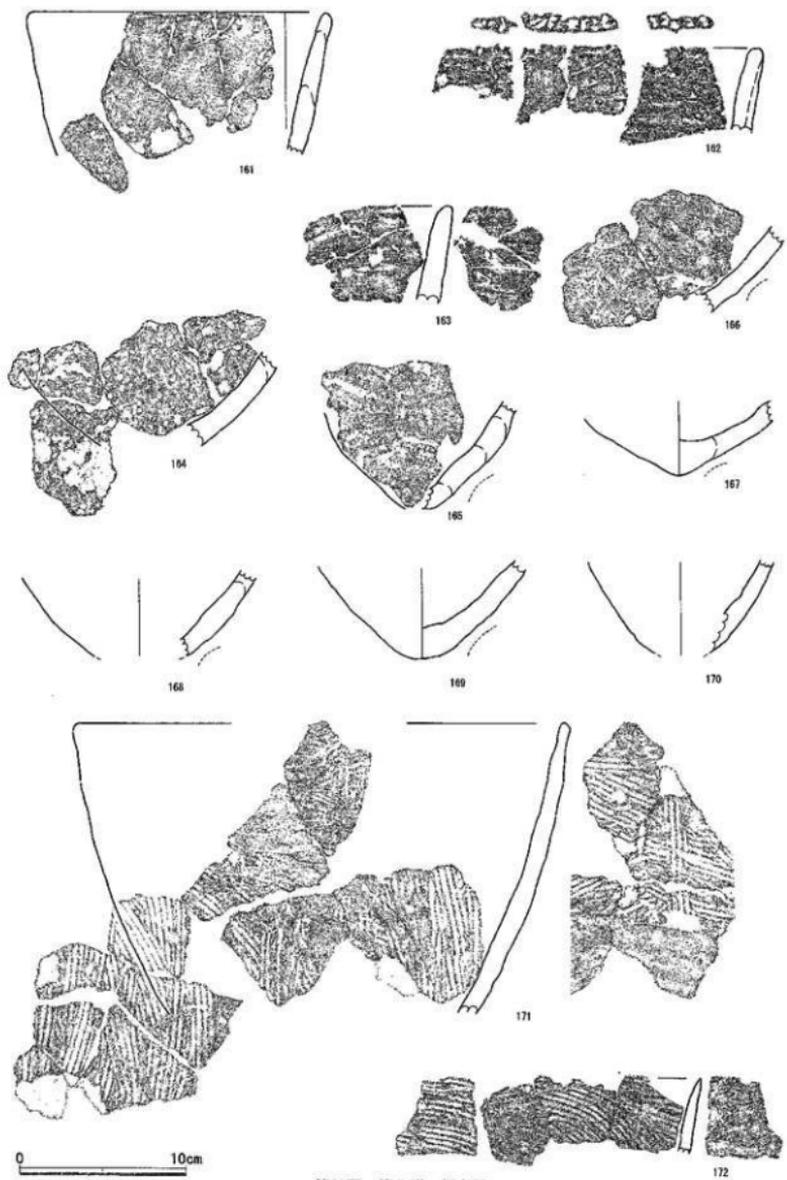
173は逆U字状の貼付けをもち、縁辺部に刻目を施す。胎土は砂質で繊維を少量含み、比較的薄手である。

(7) g類 上ノ山式

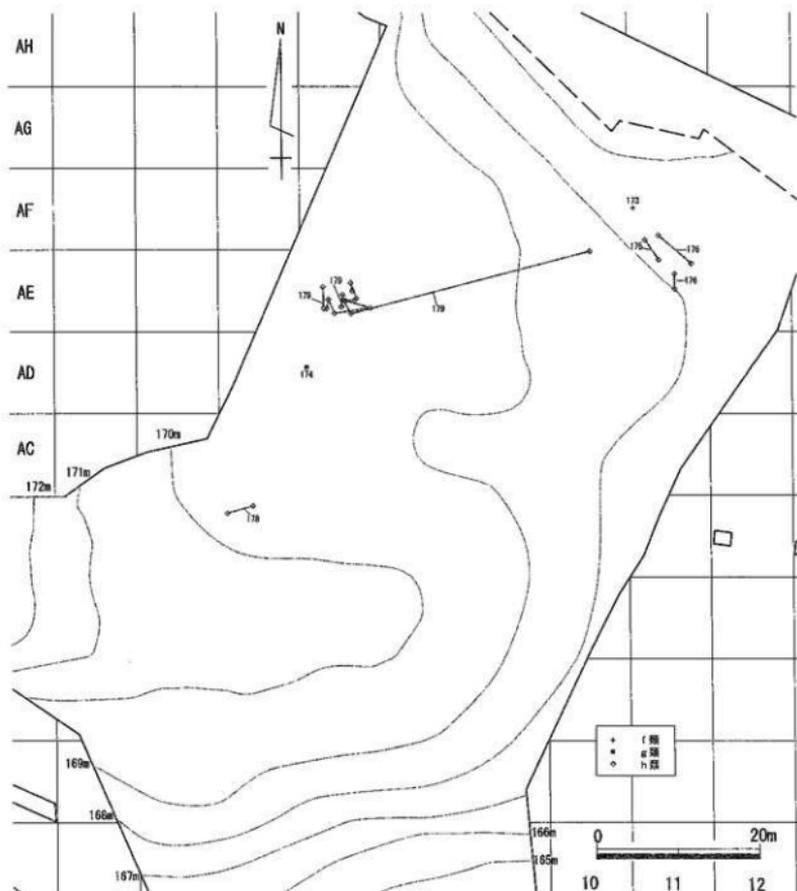
174は口縁部に平行する2本の隆帯を貼付し、上下から刺突を加えるものである。胎土に繊維と直径3～5mmの石英粒、白色岩片を含む。



第59図 第II群c・d類土器



第60圖 第II群e類土器

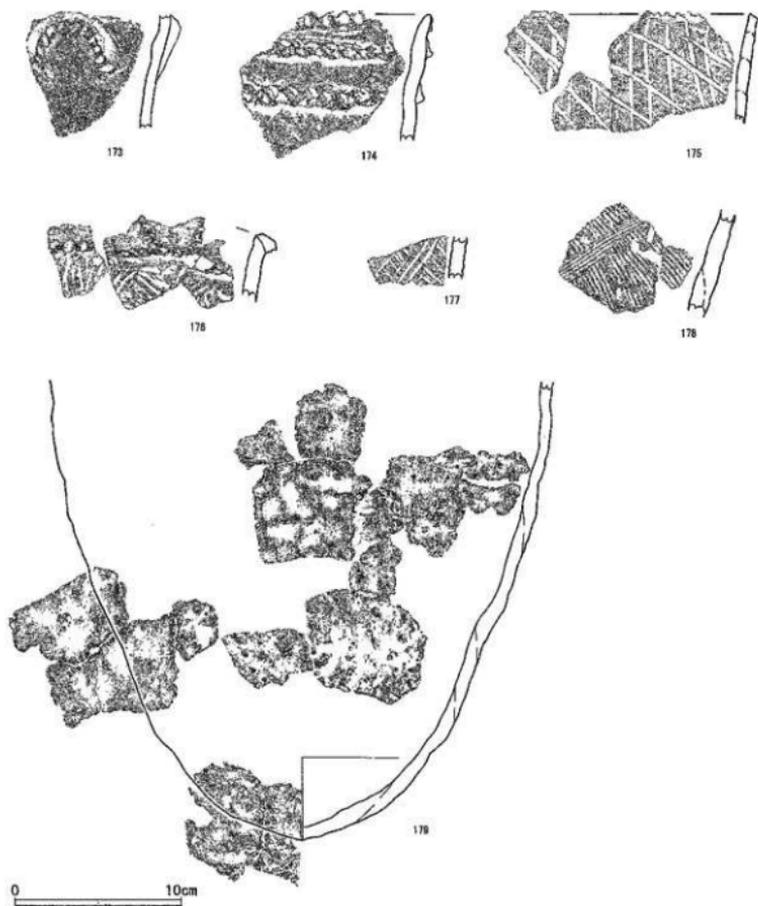


第61図 第II群土器出土状況（f～h類）

（8）h類 打越式土器

175は平縁で、口唇部に刻みを施す。胴部は条痕による器面の調整の後、沈線によって格子目状の文様を施す。内面には条痕による調整がみられる。176は突起を持つ口縁部で、隆帯上には斜めの刻みを施す。調整は条痕を斜方向に交差するように施しており、176～179は同一個体の可能性がある。

179は無文であるが、胎土や出土地点の情報からh類に伴うと考えられるものである。全体的に薄手で赤味を帯びており、横方向に指頭圧痕が観察できる。

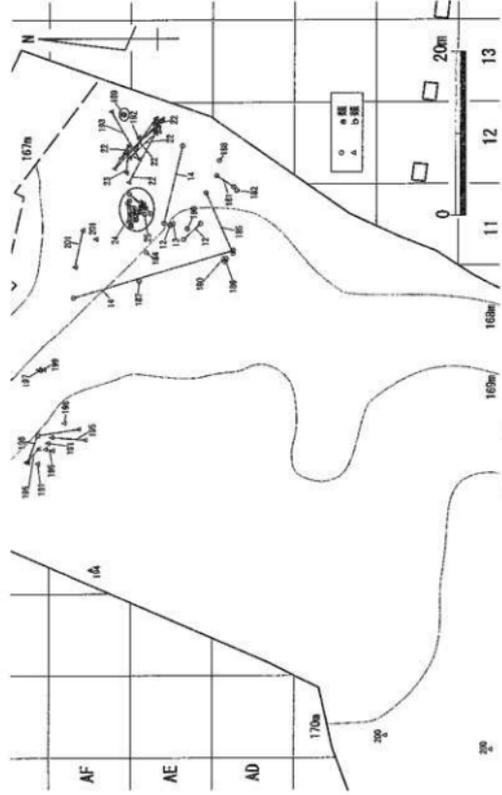


第62図 第II群 f～h類土器

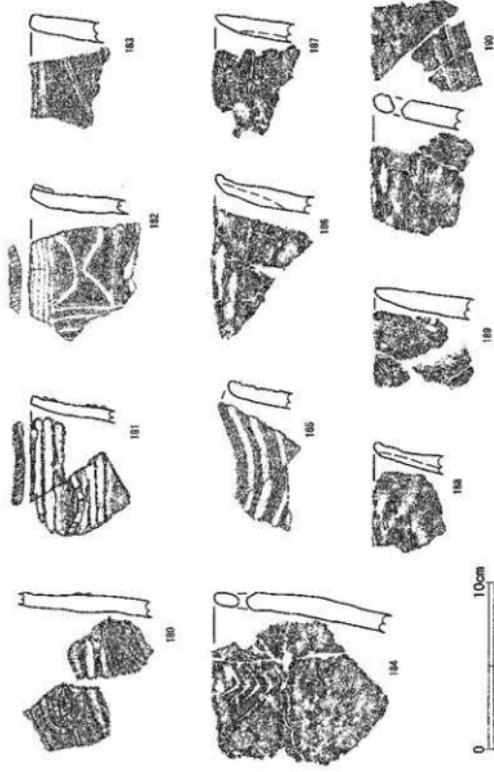
4 第III群土器

早期末～前期初頭の土器を当群とした。

これらは調査区北側に集中し、第II群と重なる。また、a類とb類は集中域を別にする。出土層位は9層 (FB) が中心となる。



第63図 第III群土器出土状況



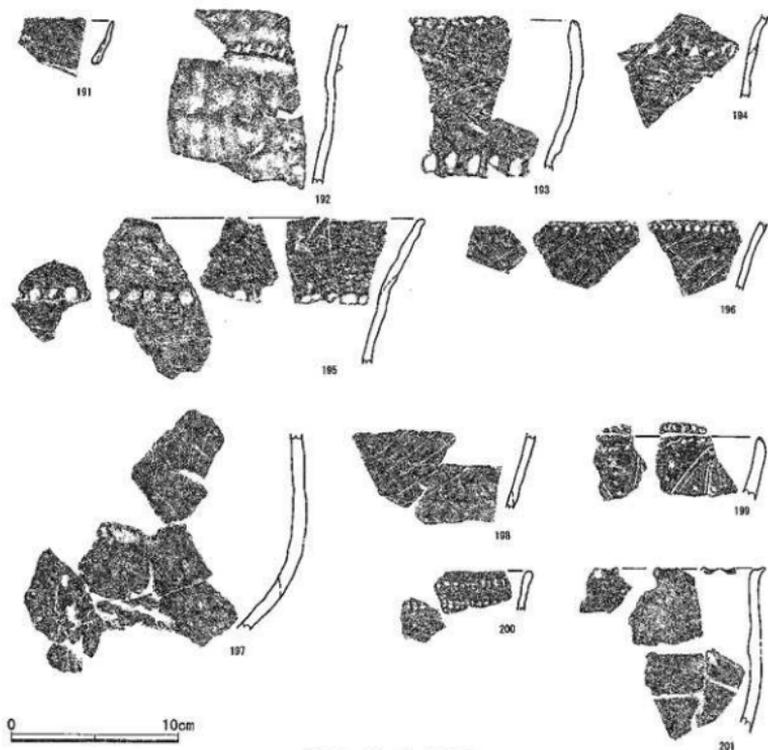
第64図 第IV群土器

(1) a類 下吉井式

口縁部破片を中心に報告する。180は棒状工具によって口縁部に渦巻き状の押し文を、頸部の隆帯上に沈線を施すものである。181は口縁部に施された2本の隆帯間に波状の押し文を施す。口唇部には貝殻の背面による押し文がある。182は隆帯と沈線に区画された文様帯部分を沈線によってさらに縦に区画し、波状の沈線を施したものである。184は矢羽状の沈線を施す。185は波状の口縁部破片で、口縁部のカーブに添った形で3本の沈線を描く。186~190は無文の土器であるが、口縁部の作り出し方や胎土の状況が下吉井式のものと同様であるためここで報告する。

(2) b類 木島式土器

11個体が出土した。191は無文の口縁部で折返し状に隆帯を貼付したものである。192は頸部に細い隆帯を貼付しその上に刺突を施す。口縁部文様帯には斜方向に細線文を施す。193~195は頸部の隆帯がなくなり、浅い刺突のみが1条廻る。196~199は浅い細線文を斜方向に施すもので、199は連続した刺突も観察できる。200は2個一対の刺突列を2条口縁部に廻らせる。201は胴部は無文であるが、口唇部を浅くつまむ。



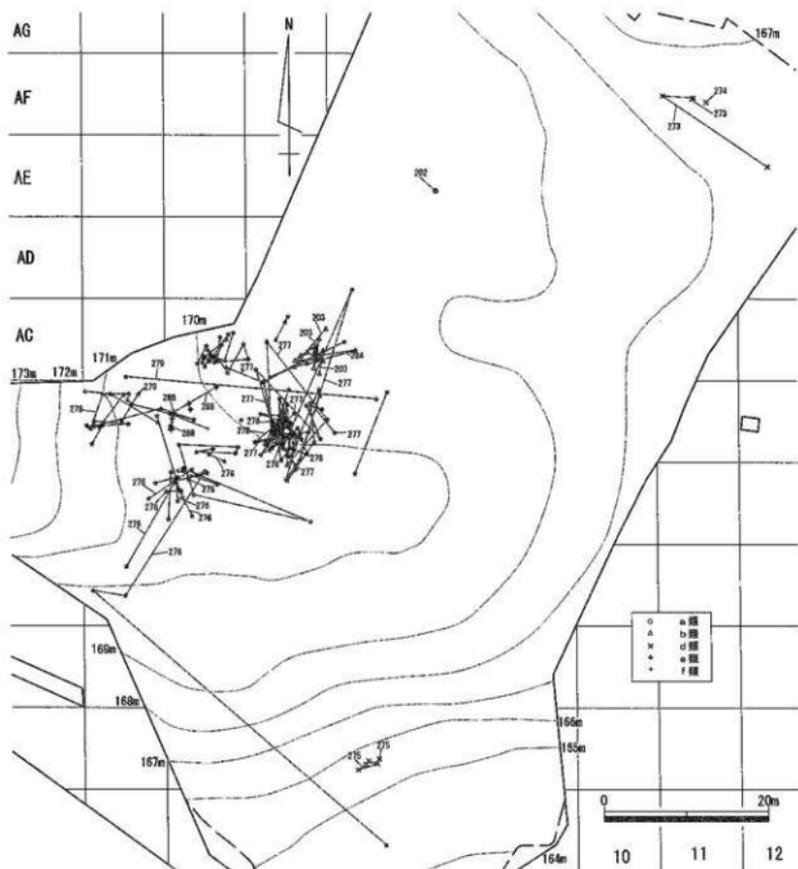
第65図 第III群b類土器

5 第IV群土器 (202~288)

縄文時代前期の罫山式と諸磯式、それに伴う土器を当群とした。当群は南側の尾根部分に集中し、a類は斜面地で単独出土している。第IV群が集中する地区は、前期後半の住居跡が検出されている。出土層位は8層(KU)が中心となる。

(1) a類 罫山式

1個体出土している(202)。口縁部は4単位の波状を呈し、口縁部文様帯は半截竹管による沈線文と貼付文からなる。胴部はRLとLRの縄文を羽状に施文し、3段のループをつくる。胎土には繊維を含む。



第66図 第IV群土器出土状況 (c類以外)

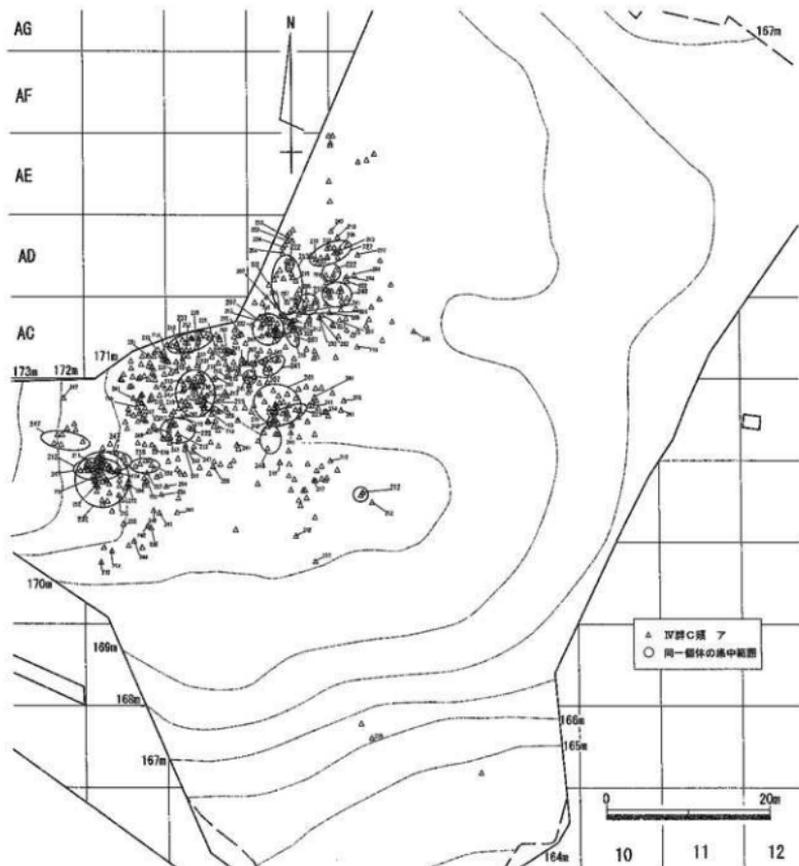
(2) b類 磨磯a式土器 (203)

a式土器と考えられるのは1個体のみで、半截竹管によってZ状に区画した内側に縄文を残す磨消縄文である。

(3) c類 磨磯b式土器 (204~272)

磨磯b式土器は68個体が出土している。深鉢、浅鉢の器種ごとの分布にはほとんど差異がなく、調査区の西側の比較的平坦な地区に分布する。また、住居跡は1基確認されており包含層出土の土器の分布と重なる。以下に深鉢と浅鉢に分けて報告する。

なお、分布図においては、出土遺物数が多数のため、遺物の接合線を割愛したものがあがるが(第67図) 各個体が集中しながら出土している状況に変わりはない。



第67図 第IV群土器出土状況 (c類 深鉢)

ア 深鉢

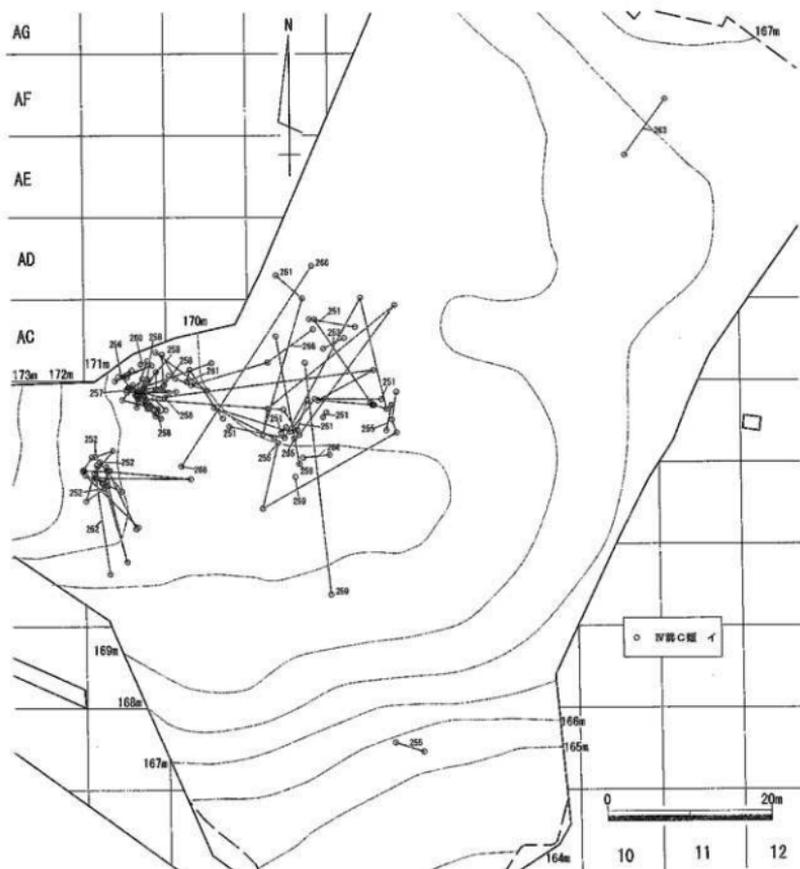
46個体が出土した。文様によって分類し報告する。

(ア) 磨消縄文を用いるもの

204～206は、文様に磨消縄文を用いるものである。204は波状口縁で、平行沈線によって区画された懸架状の入組文の内側に縄文を残す。波状の口唇部の低い部分に刻みを施す。206は平縁で、平行沈線で三角形に区画した内側に縄文を残し、頸部を2単位の沈線で区画する。胴部は横方向に縄文を施す。

(イ) 主に爪形文を用いるもの

207～211は平行沈線を用いず、平坦な器面に爪形文を施すものである。幅広い爪形文を口縁部と頸部に横走させ、その間に同じく爪形文によって懸架状の入組文を施す。帯状に施した爪形文の間には



第68図 第IV群土器出土状況 (c類 浅鉢)

刻目が入る。また、211には半截竹管を組み合わせて円形とした刺突がある(213)。

(ウ) 平行沈線+爪形文

212～231は沈線の区画内に爪形文を施すものである。中でも212～214は口縁部と頸部の横行する爪形文が、(イ)と類似し沈線を伴わず、内部の入組文のみが平行沈線で施文後に刺突を加え拵かされている。

215～231になると口縁部と頸部の区画にも沈線+爪形文が施される。また、区画内に入組文には円形の刺突や縦方向の沈線+爪形文が入る。

胴部上半部の文様帯の縄文地文、あるもの(215～227)とないもの(229～231)がある。231は無文地に沈線+爪形文の平行線を6～8条廻す。

(エ) 平行沈線のみ

232～240は縄文の地文に平行沈線で文様を描くものである。(イ)、(ウ)においては、口唇部直下に無文部を設け地文が及ぶことはないが、(エ)は地文の一部が口唇部直下にまで及ぶ。また、縄文の走行は斜方向で一定しない。

(オ) 浮線文を用いるもの

236、241～248が該当する。241は縄文を地文として、頸部に貼られた1条の浮線より上部を文様帯とし、炭手状に浮線を貼付した後、爪形文で浮線の両サイドを刻む。口唇部には部分的に細い浮線が貼られる。浮線+沈線+爪形文の土器である。

242～246は浮線文のみによって文様を構成するもので、242～245は浮線上に刻目が入る。242は縄文を地文として入組文状に浮線を施したもので、浮線上には刻目が施される。口唇部にも細い浮線が全周に貼られる。243は口縁部に部分的に縄文が地文として残るが、胴部には全く観察できない。恐らく部分的な施文であったと考えられる。244～246は無文の器面に浮線文を貼り付けたもので、246は、口縁部が内側に立ち上がり、頸部の浮線には指によるものと思われる刺突が観察できる。

247、248は胴部～底部破片である。横方向の縄文を地文にして浮線を数來回したものである。247は浮線に刻みはないが、248は浮線上に斜方向の刻みを施し、残存する限り2本単位で貼付している。

(カ) 刺突があるもの

1個体出土している(250)。小破片で全体像は不明であるが、半截竹管のような工具で刺突を施す。浮線上には同一の工具によるものと思われる刻目がある。

イ 浅鉢

底部破片を含めて22個体が出土した。これらは、個体数こそ多いが、小破片で全器形を復元できるものはなかった。

249は平行沈線+爪形文、爪形文で文様を描くもので、直線的に立ち上がるが、屈曲部の接合方法が浅鉢のそれと類似していたため、浅鉢に分類した。

251～255は浮線文を施すものである。251、252、255は斜方向の刻目が入る浮線と沈線+爪形文で入組文を描く。内湾した口縁部が特徴的である。251は地文を施さないが、252、255は縄文を地文として、粗雑な磨消しを行っている。この2点は施文具の特徴等により同一個体の上半部と下半部の可能性があるが、出土状況より別個体と判断して掲載している。

253と254は内傾した口縁部に刻みのない浮線を波状に施す。屈曲部以下は、平行沈線+爪形文で入組文を描く。

256、258は細い平行沈線+爪形文で入組文を描くもので、地文はない。256は口縁部が内側に折れ、端部に貫通孔が認められる。

259、260は平行沈線のみで文様を描くものである。260は碗形を呈する。なお、256～261は、胴部に

段を持たない鉢形、碗形のものと考えられ、AB4グリッド付近に集中する。ここは、住居跡が検出された区域でもある。

261～268は無文のものである。263は、口縁部が鬚状に作り出されたものであり、底部にかけて縄文が施される。266は口縁部が内湾した、碗状の器形になると考えられる。胴部に1条の斜方向の刻みが施された浮線が廻る。267～269は底部に縄文を施すもので、267の屈曲した段部分が268、269になると隆帯化したと考えられる。271、272は浅鉢の底部である。

(4) d類 諸磯c式土器

3個体が出土している。諸磯b式土器とは出土地点が異なり、谷部へと向かう傾斜地に分布する。

275は胴部に隆帯を貼ることで盃状の器形にし、集合沈線によって文様を描いたもので、この隆帯を境に上部は縦方向の文様を、下部には横方向の文様を施し、2個一対の貼付文を貼る。273は扇状の集合沈線、275は矢羽状の集合沈線を施す。

(5) e類 縄文土器

IV群に伴うと考えられる縄文土器と底部をまとめた。

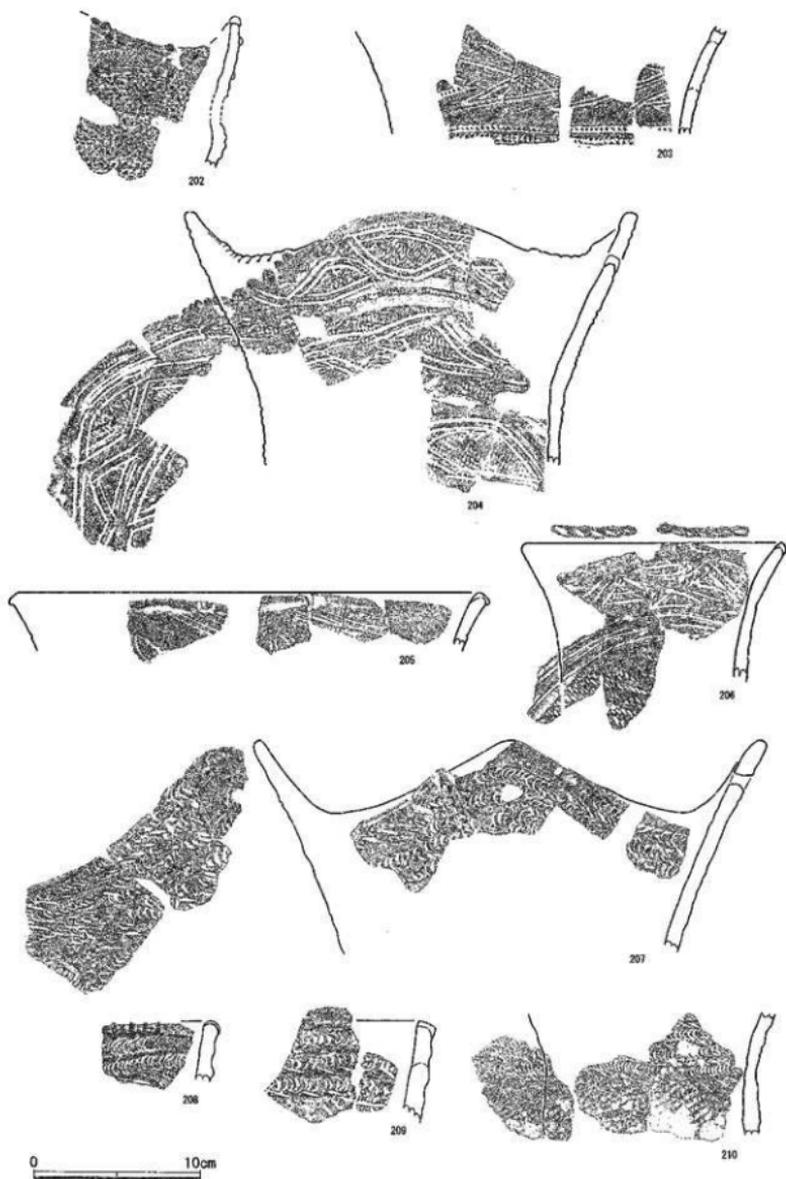
276、277は羽状の縄文土器である。何れも諸磯式土器よりは薄目の器厚であり、时期的にも若干遡るかも考えたが、出土地点は諸磯式土器と重なる。276は、無節の縄文RとLを横方向に施文したもので、胎土に繊維は含まない。277はRLとLRの縄文を用い施文しているが、施文が縦～斜方向であり羽状が崩れている。輪積み痕が明確に残っており、5cm程度の板状の紐を輪積みしている状況が観察できる。

279は口縁部の平面形状が楕円を呈するものである。底部は正円で口縁部にむかって直線的に開く。外面は輪積みの接合痕を上部3段ほど残し、その上から縦方向にRLの縄文を施文する。

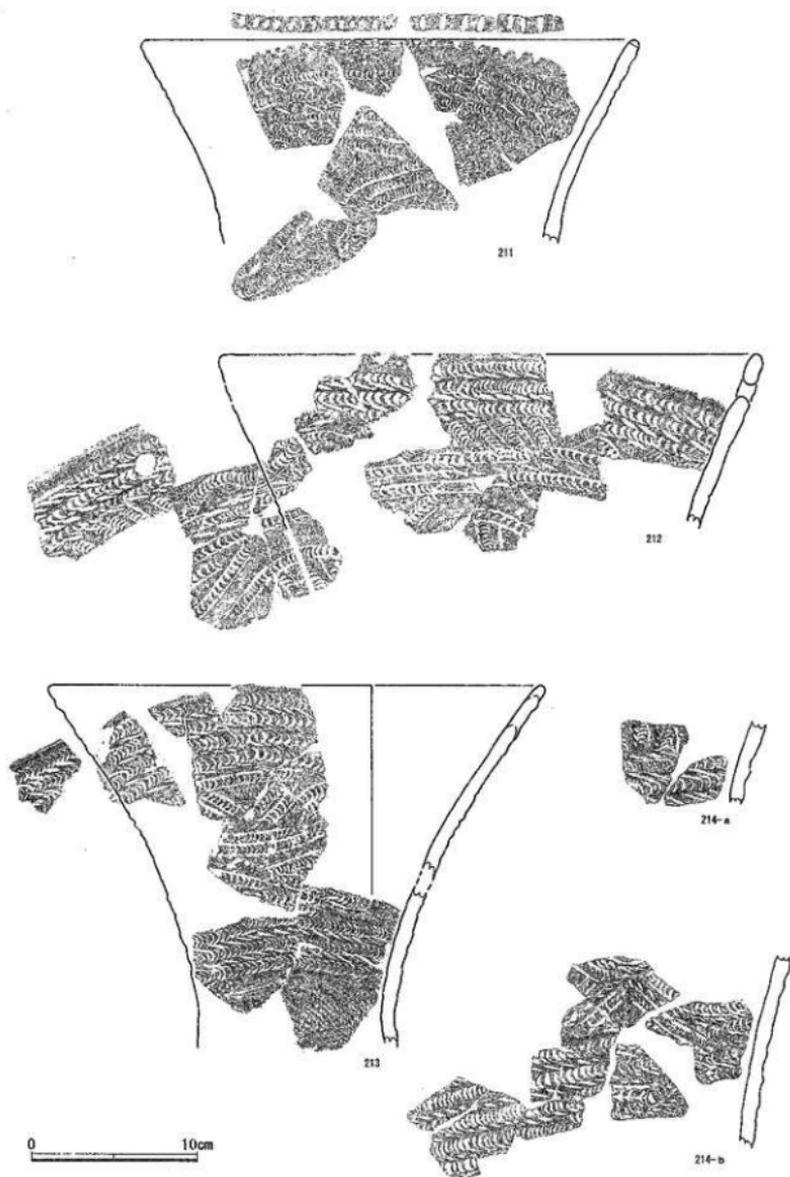
281～287は前期のものと思われる土器の底部である。底部中央がやや持ち上がり、直線的に胴部へと立ち上がるものを集めた。

(6) f類 北白川下層式

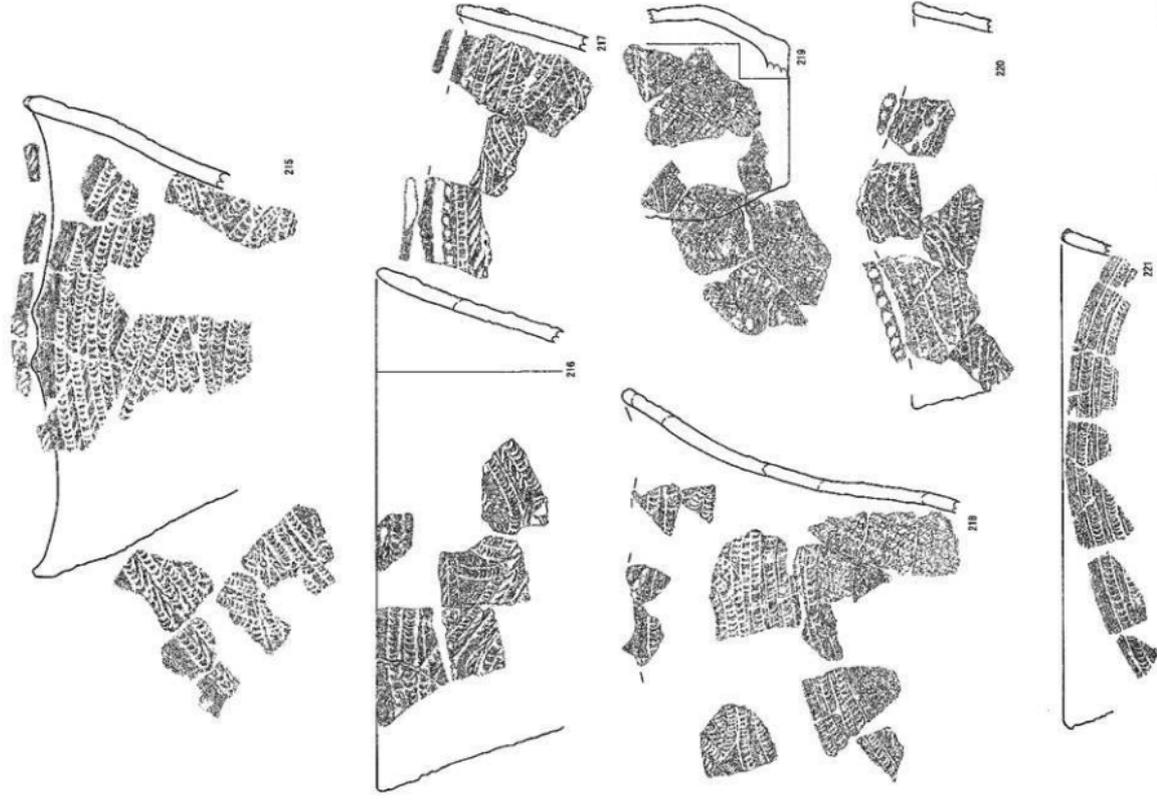
AB5グリッド、半径約8.0mの範囲で北白川下層Ⅱ式の土器片が出土している。接合はしないものの、同一個体と考えられる。288は前段多条のRLとLRの縄文を横方向に施文、地文とし、斜方向の刻目を施す浮線2本を平行に、あるいは梯子状に施すものである。



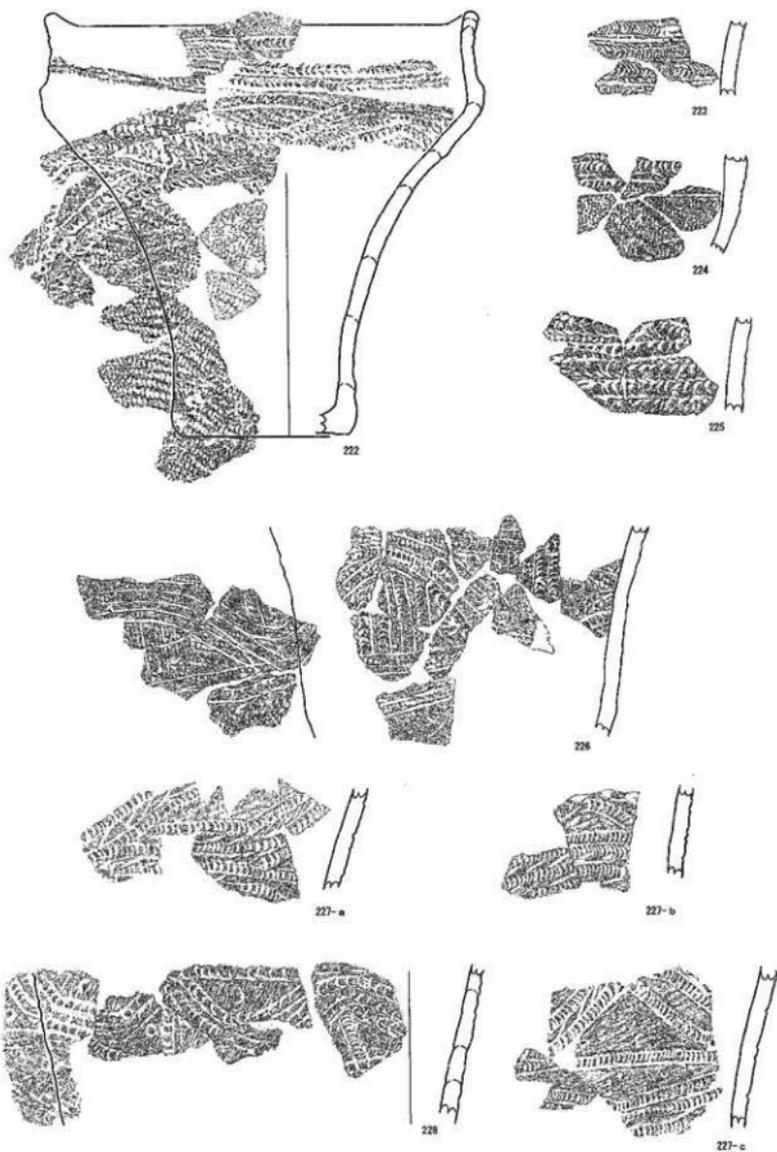
第69圖 第IV群 a · b · c 類土器



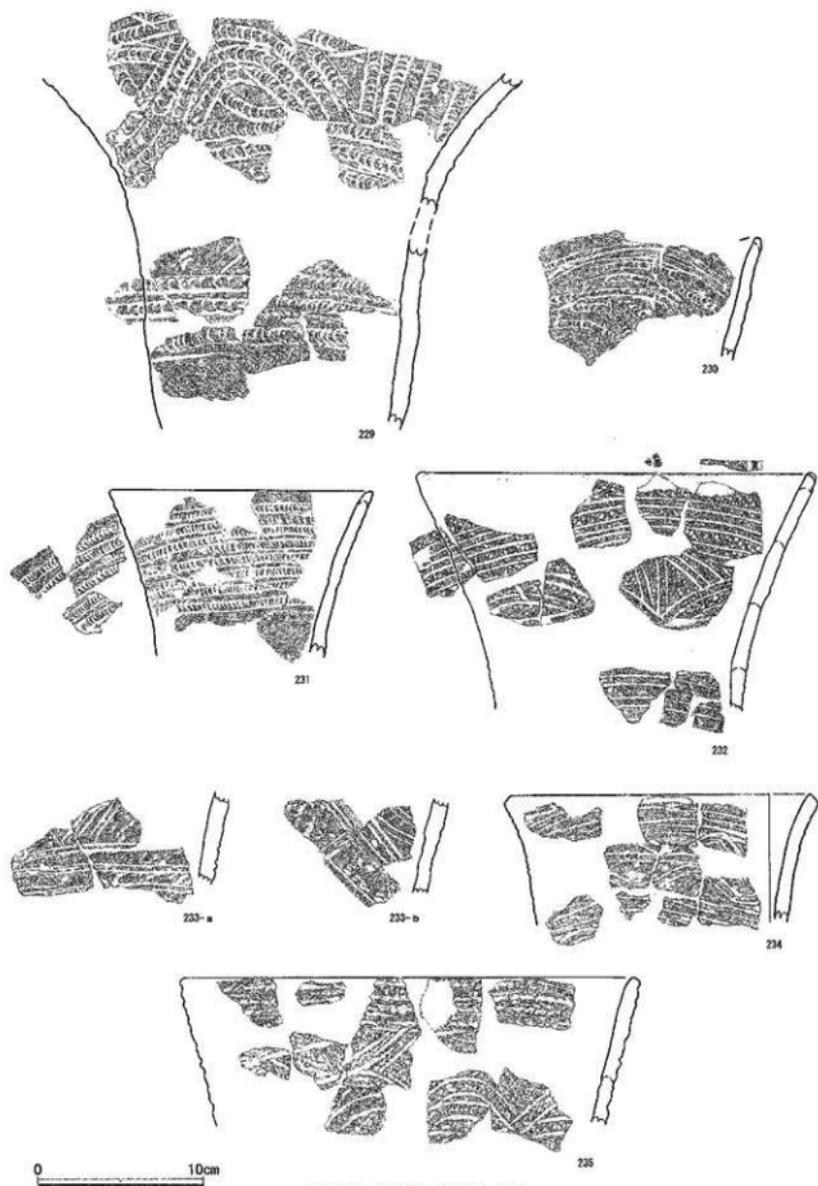
第70図 第IV群c類土器(1)



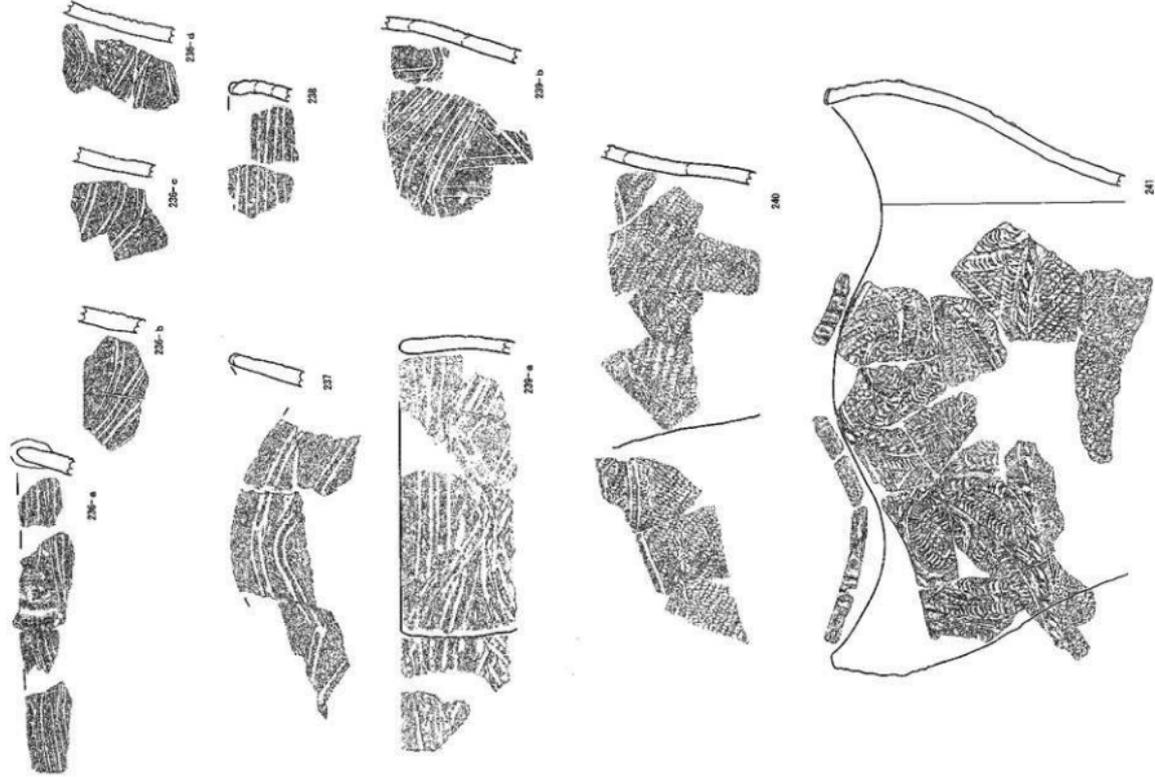
第71图 第IV群C组土器(2)



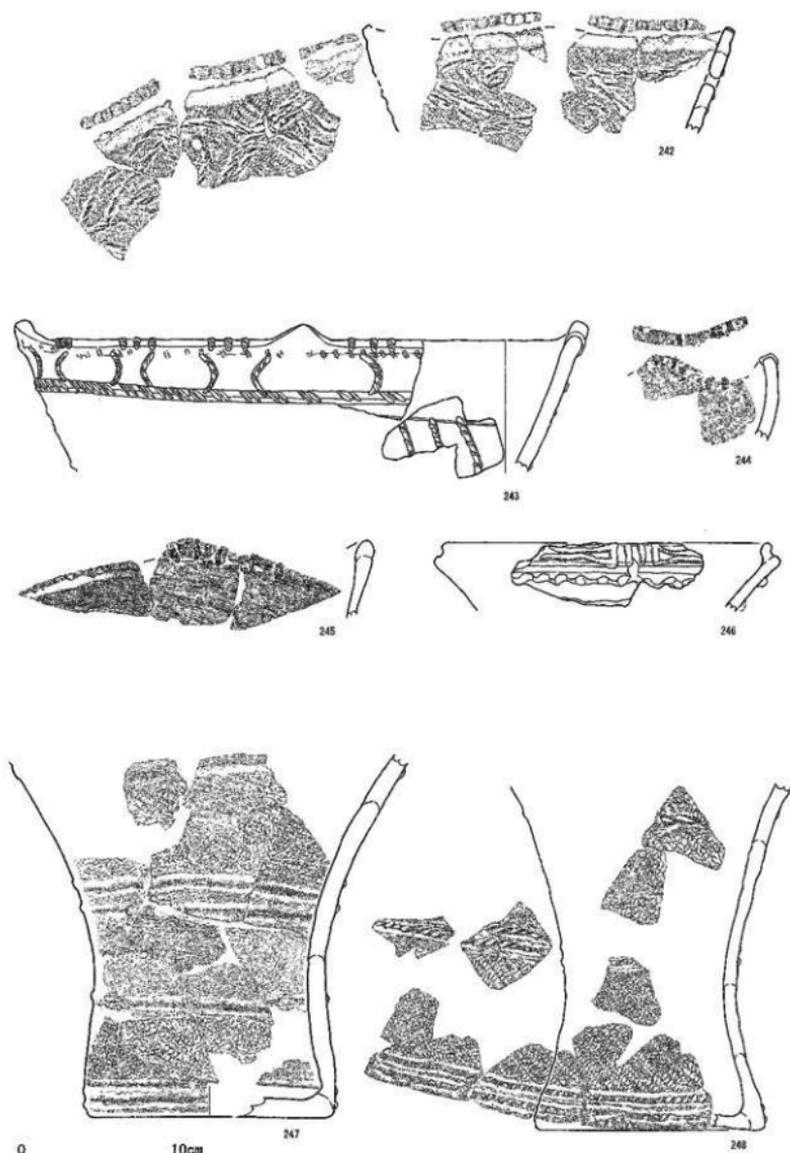
第72図 第IV群c類土器(3)



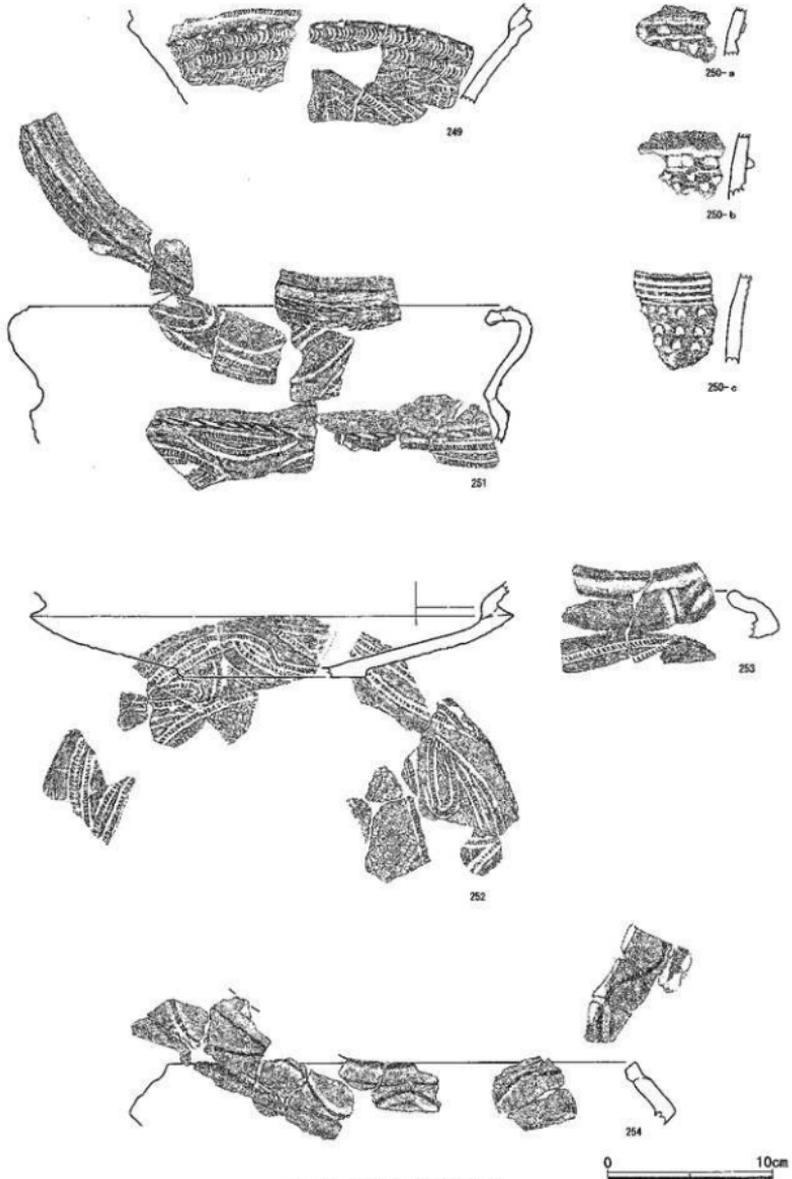
第73圖 第IV群c類土器(4)



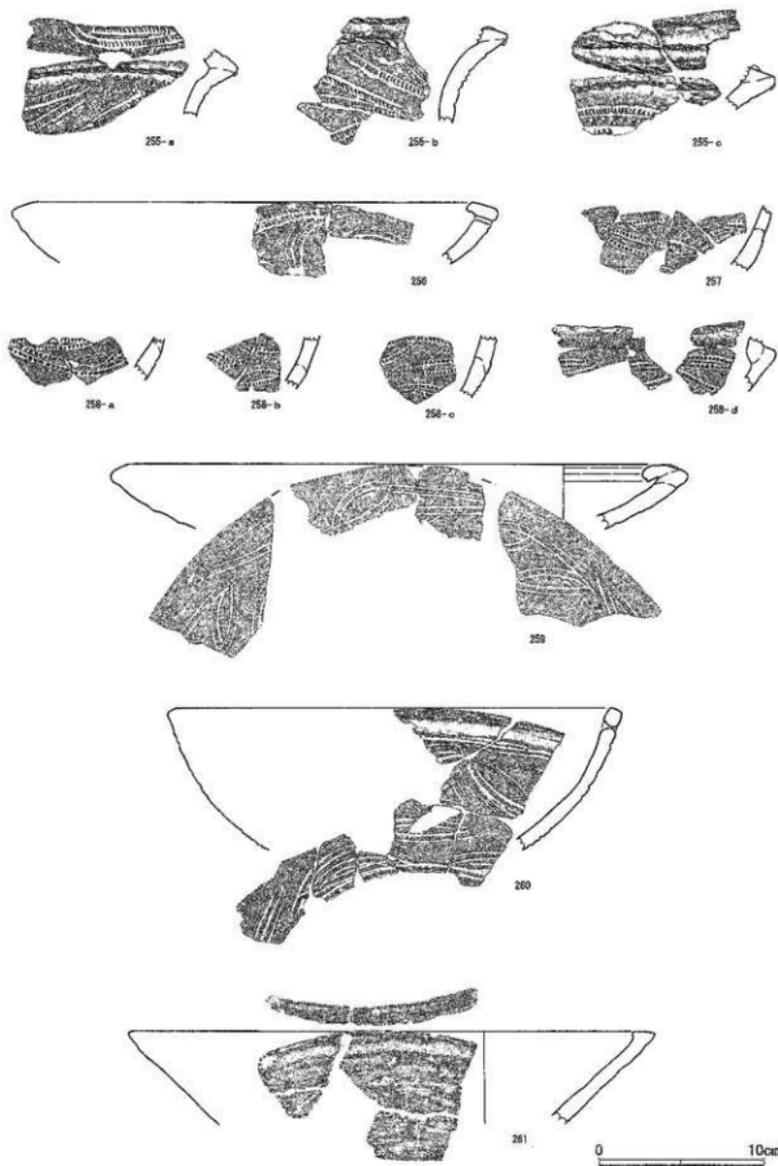
第74図 深IV群c出土器(5)



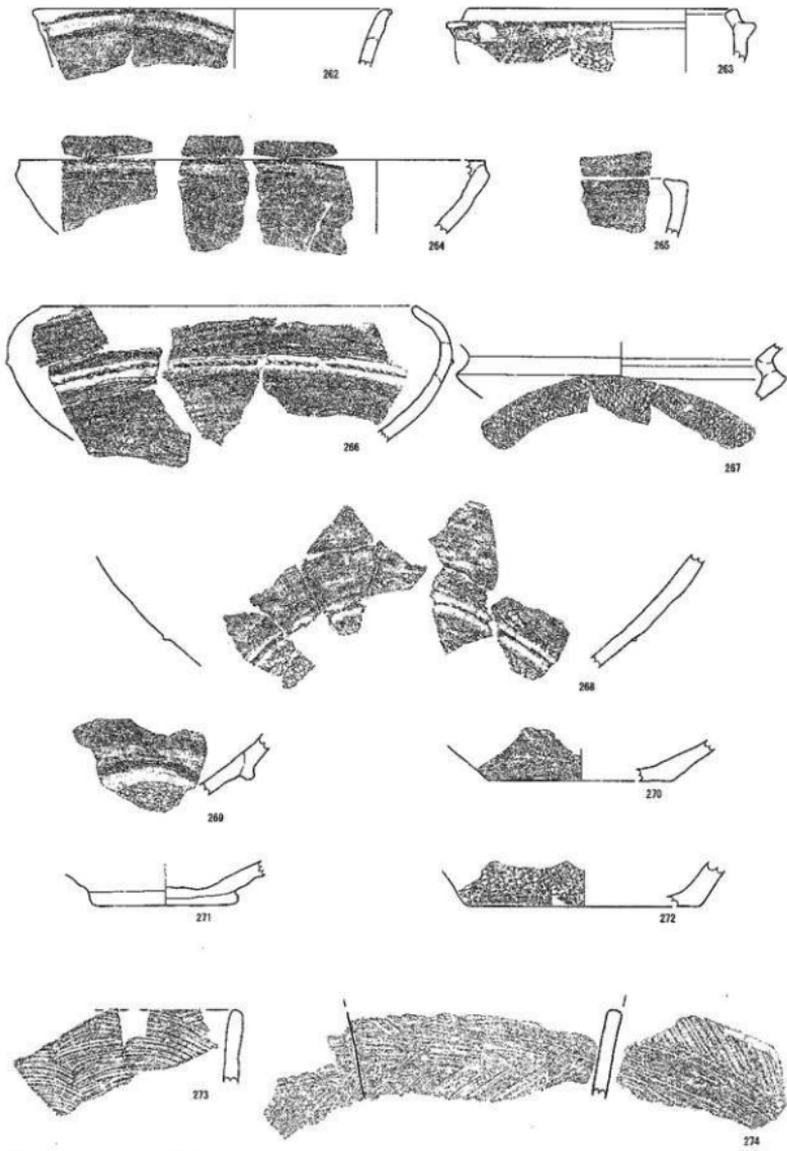
第75圖 第IV群c類土器(6)



第76図 第IV群c 類土器 (7)



第77圖 第IV群c類土器(8)

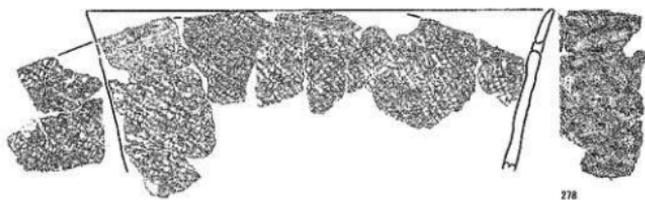
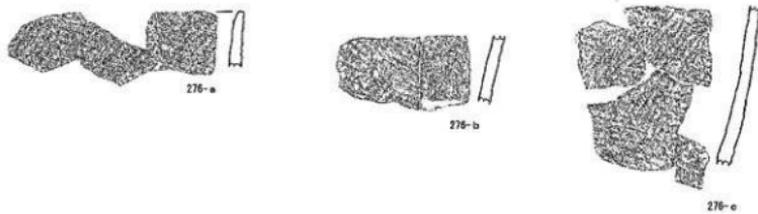


0 10cm

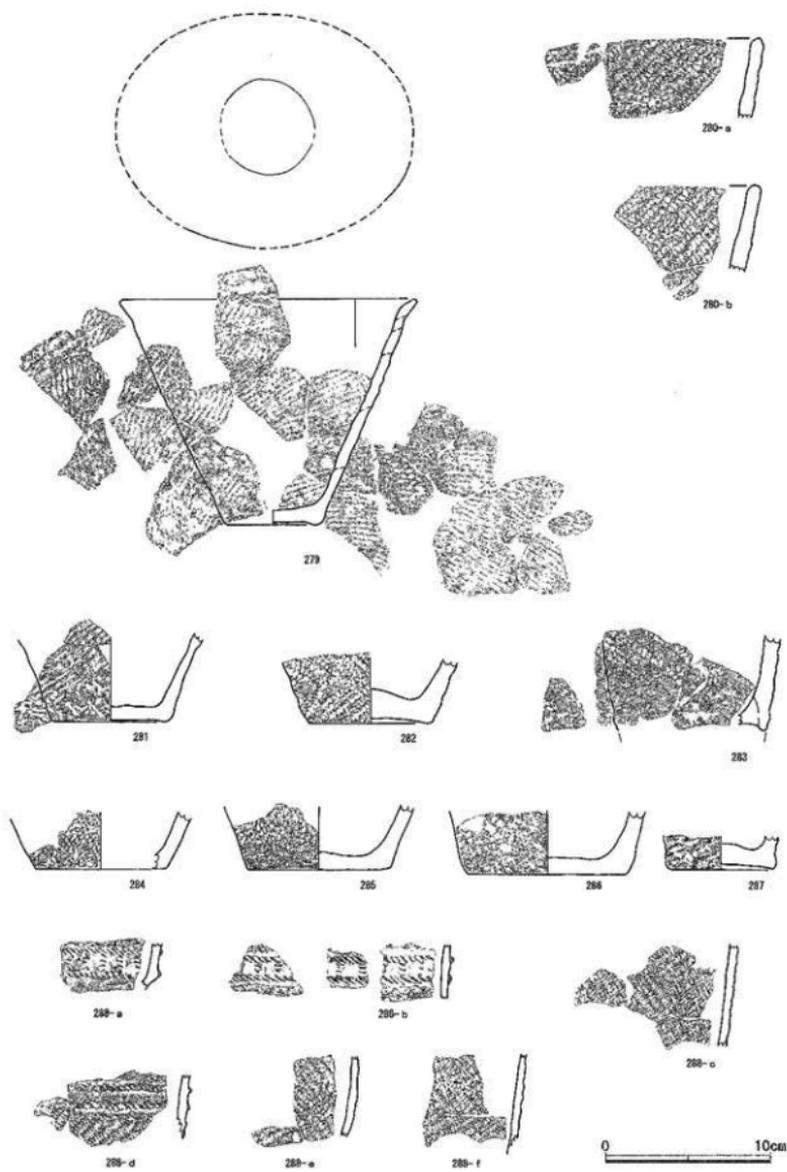
第78図 第IV群c・d類土器

圖62 蠶 P 綫 I 蠶 蠶干麻





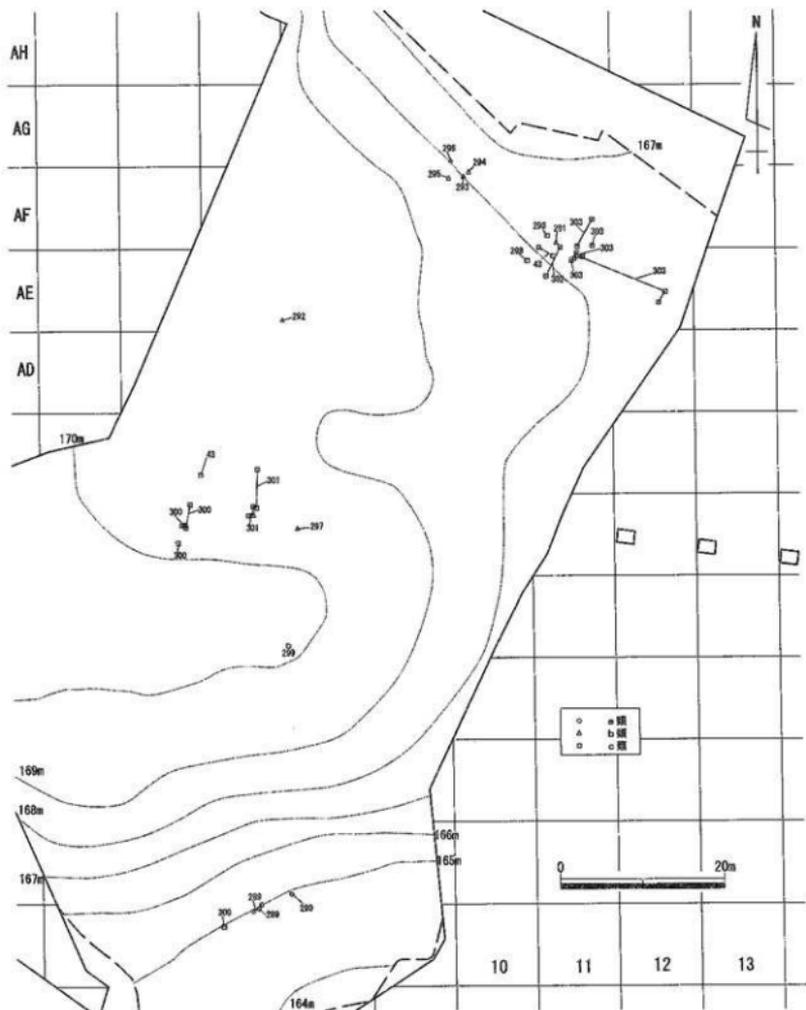
第80図 第IV群e類土器



第81圖 第IV群 e・f 類土器

6 第V群土器

中期の土器を当群とした。当該期の土器は全体の出土量としては非常に少なく、全て破片資料のみである。住居跡が3基検出されているものの、住居跡内の遺物もまた少なく、遺構・遺物の出土層位が新期スコリアの直下であるため、その殆どが後世の攪乱によって失われた結果であると予想される。



第82図 第V群土器出土状況

(1) a類 五領ヶ台式土器

無文地に半截竹管状の工具で集合沈線を施したものが、調査区の南半で2個体がまとまって出土している。

289は深鉢の胴部で、下半部に階段状の無文部を残し、集合沈線によって充填した後、頸部に横方向の沈線を回したものである。290は鉢で口縁部に無文帯を残して、その下に縦方向の沈線を帯状に配し、沈線で鋸歯状文を描いている。

(2) b類 藤内式～井戸尻式土器

291～297は藤内Ⅱ式～井戸尻Ⅰ式土器である。いずれも小破片であり、石囲炉を持つ堅穴住居とは、出土地点は重なっていない。

291、292はパネル文の隆帯上に爪形文を施すもので、区画内部に沈線を施す。293～296は同一個体の可能性があり、パネル文は内部を沈線で区画し、隆帯上には交互刺突文が入る。

(3) c類 曾利式土器

299、300は内湾する口縁部の外面に斜方向の条線を施し、その上に細い浮線を貼付するものである。また、301は胴部破片の一部で、縦方向に施された縄文を地文として浮線が垂下する。いずれも曾利Ⅱ式と考えられる。302は口縁部に渦巻文を配し、胴部には条線によって綾杉文が施される。口縁部から胴部への屈曲は弱い。曾利Ⅲ式土器と考えられる。303は口縁部の活れがほとんどなくなり、文様帯は横走する沈線で表現される。胴部は沈線で区画されたパネル状の文様帯内部を沈線で充填する。曾利Ⅳ式と考えられる。

7 第VI群土器

後期の土器を当群とした。当遺跡では後期前半から中葉にかけての土器が出土しており、前半期の土器をa類、中葉の土器をb類として報告する。

第VI群の出土点数の9割を占める中葉の加曾利B式土器は、調査区中央部に3箇所に分かれて出土している。各集中地点は、無文の粗製土器(331、333、334)が破砕した状態で検出されているのが実態で、他の精製土器はこれらの粗製土器の周辺に小さな破片資料として分布している。各粗製土器の出土地点を一つの遺物集中地点と考えると、各集中地点に深鉢、鉢、注口土器がセットで分布していることになる。出土層位は、新期スコリアを含む褐色土層(第3層)の上下に分布する。

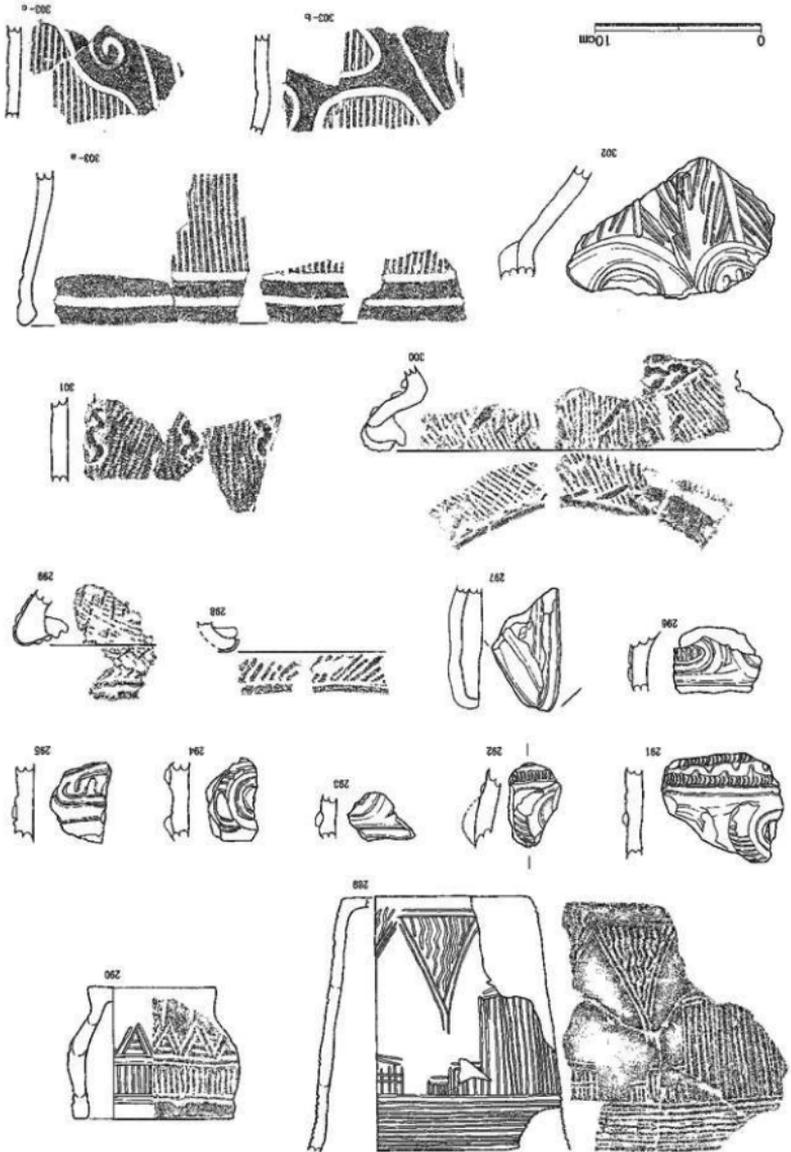
(1) a類 称名寺式～堀之内式とこれに伴うと考えられる土器

称名寺式の土器は小破片ではあるが、2個体が出土している。304は平縁で、沈線で区画された内部にLRの縄文を施す。305は波状口縁を呈し、RLの縄文を沈線で区画する。波状口縁の頂部には2個…対の円形の刺突を施す。

306～308は堀之内2式の口縁部破片である。306、307は円形の刺突が施される。308は8の字の貼付文が施され、沈線で区画された磨消縄文の横帯の一部が残る。

309～311は305～308に伴うと考えられる粗製土器である。309はrの縄文が巻きつけられた付加条縄文であるが、元の原体は不明である。胎土は砂質で小石が混じる。311は無文の土器で、内面は横方向に丁寧に磨かれているが、外面は部分的に磨痕が観察できる。口唇部が内外面からの同時のナデによって鋭角に尖る。胎土はやはり砂質である。これら粗製土器はb類に伴う可能性もあるが、口縁部内部の作り出し方がb類とは異なるためここで報告した。

第93圖 麻八線干櫛



(2) b類 加曾利B1式

当類は、残された破片資料で可能な範囲で器形を推定し、ア精製深鉢、イ粗製深鉢、ウ鉢・浅鉢、エ注口土器、才底部破片に分けて報告する。

ア 精製深鉢

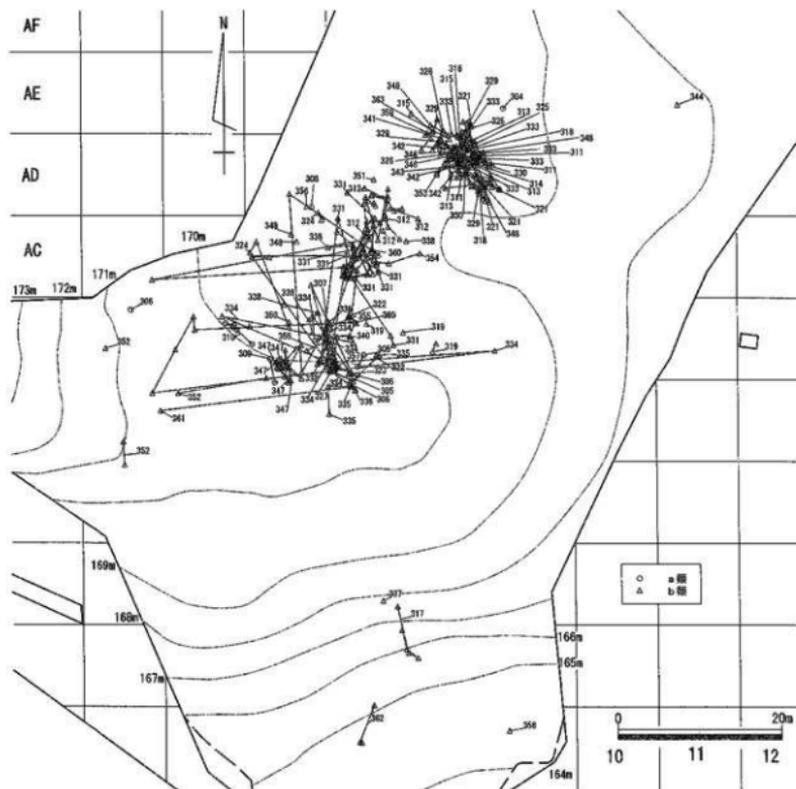
深鉢は、口縁部が内側に「く」の字に内傾し、外面あるいは内外面に横帯文を持つ。外面の横帯文に磨消縄文を用いるものを(ア)、特に文様を施さず区画内を磨き残し、文様効果を上げている素文のものを(イ)として分類する。

(ア) 磨消縄文 (312~320)

内面に文様帯を持つもの(312~315、320)と持たないものがある。裏に文様帯を持つものは口縁部内側に沈線と隆帯によって段を作る。また、312、313、315はこの段の上に円形の刺突が施される。内面に横帯文を持たない316~318は、口縁部の内面は1条の沈線が施される。

(イ) 横帯文内素文 (321~330)

外面の横帯文の内側を磨き残して文様効果を上げているもので、全ての個体の内面に横帯文が施され



第84図 第VI群土器出土状況

る。この外面の横帯文は沈線間の幅が広いもの(321~324、328)と、狭く連続しているもの(325、326、328、329)があり、それぞれ短沈線によって縦位に区画されるものがある。

また内面の文様は狭く、連続する沈線によって描かれており、沈線間に斜方向の刻目を入れるもの(323~328)や口縁部に円形の刺突を施すものがある。また、330は内面にLRの縄文を用いた磨消縄文を施し、鉤状の沈線によって区画する。以上ア、イには平線と波状口縁が存在する。

イ 粗製深鉢(331~334)

331、332は沈線を施すものである。331は内外面に丁寧なミガキが施され、外面口縁部には沈線によって木の葉状の文様を連続的に描く。内傾した口縁部には内面に沈線を1条回す。底部には割代痕有り。渦巻状のモチーフから当初晩期初頭の清水天王山式とも考えたが、底部の形状と出土状況(後述)より、当類とした。類似資料の出土例としては鎌倉市の東正院遺跡などがある。

333は無文の土器で、ヘラ状の工具によるミガキが内外面に施される。ミガキの方向は内面と外面口縁部が横方向、外面下半部が縦方向である。この幅広(約1.0cm)の工具によるミガキ痕は他の精製土器や331とは異なる。底部に割代痕有り。

334は無文の土器である。器面が風化によってザラついており判然としないが、一部にミガキの痕跡が見られることから、基本的には他の土器と同様、内外面はミガキによって調整されているものと考えられる。口縁部内面には1条の沈線が廻る。

ウ 鉢・浅鉢

当遺跡で出土している胴部が丸みを帯び、内湾する鉢形の土器は、外面にのみ横帯文を施す。横帯文は沈線で区切られているが、磨消縄文を用いるもの(335~340)と、刻目を入れるもの(341)、無文のもの(342、343)がある。

胴部が直線状に立ち上がり、口縁部が屈曲する浅鉢形の土器は、3個体出土している。いずれも小破片であり、口縁部に沈線や刺突が施される。

エ 注口土器

2個体以上が出土しているが、文様が復原できるのは347のみである。

347は櫛歯状の工具で集合沈線を作り、胴部に渦巻き文様とそれを連結させる鉤状の文様を配したものである。この文様は、施文の後1段階太い沈線によって改めて区画されている。残存状況が悪く、底部、口縁部、胴部の各一部が出土したのみであるが、非常によくミガキを施された薄手の胎土が特徴的なため、同一個体として考えた。

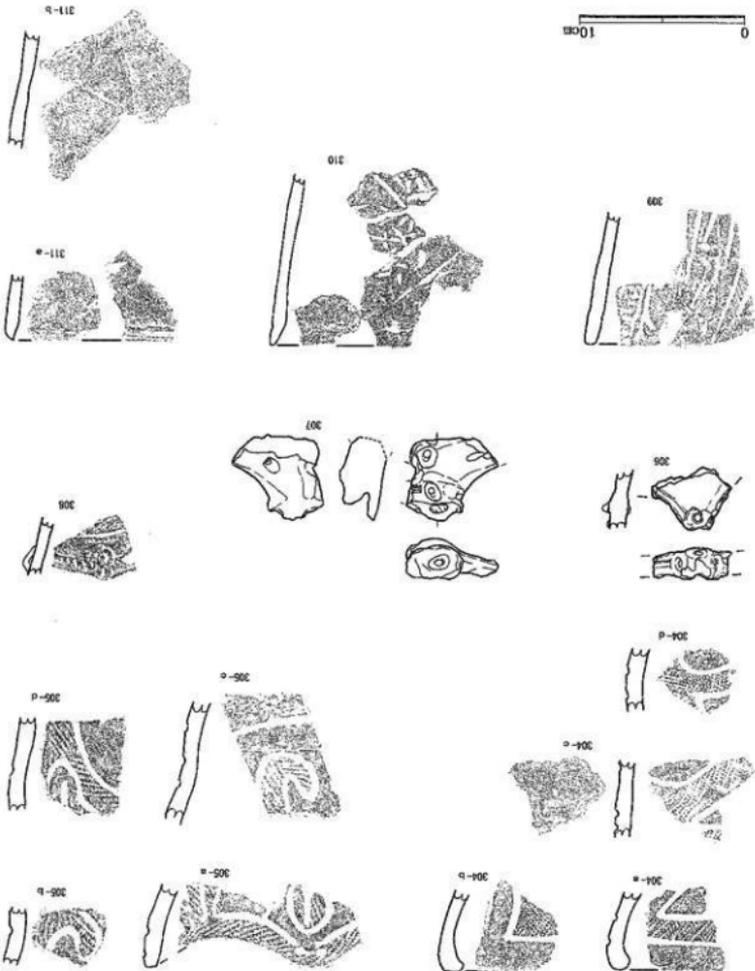
348は胴部の円形の文様から放射状に沈線を描いたもので、347とは異なり、1本ずつ沈線を描いているようである。全体的に焼きが甘い上に2次焼成を受けているようで、内面や外面の一部が剥落している部分がある。

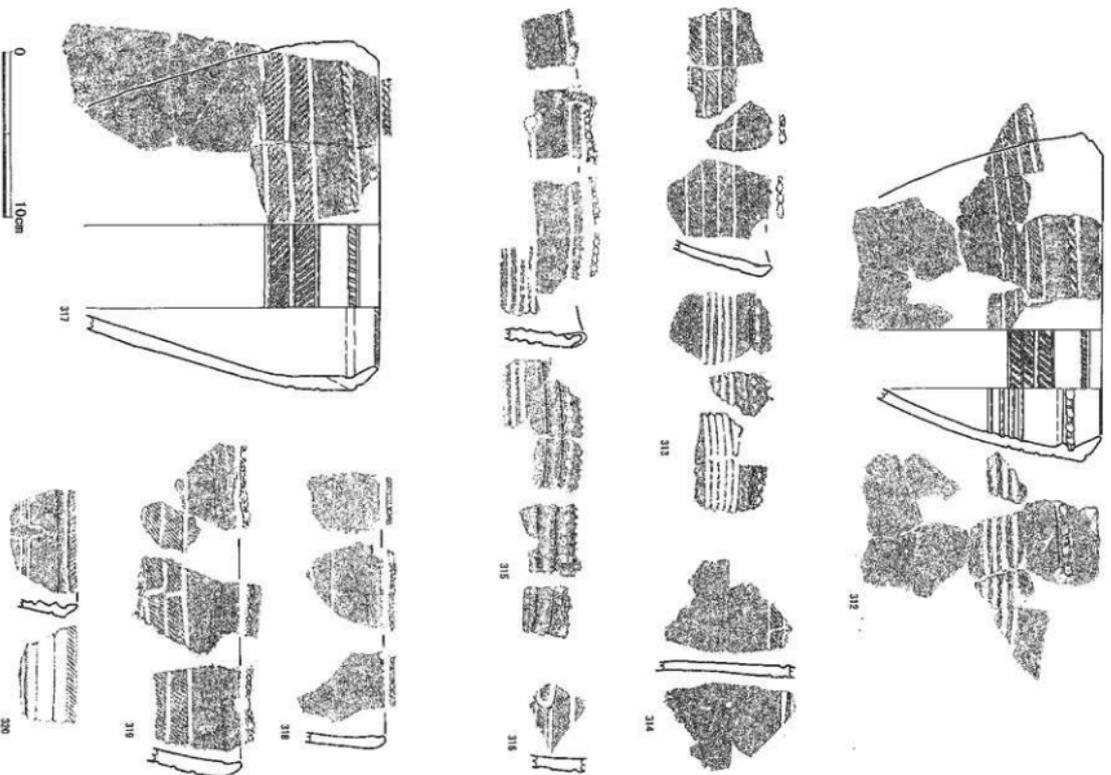
350、351は注口部分である。350は内外面とも非常によく磨き込まれた精巧な作りをしている。351は全体的にやや粗雑な作りで、外面はヘラ状の工具で磨かれた痕跡が面として残る。

オ 底部破片

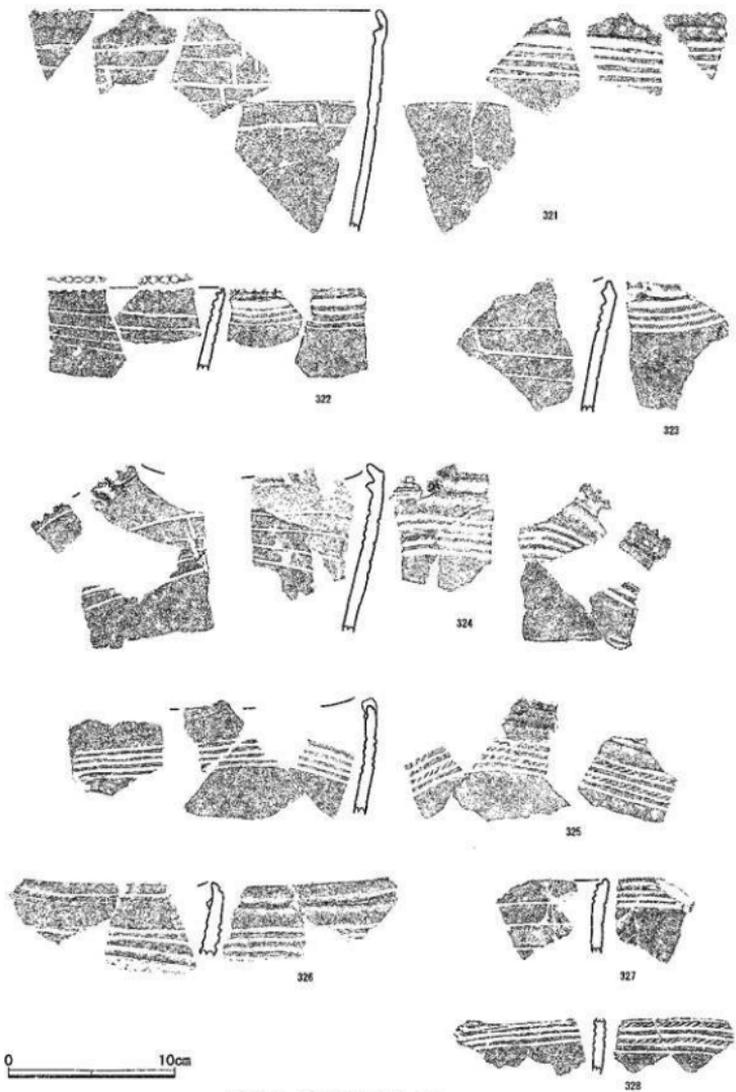
底部破片を一括した。底部に残る割代痕や胎土の特徴より、b類のものと考えられる。352に斜方向の燃系が施される他は全て無文である。底部は、352は剥落が激しく観察が不可能だが、他は全てに割代痕が観察できる。352~360は深鉢、361~363は鉢・浅鉢の底部。

第85圖 第VI群の土器

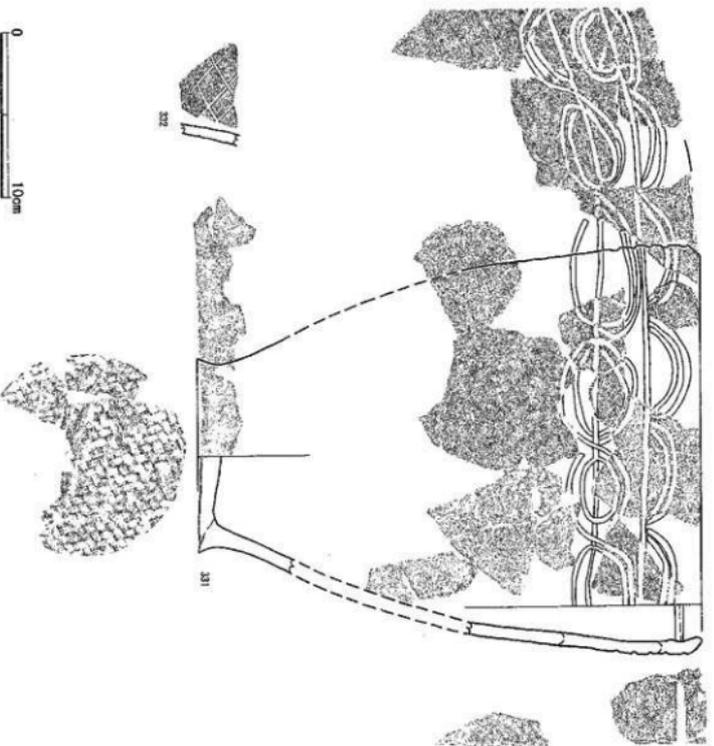
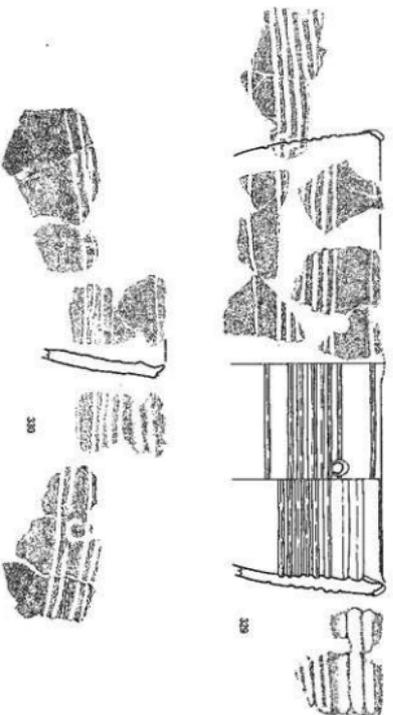




第86図 第VI群の陶土器(1)

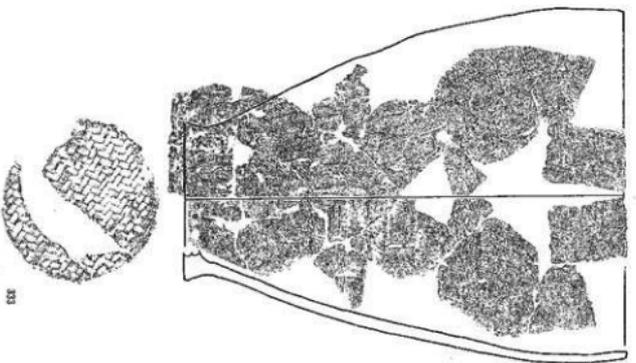


第87圖 第VI群b類土器 (2)

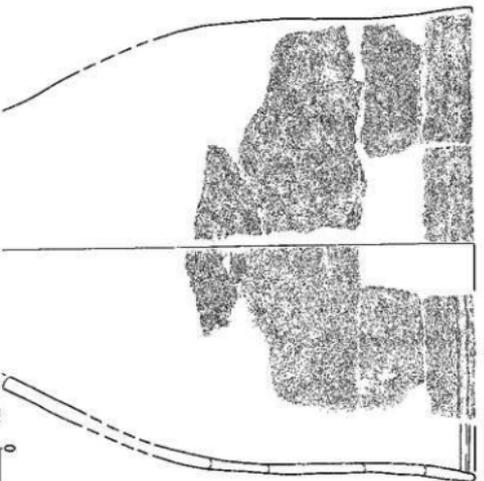


0
10cm

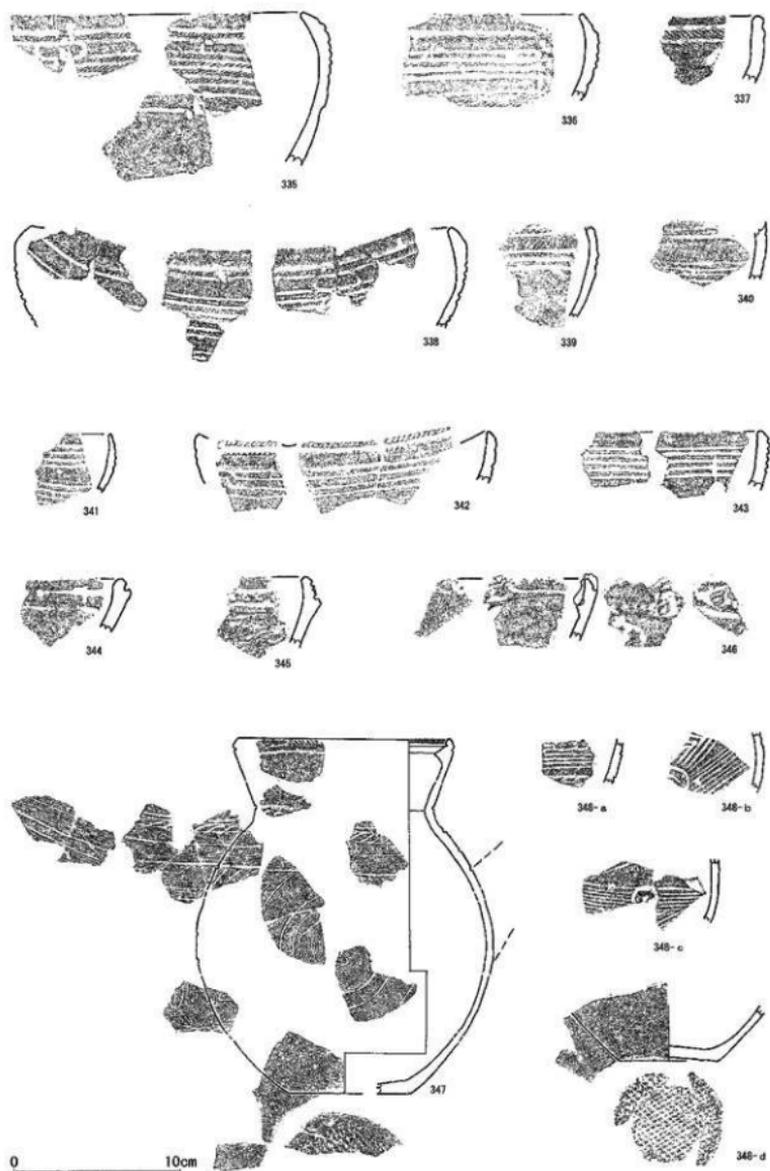
第388図 第VI群B類土器(3)



333



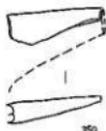
第88圖 第VI群B類土器(4)



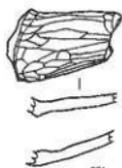
第90図 第VI群b類土器(5)



349



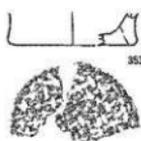
350



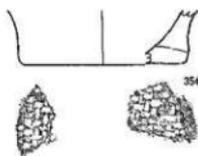
351



352



353



354



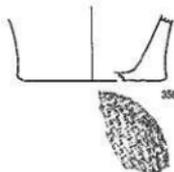
355



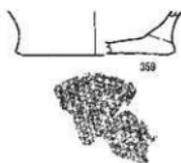
356



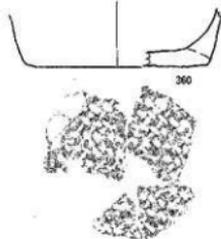
357



358



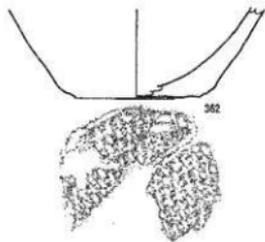
359



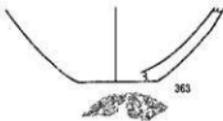
360



361



362



363



第91图 第VI群土器底部ほか

表12 縄文時代包舍層出土土器観察表

図版番号	分類	器種・形状	色調(10色)	胎土	経緯	焼成	文物番号
67	1a	6.8	7.5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の溝。内面にシズク。
68	1a	6.8, 9. (9)	5YR4/6	輝石、白色粒子、黒色粒子、白色薄片	無	有	外側に横方向の粒子目。
69	1a	8.9	7.5YR4/3	輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の粒子目。
70	1a	6.8, 9	7.5YR5/3	石灰、長石、白色粒子、黒色粒子	有	有	外側に横方向の粒子目。
71	1a	3.7	7.5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の粒子目。縦方向のナゲテ。
72	1a	6.7, 8.9	5YR5/6	石灰、長石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の粒子目。縦方向のナゲテ。
73	1a	9	7.5YR4/6	輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の粒子目。縦筋。
74	1a	8.9	7.5YR4/5	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
75	1a	5.9	10YR5/3	石灰、長石、輝石、黒色粒子、砂質	無	有	外側に横方向の横4×横4。
76	1a	9	5YR3/5	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
77	1a	8.9. (9)	7.5YR5/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
78	1a	(9)	7.5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
79	1a	7	5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
80	1a	6	5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
81	1a	(9)	5YR4/4	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
82	1a	(9)	5YR4/4	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
83	1a	(9)	7.5YR3/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
84	1a	7	5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
85	1a	6.8	5YR5/5	石灰、長石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
86	1a	8	5YR5/5	石灰、長石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
87	1a	6	5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
88	1a	(9)	5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
89	1a	9	5YR4/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。
90	1a	8. (9)	2.5YR4/5	石灰、長石、輝石、黒色粒子、白色薄片、砂質	無	有	外側に横方向の横4×横4。
91	1a	(9)	5YR5/5	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	有	有	外側に横方向の横4×横4。内面にシズク。
92	1a	(9)	5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	無	有	外側に横方向の横4×横4。縦筋。
93	1a	6.8, 9. (9)	5YR5/5	石灰、長石、黒色粒子	有	有	外側に横方向の横4×横4。
94	1a	5. (9)	2.5YR5/6	石灰、長石、白色粒子	有	有	外側に横方向の横4×横4。
95	1a	6.8	5YR5/5	黒色粒子	有	有	外側に横方向の横4×横4。
96	1a	5.8, 8.8	5YR4/5	石灰、長石、輝石、白色粒子	有	有	外側に横方向の横4×横4。
97	1a	7	7.5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側に横方向の横4×横4。
98	1a	(9)	7.5YR5/4	石灰、長石、黒色粒子、白色薄片	有	有	外側に横方向の横4×横4。
99	1b	(5)	5YR5/6	石灰、長石、白色粒子、赤色粒子	有	有	口縁部に斜方向のRの跡あり。
100	1b	8.9. (9)	5YR5/3	白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側に斜方向のRの跡あり。内面にシズク。
101	1b	5. (9)	5YR5/5	白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。
102	1b	6.8, 9. (9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子	有	有	外側に横方向のRの跡あり。縦筋。
103	1b	(9)	7.5YR7/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	口縁部に斜方向のRの跡あり。外側に赤褐色。縦筋。
104	1c	6.8. (8)	5YR5/5	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側に横方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。
105	1d	6	7.5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	無	有	無文。外側に横方向の横4×横4。
106	1d	8.9	5YR5/6	石灰、長石、白色粒子、白色薄片	無	有	無文。少し縦筋。外側に横4×横4。
107	1d	6	7.5YR6/6	石灰、長石、白色粒子	有	有	無文。内面に縦筋。外側に横4×横4。
108	1d	6	5YR5/6	石灰、長石、白色粒子、白色薄片	有	有	無文。
109	1a	5.8, 9. (9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。
110	1a	3.8, 9. (9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	口縁部外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
111	1a	8. (9)	7.5YR7/6	石灰、長石、輝石、白色薄片	有	有	口縁部に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。
112	1a	(9)	7.5YR7/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
113	1a	6.7, 8. (9)	7.5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。
114	1a	6.8, 9. (9)	7.5YR5/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
115	1a	5.9, 7.8, 9. (9)	5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
116	1a	8. (9)	5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色薄片	有	有	口縁部に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
117	1a	5.8	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
118	1a	8. (9)	7.5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
119	1a	6.8. (9)	5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
120	1a	(9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
121	1a	(9)	10YR6/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
122	1a	(9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
123	1a	(9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
124	1a	(9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
125	1a	5	7.5YR6/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
126	1a	6. (9)	7.5YR5/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
127	1a	5. (9)	5YR4/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	口縁部に縦筋と斜方向のRの跡あり。外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
128	1a	5.8, 9. (9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
129	1a	9. (9)	7.5YR7/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	口縁部に縦筋と斜方向のRの跡あり。外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
130	1a	5.9. (9)	5YR5/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
131	1a	6.8, 9	7.5YR4/4	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	口縁部、外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
132	1b	6.7, 9. (9)	10YR7/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、白色薄片	有	有	口縁部に縦筋と斜方向のRの跡あり。外側にRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。
133	1b	3.3, 6.8, 9. (9)	5YR5/6	石灰、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、白色薄片	有	有	外側に縦筋と斜方向のRの跡あり。縦筋のみ残存。内面に調整。

図版番号	分類	器体番号	色調(3色)	胎土	編織	結束	文様・図案等
201	皿	5, 6, 9	10YR7/4	石英、炭石、白色粘土	有	口	口沿部はつまみにより外反す。外面に遺跡等。
202	IVa	8	10YR6/4	石英、輝石	有	底	口沿部はつまみにより外反す。外面に遺跡等。
203	IVb	3, 5, 6, 7, 8, 9	7.5YR5/4	石英多、長石、輝石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、平行沈線文、波状口縁。
204	IVc	3, 6, 7, 8, 9	10YR5/4	石英多、長石、輝石、雲母多、赤色粘土少	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、浮線文、平行沈線文、波状口縁。
205	IVc	3, 5, 6, 7, 8	7.5YR6/6	石英多、長石、輝石、雲母多、白色粘土	無	底	外面に平行沈線文、波状口縁。
206	IVc	6, 8, (9)	7.5YR5/6	石英多、長石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	浮線+輝石。外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
207	IVc	3, 6, 8	7.5YR5/6	石英多、長石、輝石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	浮線+輝石。外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
208	IVc	6	10YR5/3	石英、長石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	浮線文、外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
209	IVc	(9)	7.5YR5/6	石英、輝石、雲母多、白色粘土、褐色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
210	IVc	5, 7, 8	10YR6/4	石英多、長石、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、縦方向のR.Lの無彫文。
211	IVc	3, 6, 8, 9	10YR5/3	石英多、長石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	口唇部に輝石。外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
212	IVc	3, 5, 6, 7, 8, 9	10YR6/4	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁+爪形文、波状口縁。
213	IVc	3, 5, 6, 7, 8	5YR5/6	石英多、長石、輝石、雲母	無	底	外面に横方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁+爪形文。
214	IVc	3, 5, 6, 8, (9)	7.5YR5/6	石英、炭石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	不底	外面に平行沈線文+爪形文、爪形文、輝石。
215	IVc	3, 5, 6, 7, 8, (9)	5YR4/6	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	口唇部に輝石。外面に平行沈線文+爪形文、輝石。波状口縁。
216	IVc	3, 6, 8	5YR5/6	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁+爪形文。
217	IVc	6	7.5YR5/6	石英多、輝石、雲母多、白色粘土、褐色粘土少、白色岩片	無	底	浮線+輝石による網目+輝石。外面に平行沈線文+爪形文、波状口縁。
218	IVc	5, 6, 8, 10	10YR6/4	石英多、炭石、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁。
219	IVc	6, 8, (9)	7.5YR5/4	石英多、長石、雲母、白色粘土	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、底彫。
220	IVc	6, 8, 9, (9)	5YR5/6	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	口唇部に輝石。外面に平行沈線文+爪形文、波状口縁。
221	IVc	6, 8	10YR7/6	石英多、長石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に平行沈線文+爪形文。
222	IVc	3, 6, 7, 8, 9	5YR4/4	石英多、長石、輝石、雲母多、白色粘土	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁。
223	IVc	6, 8	5YR4/4	石英多、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁。
224	IVc	3, 6, 8, (9)	7.5YR5/6	石英多、長石、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、内彫網文。
225	IVc	5, 6, 8	5YR4/6	石英多、輝石、雲母、白色粘土、褐色粘土少、白色岩片	無	底	外面に平行沈線文+爪形文。
226	IVc	5, 6, 8	5YR6/6	石英、長石、白色粘土、赤色粘土、白色岩片	無	底	外面に横方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、平行沈線文、内彫網文。
227	IVc	3, 5, 6, 8, 9, (9)	7.5YR6/6	石英多、長石、雲母多	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁+爪形文。
228	IVc	3, 5, 6, 8, 9, (9)	5YR4/6	石英多、長石、輝石、雲母	無	底	外面にR.Lの無彫の縄文、平行沈線文+爪形文、内彫網文。
229	IVc	3, 6, 8, 9, (9)	5YR6/6	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	外面に平行沈線文+爪形文、横方向のR.Lの縄文。
230	IVc	3, 6	5YR6/6	石英多、長石、雲母、白色粘土	無	底	外面に平行沈線文+爪形文、波状口縁。
231	IVc	5, 8, 9	5YR6/6	石英、長石、輝石、雲母、白色粘土、赤色粘土少、白色岩片	無	底	外面に平行沈線文+爪形文。
232	IVc	3, 6, 8, 9, (9)	5YR5/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	口唇部に浮線文。外面に横方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文。
233	IVc	3, 6, 8, 9	5YR5/6	石英多、長石、輝石多、白色粘土、赤色粘土少、白色岩片	無	底	外面に横方向のR.Lの縄文、平行沈線文。
234	IVc	5, 6, 8	5YR5/6	石英多、長石	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、平行沈線文。
235	IVc	6, 7, 8, 9, 10, 11	7.5YR6/6	石英多、長石、輝石	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文、波状口縁、爪形文。
236	IVc	5, 6, 8, 9, (9)	5YR4/6	石英多、長石、雲母、白色粘土、赤色粘土少、白色岩片	無	底	口唇部から口縁部に浮線文。外面に横方向のR.Lの縄文、平行沈線文。
237	IVc	6, 8	7.5YR6/6	石英、長石、雲母多、赤色粘土、白色岩片	無	底	外面に彫り不明の縄文、平行沈線文、波状口縁。
238	IVc	5, 6, 8	5YR5/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文。
239	IVc	8, 8	5YR4/4	石英多、長石、雲母、白色粘土、赤色粘土少、白色岩片	無	底	外面に平行沈線文、波状口縁。
240	IVc	5, 6, 7, 8	5YR5/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.L、R.Lの點綴縄文、平行沈線文。
241	IVc	3, 5, 6, 8, 9	5YR6/6	石英多、長石、輝石多、雲母多、赤色粘土少、白色岩片	無	底	口唇部に浮線+輝石。外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、波状口縁。
242	IVc	3, 5, 6, 8	5YR5/6	石英多、長石、輝石、白色粘土、白色岩片	無	底	口唇部に浮線+輝石。外面に縦方向のR.Lの縄文、波状口縁、波状口縁。
243	IVc	5, 6, 8	5YR5/6	石英多、長石、輝石、雲母多	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、浮線+輝石。縄文をナリナリす。
244	IVc	6, 8	5YR4/6	石英、雲母多、白色粘土、褐色粘土	無	底	口唇部、口唇部に浮線+輝石。波状口縁。
245	IVc	6	7.5YR5/6	石英、長石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	口唇部に黒土を粘付し波状文を形成。浮線+輝石。
246	IVc	6	5YR5/4	石英、長石、輝石、雲母多	無	底	外面に浮線+輝石。
247	IVc	3, 5, 6, 8, 9	7.5Y17/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、赤色粘土少、白色岩片	無	底	外面に縦方向のR.Lの縄文、浮線文、底彫。
248	IVc	5, 6, 8	5YR6/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	外面に横方向のR.Lの縄文、浮線+輝石、底彫。
249	IVc	3, 5, 6	7.5YR6/6	石英多、長石、輝石、雲母、白色粘土、白色岩片	無	底	底彫。外面に平行沈線文+爪形文、波状口縁+爪形文。
250	IVc	3, 5, 6, 7, 8	7.5YR4/2	石英多、長石、輝石、雲母多、小石	無	底	外面に浮線+網文。半軟性粘土による沈線文、網文。
251	IVc	5, 6, 7, 8, 9, (9)	7.5YR6/6	石英多、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	底彫、浮線+輝石。外面に平行沈線文+爪形文、波状口縁、底彫。
252	IVc	3, 5, 6, 8, 9	7.5YR6/6	石英、長石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	底彫。外面に縦方向のR.Lの縄文、平行沈線文+爪形文、底彫。
253	IVc	6	7.5YR4/6	石英、長石、雲母多、白色粘土	無	底	底彫。外面に浮線文、平行沈線文+爪形文。
254	IVc	5, 6, 8, 9, (9)	5YR4/4	石英多、長石、輝石、雲母多、白色粘土、白色岩片	無	底	底彫。外面に浮線文、平行沈線文+爪形文。

国際番号	分類	解位番号	色調(Heck)	胎土	織造	造形	文様図案等
255	Ivc	8, 0 (0)	5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、雲母、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に横方向のLRの織文。浮織+磨み。平行波織文+爪形文。貫通孔。
256	Ivc	8 (0)	5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、雲母多、白色粒子、白色岩片、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に平行波織文+爪形文。貫通孔。
257	Ivc	3, 6	7.5YR5/4	石灰多、炭石、雲母多、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に平行波織文+爪形文。
258	Ivc	5, 6, 8, 9	7.5YR5/4	石灰多、炭石、雲母多、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に平行波織文+爪形文。
259	Ivc	6, 9	10YR5/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、浮織文、外面に平行波織文。口唇部に糸の付着。
260	Ivc	5, 6, 8	7.5YR5/4	石灰多、炭石、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に平行波織文。貫通孔。
261	Ivc	8	10YR5/2	石灰多、輝石、白色粒子多、黒色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、無文。
262	Ivc	8	5YR5/6	石灰多、輝石、雲母、白色粒子、黒色粒子	無	無	洗鉢、無文。
263	Ivc	5	5YR5/4	白色粒子多、黒色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。
264	Ivc	5, 6, 9	7.5YR5/6	石灰多、雲母少、白色粒子多、黒色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、無文。
265	Ivc	6	10YR5/3	石灰多、輝石、白色粒子、赤色粒子少、白色岩片	無	無	洗鉢、無文。
266	Ivc	6, 8, 9	5YR5/4	石灰多、炭石、雲母、白色粒子	無	無	洗鉢、外面に浮織+磨み。
267	Ivc	6, 8, 9	5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、雲母多、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に横方向のLRの織文。
268	Ivc	5, 6, 8	10YR5/6	石灰多、雲母、白色粒子、黒色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、浮織文、外面に横方向のLRの織文。
269	Ivc	6	7.5YR5/6	石灰多、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	無	無	洗鉢、外面にLRの織文。
270	Ivc	6, 8	2.5YR5/6	石灰多、白色粒子多、黒色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に浮織+磨み。磨み。
271	Ivc	6 (0)	5YR5/6	石灰多、雲母、白色粒子、赤色粒子	無	無	洗鉢、外面に横方向のLRの織文。磨み。
272	Ivc	6, 7, 8, 9	7.5YR5/6	石灰多、炭石、雲母、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、無文。割れあり。磨み。
273	Ivc	5, 6, 8, 9 (0)	5YR5/6	石灰多、炭石、雲母多、白色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。浮織文。
274	Ivd	6	10YR5/6	石灰多、輝石、雲母少、白色粒子、白色岩片	無	無	洗鉢、外面に半横竹管による集合波織。
275	Ivc	8, 9	5YR4/4	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、白色岩片	無	無	外面に集合波織。2割+対のボタン状結付文。
276	Ivc	6, 8, 9, 12	5YR4/6	石灰多、炭石、輝石、雲母多	無	無	外面に横方向の縦線多糸のLRの織文。
277	Ivc	3, 5, 6, 8, 9, 10 (0)	7.5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、雲母多、白色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLR+LRの織文。
278	Ivc	5, 6, 8 (0)	5YR5/6	石灰多、炭石、輝石少、白色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。輪飾孔。
279	Ivc	5, 6, 8, 9	7.5YR5/6	石灰多、炭石、雲母多	無	無	外面に横方向の縦線多糸のLRの織文。
280	Ivc	3, 5, 6, 9	10YR5/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、小石	無	無	外面に横方向のLRの織文。
281	Ivc	6 (0)	5YR5/8	石灰多、雲母、白色粒子	無	無	外面に横方向の縦線多糸のLRの織文。磨み。
282	Ivc	6, 9	7.5YR5/6	石灰多、白色粒子多、黒色粒子	無	無	外面に磨み+磨み+磨み。
283	Ivc	6, 7	7.5YR5/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。磨み。
284	Ivc	6, 8	2.5YR4/7	石灰多、雲母少、白色粒子、赤色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。磨み。
285	Ivc	6, 8	7.5YR5/8	石灰多、雲母、白色粒子、黒色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。磨み。
286	Ivc	6	7.5YR4/6	石灰多、雲母、白色粒子、黒色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向からLR+LRの織文を貫付+磨み。磨み。
287	Ivc	6	7.5YR5/8	石灰多、白色粒子、赤色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。磨み。
288	Ivc	5, 6, 8, 9 (0)	10YR5/2	石灰多、輝石少、白色粒子、赤色粒子	無	無	外面に横方向の縦線多糸のLR+LRの織文。磨み+磨み+磨み+磨み。
289	Va	0	7.5YR5/4	石灰多、炭石、輝石多、白色粒子多、白色岩片多、赤色岩片	無	無	非線竹管による集合波織。
290	Va	8, 9	10YR5/4	石灰多、炭石、白色粒子、白色岩片	無	無	非線竹管による集合波織。
291	Vb	6, 9	7.5YR5/8	石灰多、炭石、輝石、白色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
292	Vb	5	7.5YR5/6	石灰多、炭石少、白色粒子多、赤色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
293	Vb	8	7.5YR5/6	石灰多、炭石少、白色粒子多、赤色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
294	Vb	6	7.5YR5/6	石灰多、炭石少、白色粒子多、赤色粒子、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
295	Vb	6	6YR5/8	石灰多、炭石、白色粒子多、赤色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
296	Vb	9	5YR5/8	石灰多、炭石、白色粒子多、白色岩片	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
297	Vb	8	7.5YR5/8	石灰多、炭石、輝石、白色粒子	無	無	口唇部外面にツノ状の突起。区画内に磨み。
298	Vb	5 (0)	7.5YR4/3	石灰多、白色粒子、赤色粒子、白色岩片	無	無	口唇部外面に横方向の縦線多糸のLRの織文。磨み。
299	Vc	5 (0)	2.5YR4/2	石灰多、炭石、雲母、白色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文+磨み。
300	Vc	6, 8, 9	7.5YR5/4	石灰多、炭石、雲母、白色粒子、赤色粒子、小石	無	無	口唇部外面に半横竹管による集合波織。浮織文。
301	Vc	6, 8, 9	7.5YR5/6	石灰多、炭石、雲母、白色粒子	無	無	外面にLRの織文。浮織文。
302	Vc	8, 9	7.5YR5/8	石灰多、炭石、雲母、白色粒子	無	無	外面に横方向のLRの織文。連続爪形文。
303	Vc	5, 6 (5)	10YR5/4	石灰多、炭石、輝石少、白色粒子、白色岩片、小石	無	無	外面の区画内に半横竹管による縦線の集合波織。
304	Vc	2	2.5YR3/3	雲母、白色粒子	無	無	口唇部外面に横方向の縦線多糸のLRの織文。連続爪形文。外面区画にミギキ。
305	Vc	5, 6, 9	10YR5/4	石灰多、炭石、白色粒子、黒色粒子	無	無	口唇部外面にLRの織文。波織+十字文。側面、縦状口縁。
306	Vc	5	7.5YR5/4	石灰多、炭石、輝石	無	無	側面、口唇部に突起+突起。外面に波織。外面区画にミギキ。
307	Vc	6	10YR5/4	石灰多、炭石、雲母、白色粒子	無	無	側面、口唇部に突起+突起。波織。外面に側面。
308	Vc	6	7.5YR4/2	石灰多、炭石、雲母、赤色粒子	無	無	口唇部に8の字状結付け文。外面に横方向のLRの織文。磨み。
309	Vc	5, 9	7.5YR4/1	輝石、白色粒子、赤色粒子	無	無	外面に横方向の横方向のLRの織文。外面にナド。
310	Vc	5, 6 (5)	7.5YR5/6	石灰多、炭石、白色粒子少	無	無	外面に横方向の横方向のLRの織文。外面にナド。
311	Vc	6 (0)	6YR5/6	石灰多、炭石、輝石、白色粒子	無	無	無文。外面に横方向の横方向のLRの織文。外面にナド。
312	Vc	3, 5, 6	7.5YR5/4	石灰多、炭石、白色粒子	無	無	口唇部に磨み。外面に横方向のLRの織文+5本の平行波織+連続爪形文。口唇部外面に波織。連続爪形文(4本の平行波織)。外面区画にミギキ。

図録番号	分類	層位番号	色調(1/10)	粘土	編織	構成	文様調査等
313	Vb	4, (6)	10YR5/4	石英、炭石、輝石、白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(1/2文+4本の沈線+短沈線)、口唇部内面に縦帯文(横帯文(5本の平行沈線)、外側内面にミガキ、縦穴口縁)
314	Vb	3, (8)	7.5YR6/6	石英、炭石、輝石、白色砂子、小石多	無	丸	外面に横帯文(1/2文+平行沈線+短沈線)、内面に縦帯文、外面内面にミガキ。
315	Vb	5, (5)	5YR8/4	石英、炭石、燧石、小石多	無	丸	口唇部に縦帯文付け+刻み、外面に沈線、横帯文(平行沈線)、口唇部内面に縦帯文、横帯文(平行沈線)外側内面にミガキ、縦穴口縁、縦穴口縁
316	Vb	(6)	7.5YR7/2	石英、炭石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	外面に横帯文(1/2文+沈線+短沈線)、外面内面にミガキ。
317	Vb	3, 8, 9	7.5YR4/3	石英少、白色砂子、黒色砂子	無	丸	1/2部外側に沈線+刻み、横帯文(1/2文+3本の沈線)、口唇部内面に刻み、口唇部に沈線、外面内面にミガキ。
318	Vb	(6)	10YR7/4	石英、炭石、燧石、燧母	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(縦帯文+沈線)、口唇部内面に沈線、外面内面にミガキ。
319	Vb	8	7.5YR4/1	石英、炭石、小石	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(1/2文+沈線+短沈線)、口唇部内面に沈線、外面内面にミガキ。
320	Vb	(5)	7.5YR6/6	石英、炭石、白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、口唇部外側に横帯文(1/2文+5本の平行沈線+短沈線)、ミガキ、1/2部内面に縦帯文、横帯文(5本の平行沈線)。
321	Vb	5, (6)	2.5YR5/1	石英、炭石、輝石、燧母	無	丸	1/2部外側に縦帯文付け+刻み、外面に沈線、横帯文(5本の平行沈線)、内面に横帯文(5本の平行沈線+短沈線)、縦穴口縁。
322	Vb	9	2.5YR5/1	白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(横帯文+3本の平行沈線+短沈線)、口唇部内面に刻み、横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
323	Vb	6	5YR4/6	白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(横帯文+3本の平行沈線+短沈線)、口唇部内面に刻み、横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
324	Vb	3, 5, 6, (8)	7.5YR6/3	石英、炭石、燧石、黒色砂子	無	丸	口唇部に刻み、横帯文(横帯文+4本の平行沈線+短沈線)、沈線、口唇部内面に刻み、口唇部に縦帯文、横帯文(5本の平行沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
325	Vb	6, (6)	7.5YR6/3	石英、炭石、小石	無	丸	口唇部に縦帯文付け+刻み、外面に横帯文(5本の平行沈線)、内面に横帯文(5本の平行沈線+短沈線)、縦穴口縁。
326	Vb	(6)	7.5YR6/4	石英、炭石、輝石	無	丸	口唇部外側に沈線+刻み、横帯文(平行沈線)、内面に横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
327	Vb	5	7.5YR5/1	白色砂子	無	丸	外面に横帯文(横帯文+平行沈線)、口唇部内面に刻み、1/2部外側に横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ。
328	Vb	5, (6)	7.5YR6/4	石英、炭石	無	丸	外面に横帯文(平行沈線)、内面に横帯文(平行沈線+短沈線)、外側内面に縦帯文+刻み。
329	Vb	3, 6, (6)	5YR6/6	石英、炭石、輝石、白色砂子、小石	無	丸	1/2部外側に縦帯文付け+刻み、外面に横帯文(平行沈線+短沈線)、沈線、口唇部外側に沈線+短沈線、横帯文(5本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁、縦穴口縁。
330	Vb	(6)	7.5YR6/8	石英、輝石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	口唇部外側に沈線+短沈線、横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、内面に横帯文(1/2文+4本の平行沈線)、 ⁶⁾ の字状の沈線+横帯文を区部。
331	Vb	3, 5, 6, 8, 9	2.5YR5/1	石英、炭石、燧石、小石	無	丸	1/2部外側に平行沈線+短沈線、ミガキ、口唇部内面に沈線、外面に横帯文。
332	Vb	6	5YR6/6	石英、炭石、白色砂子	無	丸	外面に横帯文の沈線、外面内面にミガキ。
333	Vb	3, 4, 5, 6, (6)	2.5YR5/1	石英、炭石、輝石、白色砂子、白色片目	無	丸	口唇部外側にへう状工具による横方向のミガキ、胴部から底部に現れ、具による縦方向のミガキ、内面にへう状工具による横方向のミガキ、底部に横穴。
334	Vb	3, 5, 6, 8, 9	7.5YR6/4	石英、炭石、輝石、白色片目、赤色片目	無	丸	口唇部内面に沈線、外面内面に横方向のミガキ。
335	Vb	6, 8, 9	7.5Y5/1	白色砂子、小石	無	丸	外面に横帯文(1/2文+9本の平行沈線+短沈線+横穴沈線+横穴)、外面内面にミガキ。
336	Vb	6	7.5YR6/4	石英、炭石、燧石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	外面に横帯文(1/2文+7本の平行沈線+短沈線+横穴沈線+短沈線+横穴)、外面内面にミガキ。
337	Vb	6	2.5YR5/1	石英、炭石、燧石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	外面に横帯文(縦帯文+2本の平行沈線)、外面内面にミガキ。
338	Vb	3, 5, 6, 8, 9	7.5YR5/1	石英、炭石、燧石、白色砂子、小石	無	丸	口唇部外側に沈線+刻み、横帯文(横帯文+平行沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
339	Vb	6	10YR2/1	輝石、燧石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	外面に横帯文(1/2文+平行沈線)、外面内面にミガキ。
340	Vb	9, (6)	7.5YR7/6	石英、炭石、輝石	無	丸	外面に横帯文(5本の平行沈線)、縦帯文、外面内面にミガキ。
341	Vb	(6)	5YR4/6	石英、炭石、輝石、燧母	無	丸	外面に横帯文(2本の沈線+短沈線)、外面内面にミガキ。
342	Vb	6, 7, (6)	10YR6/4	石英、炭石、燧石、白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
343	Vb	6	7.5YR6/4	石英、炭石、白色砂子	無	丸	外面に横帯文(縦帯文+5本の平行沈線)、外面内面にミガキ。
344	Vb	6	7.5YR6/4	石英、炭石、輝石	無	丸	口唇部外側に沈線+短沈線、外面内面にミガキ。
345	Vb	6	5YR5/6	石英、炭石、白色砂子	無	丸	外面に横帯文(2本の沈線+短沈線)、外面内面にミガキ。
346	Vb	(6)	10YR5/4	石英、炭石、輝石、白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、外面に横帯文(4本の平行沈線+短沈線)、外面内面にミガキ、縦穴口縁。
347	Vb	3, 5, 6	7.5YR5/4	石英、炭石、燧石、白色砂子	無	丸	口唇部に刻み、口唇部外側に沈線、口唇部外側にへう状工具による縦帯文+刻み、ミガキ、受け部分にミガキ、内面にナズ、底部に横穴。
348	Vb	5, 6, (6)	5YR6/3 (炭色)	石英多、炭石、燧石、白色砂子	無	不丸	外面に沈線による横帯文、 ⁶⁾ の字状の沈線より区部、ミガキ、内面にナズ、底部に横穴、二次焼成。
349	Vb	(6)	7.5YR5/4	石英、炭石、白色砂子	無	丸	口唇部外側に沈線、内面に横帯文、外面内面にミガキ。
350	Vb	5	7.5YR5/2	石英、炭石、輝石、白色砂子	無	丸	外面にミガキ、内面にナズ。
351	Vb	9	10YR6/3	石英多、炭石、輝石	無	丸	外面にミガキ、内面に縦帯文。
352	Vb	3, 6, 8	7.5YR6/6	石英、炭石、燧石、黒色砂子	無	丸	外面に縦方向のRの短沈文、赤線。
353	Vb	6, (6)	7.5YR6/4	石英、炭石、燧石、白色砂子、黒色砂子、小石	無	丸	内面にナズ、底部に横穴。
354	Vb	3, 5	7.5YR6/6	石英、炭石、白色砂子、黒色砂子、小石	無	丸	内面にナズ、底部に横穴。
355	Vb	6, 8	7.5YR5/4	石英、炭石、小石少	無	丸	外面内面にミガキ、底部。
356	Vb	3	10YR6/3	石英、炭石、燧石少、白色砂子	無	丸	内面にナズ、底部に横穴。
357	Vb	6	5YR6/6	石英、炭石、燧母	無	丸	外面に横穴。
358	Vb	8	7.5YR5/4	石英、炭石、輝石、白色砂子、小石少	無	丸	外面に横穴。
359	Vb	(6)	2.5YR5/6	石英、炭石、白色砂子、黒色砂子	無	丸	内面にナズ、底部に横穴。
360	Vb	3, 5, 9	7.5YR6/4	石英、炭石、燧石、白色砂子、小石	無	丸	外面に横穴。
361	Vb	6, 9	7.5YR7/4	石英、炭石	無	丸	内面にナズ、底部に横穴。
362	Vb	3, 8	10YR3/1	石英、炭石、輝石、白色砂子	無	丸	外面に横穴。
363	Vb	5	7.5YR6/6	石英、炭石、燧石、燧母	無	丸	外面に横穴。

第3節 遺構外出土の石器

包含層から出土した石器の点数は表13のとおりである。この他に多数の剥片類が出土したが、全体的には剥片類よりもtool類が多いという印象を受ける。これらの石器の出土層位は2層の黒色土～9層のFBで、レベル的には大変広がりをもって出土している。また、石器製作跡的に剥片類が特に集中する地点を持たないのも特徴であり、石器の分布する地点に満遍なく石器、剥片類が出土している状況である。

石器の出土状況は前節で述べたとおりであり、地点を同じにして多時期の遺物が層位をまたがって出土しているため、石器は土器との共伴関係から時期を判断することが不可能である。よって、これらを器種別に分類した上で、残存状態が良いものを中心に報告する。また、特に出土状況に特徴のあるものに関しては各項にて別記する。

表13 縄文時代包含層出土石器集計表

器種名	石鏃	スクレイパー	楔形石鏃	石匕	石鏃	石斧	剥石器	磨石・砥石類	剥片・砕片	合計
点数	84	7	2	12	4	8	4	187	837	1,145

1 石鏃 (364～436)

84点が出土した。これらの石鏃は、完成品・欠損品が71点、13点が未製品となっており、製作途上のものが全体の約18%と非常に少ない。剥片類の出土が非常に少ないことと合わせて、通常集落遺跡で行われている道具の補充を目的とした石器の製作行為が、殆ど行われていないことが石鏃の組成の中でも推測できる。

ここでは、残存状況の良い73点を図化し、基部の形状によって便宜的にa～c類に分類する。

<a類>基部が凹状のもの

364～412が該当する。基部の形状は同じ凹基であっても、挟りかほとんどないものや、脚部が内湾するものなど様々であり、中間的なものも存在する。

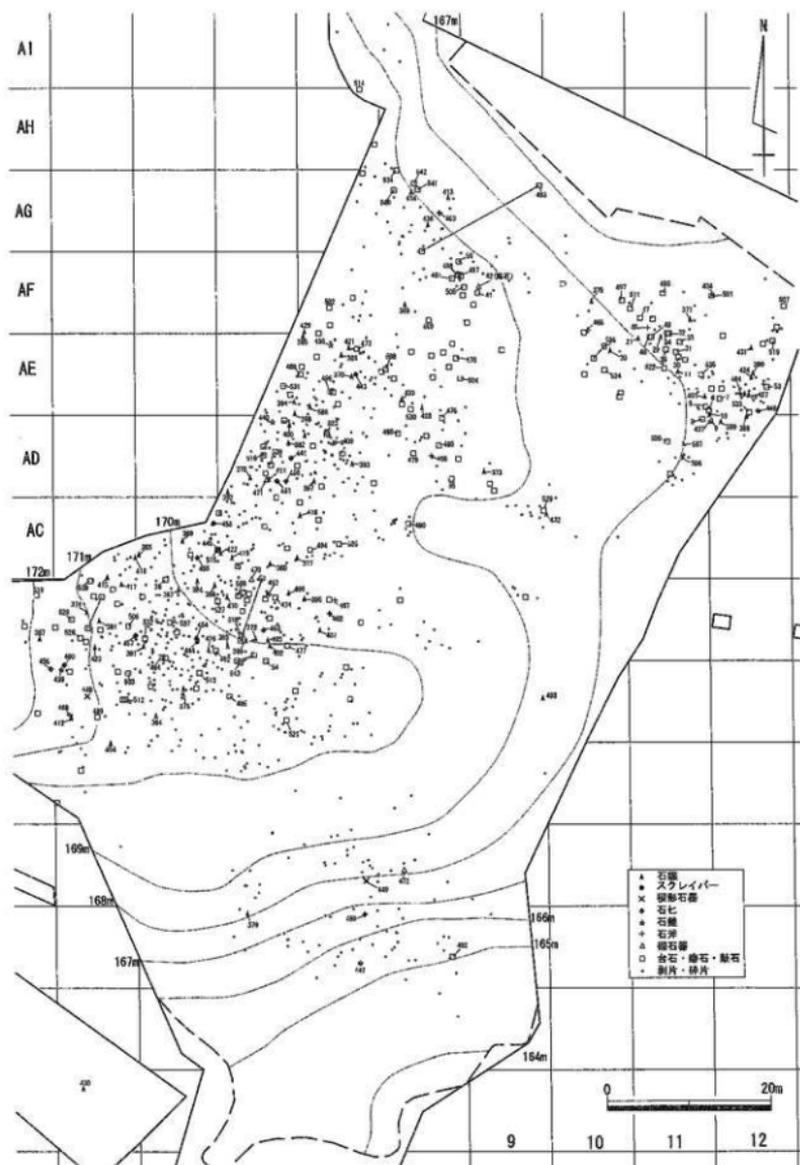
364～367、469は正三角形で僅かに挟りが入り、比較的小型のものである。断面形状はやや菱形に近くなり、表裏面に素材剥片の剝離面が残される。調整が中心部にまで及んでいないものもあり、リダクションの結果ではなく、当初より小型の石鏃を目的としてつくられたものと考えられる。未製品として掲載した424～428も同様に小型のものになると考えられる。

391は、縁辺部が鋸歯縁に整えられる特徴的なもので、表面に節理面を残すが、薄く湾曲のない形状に整えられている。393は被熱による白色化が観察できる。408は今回の出土遺物の中で、唯一脚部が内湾するものである。411、412は所謂飛行機鏃と呼ばれるもので、2点とも諏訪ヶ台産の黒曜石を素材として2層の黒色土より出土しており、製作も縁辺部を直線的に削出した後に、1～2打の剝離によって胴部中央に括部を削出するという共通性を持つ。これらは後期の土器分布と重なる。

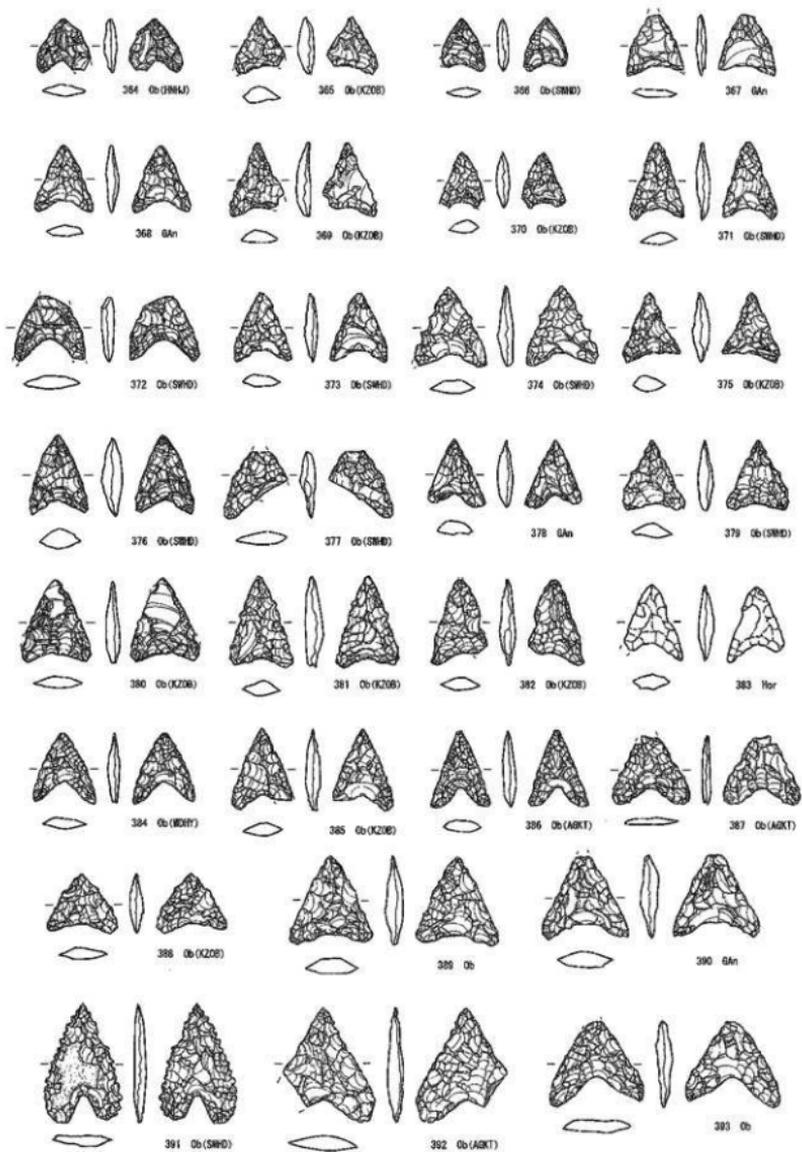
<b類>基部が平坦に近いもの

413～418、420が該当する。413のように少々厚目で帯形のもの、三角形に近いものがある。420はやや大型の石鏃で、先端が細く尖り表裏面に素材の剝離面を残す。その大きさと形状から、弥生時代以降の遺物の可能性もある。

また、頁岩や黒曜石を用いた石材が多い中で417、418は粘板岩を素材としている。板状に剝離した素材の縁辺部のみ調整を加える技法は、c類として分類した419と同じである。よって形態はb類としたが、419と同時期のものであり、使用方法も類似すると考えられる。

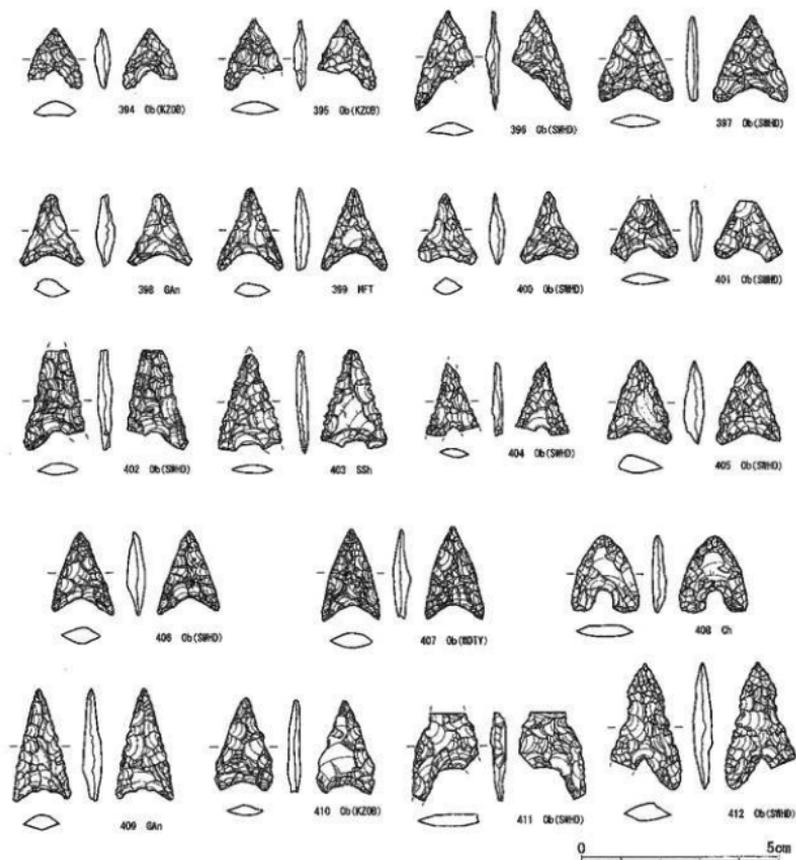


第92図 石器出土状況図



第93圖 石釵 (1)

0 5cm

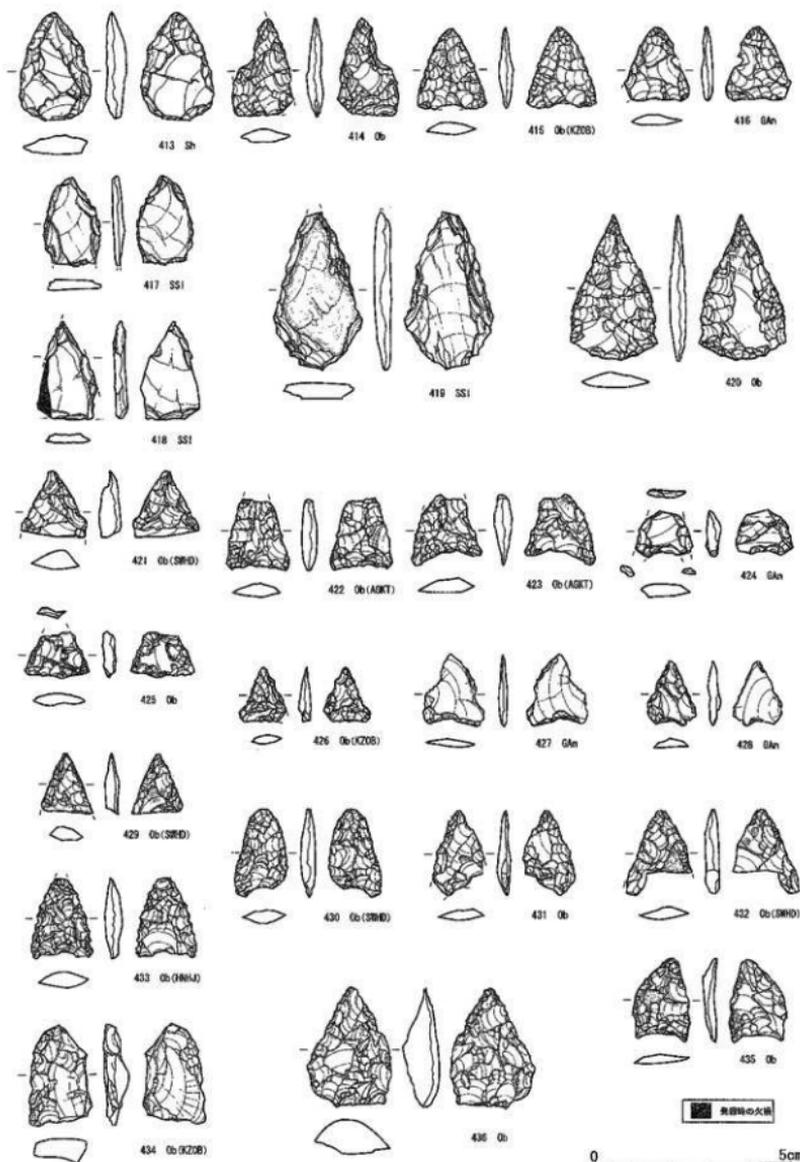


第94図 石鏃 (2)

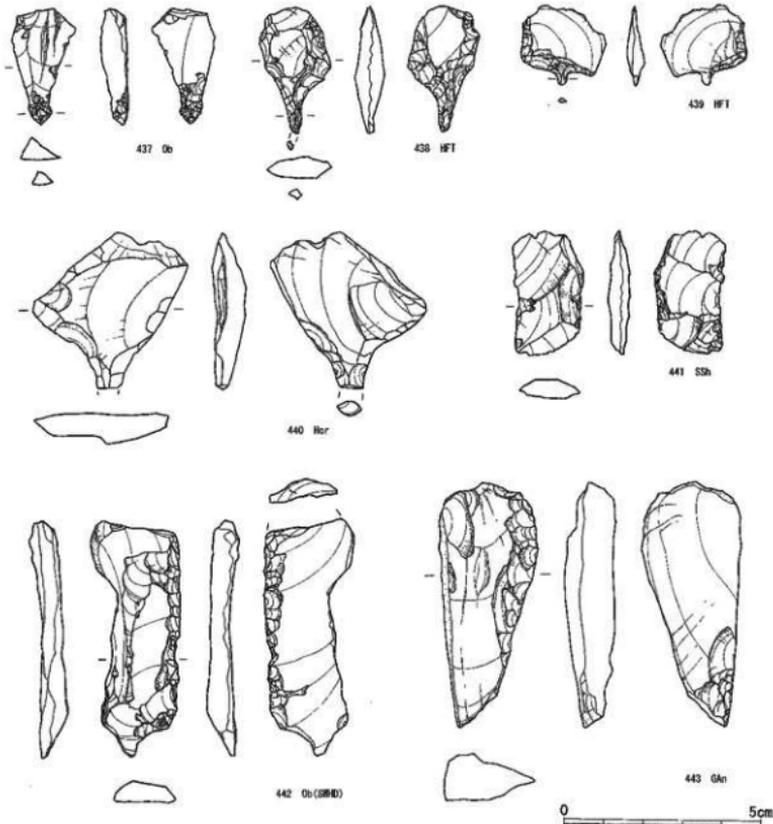
<c類>凸状の基部を有するもの

419が該当する。前述のとおり粘板岩の平坦な剝離を生じやすい石材で作られる石鏃で、板状の剥片に縁辺部のみの調整を加えることによって整形される。

当遺跡で出土したものは欠損品も含まれており、現状ではb類とc類に分類した。これらに類似する石鏃は愛鷹・箱根山麓を中心に出土しており、基部の形状は様々であるが、最大幅が器体の下部約1/3に設定され、薄手であることは製作技術とともに共通しており、非常に特徴的な石鏃である。石材の節理と同方向の衝撃に著しく弱い石材を選択しており、刺突を目的とする石鏃の実用に耐えるかは、はなはだ疑問である。当遺跡においては3点が約15m以内の範囲で出土しており、第IV群土器（前期後半）と出土位置が重なっている。しかし、弥生時代の石製模造品が同じ石材を選択しており、住居跡も検出されていることから、同時代の石鏃形の石製品である可能性もある。



第95図 石鏃 (3)



第96図 石鏃・スクレイパー

<その他>未成品・欠損品

421～436は未製品や、欠損によって基部による分類が不可能なものである。

2 石鏃 (437～440)

剝片の端部に両側縁から調整を加え、先端部を作り出しているものである。437は断面三角形の剝片端部に調整を加えて鏃部を作り出したもので、先端部はやや鈍い。439は薄い貝殻状の剝片を素材としたもので、バルブを除去するように調整を加えるとともに、薄い剝片の中でも厚味のある打点の周辺を選択し、刃部を削出する。440は反対に剝片の端部に表裏両面より調整を加えて鏃部を作り出す。先端部欠損。

3 スクレイパー (441~447)

剥片、あるいは石核の縁辺部に連続した調整を加えるものを分類した。サイドスクレイパー、エンドスクレイパーと呼ばれるものである。

441~444は調整が直線的、あるいは外湾するものである。441は剥離が直線的に連続するためスクレイパーとしたが、楔形石器の可能性もある。442は刃部を表裏から削出する。444は分厚い縦長剥片の側縁部に90度に近い加工を施す。FBからの出土であるためここに掲載したが、同様の石材の尖頭器が出土していることから、縄文時代草創期の遺物の可能性もある。

445~447は凹状の調整を施す所謂ノッチである。前者に比べ小型で薄手の剥片を素材に用いる。445は石錐状の調整が施されるが、左辺の調整が弱いため、ノッチとして分類している。447は背面に平坦な調整を施しているが、端部の加工がより入念になされており、ノッチ部分を削出している。

4 楔形石器 (448、449)

剥片の上下端部に打撃痕を認め、衝撃によって明らかなダメージを受けているものを分類した。両極打法によって生じる楔状の剥片は除外してある。448は剥片端部に微細な剥離が観察できる。剥片の打点側と末端部に衝撃痕がみられる。

5 石ヒ (450~461)

12点出土した。横型のもの10点、縦型のもの2点である。450はガラス質黒色安山岩製のもので、左側縁部に欠損後刃部を再生した痕跡が残る。風化の著しいホルンフェルス製のを除き、加工の状況が観察できるものについて、そのつまみ状の突起部分を拡大観察したが、緊締等を想定できる剥離面の潰れはない。また、ホルンフェルスやチャート、凝灰岩といった石材を選択しており、縄文時代を通して多用される黒曜石製のものは1点のみである。

6 石斧

8点出土し、風化の著しい1点を除いて図化した。

462は磨製石斧の断片である。折れに関する剥離が同一方向から生じているため、使用時の衝撃によって破砕した可能性がある。正面に打痕と磨痕が残る。また、剥離面を含めて全体的に受熱し、赤化している。

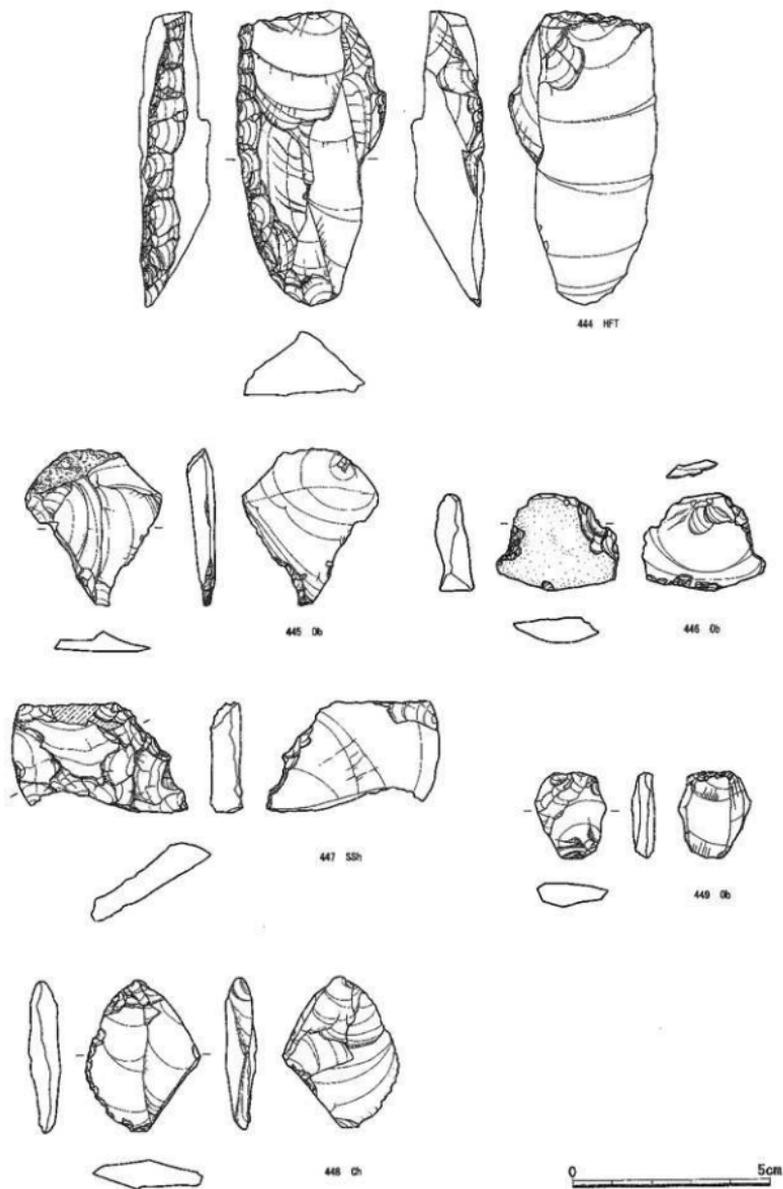
463~468は打製石斧で、468を除いてすべて刃部側に最大幅をもつ盪形の石斧である。464は縁辺部のエッジを意図的に潰したものと考えられる打痕が観察できる。また、正面左辺には使用によるものと思われる光沢(図トーン部分)が観察される。先端部欠損。465は石斧の基部で、節理により折損している。折れ面を含めて酸化鉄が付着する。466も464と同じようにエッジを意図的に潰したものと考えられる打痕が観察でき、下辺には一部側縁部に及ぶ光沢が残る。刃部先端部は使用によると思われる剥離が生じているため、この光沢は観察できない。

7 石錘

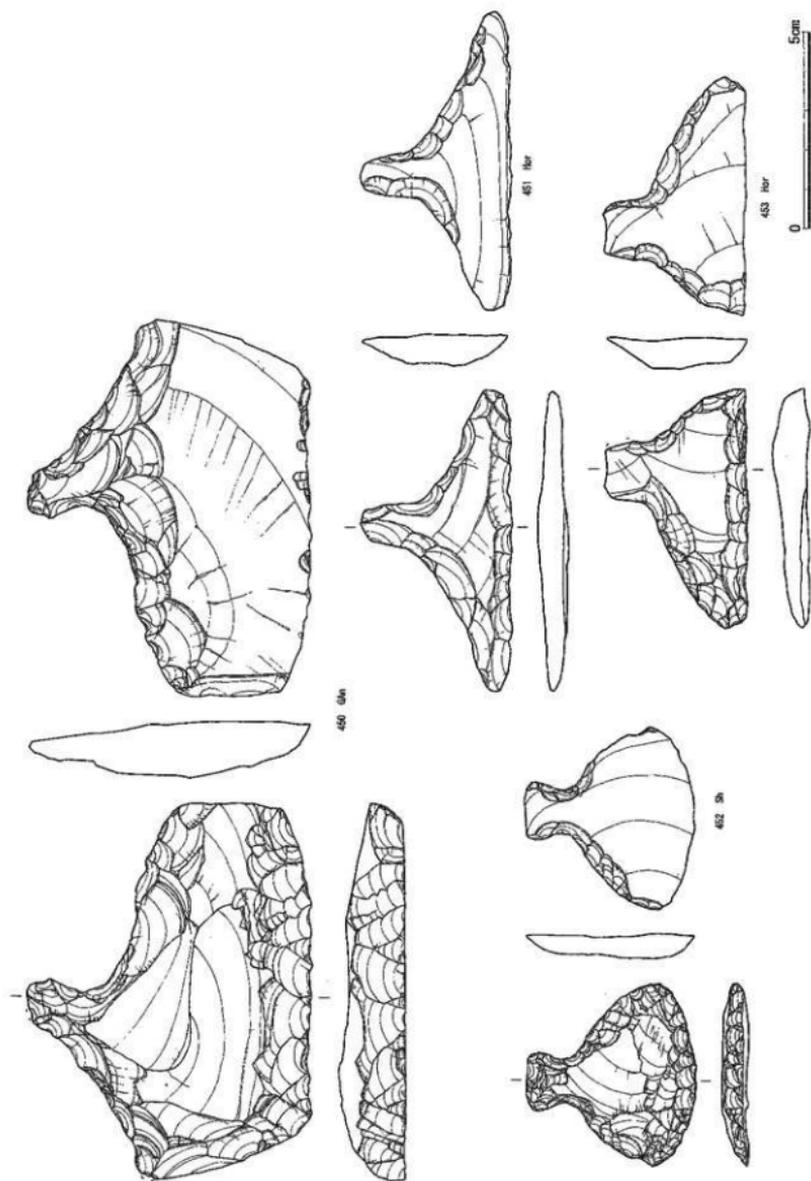
469は円礫の縦軸方向に敲打によって溝状の凹を作ったものである。側縁部に独立した打痕があることから敲石としても使用された可能性がある。縁辺部に及ぶ溝状の敲打痕を評価して石錘とした。

8 礫器

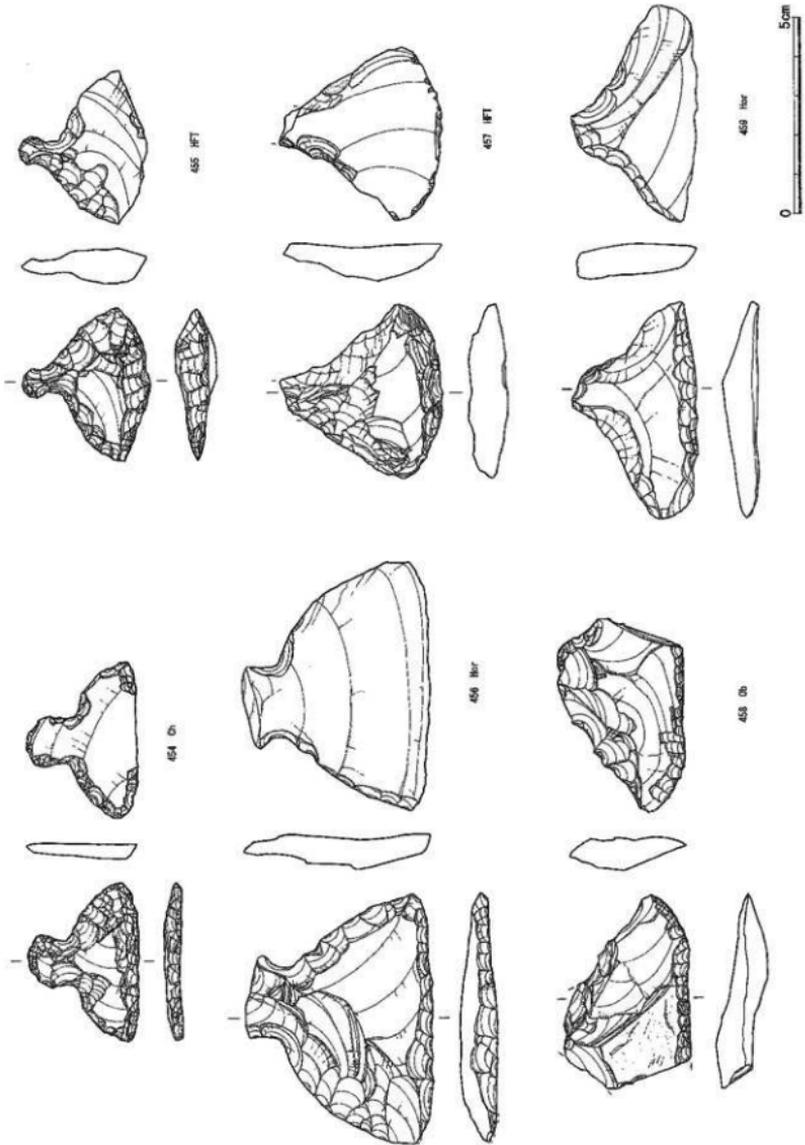
470は断面半円形の素材を用い、ほぼ全局を加工によって円形に調整する。刃部と考えられる剥離は、両面から加えられている。471、472は原礫面を打面として作られた片刃のものである。石核の可能性もある。



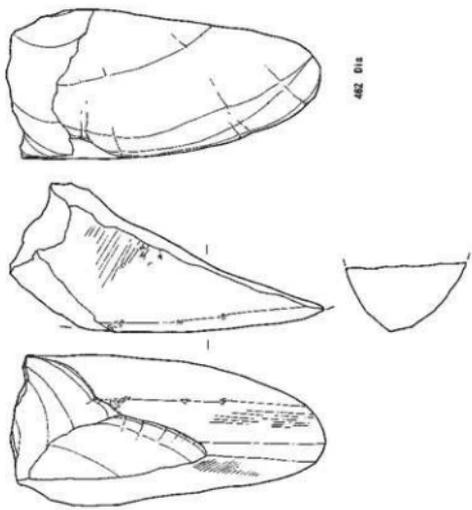
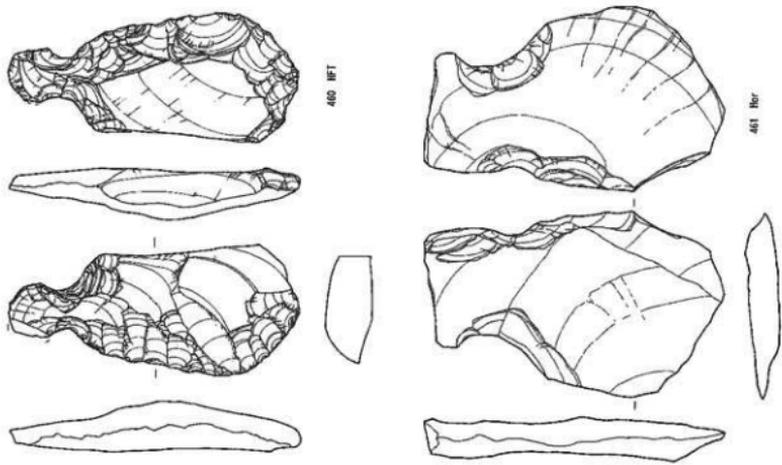
第97図 スクレイパー・楔形石器



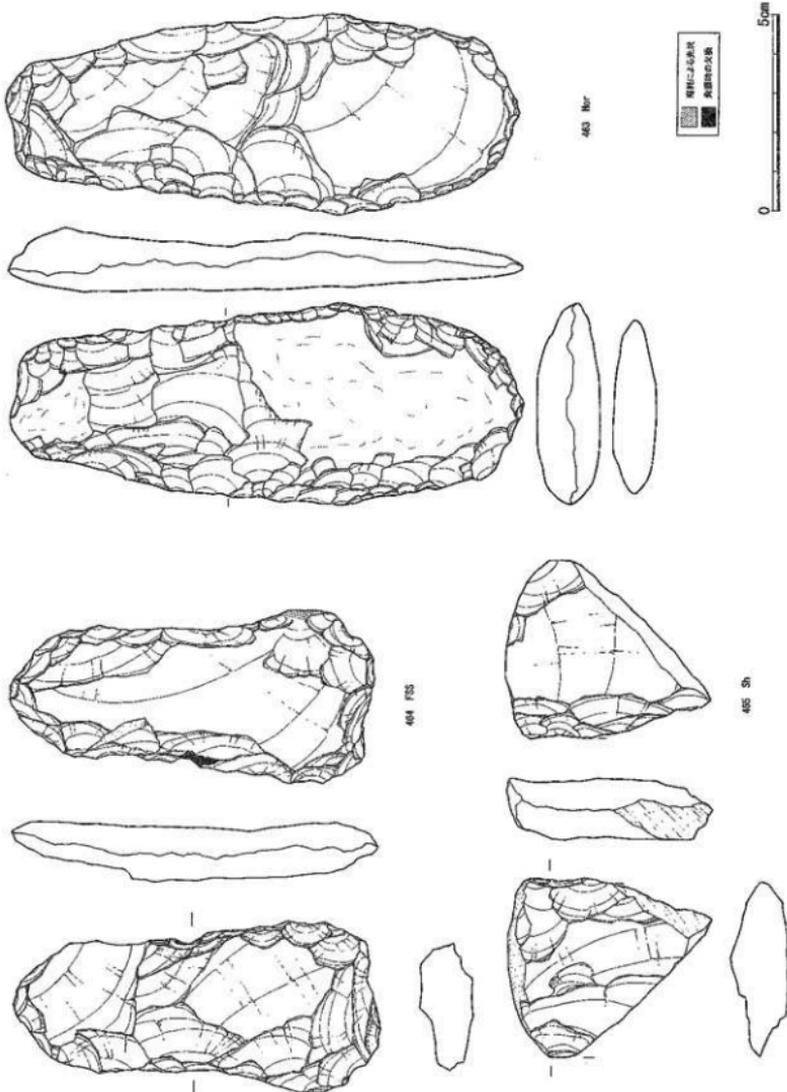
第98図 石匕(1)



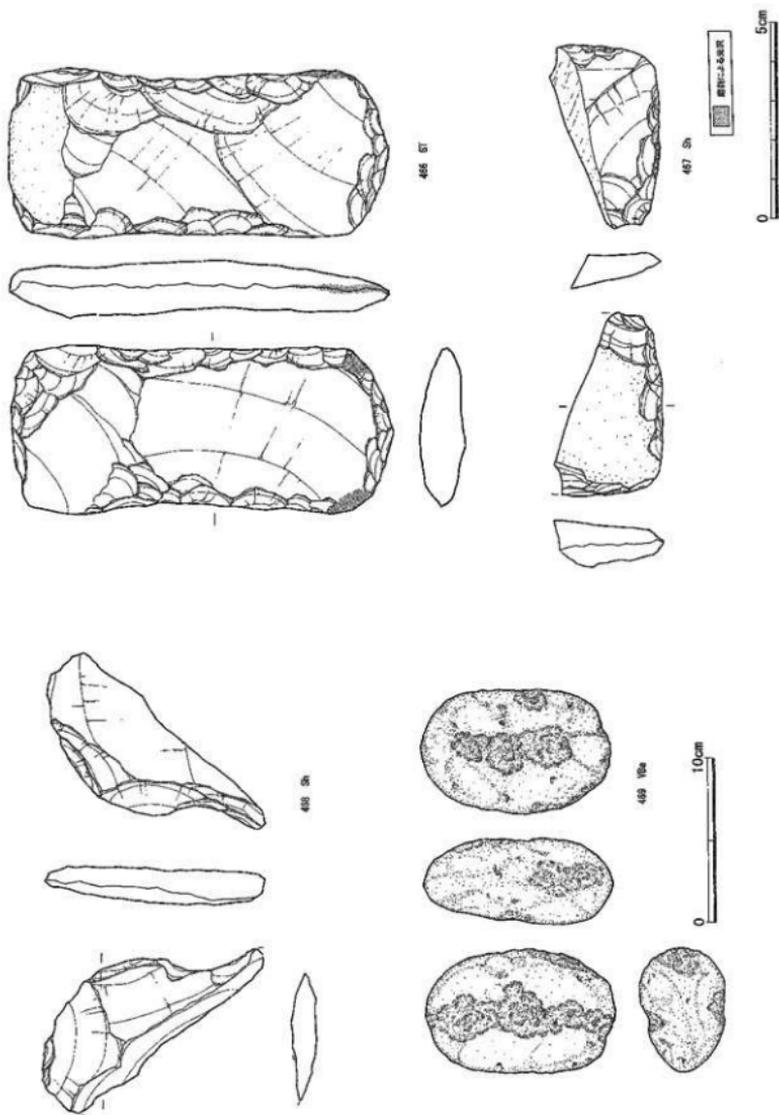
第99図 石匕 (2)



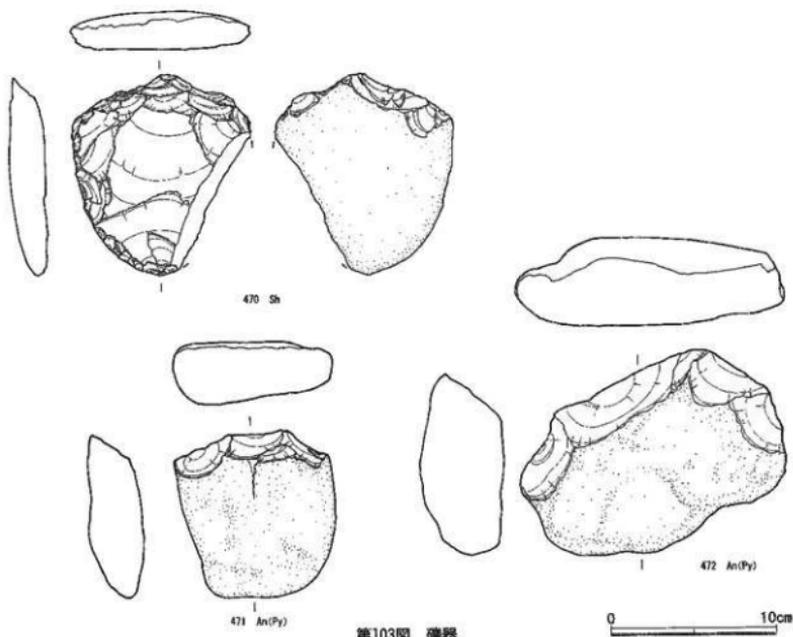
第100図 石匕・磨製石斧



第101図 打製石斧



第102圖 打製石斧・石錘



第103図 礫器

9 敲石・磨石類

打痕・磨痕が観察できるもので、持ち上げて使用することを考え、仮に使用時の状態で15kg未満の石器を分類した。160点が出土し分類後59点を図化している。これらは、敲石・磨石と呼ばれるものであるが、機能までを特定することは不可能であるので、打痕・磨痕の観察できる部位やその組み合わせを中心に分類し報告する。

なお、使用痕跡の観察は、肉眼あるいは4～7倍ルーペの下で行い、石材に敲打によるものと考えられる潰れや剝離が観察できるものを打痕とした。また、磨痕は、風化であれば石材の粒子の欠落、あるいは硬度の違いから粒子間に凸凹が生じるものの、これらの凸凹がなく、さらに石を構成する鉱物の硬軟差なく平坦に整えられているものを人為的であると判断し図化した。

(1) I群 打痕のみが観察できるもの

a類 円柱状の礫の長軸端部のみ打痕が観察できるもの

473～476が該当する。473～475はやや硬い線状の潰れが観察でき、石器製作用のハンマーの可能性もある。

b類 円盤状の礫の中心部分に打痕が観察できるもの

477～482が該当する。481のように表裏の平坦面に凹状の打痕があるもの、または小口部分の端部にも打痕が残されるものもある。所謂凹石。

(2) II群 打痕と磨痕が観察できるもの

a類 打痕の周辺に磨痕が残るもの (483～487)

磨痕と打痕は重なって存在しているが、痕跡に前後関係を認めることは難しく、一連の動作の中で複合的に使用されていたものと考えられる。また、485は側縁部に顕著な磨痕が観察できる。

b類 扁平な円礫の平坦部に磨痕が、周縁部に打痕が残るもの(488~501)

磨痕は491、501を除いてその殆どが稜線を持つように平坦で明瞭である。繰り返して使用され、面が平坦になったところで放棄されたものと考えられる。

c類 磨痕が側縁にまで及び形状が扁平なもの(502~510、512)

打痕が縁辺の小口部分に残され、磨面は稜線を持ち平坦で明瞭である。特に側縁部の磨痕は直線的でより明確な稜線を形作っている。

d類 磨痕が側縁にまで及び棒状のもの(511、513~517)

断面が磨面によって多角形になる。いずれも長軸の端部に打痕が観察できる。515、516は断面三角形の特殊磨石と呼ばれるものであり、このように折れた状態で出土することが多い。

(3) III群 磨痕のみが観察できるもの

a類 扁平な円礫の平坦部に磨痕が残るもの(518~524)

比較的小型の518、519は磨痕が明確に残り、稜を形成しているが、520、521、523のような大型のものには使用痕跡が不明瞭である。使用方法の差によるものと考えられる。

b類 磨痕が側縁にまで及ぶもの(525~533)

これらもまた、a類と同じ傾向があり、小型のものほど磨痕が明確に残る。525、526、528の側縁部は磨痕によって直線状になる。

III群の石器については、形状がII群b・c類にほぼ対応する。現在観察できる使用痕跡によって分類したものの、III群a・b類とII群b・c類は、ほぼ同じ環境下で使用されていると推察できる。しかし、特殊磨石と呼ばれるII群d類は、III群中には近似形態の存在が確認できないことから、限定された磨動作と敲動作の組み合わせによって生じた石器であると考えられる。

(4) その他

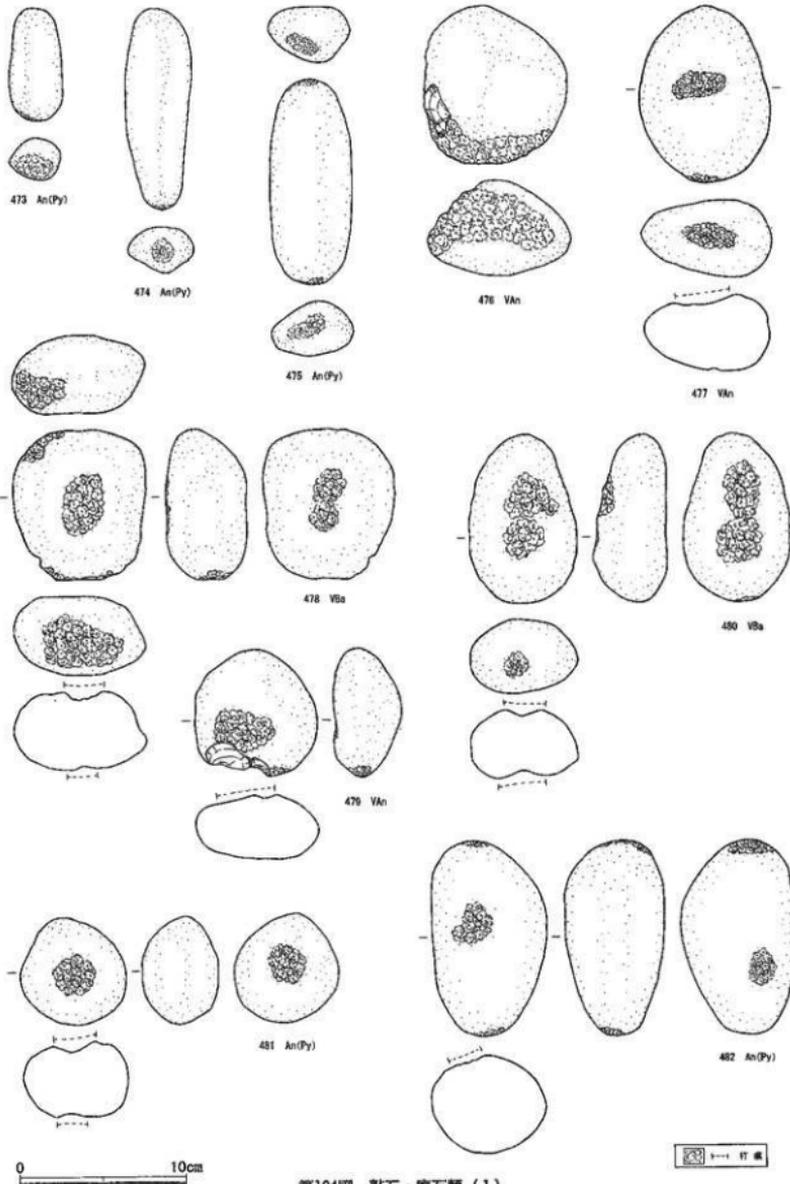
534、535は、磨痕を残す石器であるが、なだらかな曲線を描いた磨面から構成されており、一方の方向の連続的な運動を連想させるものである。小型ではあるが、置き砥石である可能性が高い。特に535は一部に段差が出来るほど使い込まれている。

10 石皿、台石等

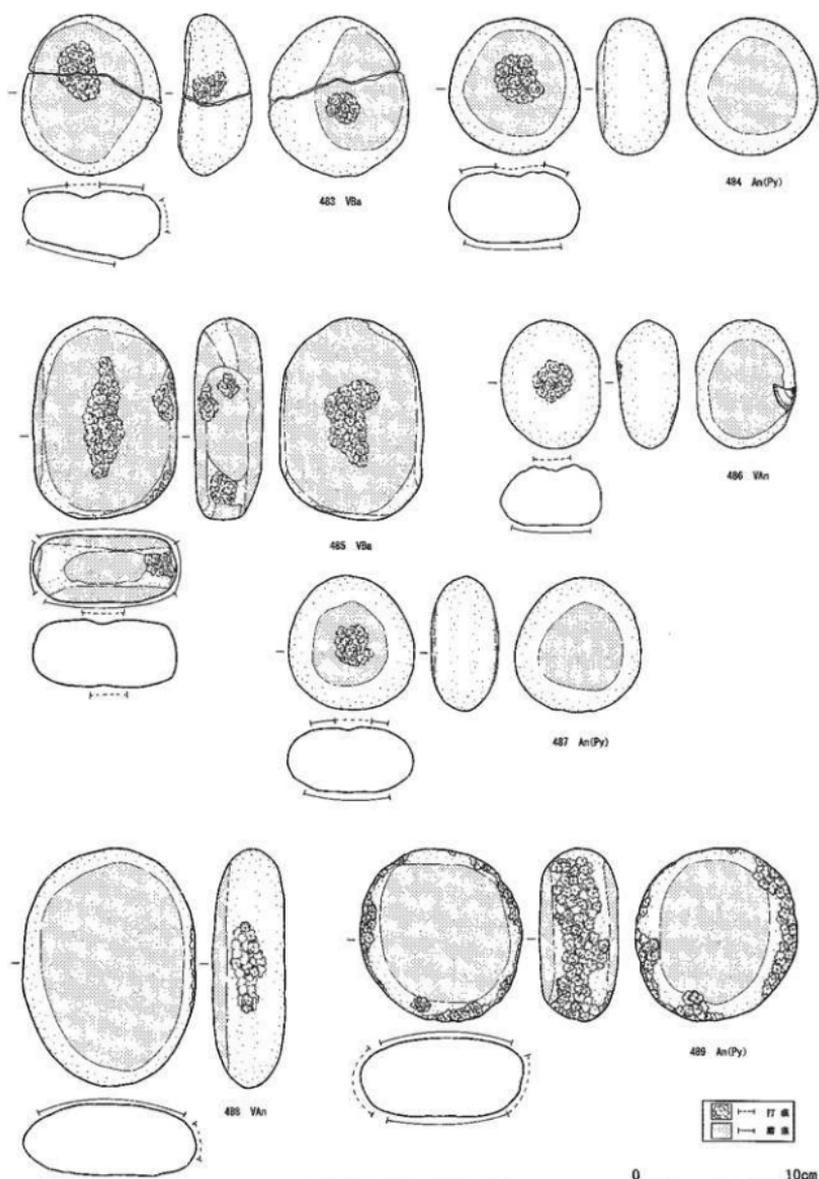
磨痕や打痕が観察できるもので、完形時の重さが15kg以上で、持ち運びが困難であり、日常的には据えられた状況での使用が想定できるものである。27点が出土し、9点を図化している。

打痕のみのもの(536、537)、打痕と磨痕が観察できるもの(538、539)、磨痕だけのもの(540~543)がある。使用痕跡が礫の破砕面に切られているため、全てが欠損品ということになる。また、必ずしも平坦な礫を使用しているものばかりではなく、539や541のように裏面が凸状になり不安定なものもあることから、やはり地面等に固定して使用していたのであろう。

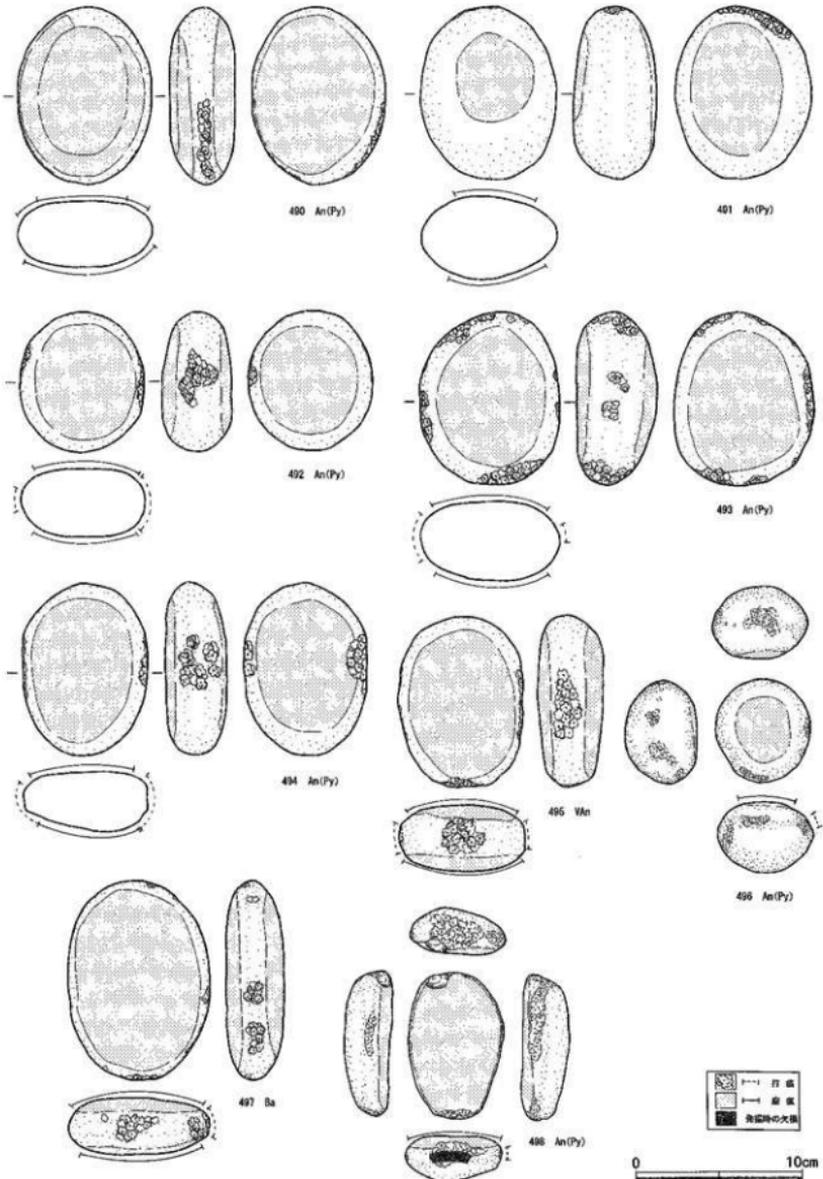
この他に遺跡には使用痕が判別できない多量の円礫が搬入されている。梅ノ木沢川の転礫と考えられ、遺跡内に点々と分布し、ほとんど受熱による赤化が観察できない。一方、集石等の礫は、円礫というよりも角礫が多く河川の転礫は殆ど含まれない。石材的には両者は変わりなく、どのような理由でこれらの選択がなされているか課題が残る。



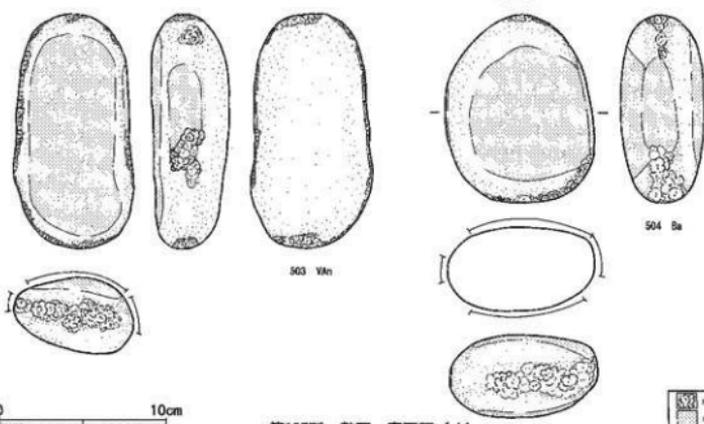
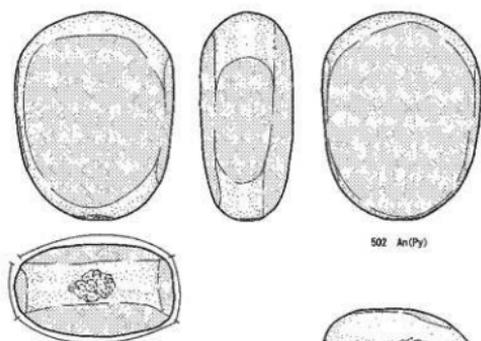
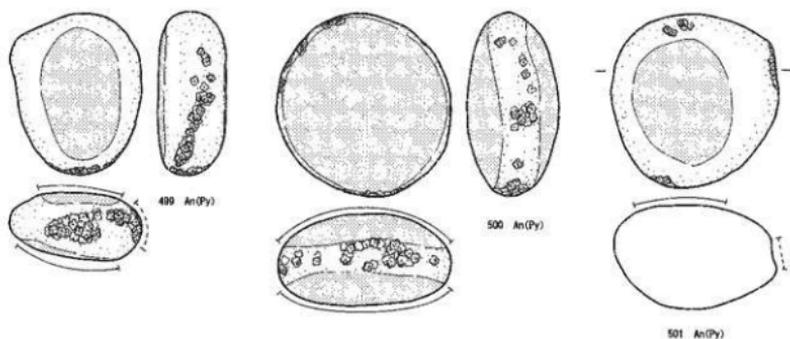
第104図 燧石・磨石類(1)



第105圖 矽石・磨石類 (2)



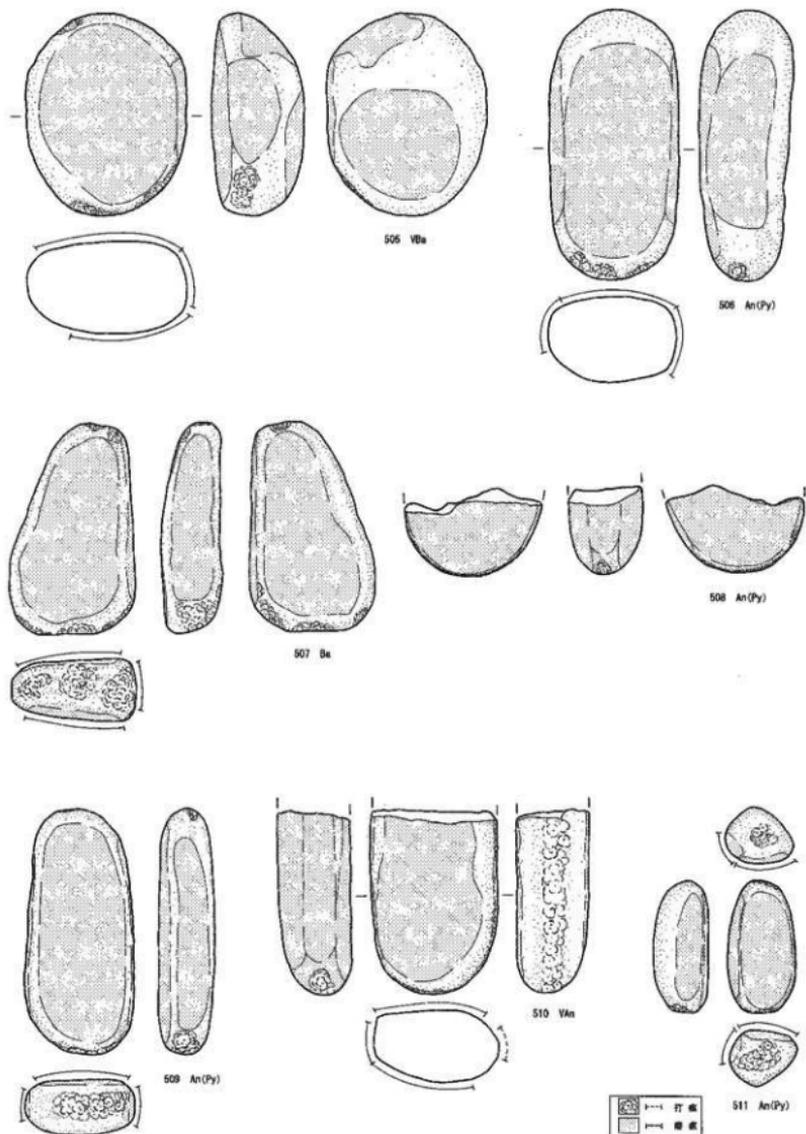
第106図 敲石・磨石類 (3)



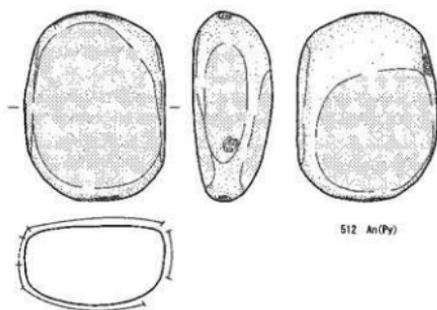
0 10cm

第107圖 敲石・磨石類 (4)

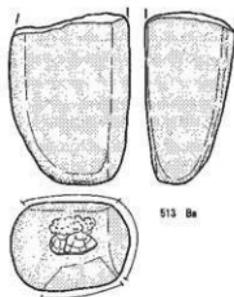




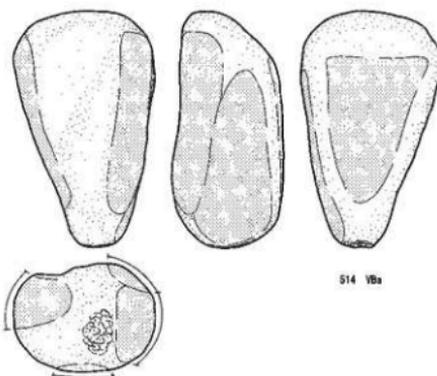
第108図 敲石・磨石類 (5)



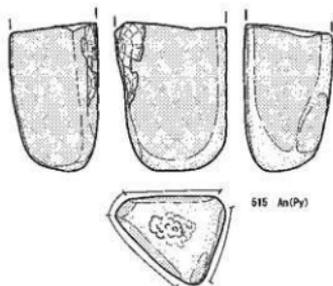
512 An(Py)



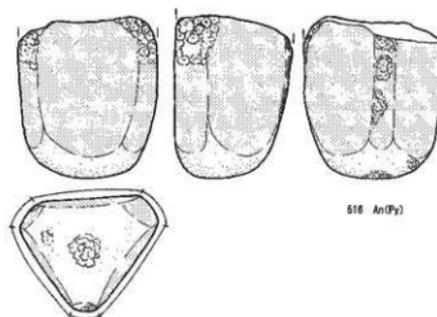
513 Ba



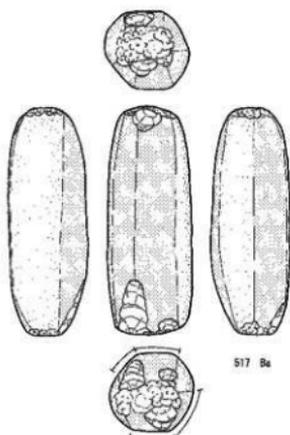
514 VBa



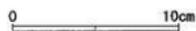
515 An(Py)



516 An(Py)

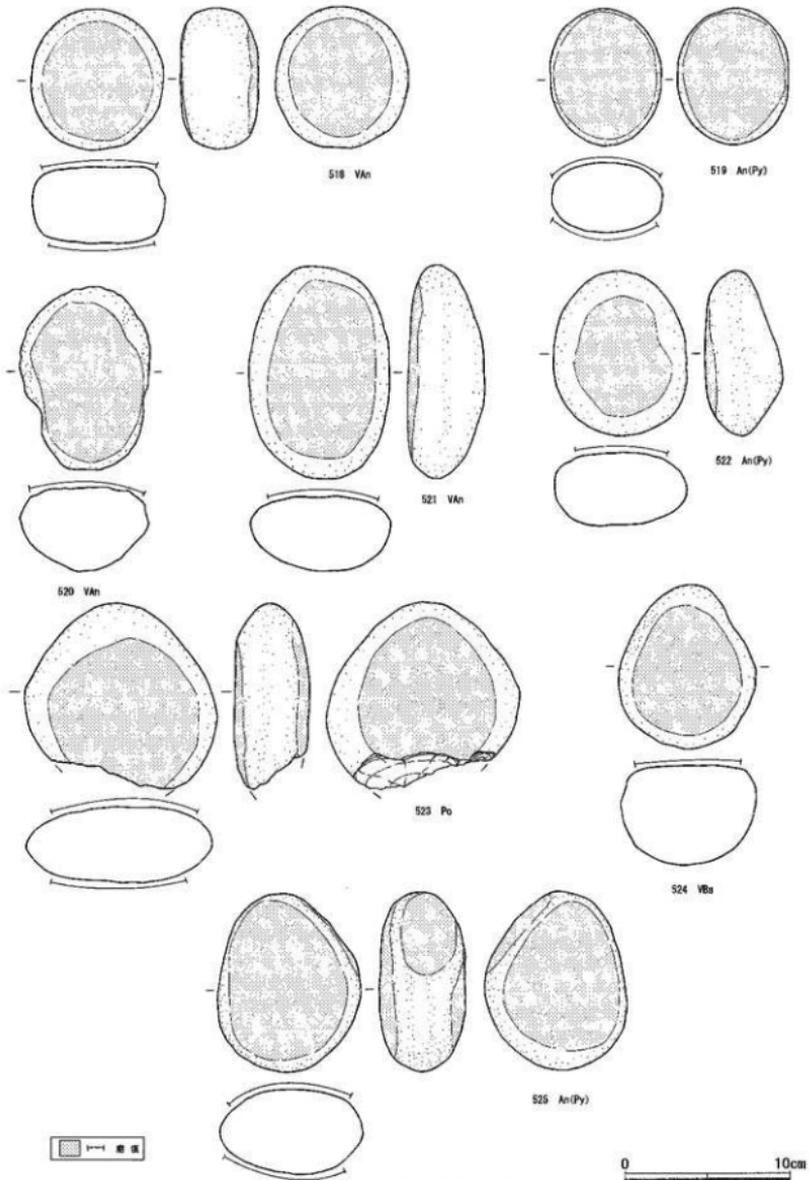


517 Ba

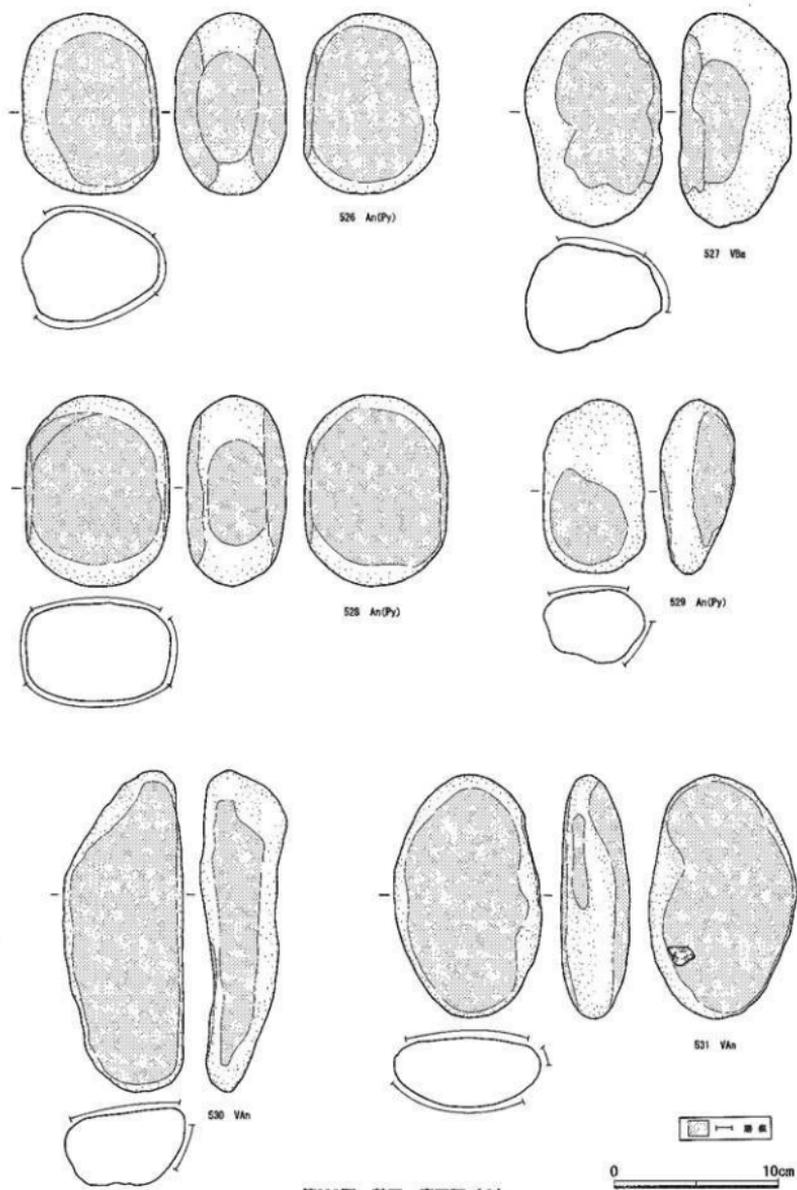


第109圖 敲石・磨石類 (6)

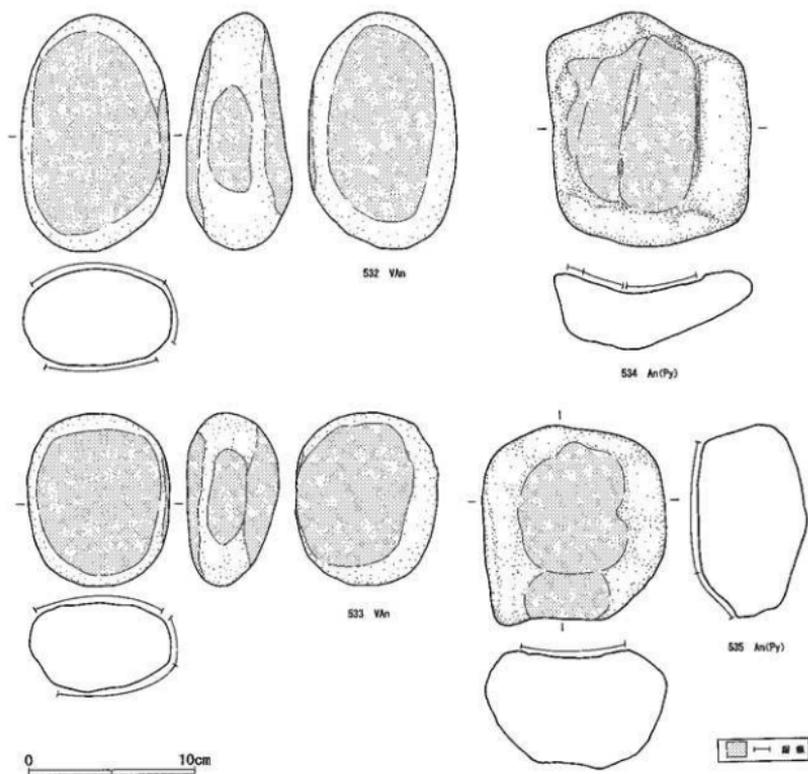




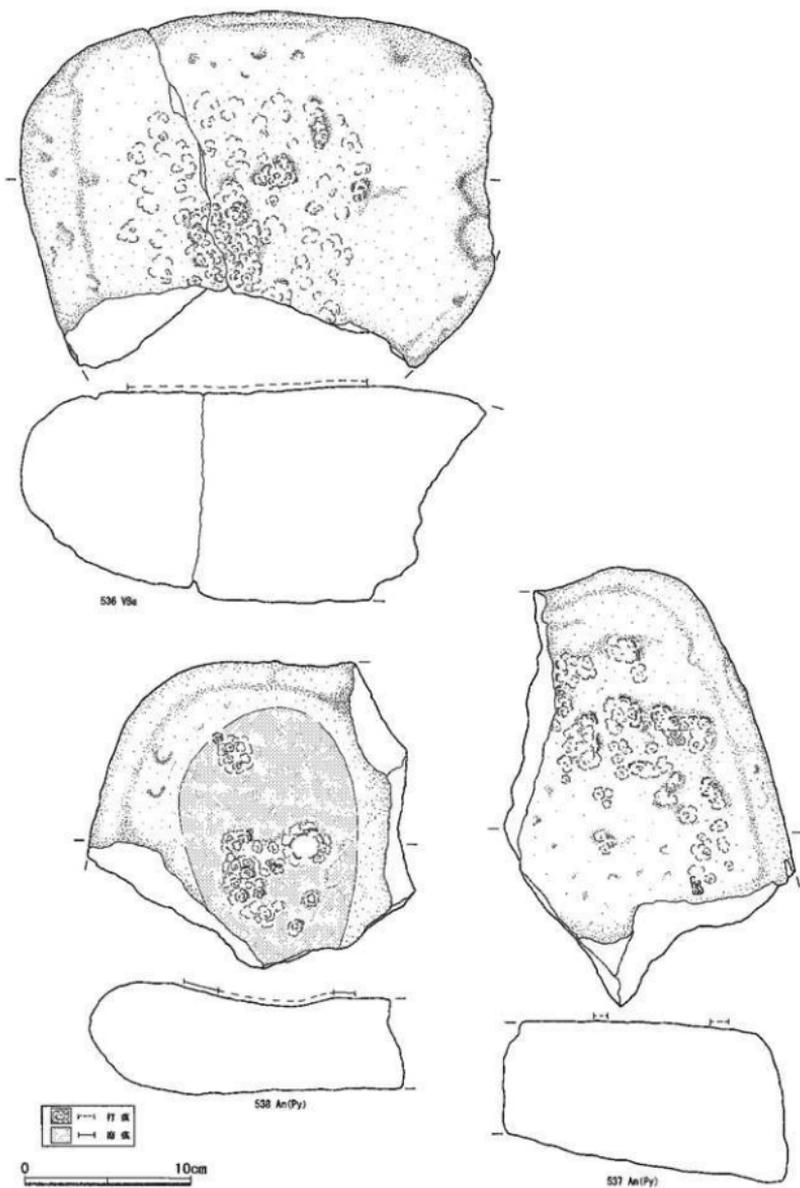
第110図 敲石・磨石類 (7)



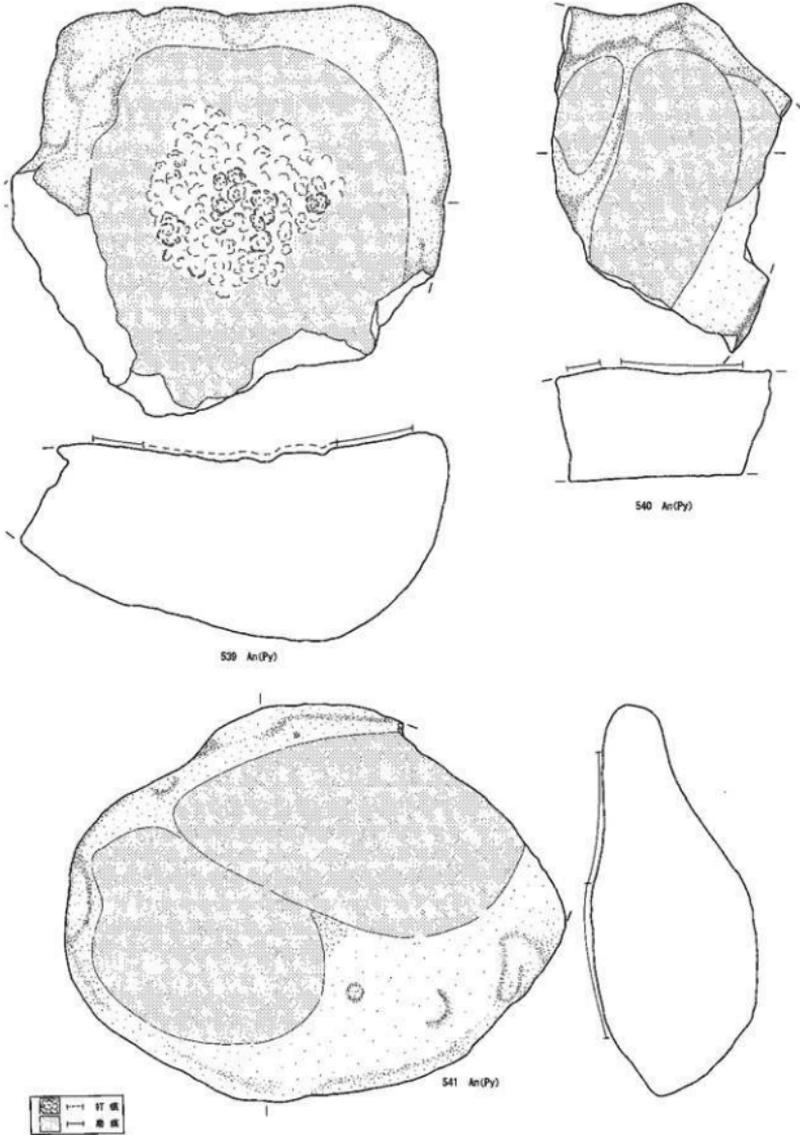
第111圖 敲石・磨石類 (8)



第112図 敲石・磨石類（9）

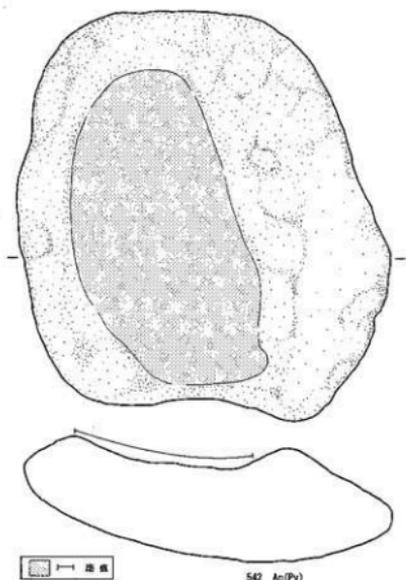


第113圖 台石・石血類(1)

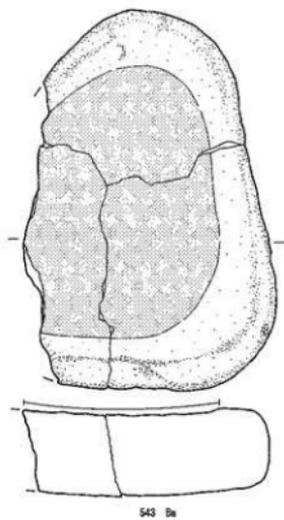


第114図 台石・石皿類 (2)

0 10cm



542 An(Py)



543 Ba

0 10cm

第115図 台石・石皿類 (3)

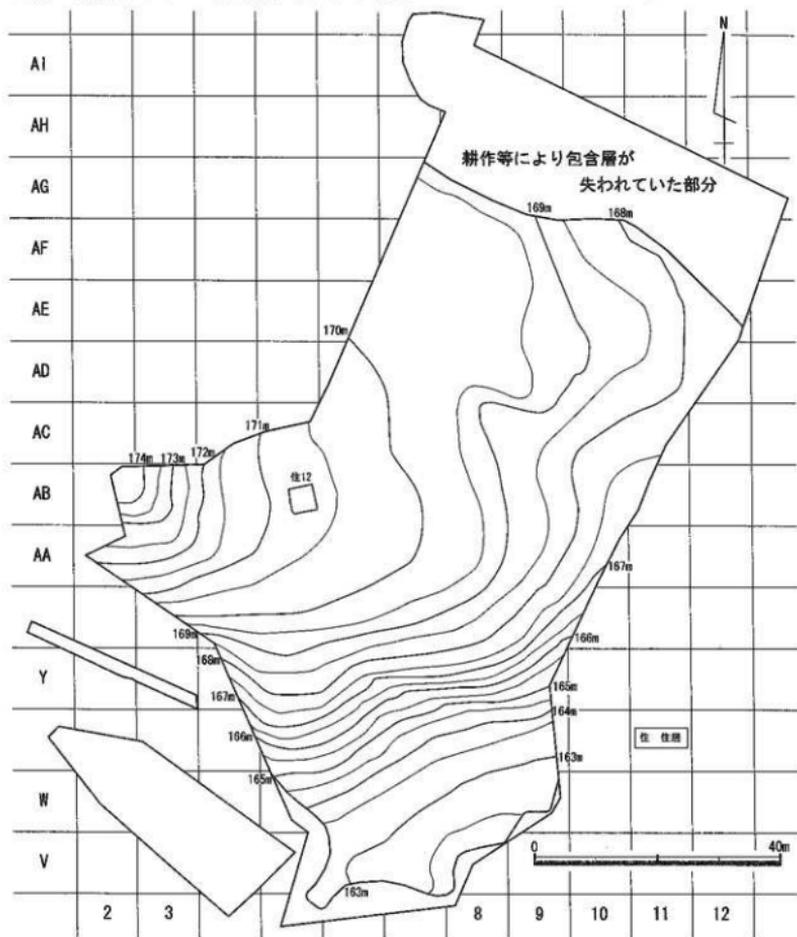
表14 縄文時代各層出土石器計測表

図号	層位	年代	石名	O b	厚さ	最大長	最大幅	重量	国産	産地	産地	石名	O b	厚さ	最大長	最大幅	重量
番号				厚さ	(mm)	(mm)	(mm)	(g)	産地	産地	産地		厚さ	(mm)	(mm)	(mm)	(g)
354	11844	6	Gan	石名	13.2	13.1	13.4	0.4	357	10887	5	HPT	石名	14.0	14.0	13.3	116.3
355	11845	5	Ob	KZOB	13.0	12.9	13.1	0.5	358	10888	9	Ob	石名	13.5	13.5	13.0	96.2
356	2194	6	Ob	SWHD	13.0	13.0	12.9	0.3	359	4062	8	HPT	石名	37.7	34.2	8.7	14.8
357	20365	9	Gan	石名	11.5	11.4	11.5	0.3	360	5252	6	HPT	石名	52.2	52.2	41.1	31.0
358	11844	6	Gan	石名	15.9	14.8	15.5	0.6	361	50378	—	Hor	石名	75.0	48.7	8.7	36.4
359	11331	6	Ob	KZOB	13.0	13.0	13.0	0.3	362	1313	9	Ob	石名	108.0	108.0	108.0	466.2
360	11844	6	Ob	KZOB	12.4	11.1	11.1	0.5	363	10309	—	Hor	石名	129.8	51.1	129.8	6.6
361	42223	9	Ob	SWHD	13.8	13.8	13.6	0.6	364	25843	7	FSS	石名	51.9	15.7	14.4	86.2
362	3933	5	Ob	SWHD	16.1	17.0	16.3	0.7	365	30094	—	Sh	石名	52.3	46.1	115.0	141.4
363	31349	—	Ob	SWHD	17.6	14.7	14.4	0.6	366	33087	8	GT	石名	96.4	43.1	13.6	30.6
364	106	6	Ob	SWHD	13.0	13.0	13.0	0.3	367	1113	9	HPT	石名	27.6	27.6	11.3	44.0
365	24222	6	Ob	KZOB	17.8	14.7	14.5	0.7	368	3282	3	Sh	石名	155.4	46.4	18.5	12.0
366	4477	6	Ob	SWHD	13.0	13.0	13.0	0.3	369	787	8	VBa	石名	113.8	74.4	31.9	369.1
367	14434	6	Ob	SWHD	11.2	11.2	11.2	0.4	370	19110	6	Sh	石名	121.5	100.0	53.0	134.0
368	21900	6	Gan	石名	17.4	14.5	14.0	0.7	371	20757	8	An(Pv)	石名	102.0	96.0	28.0	470.6
369	4131	8	Ob	SWHD	17.9	15.9	14.2	0.7	372	4164	8	An(Pv)	石名	132.0	102.0	51.0	1100.4
370	30247	8	Ob	KZOB	12.0	11.7	11.7	0.4	373	16671	6	An(Pv)	石名	97.0	92.2	25.8	70.8
371	20000	8	Ob	KZOB	22.4	16.1	15.8	1.2	374	17209	6	An(Pv)	石名	121.7	99.3	27.8	178.1
372	1146	3	Ob	KZOB	19.0	19.0	14.2	0.3	375	50358	—	Sh	石名	123.5	46.2	31.9	27.1
373	17212	3	Hor	石名	15.2	14.5	15.0	0.8	376	28070	6	VAn	石名	96.5	84.5	27.8	569.3
374	20587	8	Ob	WDTY	13.2	13.7	13.1	0.5	377	3197	6	VAn	石名	196.0	77.5	47.0	456.2
375	15897	6	Ob	KZOB	23.7	11.5	11.0	0.3	378	26206	5	VBa	石名	90.1	80.3	48.0	426.9
376	14101	7	Ob	AGKT	13.6	15.5	15.3	0.6	379	48018	17	VAn	石名	76.1	71.5	40.5	180.2
377	21254	10	Ob	AGKT	17.7	18.0	17.2	0.7	380	34381	—	VAn	石名	101.1	64.2	44.5	326.0
378	18252	—	Ob	KZOB	13.0	13.0	13.0	0.3	381	1151	9	VAn	石名	82.2	64.1	36.3	467.5
379	30730	—	Ob	石名	22.7	21.0	4.7	1.4	382	3979	8	An(Pv)	石名	117.9	68.2	56.1	614.5
380	37426	—	Gan	石名	24.1	22.1	10.2	0.5	383	16342	6	VBa	石名	96.5	82.0	44.6	305.0
381	16250	5	Ob	SWHD	30.3	19.8	3.1	1.4	384	17466	9	—	—	—	—	—	—
382	2070	8	Ob	AGKT	18.2	22.1	11.1	0.7	385	13582	8	VBa	石名	81.6	78.5	44.1	418.3
383	20000	—	Ob	石名	22.0	22.0	14.0	1.1	386	30943	8	VBa	石名	120.5	86.2	40.5	651.4
384	14201	6	Ob	KZOB	15.3	13.0	14.1	0.5	387	19888	8	VAn	石名	78.0	61.0	38.0	178.9
385	1560	9	Ob	KZOB	17.0	14.6	15.0	0.3	388	19886	8	An(Pv)	石名	81.1	76.0	40.0	340.0
386	23889	6	Ob	SWHD	16.0	16.1	16.0	0.6	389	14728	7	VAn	石名	143.2	103.1	32.8	886.5
387	688	5	Ob	SWHD	21.7	18.5	3.4	1.8	390	857	7	An(Pv)	石名	233.8	97.2	63.3	711.9
388	24133	9	Gan	石名	14.4	16.3	4.8	0.8	391	17091	8	VAn	石名	197.8	160.0	42.8	480.0
389	15098	6	HPT	石名	26.7	16.6	3.9	0.8	392	32617	—	An(Pv)	石名	104.6	81.7	48.0	607.7
390	21156	9	Ob	SWHD	18.2	14.9	4.1	0.6	393	30660	8	VAn	石名	94.0	74.5	62.0	412.3
391	37847	—	Ob	SWHD	15.7	17.1	15.1	0.6	394	23645	6	An(Pv)	石名	104.6	84.5	46.8	651.0
392	35981	1	Ob	SWHD	13.0	14.0	13.0	0.3	395	18451	9	VAn	石名	82.2	74.1	36.3	467.5
393	3792	9	SSh	石名	16.7	15.0	12.5	0.9	396	4580	6	VAn	石名	103.2	76.0	38.1	378.5
394	5894	8	Ob	SWHD	18.0	13.0	13.0	0.5	397	16701	6	An(Pv)	石名	62.4	57.0	43.7	220.0
395	15940	8	Ob	SWHD	21.2	16.4	6.3	1.2	398	34699	9	Sh	石名	131.6	84.7	31.8	460.2
396	665	9	Ob	SWHD	15.4	15.4	15.0	0.9	399	1637	7	An(Pv)	石名	108.0	76.2	38.1	446.2
397	3543	8	Ob	WDTY	23.2	14.2	3.7	1.9	400	30665	—	An(Pv)	石名	88.8	78.9	31.2	458.5
398	50343	—	Ob	石名	19.8	17.4	3.7	0.9	401	34581	—	An(Pv)	石名	111.1	104.1	54.5	550.0
399	22630	10	Gan	石名	28.8	14.8	5.1	1.3	402	26141	—	An(Pv)	石名	106.9	100.9	60.1	537.6
400	16169	3	Ob	KZOB	16.8	14.8	4.3	0.7	403	10238	8	An(Pv)	石名	123.2	82.4	55.5	1063.3
401	13151	5	Ob	KZOB	22.0	14.0	14.1	1.2	404	13151	5	VAn	石名	82.2	64.1	36.3	467.5
402	5581	6	Ob	SWHD	13.0	13.0	13.0	0.3	405	25791	3	VAn	石名	113.7	88.2	50.2	702.8
403	13089	6	Sh	石名	27.5	18.4	5.2	0.7	406	19956	5	VBa	石名	122.9	96.7	65.2	711.8
404	24504	—	Ob	KZOB	23.0	15.0	4.8	1.3	407	18057	—	An(Pv)	石名	165.0	70.2	54.5	1946.9
405	18670	1	Ob	KZOB	16.8	17.7	18.3	0.3	408	37766	—	An(Pv)	石名	108.0	76.2	38.1	446.2
406	282	9	Gan	石名	11.8	16.0	11.1	0.3	409	33584	6	An(Pv)	石名	51.9	32.4	44.0	2347.3
407	24971	10	SS	石名	25.0	14.0	3.1	1.1	410	5909	8	VAn	石名	147.5	64.1	33.4	544.0
408	21844	6	SS	石名	64.0	14.6	12.6	1.2	411	36212	8	An(Pv)	石名	111.8	107.1	65.0	1034.3
409	21546	6	SS	石名	44.3	22.8	4.6	1.4	412	24035	8	An(Pv)	石名	73.7	40.0	32.6	138.8
410	33044	—	Ob	石名	27.1	22.1	4.4	1.0	413	1338	6	An(Pv)	石名	111.3	84.7	47.8	684.0
411	12282	8	Ob	SWHD	17.3	16.8	16.7	1.2	414	4933	6	Sh	石名	102.0	102.0	53.0	561.7
412	21822	9	Ob	AGKT	18.0	18.0	14.2	1.1	415	31128	—	VBa	石名	143.1	83.1	66.6	969.6
413	24053	10	Ob	AGKT	11.3	18.0	14.7	1.0	416	20328	8	An(Pv)	石名	88.2	65.5	62.0	434.0
414	37594	—	Gan	石名	11.7	14.3	13.0	0.7	417	20838	8	An(Pv)	石名	92.8	82.7	69.7	778.4
415	46372	—	Ob	石名	11.8	16.0	12.0	0.3	418	5081	—	Ba	石名	157.0	68.5	47.0	661.0
416	20566	8	Ob	KZOB	14.0	12.0	13.0	0.4	419	19190	6	VAn	石名	83.0	78.0	47.2	540.1
417	37118	—	Gan	石名	18.6	16.7	2.4	0.8	420	37597	—	An(Pv)	石名	81.7	67.2	41.3	280.8
418	30409	10	HPT	石名	16.6	19.3	3.4	0.6	421	90603	—	VAn	石名	110.8	76.2	41.3	488.3
419	22556	1	Ob	SWHD	17.0	17.0	16.0	0.9	422	5073	8	VAn	石名	108.0	76.2	38.1	446.2
420	3983	3	Ob	SWHD	22.2	15.4	4.0	1.1	423	38173	—	An(Pv)	石名	18.8	89.0	46.0	522.3
421	32865	—	Ob	石名	21.7	13.2	13.0	0.7	424	12406	5	Fo	石名	110.0	115.0	45.0	1848.0
422	37271	—	Ob	SWHD	12.1	17.0	14.0	0.9	425	30384	—	VBa	石名	98.4	88.5	60.9	579.2
423	37594	8	Ob	HPTJ	26.0	15.0	14.7	1.2	426	19460	6	VAn	石名	107.2	84.8	34.1	644.2
424	3636	8	Ob	KZOB	25.0	16.2	8.7	2.4	427	23662	6	An(Pv)	石名	188.7	82.1	67.0	894.1
425	50842	—	Ob	石名	21.0	14.7	3.9	0.9	428	19030	6	VBa	石名	128.2	82.6	66.9	797.6
426	4442	—	Ob	石名	30.7	21.3	9.4	4.6	429	18559	6	An(Pv)	石名	115.1	86.8	58.8	1010.8
427	39327	—	Ob	石名	25.9	15.8	6.8	2.1	430	37579	—	An(Pv)	石名	104.0	60.1	44.1	350.1
428	24964	10	HPT	石名	21.4	21.9	11.2	0.3	431	27037	—	VAn	石名	128.1	128.1	69.1	1030.0
429	5485	8	HPT	石名	28.4	28.4	4.7	1.4	432	12357	5	VAn	石名	146.0	96.6	62.2	666.2
430	12137	3	Hor	石名	40.0	40.3	6.2	1.1	433	16673	6	VAn	石名	129.1	89.5	63.6	1076.8
431	12724	6	SSh	石名	31.8	18.4	5.7	3.4	434	32802	—	VAn	石名	103.7	85.0	55.1	626.4
432	3622	9	Ob	SWHD	25.5	22.7	16.3	0.5	435	12171	7	An(Pv)	石名	142	124	54	1070
433	17734	1	Ob	石名	21.0												

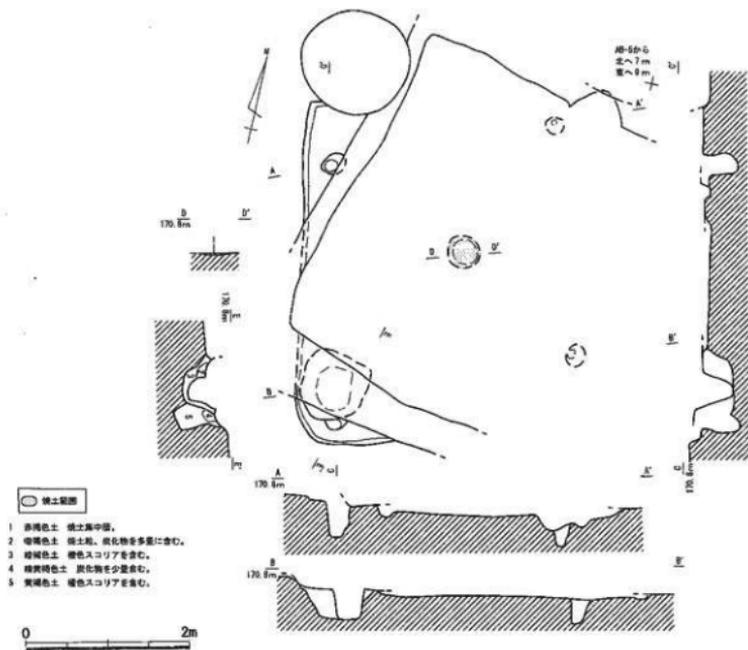
第IV章 弥生・古墳時代の遺構と遺物

第1節 遺構

新期スコリア降灰後形成された黒色土層中より弥生・古墳時代に比定される遺物が出土している。しかし、これらと確実に同じ時期と認められる遺構は見つかっていない。形態の特徴より弥生・古墳時代の遺構と判断されるものは、住居跡1基のみである。



第116図 弥生・古墳時代の遺構配置と地形



第117図 12号住居跡

12号住居跡

AB5グリッドに位置する。平安時代に比定される13号・14号住居跡と大きく重複し、これらに切られる。復原される竪穴住居の平面形は方形を呈し、東西幅3.8m、南北幅4.0mである。住居跡中央部に地床炉の痕跡と思いき焼土集中層が発達していた。竪穴内部の四隅には、1本ずつ主柱穴が配置される。壁溝は検出されなかった。

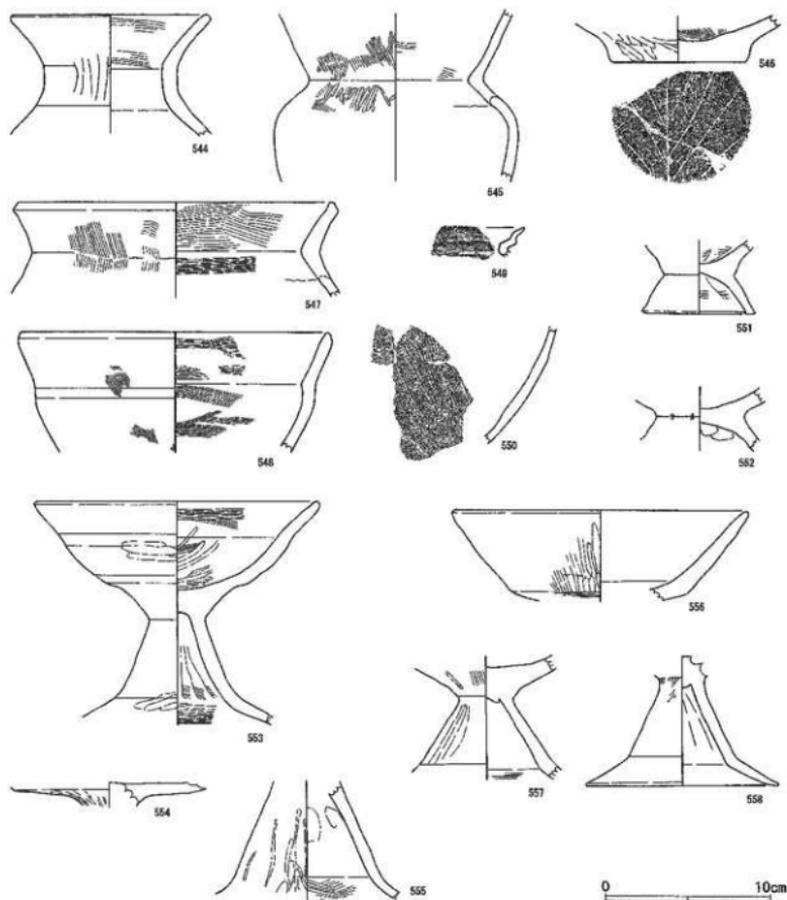
遺構の年代を決定づける遺物の出土は無かったが、新期スコリア層堆積以降の構築である点と、竈を持たず、地床炉が設けられていた形態が遺跡調査範囲内検出の律令期住居跡と異なっている点より、弥生時代～古墳時代に帰属すると想定される。

第2節 弥生・古墳時代の包含層の遺物

1 土器

包含層からは、1部位のみの小片の場合が多いものの、古墳時代のほぼ全般を通じて土師器が出土している。須恵器は確認されていない。

古墳時代前期～中期前半に比定される土器は少量であるが、壺・甕類が確認されている。544は短頸壺の口縁から頸部である。頸部外面は縦位のミガキ、内面は横位のハケ調整の後、横・斜位のナデが施

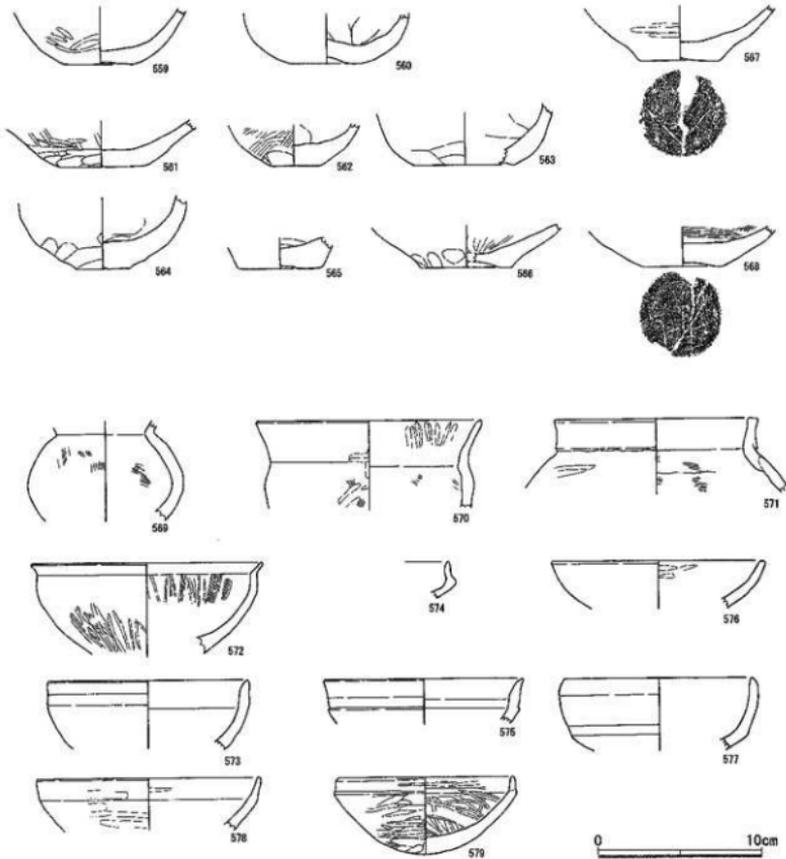


第118図 弥生・古墳時代の包含層遺物（1）

される。545は甔形壺の口縁下位から胴部上位である。外面は縦位のミガキ調整が施され、口縁下位内面は横位のミガキ、胴上位内面は横位のナデ調整がなされ輪痕が残る。546は壺の胴下位から底部である。胴下位外面はミガキが施され、底部外面には木葉痕が残る。底部内面はハケ調整がされる。

547は甔の口縁～胴中位である。外面は頸部に縦位のハケ調整を施し、口縁内面は横位のハケ、胴上位内面は横位のナデがなされる。548は小形の鉢である。549は、器壁を薄く作る台付甕、いわゆるS字甕の口縁部。550は同じく胴部である。551、552は、台付甕の底～高台部である。

梅ノ木沢遺跡の古墳時代に比定される出土土器の主体を占めるものは、多量の白色粒子を含んだ黄灰色を呈する胎土の土器群（556～558、567、568）とこれに年代的に併行または、若干前後していたとみ



第119図 弥生・古墳時代の包含層遺物（2）

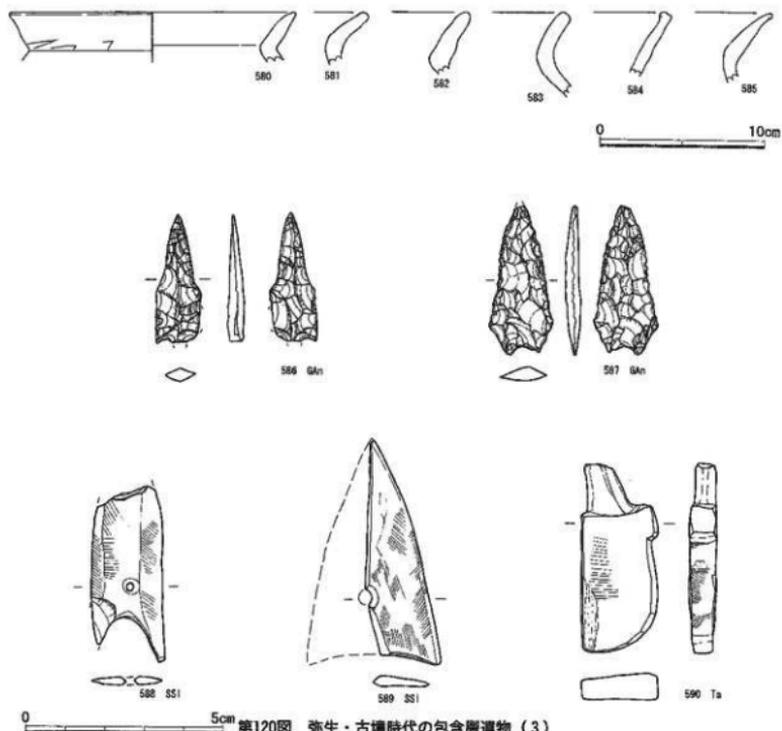
られる径1mm以下の石英・白色粒子などを含む赤褐色を呈する胎土の土器群で、ともに器種は、高坏、丸底または、上げ底の小型壺類で構成される。前者は、沼津市豆生田遺跡出土土器の古墳時代中期後半の類例（71号住居竈芯材転用土器で焼成が劣悪なもの）に比定される。

553～557は高坏である。坏底部は、比較的平坦で、脚下部が明確な屈折により開く。

559～568は丸底の小型壺である。560は底部中央を凹ませ、上げ底状にし、565、566は底縁に一定幅を確保し高台形に成形する。562～564は胴部最下位～底部を横位のヘラケズリにより成形する。

古墳時代後期に比定される土師器には、坏が確認される（572～579）。574、575は須恵器模倣坏であり、張り出し状になる胴部上中位から口縁が外反気味に開く。

当該地域の6～8世紀に比定される集落遺跡で出土例の多い鞍車型壺と同様の形状、器面調整法の壺



第120図 弥生・古墳時代の包含層遺物(3)

の口縁部(内外共に横位のナデ)が出土している(580~585)が、駿東型甕の胴部位の特徴である、球胴器形で外器面をハケ調整のちミガキを施した破片の数は、口縁片数に比べ少量である。

2 石器・石製品

586、587は弥生時代に比定されるガラス質黒色安山岩製の打製石鏃である。いずれも縄文時代に比定される石鏃よりも大型である。586の基部は、欠損しているが有茎である。

588、589は共に弥生時代後期に比定される珪質粘板岩製の有孔磨製石鏃である。表裏面共に丁寧に研磨され、中心軸の基部寄りの箇所には円形の穿孔がある。

590は古墳時代に比定される滑石を素材とした刀子形石製模造品である。古墳副葬品としての類例が多い祭祀遺物であるが、南北両側から比高差約40mの尾根筋によって挟まれ、平野部を望むことが出来ない本遺跡調査区は、古墳を設営する環境として不良であり、古墳そのものは確認されていない。確実な共存資料でないが、先述の古墳時代中期後半に比定される土器群は、高環や小型壺などが数量的に優位であり、中・大型の貯蔵・調理具に相当する土器が殆ど認められず、器種構成から単純な集落内の生活残滓としての印象は希薄である。590の存在と合わせ当地への祭祀関連用具としての持ち込みが疑われる。

表15 弥生・古墳時代出土土遺物観察表(1)

図録番号	産地	器種	保存部分	器形制		図説	出土金物	備考
				外周	内面			
544	土師器	無蓋鉢	内縁一帯	短縮 縮径ミガキ	口縁一帯に口 縮径ハケのもの縮径ナシ	後藤口内 (33) mm	多数の白色粘土	
545	土師器	短冊	短冊中位	短冊下位 縮径ミガキのものと縮径ミガキのものと 縮径ハケのもの縮径ミガキのもの 縮径ミガキのものと縮径ミガキのもの	口縁一帯に口 縮径ハケのもの縮径ナシ	後藤口内 (33) mm	多数の白色粘土	
546	土師器	蓋	内下位一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
547	土師器	皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (37) mm	多数の白色粘土	
548	土師器	鉢	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (39) mm	多数の白色粘土	
549	土師器	六付鉢	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (39) mm	多数の白色粘土	1つは少くも土師器
550	土師器	白付鉢	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (39) mm	多数の白色粘土	1つは少くも土師器
551	土師器	白付鉢	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (39) mm	多数の白色粘土	
552	土師器	白付鉢	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (39) mm	多数の白色粘土	
553	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
554	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
555	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
556	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
557	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
558	土師器	高杯	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (72) mm	白色粘土	
559	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
560	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
561	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
562	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
563	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
564	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
565	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
566	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
567	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
568	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
569	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
570	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
571	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
572	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
573	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
574	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
575	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
576	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
577	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
578	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
579	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
580	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
581	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
582	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
583	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
584	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
585	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
586	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
587	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
588	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
589	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	
590	土師器	小皿	口縁一帯	短縮 縮径ミガキ	縮径ハケ	後藤口内 (33) mm	少量の白色粘土	

表16 弥生・古墳時代出土土遺物観察表(2)

図録番号	産地	器種	石材	器形制				備考
				最大径 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	
596	12961	打製石鏃	C/An	(32.8)	(12.5)	(4.3)	(1.52)	有蓋
587	24056	打製石鏃	C/An	(38.0)	(16.3)	(3.9)	(1.98)	有蓋
588	3832	磨製石鏃	SSI	(44.5)	(18.0)	(2.0)	(2.37)	内側の少許孔あり 逆刺発達
589	3826	磨製石鏃	SSI	(54.5)	(16.0)	(2.5)	(2.61)	内側の少許孔あり 逆刺発達
390	8340	ノ字形石鏃根絶品	Te	47.5	20.0	6.7	10.85	

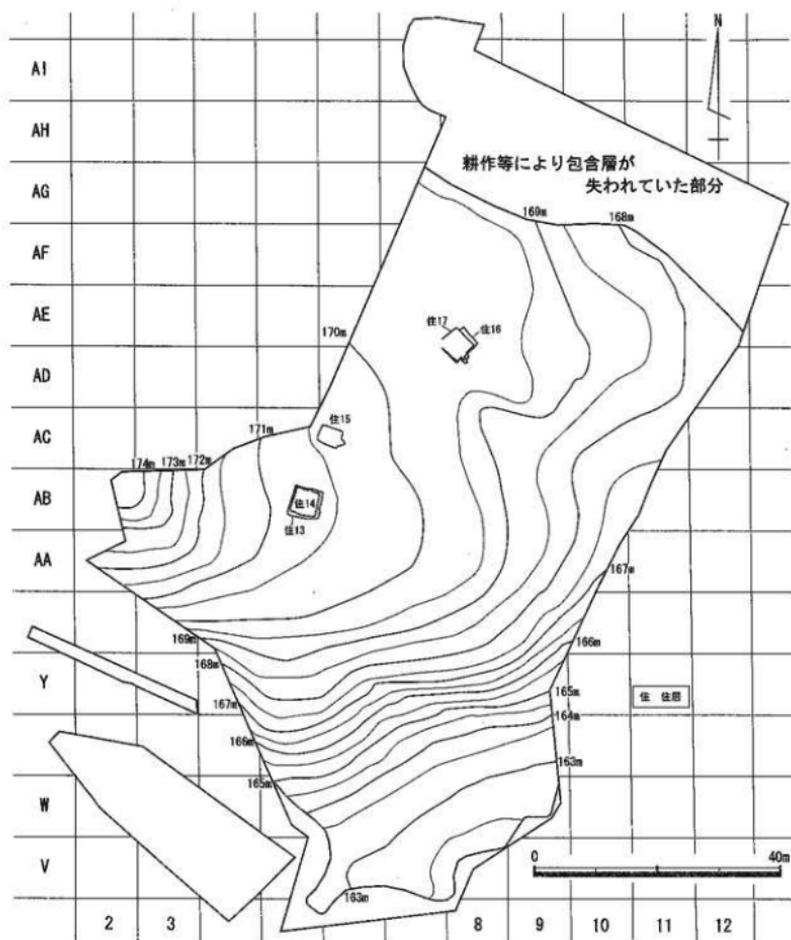
表17 弥生・古墳時代住居跡計測表

住居番号	E-W (m)	S-N (m)
12号	3.8	4

第V章 奈良・平安時代の遺構と遺物

第1節 遺構とそれに伴う遺物

平安時代に比定される住居跡が建替えの前後分を含めて13号～17号の合計5基確認されている。いずれも尾根上の検出であり、調査区中央に入り込んでいる埋没谷々頭の西側を取り囲むように並んでいる。



第121図 奈良・平安時代の遺構配置と地形

1 13号住居跡

AB5グリッドに位置する。14号住居跡を拡張し、主軸方向を変更した住居跡とみられ、12号住居跡と重複し、これを切る。平面形は方形を呈し、東西幅5.0m、南北幅4.5mである。東壁の南寄りに竈が設置され、主軸方向は、N-94°-Eである。覆土中に多量の炭化物が混じる。

主柱穴に相当する小土坑は、西壁側、14号住居跡の北西隅に設定されたものがそのまま継続使用されたとみられる。周壁溝は、東壁中・北部から北壁、西壁北・中部で断続的に検出されたが、反対側では、南壁中部でわずかに検出したのみである。住居跡の北側で密、南側で疎である壁溝検出傾向は、前段階の後述する14号住居跡とも一致しており、共通する立地環境下において、建築者が建物施設としての壁溝の機能を同じように求め、踏襲したことを物語っている。

竈は、焼土と下位の掘込み、構築材の一部とみられる礫が残るのみである。

遺構の年代観は、出土遺物より10世紀前半以降にあてられる。

<出土遺物>

591～593は、13号住居跡南東隅の主柱穴に平面的に重複し、これを切る落込みの覆土より検出された遺物である。591、592は、灰釉陶器の碗の体下位から高台部で、591の高台の断面形は、三日月形を呈す。592の底部外面には、糸切痕が残り、共に折戸53窯式併行段階に比定される。

593は8世紀後半に比定される土師器の坏の底部で、内面には、放射状の暗文が描かれ、外面は、横位のヘラナデがなされる。

594は13号住居跡の竈内より検出された土師器の皿である。底部外面に糸切痕を残す。

595は住居跡覆土層中より出土した土師器の甕の口縁部である。内外面共に横位のナデ調整が施される。これらの出土遺物の内、593、595はその年代観から混入物と認識される。

2 14号住居跡

AB5グリッドに位置する。12号住居跡と重複し、これを切る。13号住居跡の拡張前の住居跡とみられ、平面形は方形を呈し東西幅4.0m、南北幅4.2mである。東壁の中央部に竈が設置される。主軸方向は、N-16°-Eである。

主柱穴に相当する小土坑は、北東・北西・南西隅に1基ずつ検出されている。周壁溝は、北西隅部、東壁中部、南壁東部の一部で検出される。竈は、下位の掘込みと構築材の一部とみられる礫が残るのみである。

明確に遺構に伴う遺物が出土していないが、拡張前段階として、13号住居跡に準じた年代観が与えられる。

3 15号住居跡

AC6グリッドに位置する。平面形は方形を呈し東西幅3.6m、南北幅3.0mである。東壁のやや南寄りに竈が設置される。主軸方向は、N-110°-E。壁溝は、ほぼ一周し、場所により0.6～0.7m間隔で小穴が開けられている。

住居跡内部の四隅には、1本ずつ主柱穴が配置される。床面と同一視される堅穴掘方底面直上に焼土の広がり、多量の炭化材が検出されており、焼失建物であったことが分かる。

竈は黄褐色スコリアを含む褐色土により構築されているが、その天井部、煙道部は失われている。残存する袖石と焼土より、燃焼室内の幅はおよそ0.3mであることが分かる。

遺構の年代観は、出土遺物より9世紀後半以降に比定される。

<出土遺物>

596は15号住居跡の竈内より検出された。口縁が外反し、胴部が膨らむ小型甕の口縁から胴下位である。口縁の幅は狭く、頸部の括れは発達していない。器面調整は、横位の指ナデが基本であるが、胴上内面は、横位の板ナデが施されている。年代は、9世紀後半以降に比定される。

4 16号住居跡

AD・AE6グリッドに位置する。17号住居跡と重複し、これに切られる。平面形は、長方形を呈し、東西幅4.8m、南北幅3.6mである。壁溝は検出されなかった。東壁の南寄りに竈が設置され、主軸方向は、N-140°-Eである。主柱穴に相当する小土坑は、四隅に1基ずつ配される。住居跡北隅部に平面形0.6×0.5mの長方形を呈し、深さ0.3mの貯蔵穴と思しき土坑が確認される。

竈は完全に壊されていたが、煙道部を含めたその掘方は、住居壁より約1.1m突出し、土層断面では支脚、袖石、煙道補強材の抜き取りの痕跡が確認されている。

遺構の年代を特定する遺物の出土は、無かった。17号住居跡と住居主軸方向、掘方面積はほぼ同じであるが、土層断面観察より17号住居跡は16号住居跡埋没後の建設であり、連続性は認められない。

5 17号住居跡

AD・AE6グリッドに位置する。16号住居跡と重複し、これを切る。平面形は方形を呈し東西幅4.3m、南北幅3.9mであり、壁溝は確認されなかった。東壁の中央に竈が設置され、主軸方向はN-137°-Eである。住居跡内部の四隅には、1本ずつ主柱穴が配置される。竈は完全に壊されていたが、焼土のほか、土層断面では袖石の抜き取りの痕跡が確認されている。

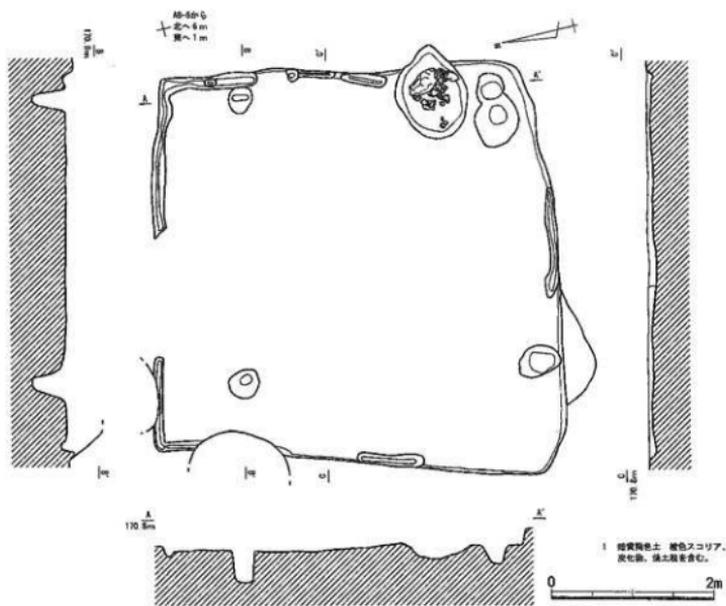
遺構の年代を特定する遺物の出土は無かった。調査区内で同じ東竈の住居跡（13号、15号）が並ぶことから、これらに近い年代が想定される。

表18 奈良・平安時代遺構出土遺物観察表

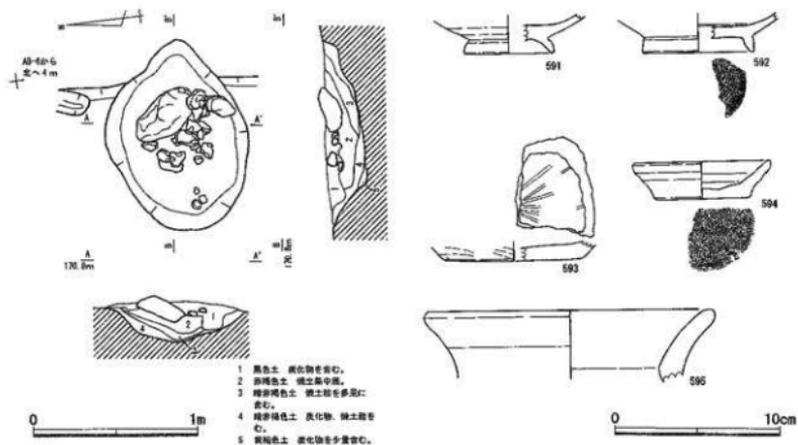
調査 番号	種類	状態	発見部位	器形特徴		尺長	出土層位	備考
				外周	内面			
501	瓦熱陶器	破	坪下位～ 基台	横紋ナデ	横紋ナデ	葺加高台縁 (54) mm		13号住居跡埋没内出土 子目出露 埋没部出土
502	瓦熱陶器	破	坪下位～ 基台	横紋ナデ	横紋ナデ	葺加高台縁 (50) mm		13号住居跡埋没内出土 埋没部出土
503	土器類	破	坪下位～ 基台	横紋ヘナナデ	放射線状文	葺加高台 (50) mm	白色灰子、 白色の土層	13号住居跡埋没内出土 埋没部出土
504	土器類	破	口縁～ 胴上	口縁ヘナナデ 横紋ナデ	横紋ナデ	葺加高台 (56) mm	少量の小粒	13号住居跡埋没内出土
505	土器類	破	口縁部	横紋ナデ	横紋ナデ	葺加高台 (177) mm	白色、黄色灰子	13号住居跡埋没内出土 埋没部出土
506	土器類	破	口縁～ 胴下位	ナデ	口縁、胴中上位 横紋ナデ	葺加高台 (240) mm	白色灰子、 ごく少量の土層	13号住居跡埋没内出土

表19 奈良・平安時代住居跡計測表

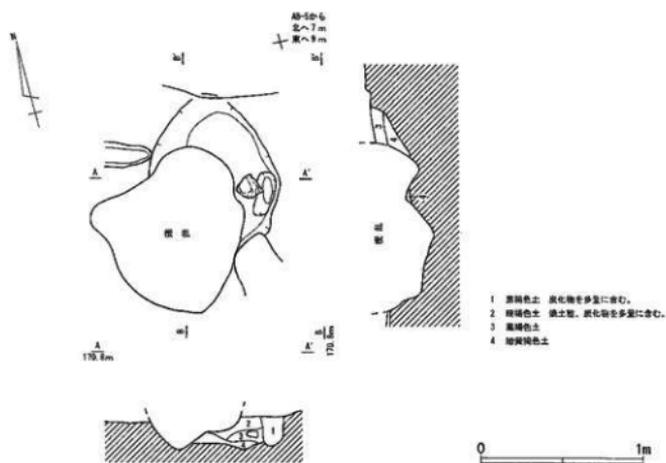
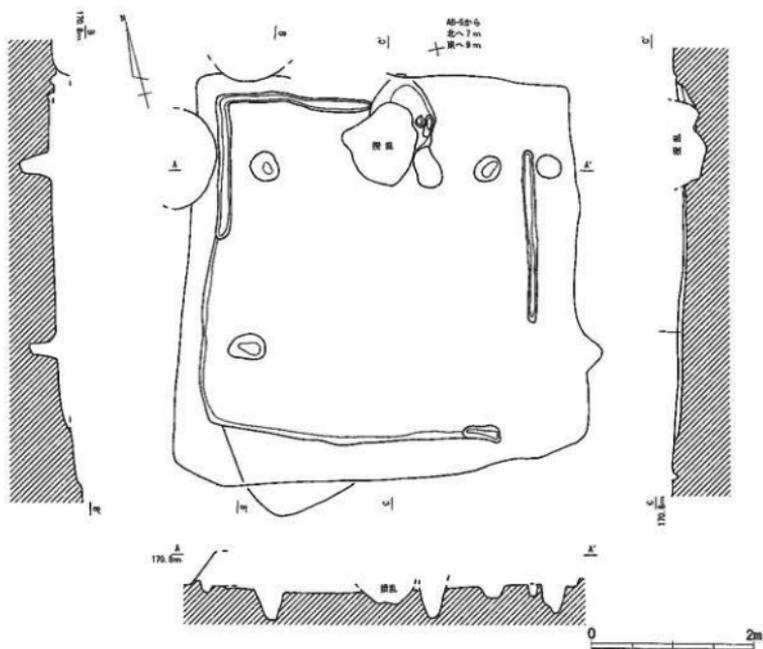
住居番号	E→W (m)	S→N (m)	住居番号	E→W (m)	S→N (m)
13号	5	4.5	16号	4.8	3.6
14号	4	4.2	17号	4.3	3.9
15号	3.6	3			



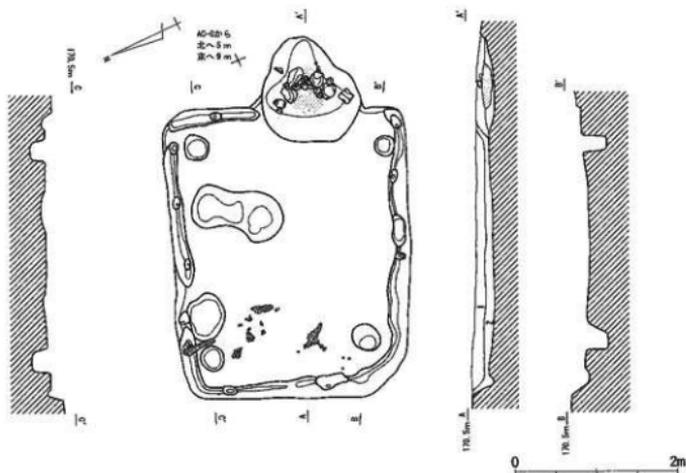
第122図 13号住居跡



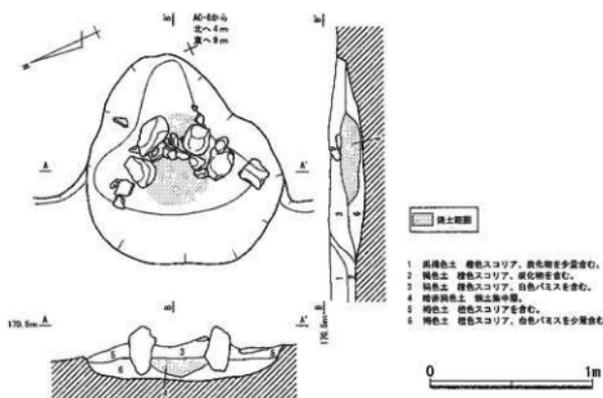
第123図 13号住居跡竈と出土土器



第124图 14号住居跡之断面測图



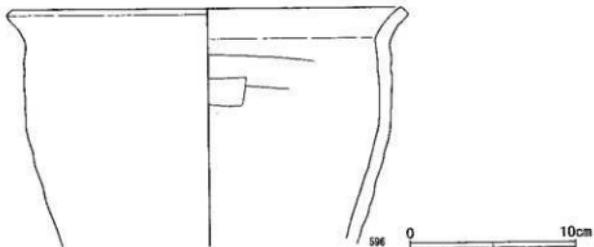
<15号住居跡>



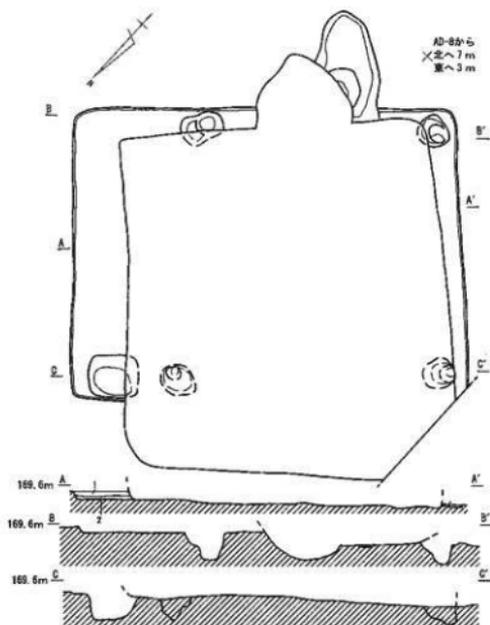
遺土断面

- 1 黒褐色土 褐色スコリア、炭化物を少量含む。
- 2 褐色土 褐色スコリア、炭化物を含む。
- 3 褐色土 褐色スコリア、白色パースを含む。
- 4 暗赤褐色土 粘土層中層。
- 5 褐色土 褐色スコリアを含む。
- 6 褐色土 褐色スコリア、白色パースを少量含む。

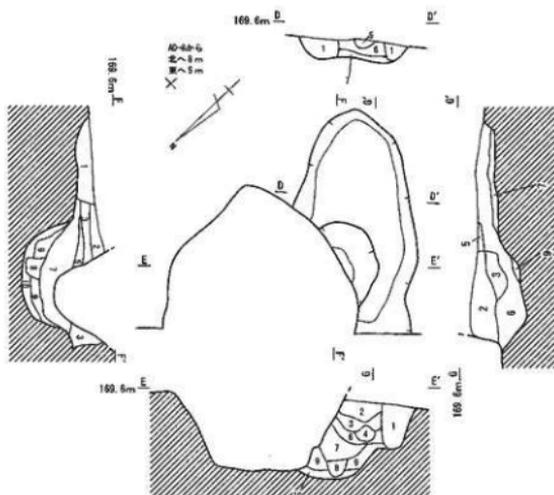
<竈内出土土器>



第125図 15号住居跡と出土遺物



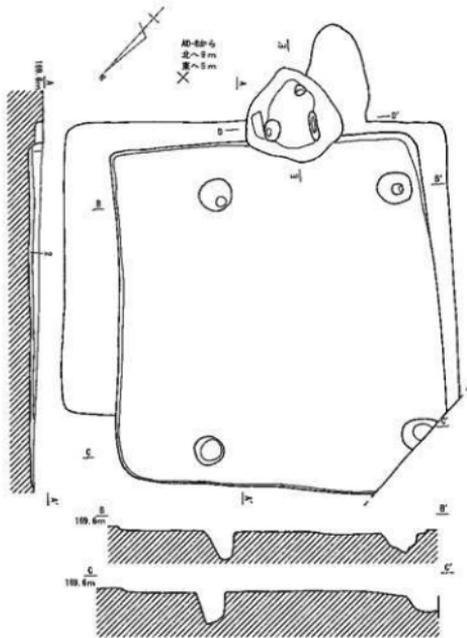
- 1 に近い黄褐色土 磁石主体、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 褐色土層を含む。



- 1 に近い黄褐色土 褐色スクリアを多量、磁土層、炭化物を少量含む。
- 2 に近い黄褐色土 磁石主体、炭化物を含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色土層、炭化物を含む。
- 4 暗赤褐色土 磁土層、炭化物を多量に含む。
- 5 黒褐色土 褐色スクリア、白色シリスを含む。
- 6 に近い黄褐色土 褐色スクリア、磁土層、炭化物を含む。
- 7 黒褐色土 磁土層、炭化物を含む。
- 8 黒褐色土 磁土層、炭化物を含む。
- 9 黒褐色土 黄褐色土層、炭化物を含む。
- 10 壁跡により覆われた地盤。



第126図 16号住居跡と竈実測図



- 1 黒褐色土 褐色スクリア、白色パリスを含む。
- 2 に近い黄褐色土 黒褐色土層、黄褐色土層を含む。
- 3 暗褐色土 砂土層、灰土層、炭化物を多量に含む。
- 4 赤褐色土 灰土層中層、炭化物を多量に含む。
- 5 黒褐色土 灰土層を少量、炭化物を少量、褐色スクリアを含む。
- 6 に近い黄褐色土 灰土層を多量に含む。
- 7 褐色土 灰土層を多量、炭化物を含む。
- 8 黒褐色土 炭化物を多量、灰土層を含む。
- 9 に近い赤褐色土 灰土層中層、炭化物を多量に含む。
- 10 黒褐色土 灰土層、炭化物を多量に含む。
- 11 暗褐色土 褐色スクリアを多量に含む。
- 12 暗褐色土 灰土層を多量に含む。
- 13 赤褐色土 灰土層中層。
- 14 黒色土 炭化物を多量に含む。

第127図 17号住居跡

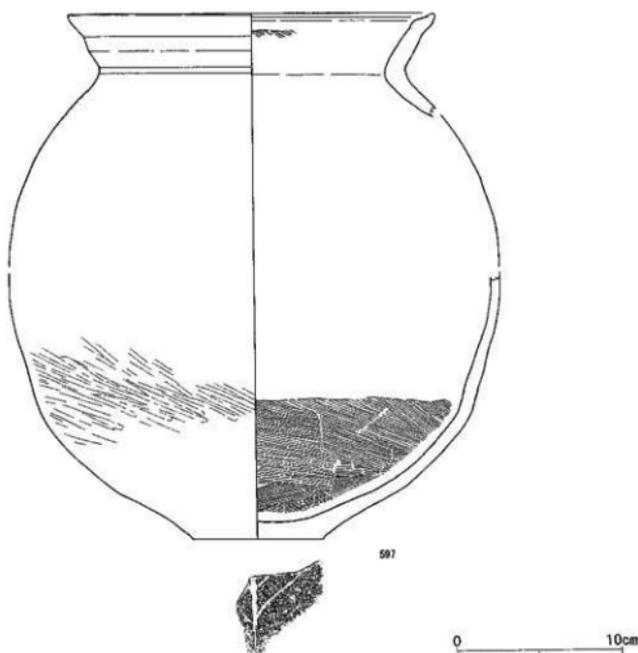


第2節 奈良時代の包含層の遺物

古墳時代の包含層遺物と同様、当該年代に比定される出土土器の殆どは細片であり、図示出来るものは極めて限定されている。

597は梅ノ木沢川支流の沢の北岸部で単独検出された資料で、いわゆる駿東型甕の口縁から底部である。

口唇部内側で浅い窪みが一周し、受け口状の形態を作る。器の最大径は、胴上中位に設定されている。器表面の調整は、口縁の内外面はともに横位のナデ調整がされ、胴部外面はハケ調整の後、横・斜位のミガキが密に施され、内面は横位のハケ調整がなされる。底部外面には木葉痕が残る。器外面で発達したミガキ調整の特徴から8世紀前半に比定される。



第126図 奈良時代の遺物

表20 奈良時代包含層出土遺物観察表

図録番号	種類	部位	残存部位	表面調整		法差	胎土含有物	備考
				外面	内面			
597	土師器	甕	口縁～ 胴部	口縁部 横位ナデ 胴部 斜位ハケの横位ミガキ 底部 木葉痕	口縁～胴上位 横位ナデ 胴下位～底部 横位ハケ	復原高さ (320) mm 復原口径 (225) mm 復原最大胴部径 (298) mm 復原底径 (80) mm	白色粒子	いわゆる駿東型甕

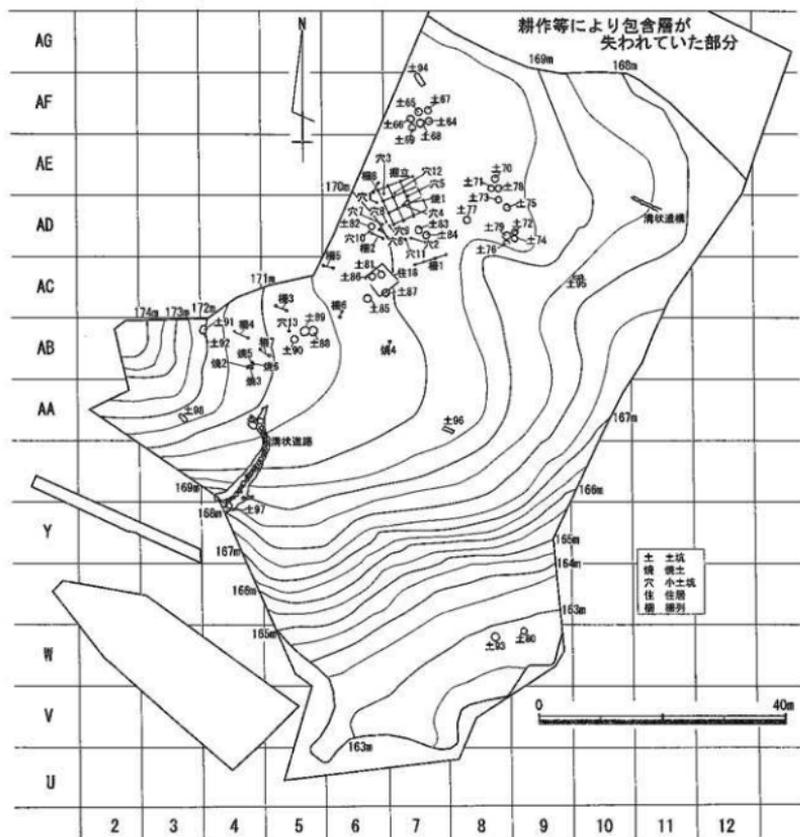
第VI章 中近世その他の時代の遺構と遺物

第1節 遺構とそれに伴う遺物

1 近代以前の遺構

(1) 溝状道路遺構跡

本遺構は、Z4グリッドからAA4・5グリッド南部、丘陵西側の斜面部に位置し、崖線に対し直交する形で南西側へ弓なりに延びる、残存長18.6m、最大幅3.3mの規模を持つ溝状遺構である。尾根上で2方向に分岐するが、その埋没は尾根稜線へと向う西側が先行している。



第129図 中近世その他の時代の遺構配置

底面の幅は、およそ0.4mと一定であり、これとほぼ同じ径の小ピットが数珠状に連続し、横断面形は、T字形を呈す。検出面からピット底面までの深さは、0.3～1.2mである。底面の勾配は、中段部でおおよそ12～13°であり、下位堆積土には所々強く締った箇所が確認される。

踏み固めの結果とみられる硬化部の存在より、この溝は、尾根上と沢を結ぶ通路として機能していたと考えられる。底面の小ピットの連続は、地山を階段状や単純な傾斜に崩削した場合よりも通行者の足が滑らない安定した昇降が出来るように工夫されたものであろう。

覆土から出土した遺物の年代より、完全な埋没時期は近代以降に比定されるが、硬化部の発達の状態から、比較的長期にわたって使用されていたと考えられ、工事及び使用開始年代は近代以前に遡るものとみられる。

<出土遺物>

598は、瀬戸系磁器の染付碗である。絵付の手法は覆紙摺絵の印判手で、内面の口縁には環珞を巡らせ、見込みには1条の圓縁が廻り、中央に松竹(梅)の文様が入られる。体部上中位外面は、鹿子模様を地文として推定12単位分、四菱形の白抜き窓を配し、各々松、桐(竹?)、梅の文様が入る。体部下位外面は縦位の連続する竊状文である。年代は19世紀後半以降に比定される。

599は、近世銭貨の寛永通寶である。銅を素材としており、銭銘は細手で、いわゆる新寛永銭(初鋳1697年)である。

2 時期不明の遺構

遺物の出土が無かったり、小片のため年代を設定する根拠が乏しく、時期不明とした遺構は以下の通りである。遺構覆土は、いずれも新期スコリアより上層の黒色土であり、弥生時代以前に遡らない。

(1) 掘立柱建物跡

AD・AE 7グリッドに位置する。南東側を土地の擾乱により失っているが、3×3間の総柱建物と推定される。柱穴間の距離は、東西方向で1.4～1.9m、南北方向で1.4～1.8m前後を測る。

建物の東西軸と後述する南東側に位置する1号柵列の方向が平行であり、同時存在していた可能性がある。帰属年代は不明である。

(2) 柵列

柵列と推定される、同規模の小土坑の連続した並びが合計8箇所検出されている。

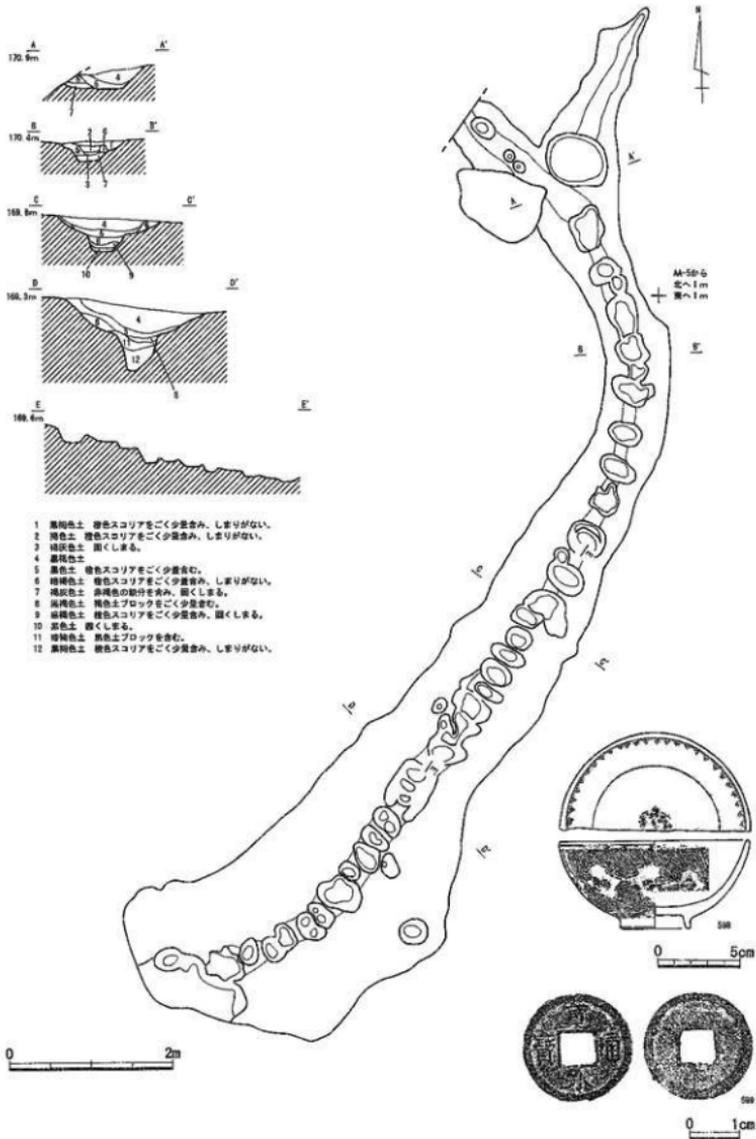
1号柵列はAD 7グリッド東部に位置する。1.3～1.6m間隔で直線的に配置された4基の小土坑からなる。主軸方向はN-73°-Eで、位置的に埋没谷を縦断する通路の遮断を担っていたと想定される。

2号・3号・4号柵列は、AD 6グリッド東部・AC 5グリッド南部、AB 4グリッド北東部で検出された1.5～2.1m間隔で配置された2基の小土坑の並びで、主軸方向はいずれもN-64°-Wである。

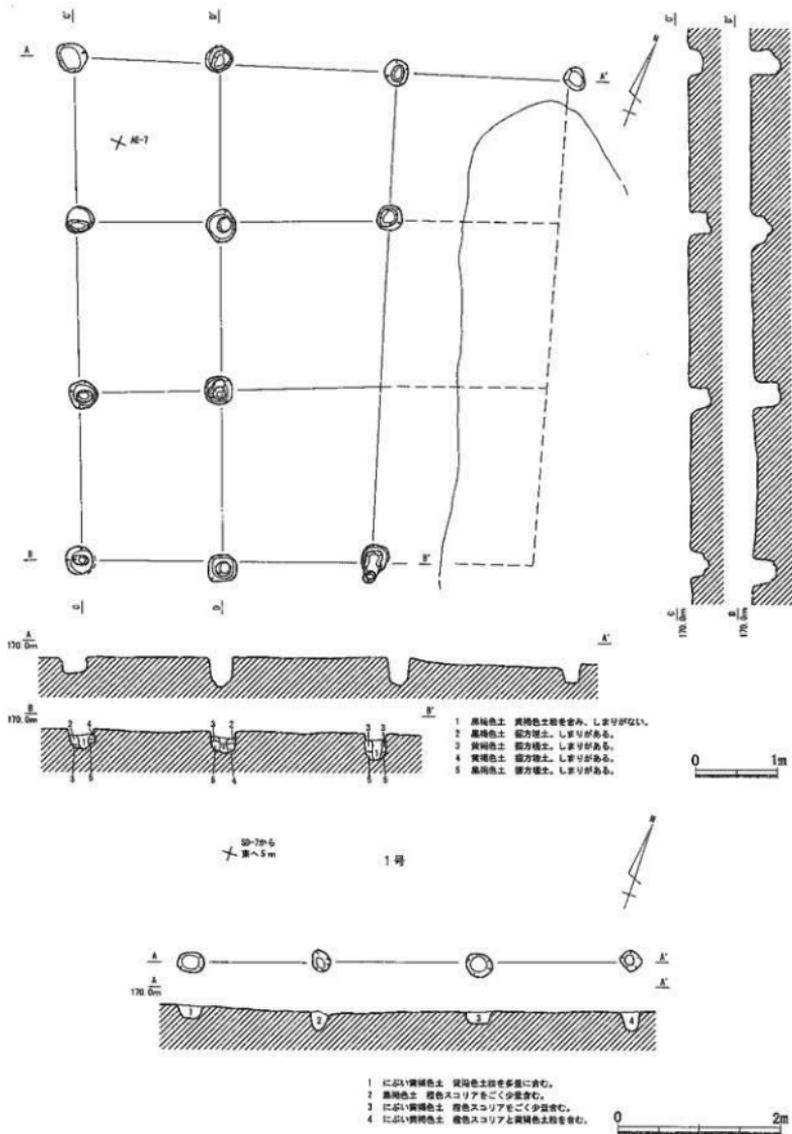
5号柵列はAC 6グリッド北西部に位置し、1.2m間隔で配置された2基の小土坑の並びで、主軸方向はN-75°-W。これより約7.2m南南東側、AB 6グリッド北西部に位置する6号柵列は、0.6m間隔の2基の小土坑の並びであり、5号柵列とはほぼ直交するN-20°-Eに主軸方向がある。

7号柵列はAB 5グリッド東部に位置する1.4m間隔で配置された2基の小土坑の並びで、2号・3号・4号柵列の方向と若干異なるN-59°-Wの主軸方向を持つ。

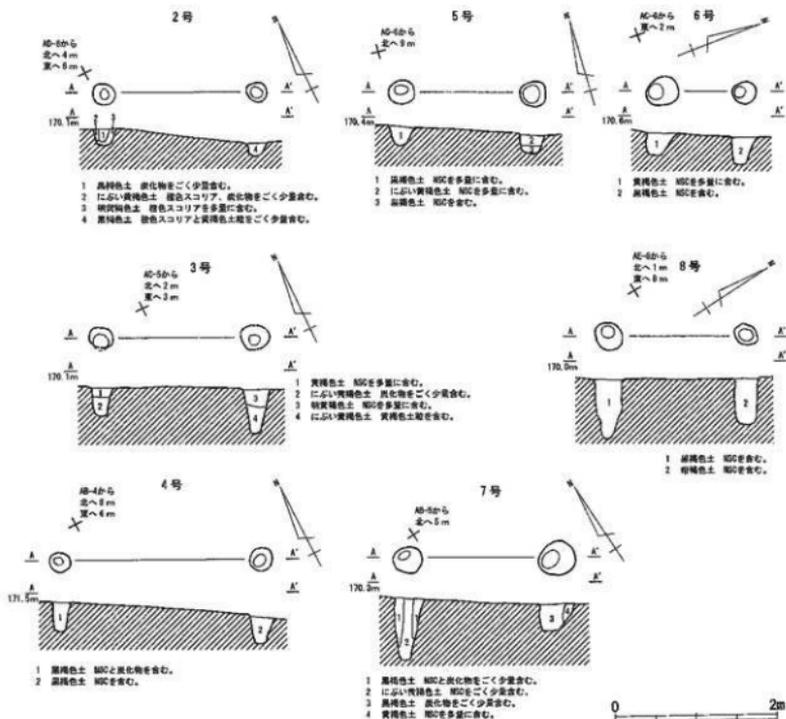
8号柵列はAE 6グリッド南東部に位置する1.3m間隔で配置された2基の小土坑の並びで、N-33°-Eの主軸方向を持つ。8号柵列を構成する小土坑は、他の柵列構成小土坑より比較的深く掘削される。



第130図 溝状道路遺構跡と出土遺物



第131図 掘立柱建物跡と柵列



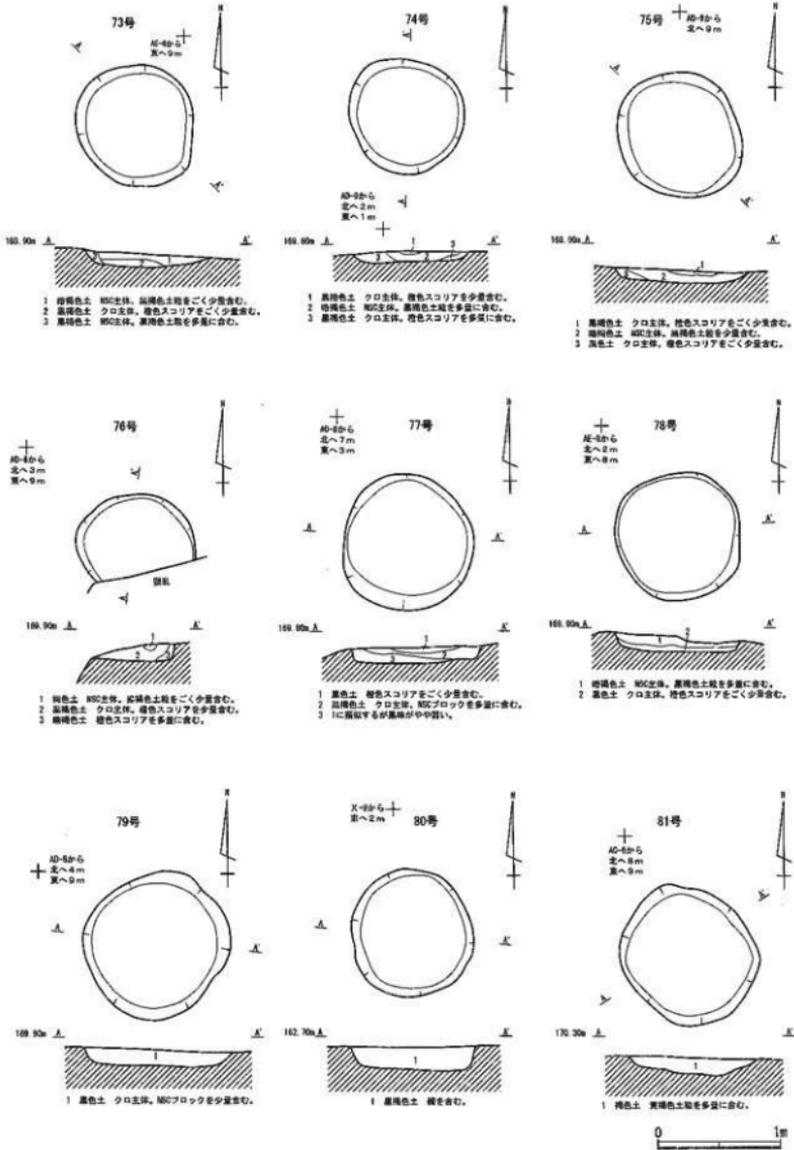
第132図 掘削

(3) 円形土坑

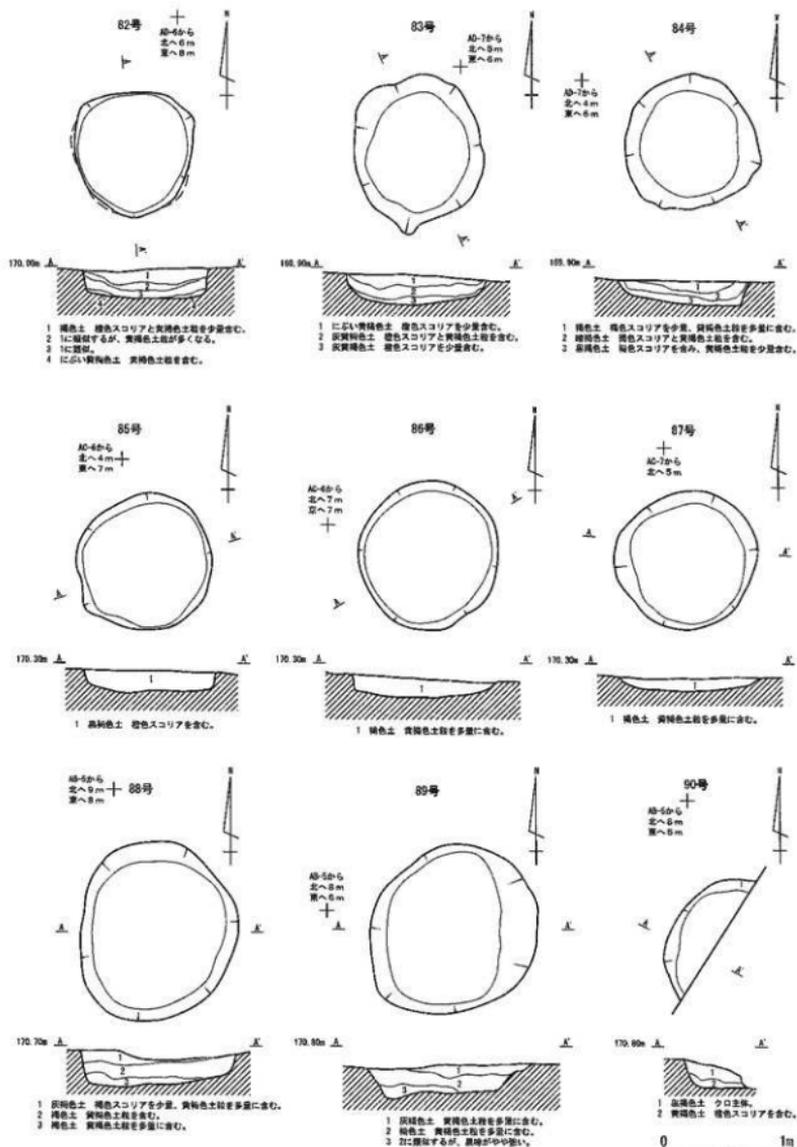
今回の調査区内では、新期スコリア層上面で、直径0.8~1.4m程度の平面形円形または、亜円形の土坑が尾根上を中心に合計30基検出された。88号土坑が13号住居跡と重複し、これを切っていることから、年代的に古代以降に比定されることが確実であるが、いずれの土坑についても明確な年代を示す遺物の出土例が無い。この土坑の性格について、墓塚、畑作に伴う貯蔵穴、水溜め用の桶類を据えた穴、トイレ等の諸説があるが、現地発掘時の所見より、それらを特定出来る内容は確認されなかった。

調査区北部に集中する円形土坑群の中に覆土土層観察より、埋土の侵入方向が推定出来るものがいくつかある。65号・67号土坑は、同じ地勢・立地条件で近接しているにも関わらず、堆積傾斜が反対を向いていた。土坑間に置かれた土を分けるようにして、同時に埋め立てられたことが想定される。

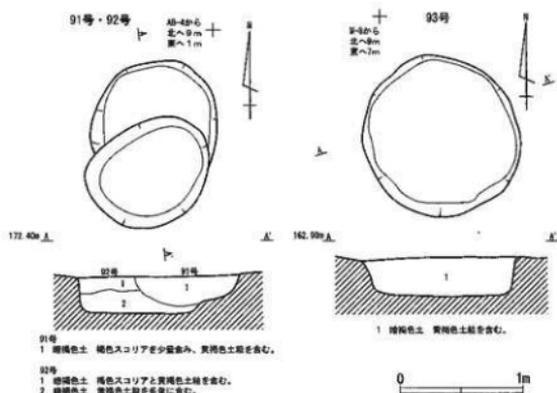
円形土坑の分布については、尾根上でその空白域は、溝状道路遺構跡の東側延長と一致し、この方向軸に直交する形で（通行を止める）柵柵（2号~5号、7号）の配置が見られる。また、調査区中央の谷頭部で谷筋に平行する列状の配置が認識出来ることから、道路と想定される範囲の緑部にこれら土坑が設置されていたと見られる。



第134図 円形土坑(2)



第135図 円形土坑 (3)



第136図 円形土坑 (4)

表21 土坑計測表

土坑番号	最大径 (m)	最大径さ (m)	土坑番号	最大径 (m)	最大径さ (m)
84	1.12	0.23	79	0.20	1.15
85	1.12	0.20	80	1.40	1.24
86	1.15	0.18	81	1.19	1.16
87	1.10	0.12	82	1.00	0.25
88	1.15	0.25	83	1.10	0.25
89	1.15	0.25	84	1.10	0.20
70	1.17	0.10	85	1.18	0.18
71	1.02	0.12	86	1.20	0.19
72	0.95	0.07	87	1.18	0.12
73	1.06	0.14	88	1.50	0.30
74	0.98	0.09	89	1.50	0.30
75	1.10	0.12	90	1.30	0.40
76	0.95	0.15	91	1.04	0.24
77	1.10	0.15	92	(L.40)	0.30
78	1.03	0.14	93	1.33	0.24

表22 中近世その他の時代出土遺物観察表

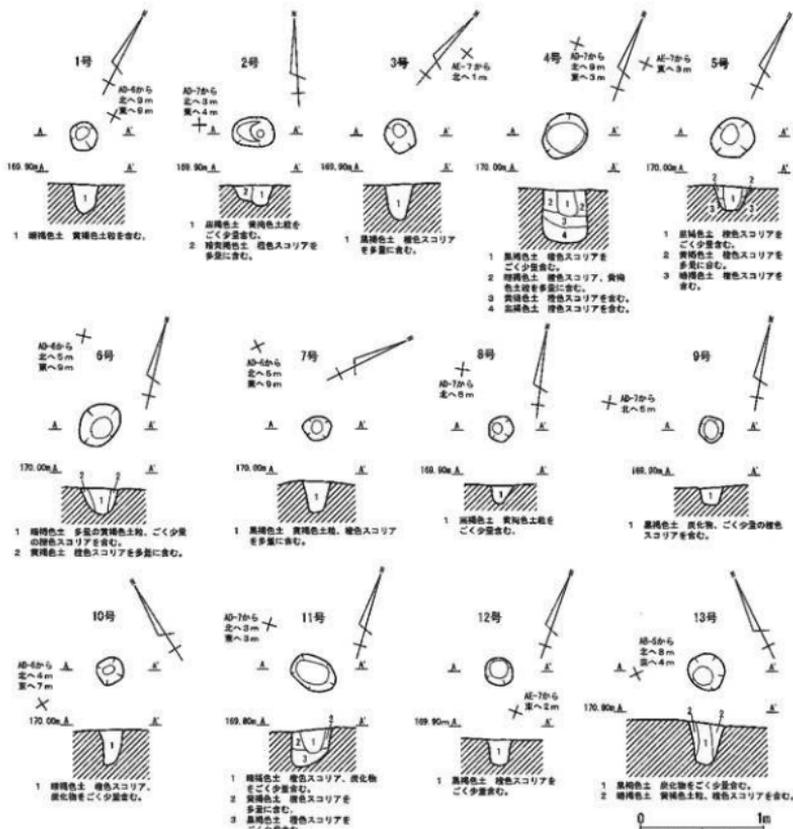
採取 番号	種類	器種	保存部位	断面観察		法量	備考
				外面	内面		
508	土器	甕	口縁～ 肩部	頸部筋線付 透明粘灰面 体上中位 地文 筋子文 推定12単位の内腹面内に 物・刺(竹?)・筋文 体下位 縄状文	口縁 縦筋文 見込み 胴筋1条その内面に 於存(器)文	器高62mm 口幅11mm 高台径43mm	溝状遺跡破断出土 瀬戸内式系磁器

採取 番号	種類	法量	備考
509	鏡貨	直径(厚) 21.9mm(8) 21.3mm 孔径(厚) 6.5mm(8) 6.9mm 重量 1.35g	溝状遺跡破断出土 新瓦永瀬鏡 (初瀬1697年)

採取 番号	種類	器種	保存部位	断面観察		法量	胎土含有物	備考
				外面	内面			
600	土器胎	弁	14部部	縦位ナデ	ミガキ		白色砂子	94号土坑出土
601	弥生土器 または 土器胎	甕	胴部	縦位ハケ	横位ナデ		多量の石英	95号土坑出土
602	土器胎	甕	胴部	斜位ハケ	ナデ 輪痕帯状		白色砂子	96号土坑出土
603	土器胎	甕 または瓶	口縁部	縦帯任痕帯	横位ハケ		白色砂子	96号十坑出土
604	土器胎	甕	口縁部	横位ナデ	横位ナデ		少量の石英	97号土坑出土
605	弥生土器 または 土器胎	甕	胴下位～ 底部	横位ナデ 縦位ハケ	横位ハケ	直径底径 (102) mm	白・赤色砂子	98号土坑出土

(4) 小土坑

調査区中央部の尾根上では、同様の土坑と共に建物柱穴の並びや柵列を構成するのに根拠が十分でない小土坑が13基確認されている。12基がAD・AE 6・7グリッド内で13号・14号住居跡や2号・8号柵列と近接しており、これらの遺構と直接・間接的に関わりを持っていたと考えられる。比較的近隣の土坑同士では平面規模、遺構底面の標高値が近い傾向にある。



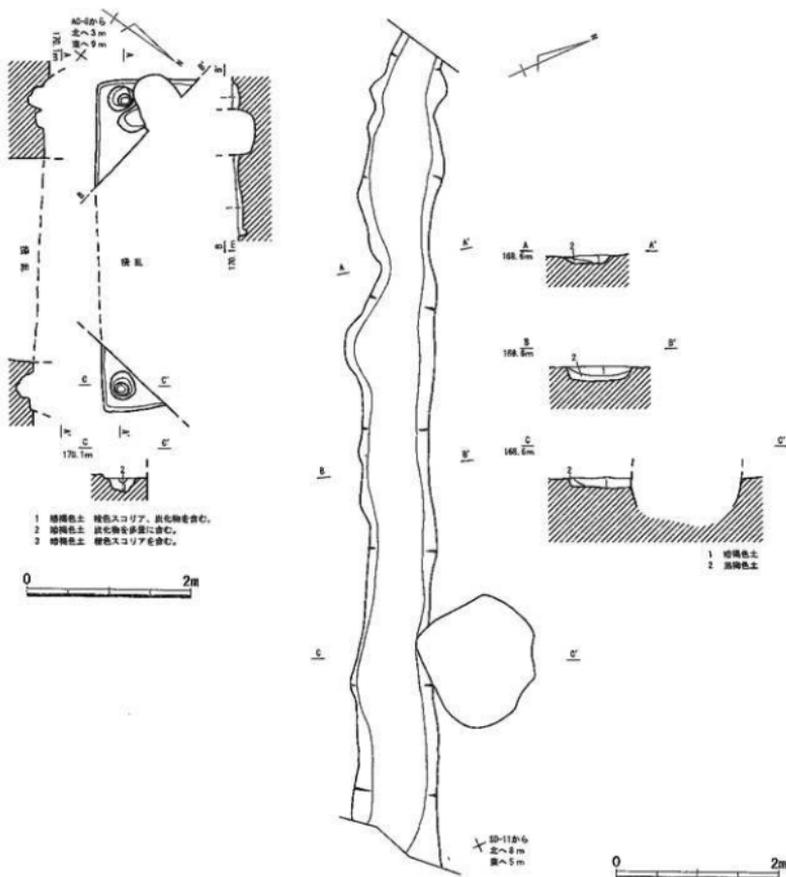
第137図 小土坑

(5) 18号住居跡

AB6・7グリッドに位置する。南西及び南東隅部のみを検出であり、復原される平面形は、方形を呈し、一辺4.0m程度の規模と推測される。各々の残部で主柱穴に相当する小土坑が確認された。古墳時代から古代に比定される住居跡とみられるが、具体的な年代は不明である。

(6) 溝状遺構

AD11グリッド北西部に位置する残存長4.85m、最大幅0.55mの直線的に掘削された溝で、その方向は、およそN-63°-Wである。横断面形は皿形を呈す。帰属年代は不明である。



第138図 18号住居跡・溝状遺構

(7) 焼土集中地点

新期スコリア降灰以降に使用された、焼土塊、粒の集中が確認される落込みで、炉、竈、焼失建物などの遺構認定が出来なかったものが、合計5箇所検出されている。

4号焼土は、AB7グリッド西部に位置する平面楕円形で、1号焼土は、AD7グリッド北西部に位置する平面形不整形の浅い土坑で、ともに中央部に焼土塊と炭化物の集中がみられる。

2号焼土は、AB4グリッド東部に位置する平面楕円形の落込みで、覆土は、地山(新期スコリア)のブロックと焼土粒により構成される。

3号、5・6号焼土は、AB4グリッド南東部に位置する。覆土が地山(新期スコリア)のブロックと焼土粒により構成される小ピットが2基隣接するようにして検出されている。

(8) 平面長方形の土坑

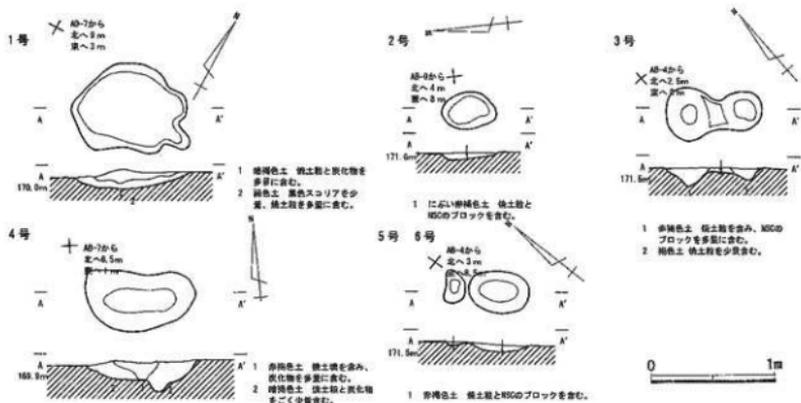
平面長方形の土坑が合計5基、屋根上の平坦部から谷への落ち際に検出されている。土坑掘方の壁が極めて直線的に立ち上がることから、掘削道具は刃部を広く平坦に作った鉄製品が使用されたと思われる。底面の一部が凹む場合もあるが、縄文時代の陥穴土坑底面の逆茂木のような明確な掘込み、打込み痕は残されていない。いずれの土坑も覆土中より弥生時代後期以降の土器片の検出を見ているが、小片である。

94号土坑はAF7グリッド北部に位置する。長軸2.1m、短軸0.7m、検出面からの深さ0.9mで、主軸方向は、N-32°-Wである。北西側にテラス状の段差が設けられている。

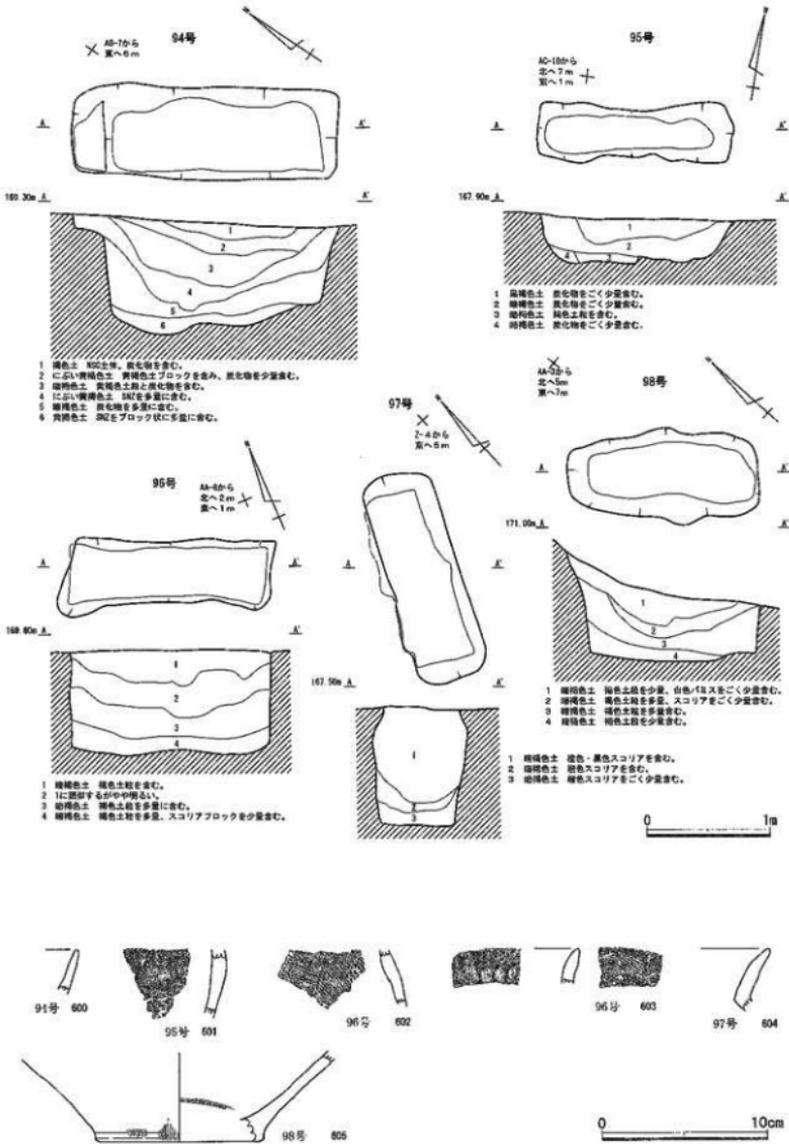
覆土2層より出土した613は、土師器環の口縁部片で、外面は横位のナデ、内面はミガキが施される。

95号土坑はAC10グリッド北西部に位置する。長軸1.6m、短軸0.5m、検出面からの深さ0.4mで、主軸方向はN-82°-Eである。

覆土4層より出土した601は、弥生土器または土師器甕の胴部片で、外面には縦位のハケ調整がなされている。



第139図 焼土集中地点



第140図 平面長方形の土坑と出土遺物

96号土坑はAA7グリッド南東部からAA8グリッド南西部に位置する。長軸1.6m、短軸0.5m、検出面からの深さ0.8mで、主軸方向はN-65°-Wである。

覆土1層中より出土した602は、土師器甕の胴部片である。内面は風化により器面の調整は、明らかでないが、外面は斜・横位のハケ調整がなされる。603は、ほぼ直立する土師器の甕または、甕の口縁部片で、外面は指ナデ、内面は横位のハケ調整がなされる。

97号土坑はY4グリッド北部に位置する。長軸1.7m、短軸0.6m、検出面からの深さ0.9mで、主軸方向はN-27°-Eである。

覆土1層より出土した604は、土師器甕の口縁部片である。内外面共に横位のナデ調整がみられる。

98号土坑はAA3グリッド中央部に位置する。長軸1.5m、短軸0.6m、検出面からの深さ0.8mで、主軸方向はN-42°-Wである。

覆土3層より出土した605は、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される甕の胴下位から底部片である。内外面共に風化により器面の調整は明らかでないが、胴最下位外面に縦位、内面に横位のハケ調整痕が確認される。

<第I章～第VI章 参考文献>

- 町田 洋 2006 「2-1富士山と周辺の火山」『日本の地形5 中部』東京大学出版会
- 池谷信之・増島 淳 2006 「アカホヤ火山灰下の共生と相克」『伊勢湾考古第20号』知多古文化研究会
- 木ノ内義昭 2002 「第VI章 考察 第1節 須恵器流入以降律令時代の土師器の様相 一主として富士帯推定地の出土遺物から一」『東平遺跡 第16地区（三日月庵寺跡）、第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 沼津市史編さん委員会 沼津市教育委員会編 2002 「沼津市史」資料編 考古 沼津市
- 赤坂 仁 1996 「器職 b・c 式土器の変遷過程」『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 山本恵一 1995 「静岡縣下の6～7Cの土師器 一駿河東部・伊豆北部の現状について」『東四土器研究』第4号 東四土器研究会
- 谷口麻浩 1989 「諸儀式土器様式」『縄文土器大観1』小学館
- 山本恵一 1989 「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」『沼津市博物館紀要』13 沼津市歴史民俗資料館
- 北川恵一 1988 「駿東遺」の初観と終末について。『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗資料館

紙面の都合上、調査報告書は割愛させていただきました

第VII章 調査の成果と課題

本報告書は、梅ノ木沢遺跡調査報告書3分冊のうちの第1分冊目にあたる。本書の中心となったのは縄文時代の遺構・遺物である。ここではこの縄文時代の出土遺物等に関して若干の考察を加えたい。

1 遺構

時期が決定できる縄文時代の遺構としては、早期～中期の住居跡がある。早期後半清水柳E類～野島式土器に伴うもの3基、茅山上層式期1基、木島式期1基、下吉井式期1基、前期後半諸磯b式期2基、中期後半のもの3基である。この他に住居跡は検出されなかったが、後期中葉の土器が集中して出土している地点を評価すれば、この狭い谷の中に早期～後期にわたって断続的に人間が生活した痕跡が残されていることとなる。

各住居跡は同時期内では切り合いを持たず、炉跡内の焼土層の形成が少ないのが特徴である。また、住居跡は少ないながらも、狭い範囲に多岐にわたる型式の土器が出土していることから、縄文時代をとおして、非常に小規模かつ、季節的・一時的な住居が継続的にこの地に営まれたことを示唆している。

当遺跡は南北西を尾根に囲まれた、2本の沢が合流する三角州状の平坦地に立地しており、遺跡からは周囲の台地上の状況は見る事が出来ないが、反対に台地の縁辺部に立つと遺跡の状況を非常によく観察することができる。このような立地の特殊性が、縄文時代を通じて、あるいはそれ以降にわたって土地の利用が継続された理由と考えられる。これまで台地上を中心として調査が進められてきた縄文時代の集落遺跡の立地を考える上で非常に興味深い例となろう。

一時的・小規模な集落としての遺跡の性格は、沢水の利用、石材の確保等が考えられるが、関連する遺構等の検出がないために推測することは難しい。

2 清水柳E類土器と野島式土器

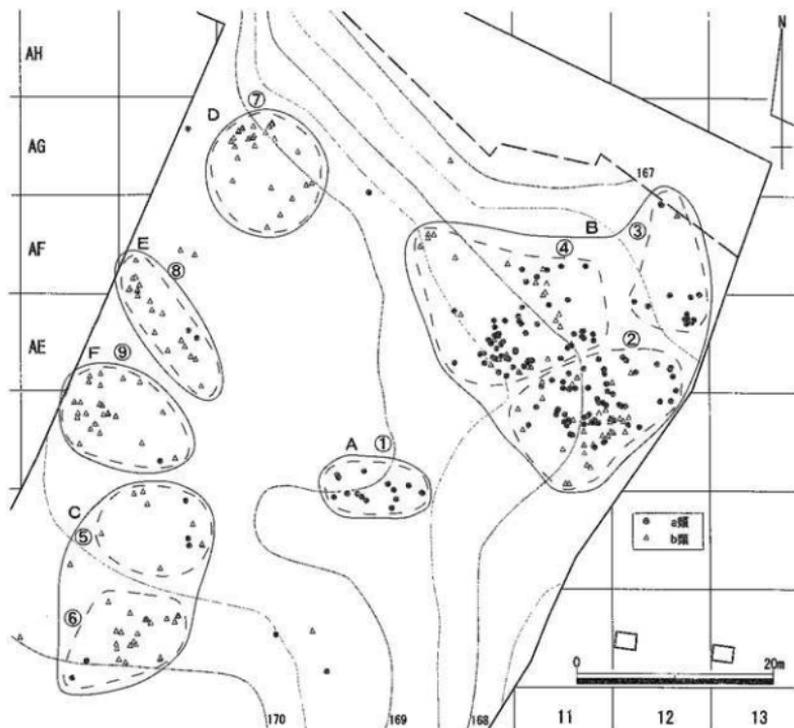
本遺跡で第II群a類、b類として分類した、清水柳E類土器と野島式土器の分布に興味深い結果が得られているため、以下に簡単にまとめる。

(1) 資料操作の方法

当遺跡の土器は、ドットによる取り上げ方式を採用している。調査の成果を見てみると、包含層といえども、破片資料の出土位置は各個体ごとにまとまりを示しており(第三章)、遺跡内では当時の原位置をある程度維持していることが明らかになっている。一方、1破片1ドットとなっているため、視覚的に非常に多くの土器が出土しているように見えても、実際には一個体が小破片に破砕して出土しているだけの場合も多い。

このような土器特有の出土状況を視覚的に整理するため、個体を推定しやすい口縁部破片を中心に出土遺物の集中地点を仮に①～⑨の9箇所に分け(第141図)、各個体の分布状況を表23にまとめた。この際、小片に分割されているものに関しては、各集中地点に2点以上出土しているものを○印として「出土地点」の評価をしている。その上で、複数個体間で接合関係が認められる集中地点を接合グループとして実際の集中地点としてまとめる作業を行った。これによって破片の出土状況を平均化し、なおかつ各個体の分布状況を客観的に捉える手段とした。

なお、個々資料の具体的な分布状況や接合状況については、第三章第50図に示してある。



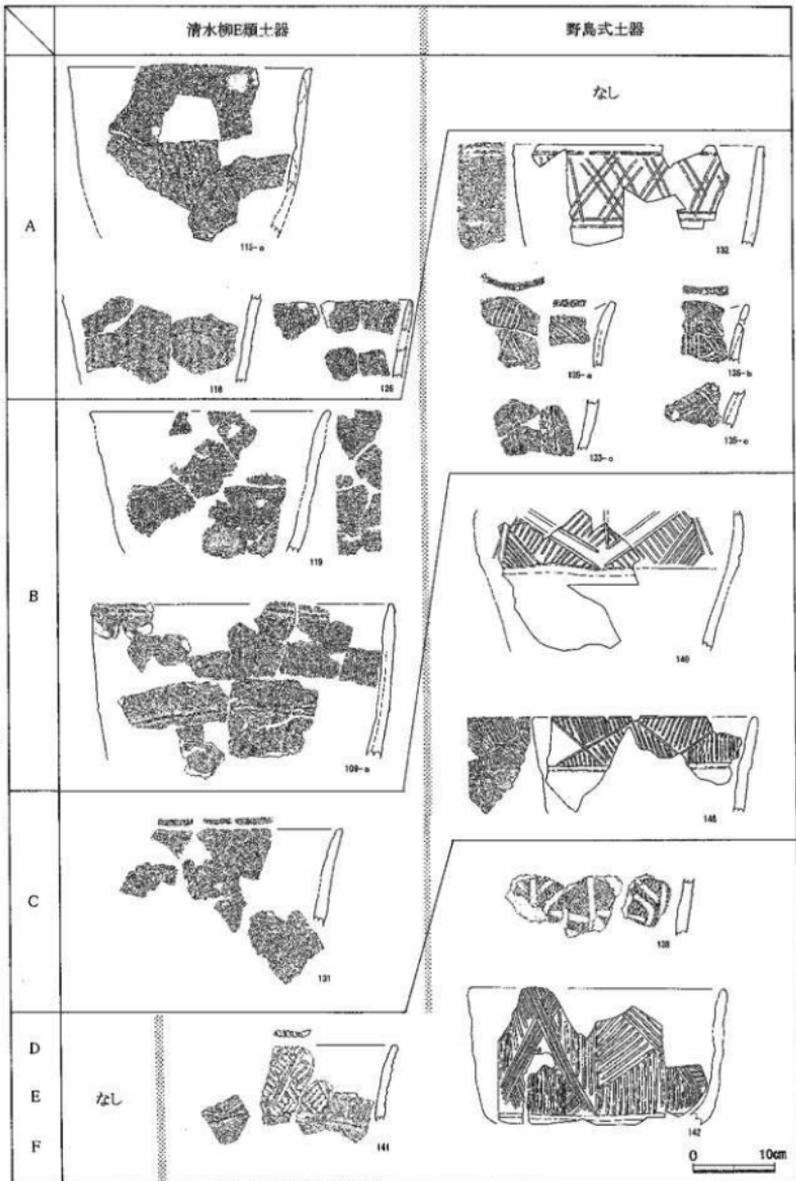
第141図 土層の出土状況とグループ化

表23 各層別土層出土状況総括表
清水増E層 (a層)

採合 グループ	検出No	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	
A	①																								
B	②																								
	③																								
	④																								
C	⑤																								
	⑥																								
D	⑦																								
E	⑧																								
F	⑨																								

野鳥式 (b層)

採合 グループ	検出No	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152		
A	①																							
B	②																							
	③																							
	④																							
C	⑤																							
	⑥																							
D	⑦																							
E	⑧																							
F	⑨																							



第142図 各接合グループに含まれる代表的な土器

(2) 出土状況

上記の方法で、Ⅱ群b類とc類が集中する地点は視覚的に9箇所にとまることができる。この9箇所の集中地点を土器の接合関係がより強いグループ(=土器の出土地点として評価できる範囲)にとまていく作業によって、大きくA~Fの接合グループに整理した。

各接合地点で出土している土器は以下のとおりである。

<Aグループ>清水柳E類土器のみの出土。細隆起線文を持たないものが3個体出土している。

<Bグループ>清水柳E類土器を多く含む。細隆起線文を持たないもの11個体、細隆起線文を持つもの6個体が含まれる。細隆起線文は、口唇部直下につくものと口縁部文様帯を区画して胴部につくものがあり、縦方向の区画も含まれる。

野島式土器は沈線文系のものが5個体出土しており、細隆起線文を持つものがある。出土量的には清水柳E類土器が卓越する。

<Cグループ>清水柳E類土器は1個体のみの出土となり、モチーフを持った沈線を含む。また、絡条体もこの沈線に沿って斜方向に施される。野島式土器は5個体が出土し、幾何学のモチーフ内を沈線で充填するものが中心である。

<D・E・Fグループ>清水柳E類土器は含まれない。野島式土器は、C地点と同じくモチーフ内を沈線で充填したものが6個体出土している。

(3) まとめ

上記のように、各地点で清水柳E類土器と野島式土器の組み合わせが抽出できた。野島式土器が含まれないグループに細隆起線文を持たない清水柳E類土器が存在し、細隆起線文がそれぞれに含まれる時期には、野島式土器の文様構成は単純な沈線文となる。また、文様帯に沈線を充填するタイプの野島式土器には清水柳E類土器はほとんど伴わないというのが当遺跡の結論である。

また、この2種類の土器は独自に変化しているのではなく、特定の文様要素(細隆起線文、沈線)を共有しつつ変化しており、胎土も非常に類似している。よって絡条状体瓦痕文が施されているか否かという文様の特徴の一点をもって型式分類していくという作業はいささか乱暴のように思える。

梅ノ木沢遺跡の野島式土器の中には、細隆起線文で幾何学文様を描くタイプのものが含まれていないため、供伴関係の説明としては不完全なものとなっているが、出土状況が良好な遺跡を抽出し、集めていくことで、清水柳E類土器と野島式土器の関係が今後明らかになってくるものと考えている。

著者は、過去にも小池遺跡(三島市)、徳倉B遺跡(三島市)で清水柳E類土器と野島式土器の調査に携わってきたが、斜面地ということもあって、遺跡の土層堆積状況が非常に悪く遺物が原地点から移動してしまっているという感想を持っていた。その状況は、一箇体の土器が広範囲に分散して出土していることから推察できる。早期という遺構が少ない時期において、土器型式の共時性を述べる為には包含層出土地点の情報も有用である。そこで出土状況が良好な当遺跡において、さらに供伴関係の信憑性を高める為に接合グループでの抽出を試みたわけである。

今回提示したグループ間の相違が時期差となるか、集団の差となるかは今後の課題とし、両類土器の供伴関係の一例として提示したい。

写真図版



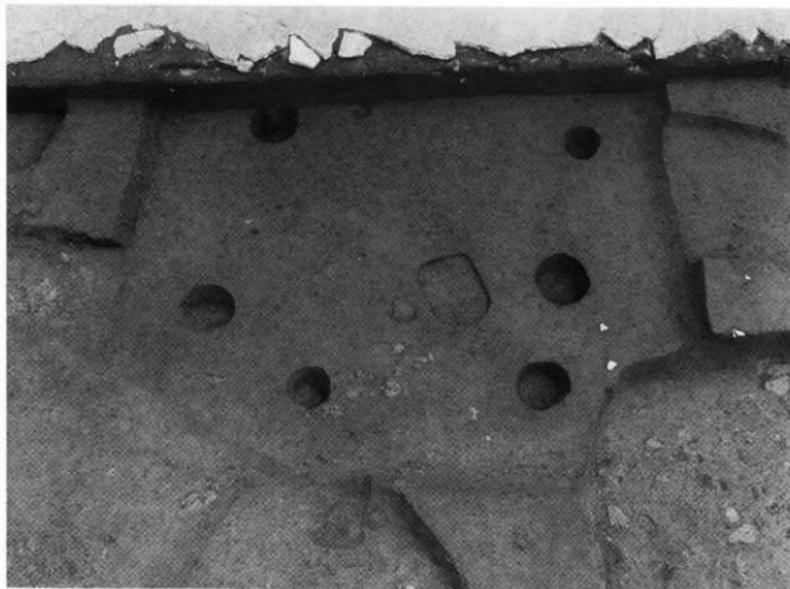
調査区北西愛鷹山を望む



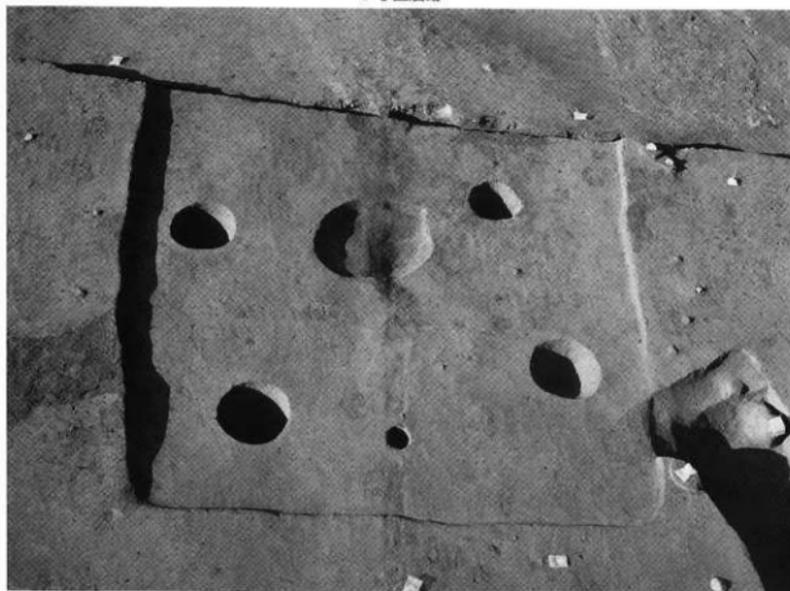
1号住居跡



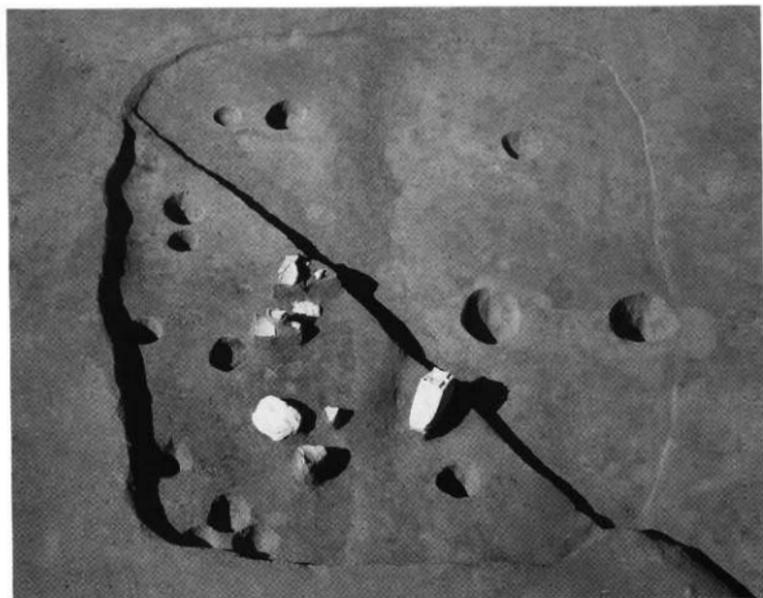
2号住居跡



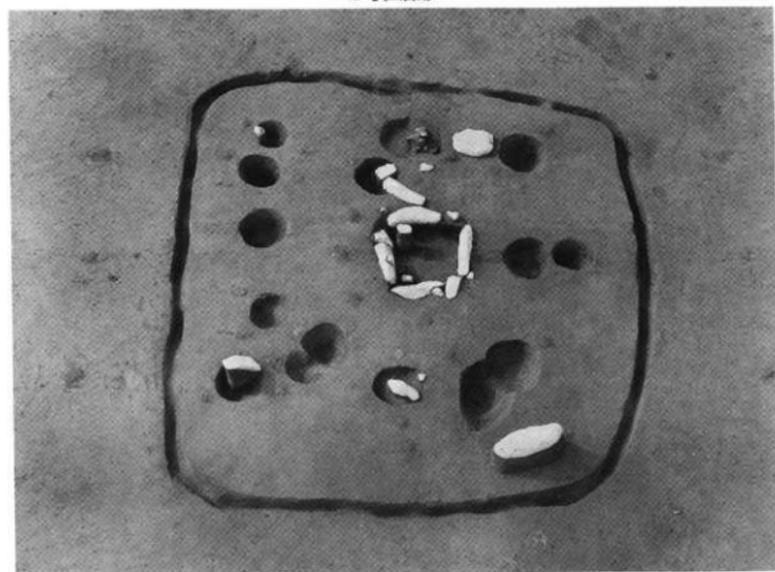
5号住居跡



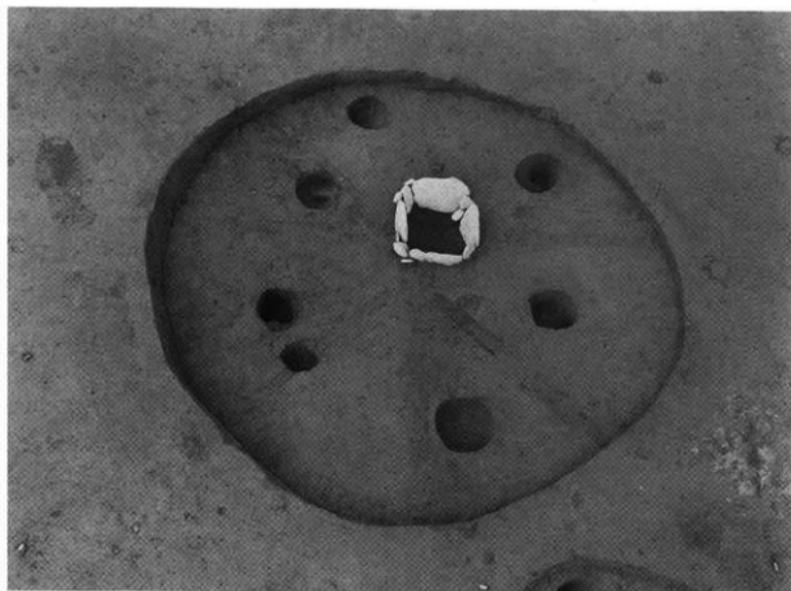
7号住居跡



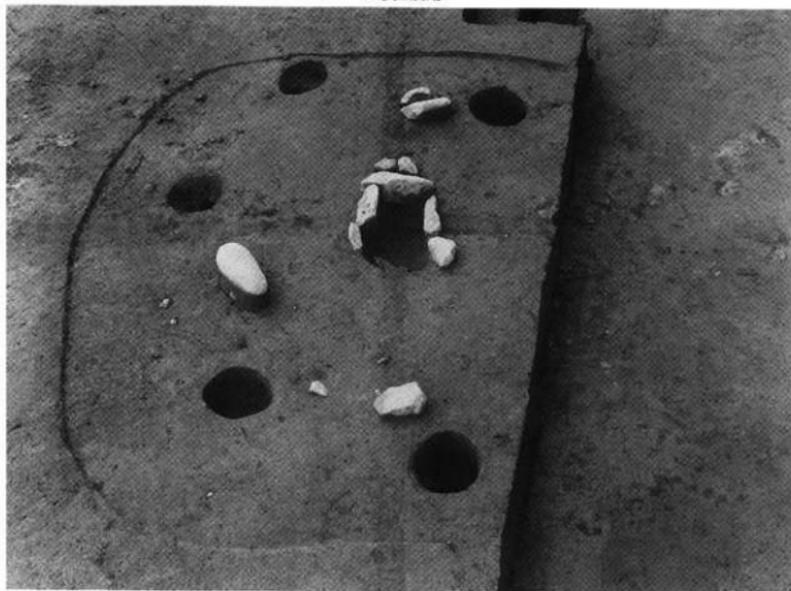
8号住居跡



9号住居跡



10号住居跡



11号住居跡



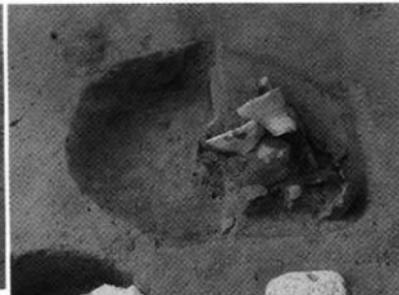
9号住居跡石囲炉



10号住居跡石囲炉



11号住居跡石囲炉



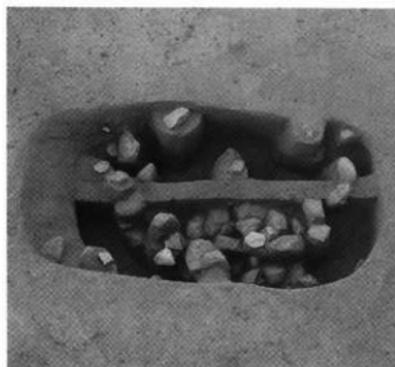
9号住居跡土器出土状況 (40)



第II群土器出土状況 (109)



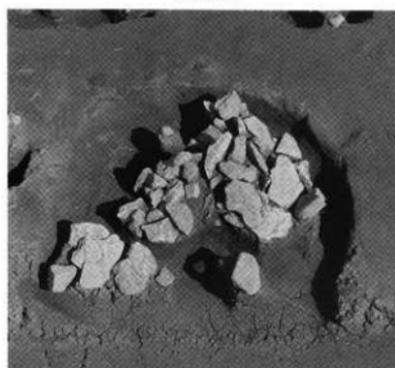
4号住居跡土器出土状況 (18)



1号集石



2号集石



3号集石



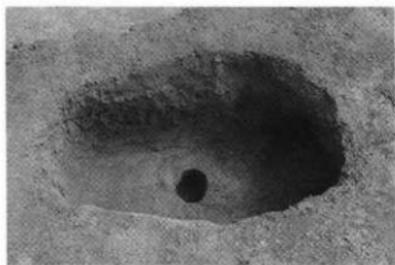
4号集石



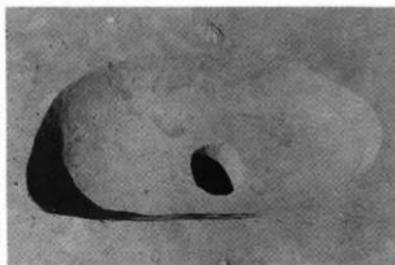
13号集石



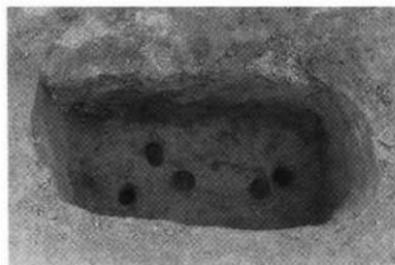
14号集石



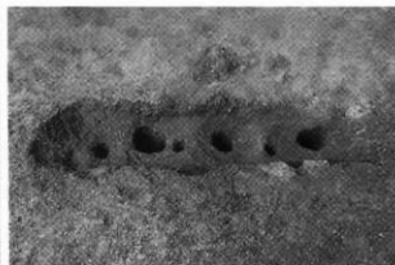
1号土坑



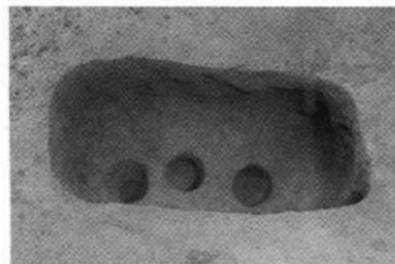
5号土坑



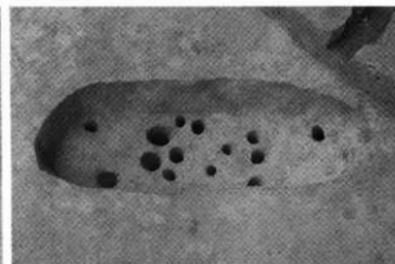
11号土坑



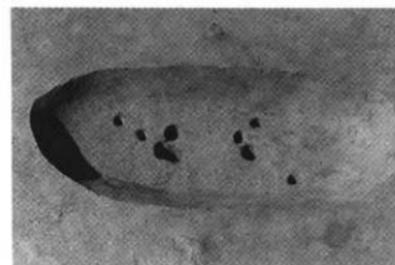
13号土坑



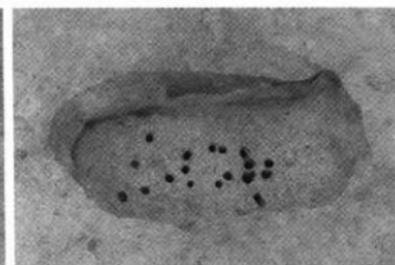
15号土坑



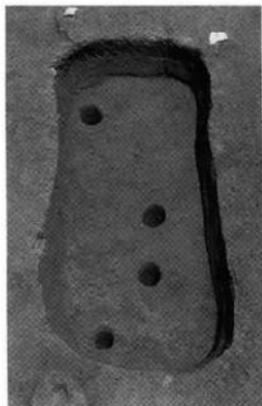
22号土坑



24号土坑



29号土坑



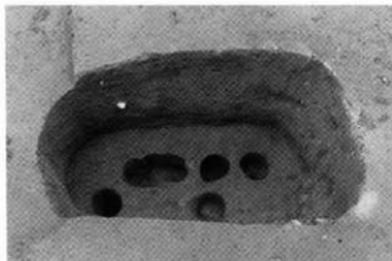
14号土坑



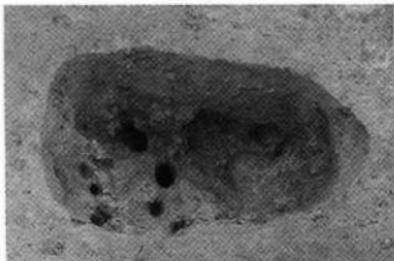
21号土坑



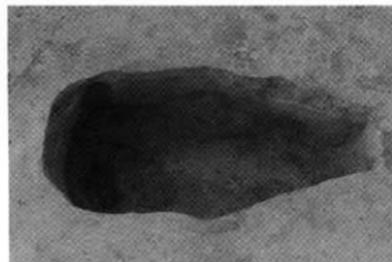
45号土坑



31号土坑



32号土坑



51号土坑



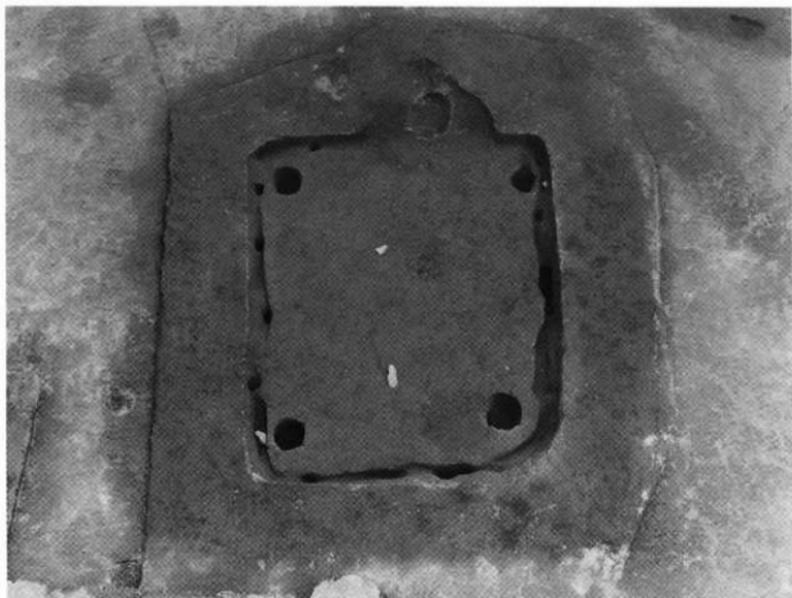
59号土坑



13・14号住居跡



16・17号住居跡



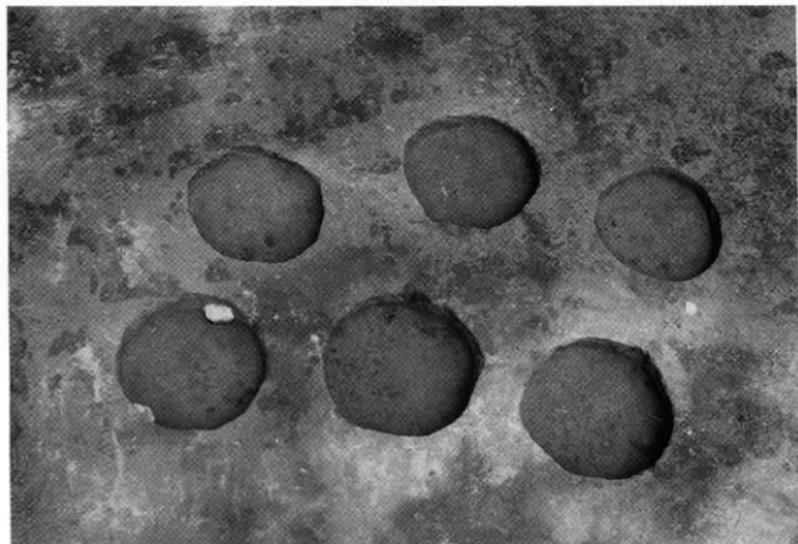
15号住居跡



溝状道路遺構



掘立柱建物跡



円形土坑 (64号~69号)



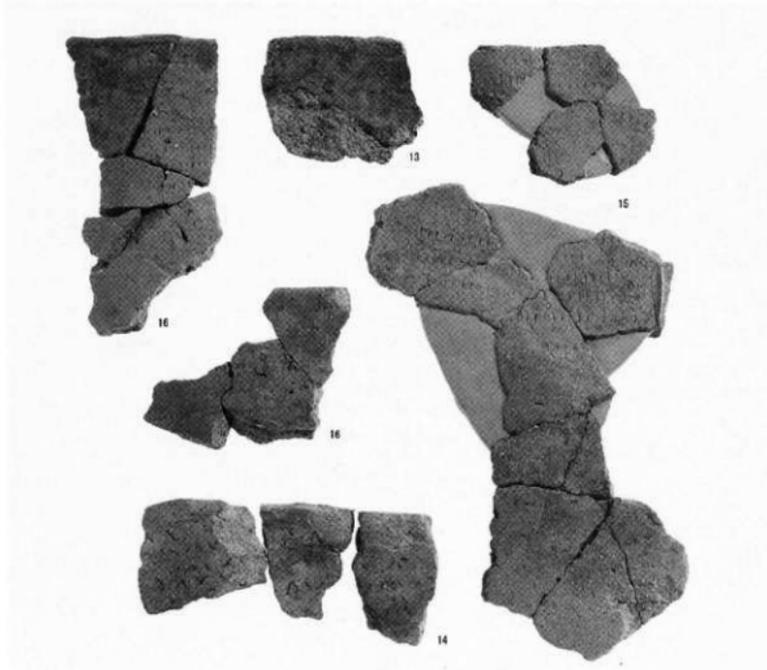
1号住居跡出土土器



住居跡出土石鏃



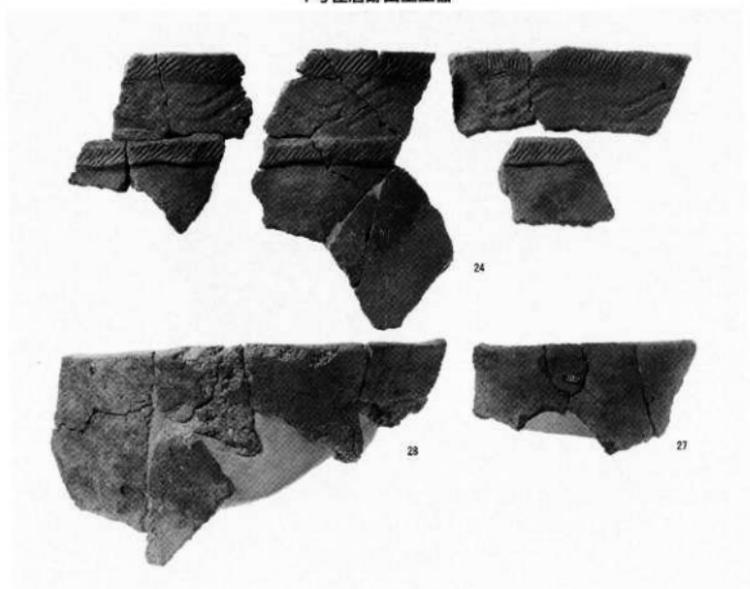
2号住居跡出土土器



3号住居跡出土土器



4号住居跡出土土器



6号住居跡出土土器



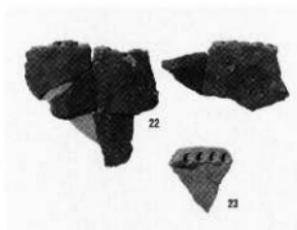
8号住居跡出土土器



7号住居跡出土土器



10号住居跡出土土器



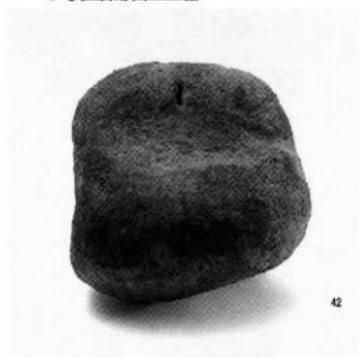
5号住居跡出土土器



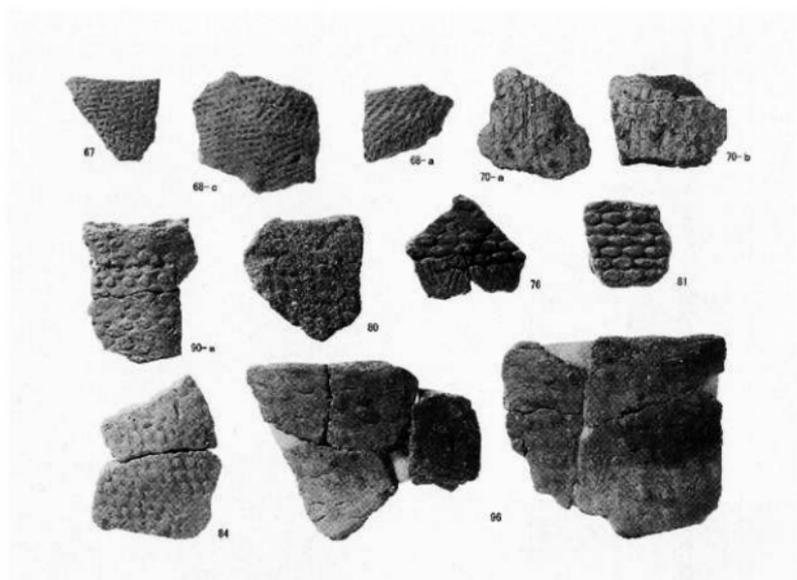
9号住居跡出土土器



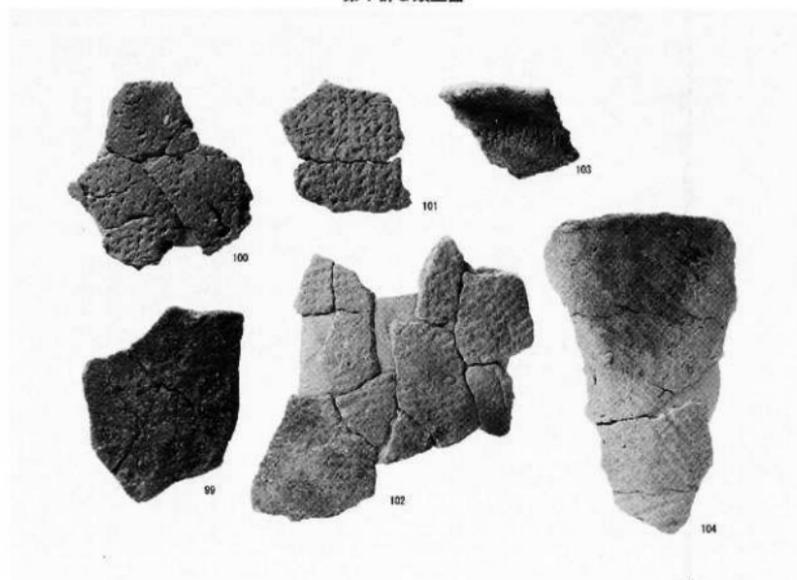
10号住居跡出土石斧



9号住居跡出土陰石



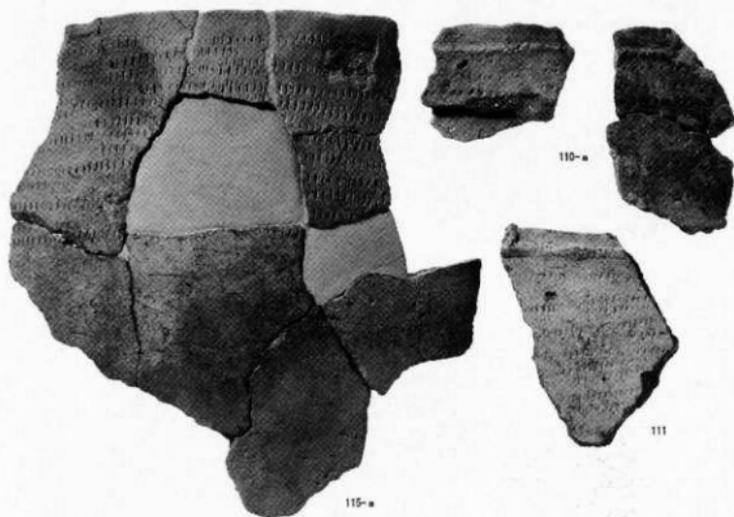
第I群d類土器



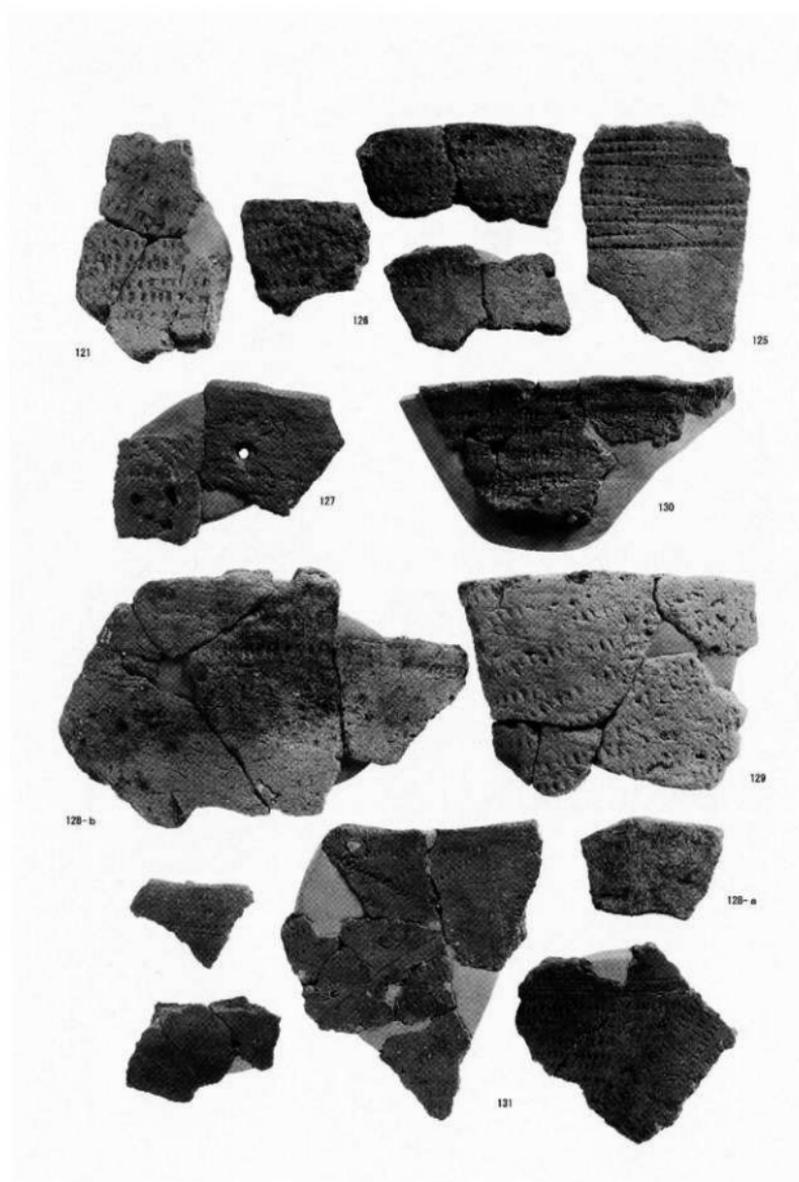
第I群b・c類土器



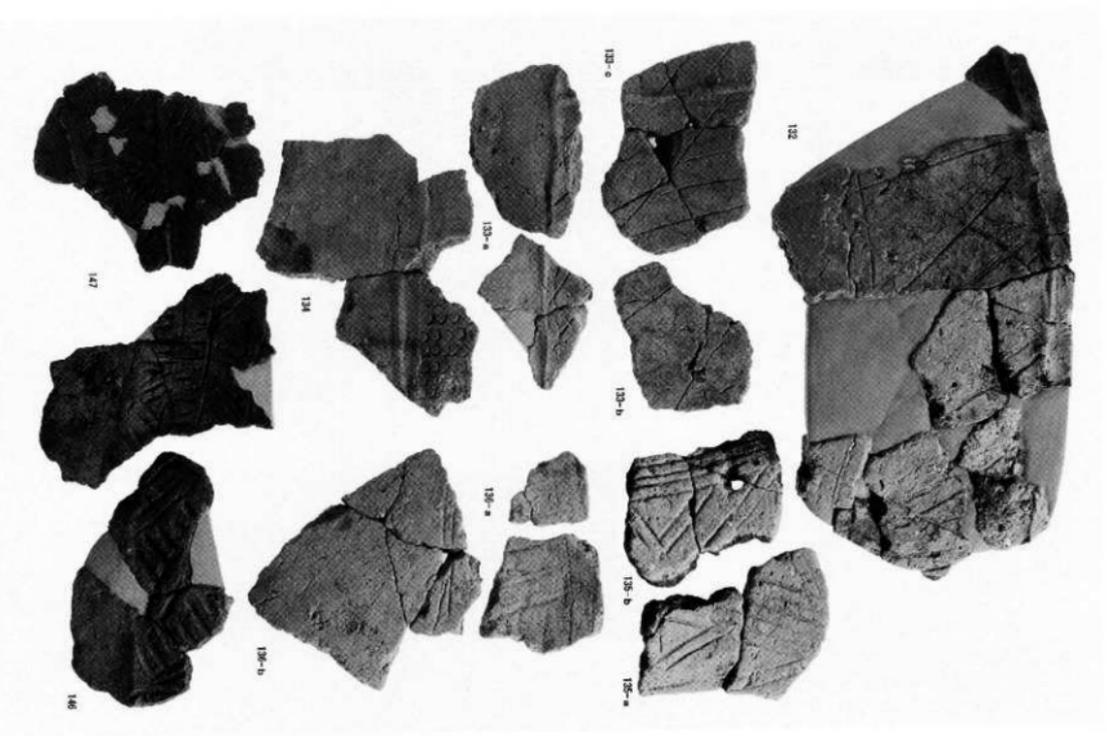
第II群a類土器(1)



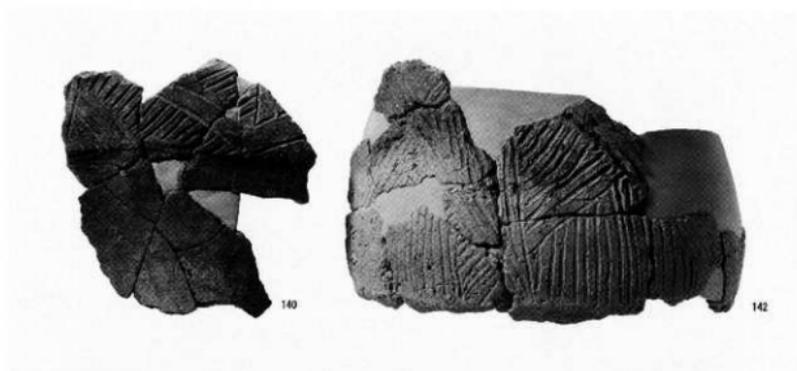
第II群a類土器(2)



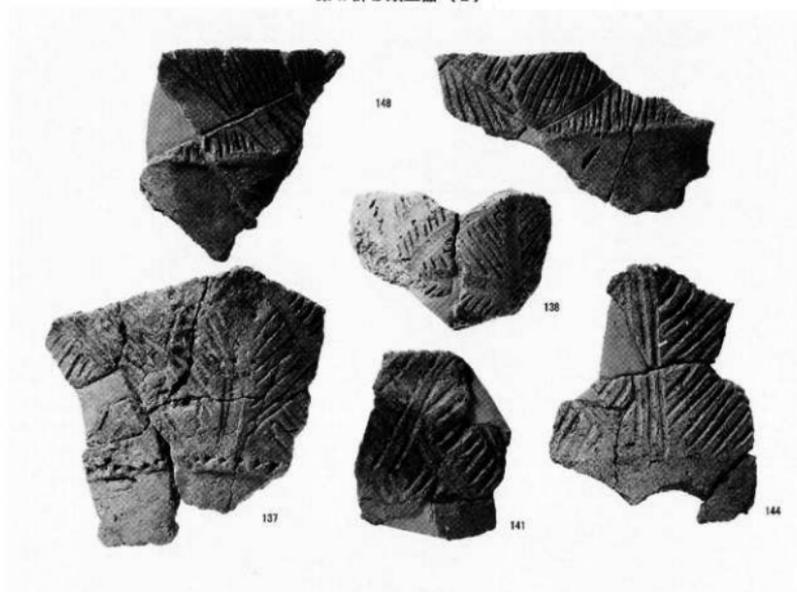
第II群a類土器(3)



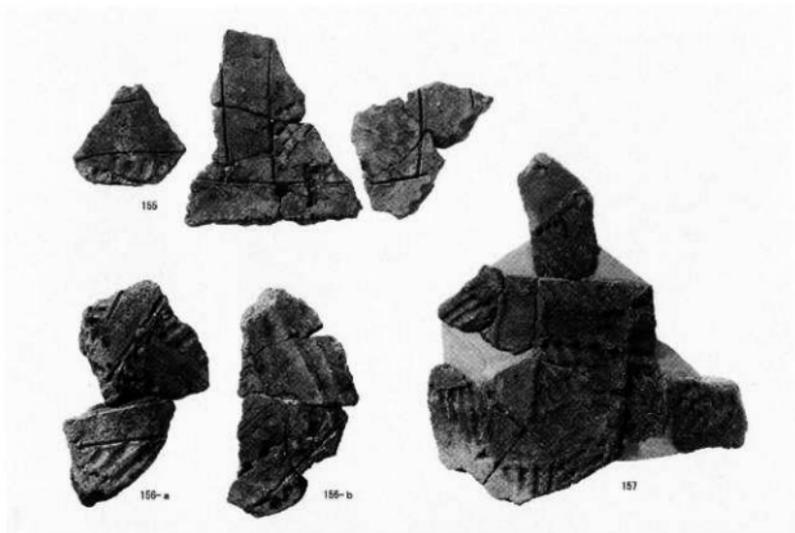
第II群b類土器 (1)



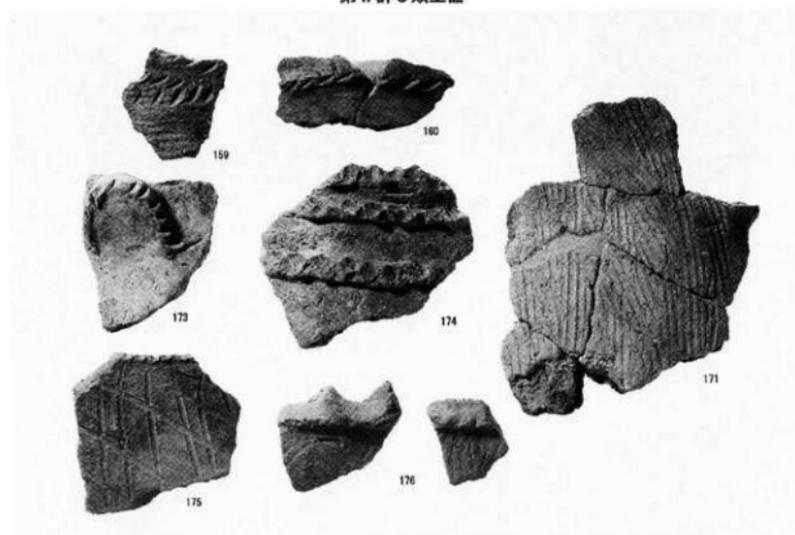
第II群b類土器(2)



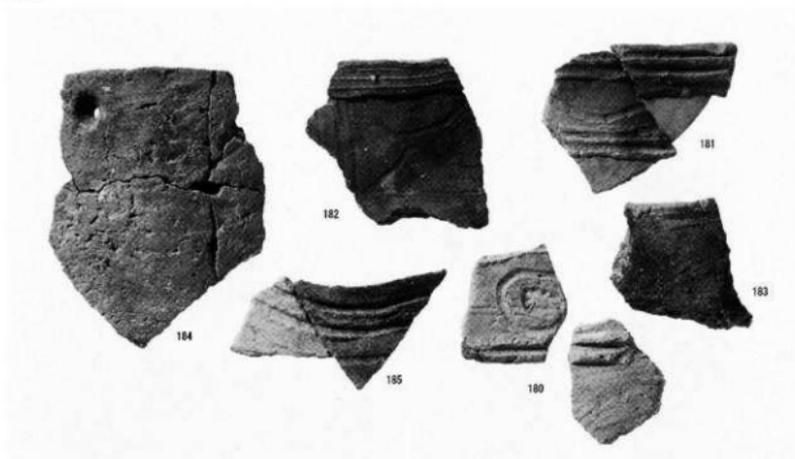
第II群b類土器(3)



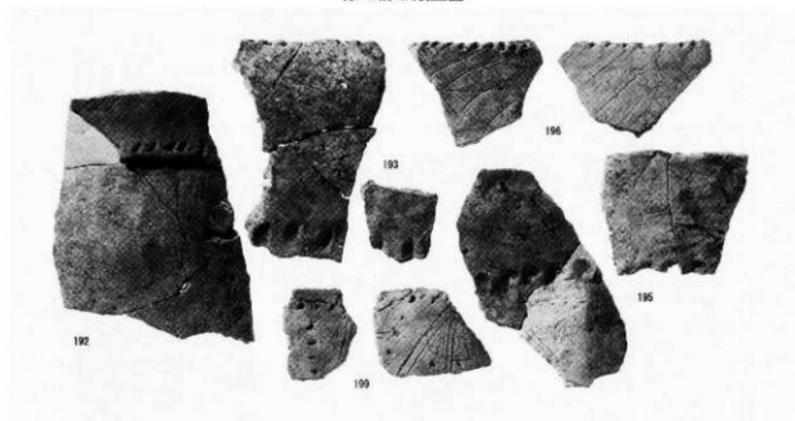
第II群c類土器



第II群d・f～h類土器



第III群 a類土器



第III群 b類土器



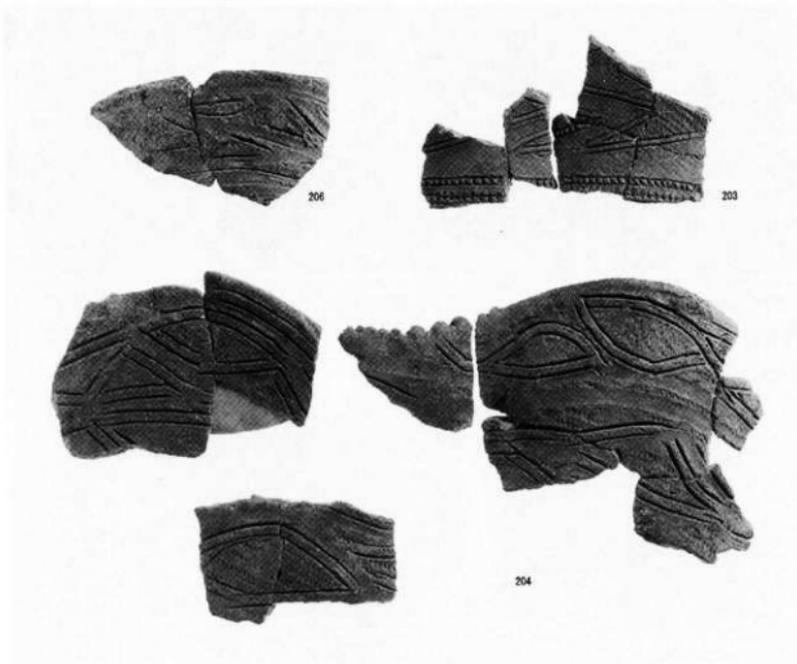
第II群 e類土器



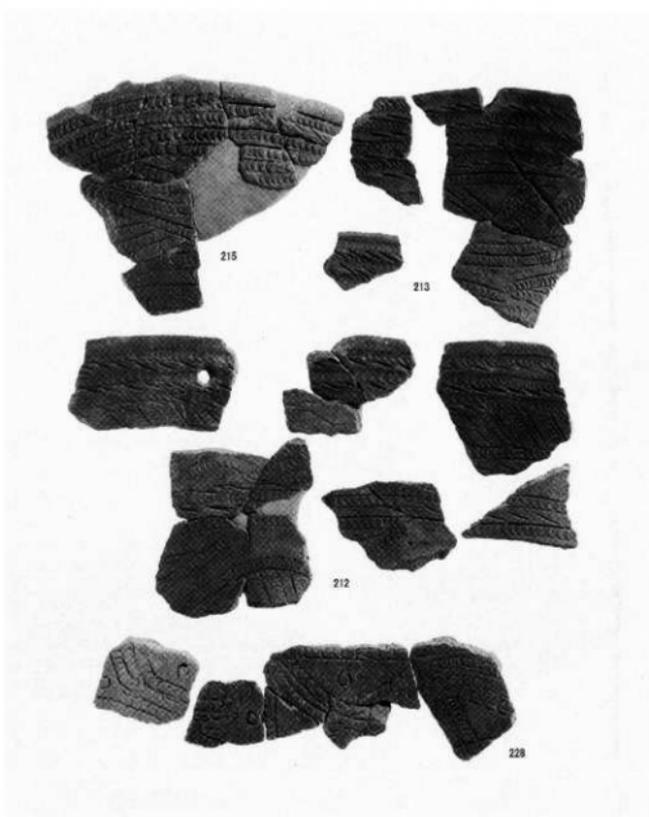
第IV群 f 類土器



第IV群 a 類土器



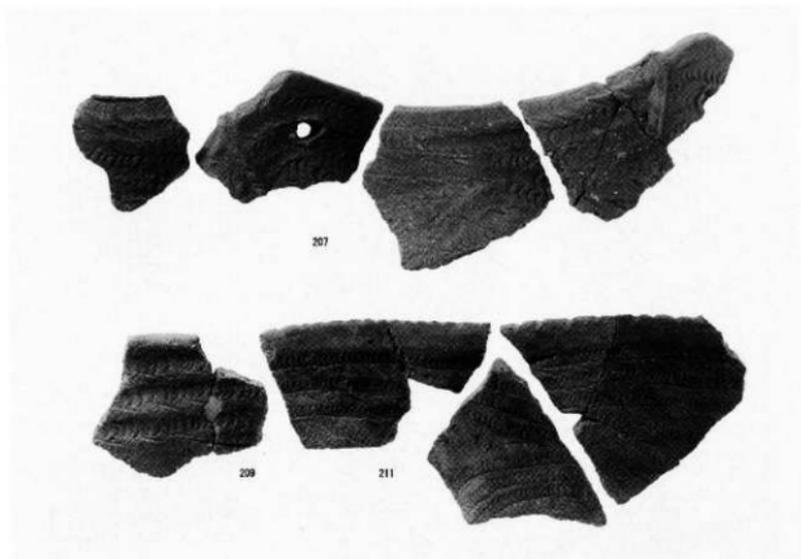
第IV群 b・c 類土器



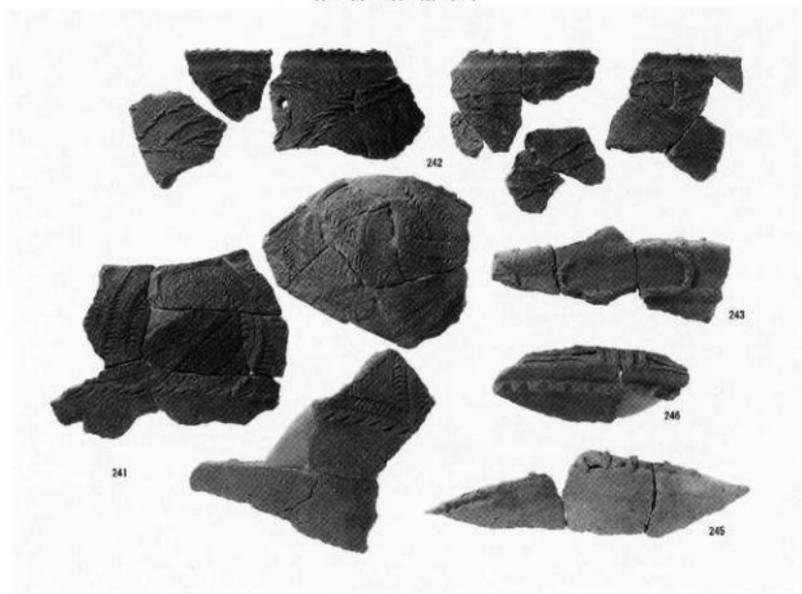
第IV群c類土器(1)



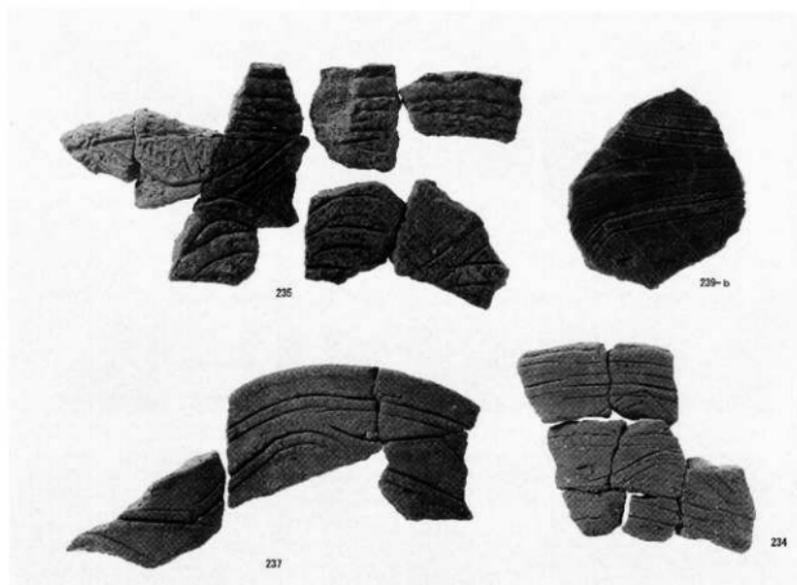
第IV群c類土器(2)



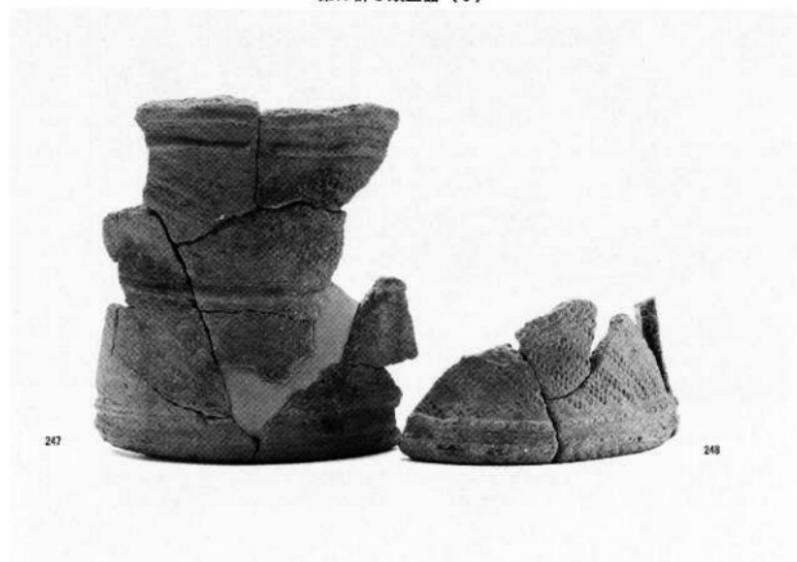
第IV群c類土器(3)



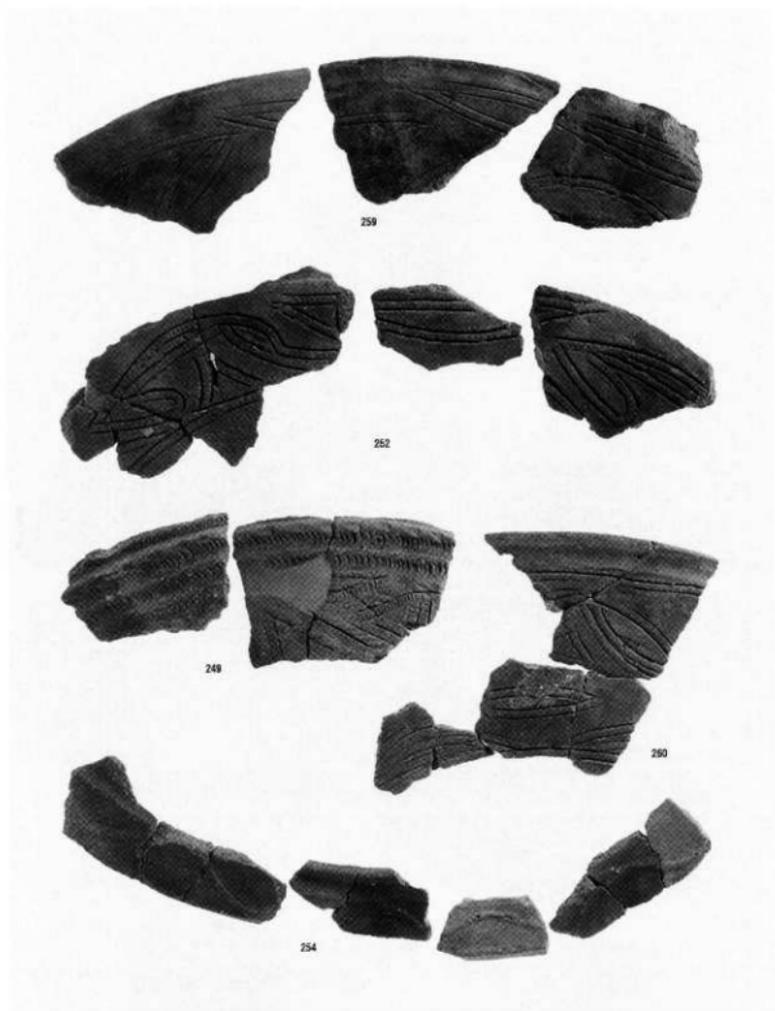
第IV群c類土器(4)



第IV群c類土器 (5)



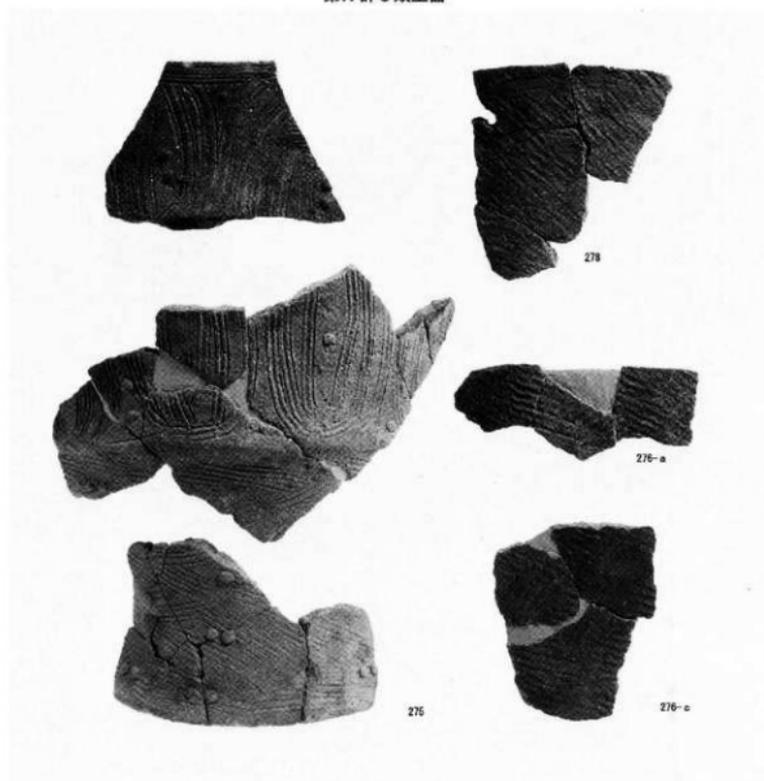
第IV群c類土器 (6)



第IV群c類土器(7)



第IV群 e 類土器



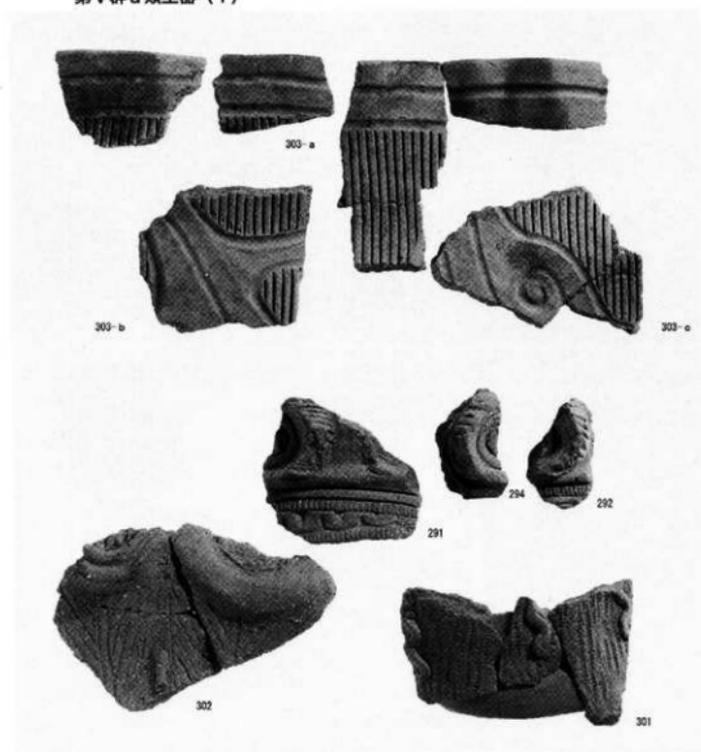
第IV群 d 類土器



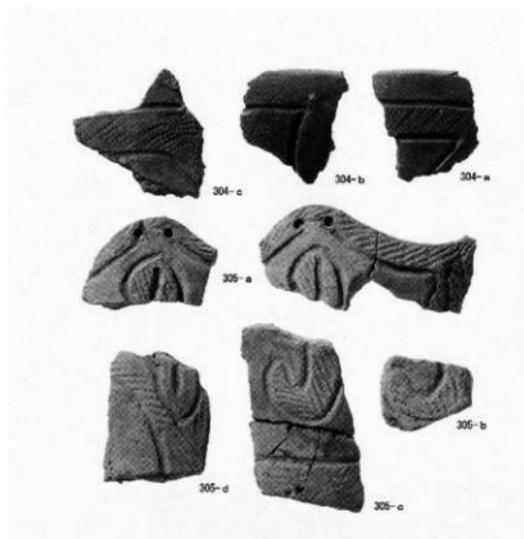
第V群a類土器(1)



第V群a類土器(2)



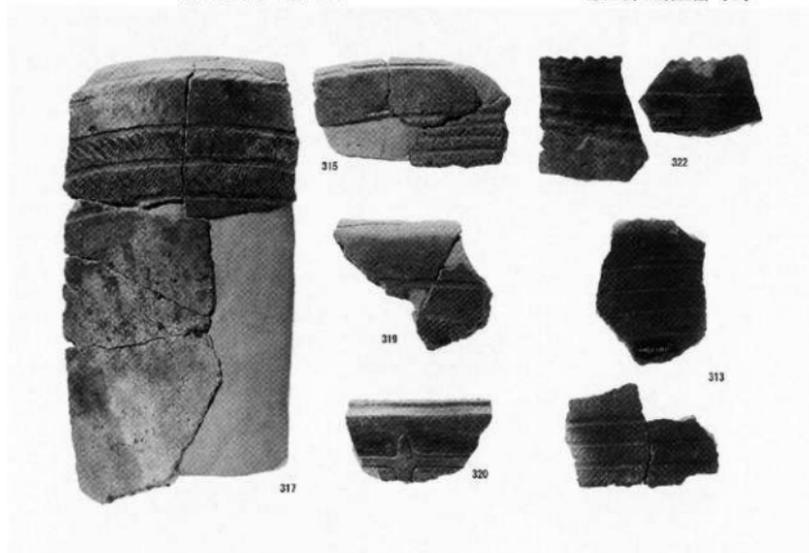
第V群b・c類土器



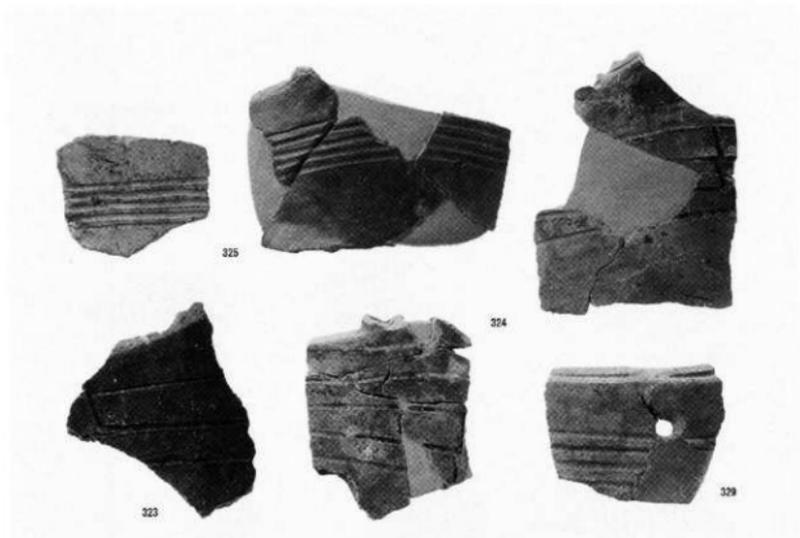
第VI群 a 類土器 (1)



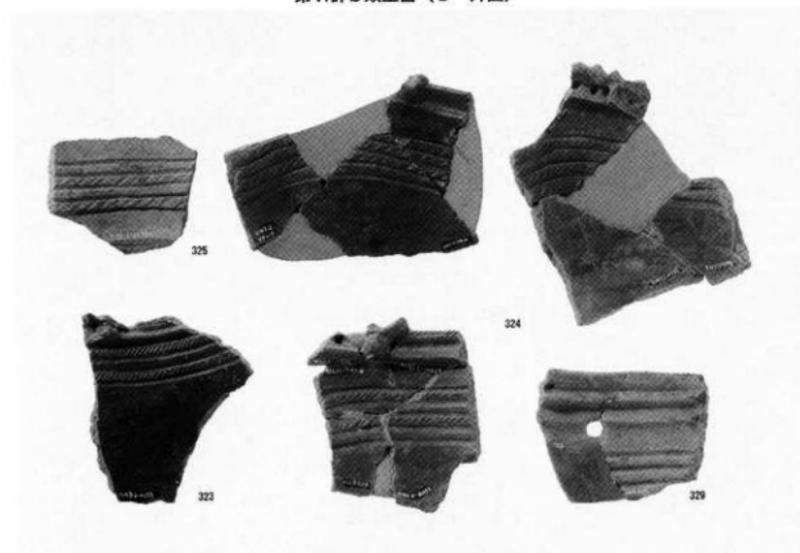
第VI群 a 類土器 (2)



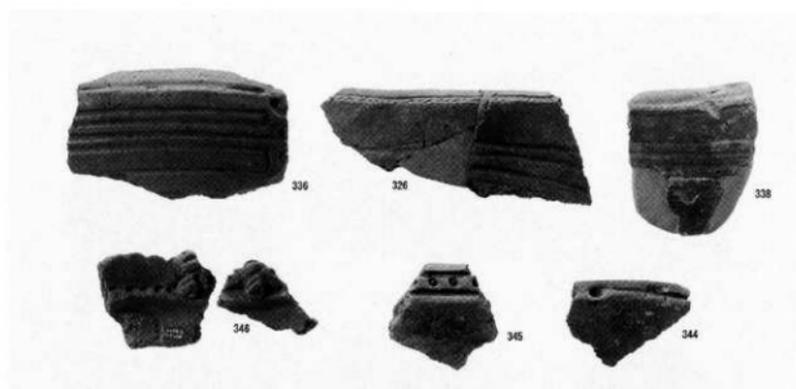
第VI群 b 類土器 (1)



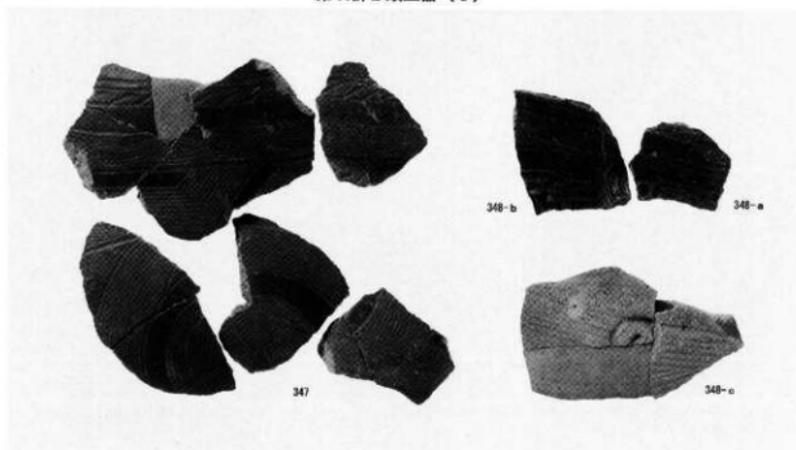
第VI群b類土器（2・外面）



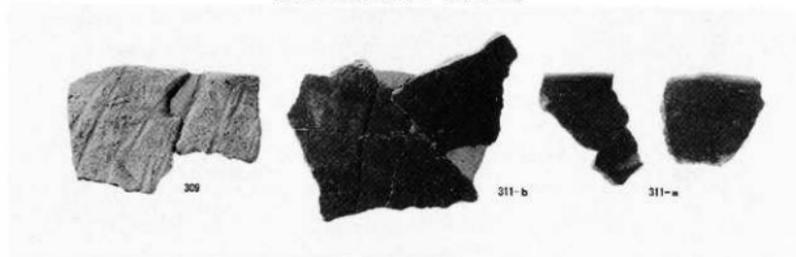
第VI群b類土器（2・内面）



第VI群b類土器 (3)



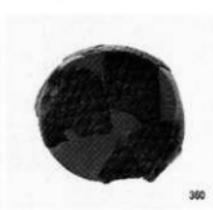
第VI群b類土器 (4・注口土器)



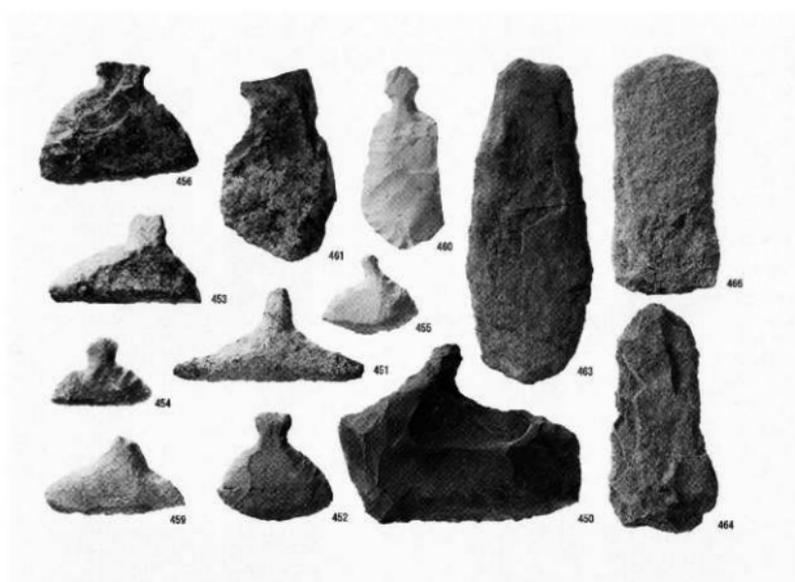
第VI群a類土器



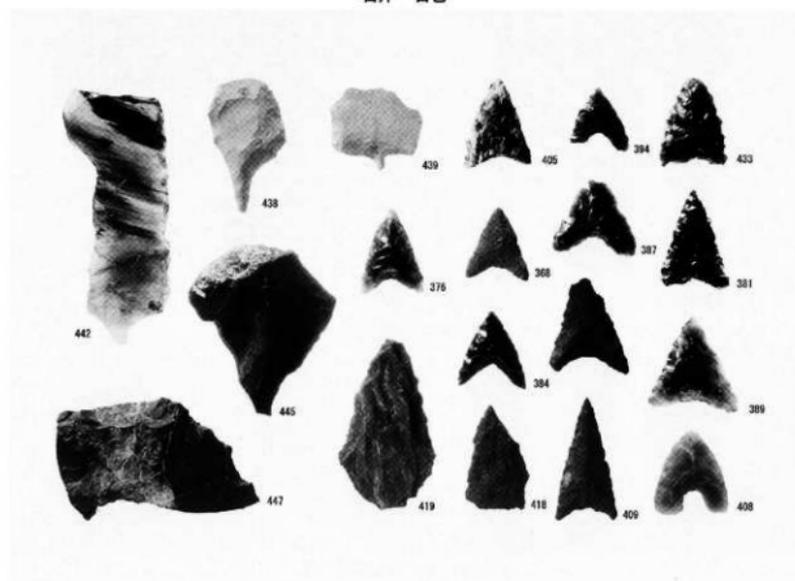
第VI群b類土器



第VI群b類土器底部網代痕



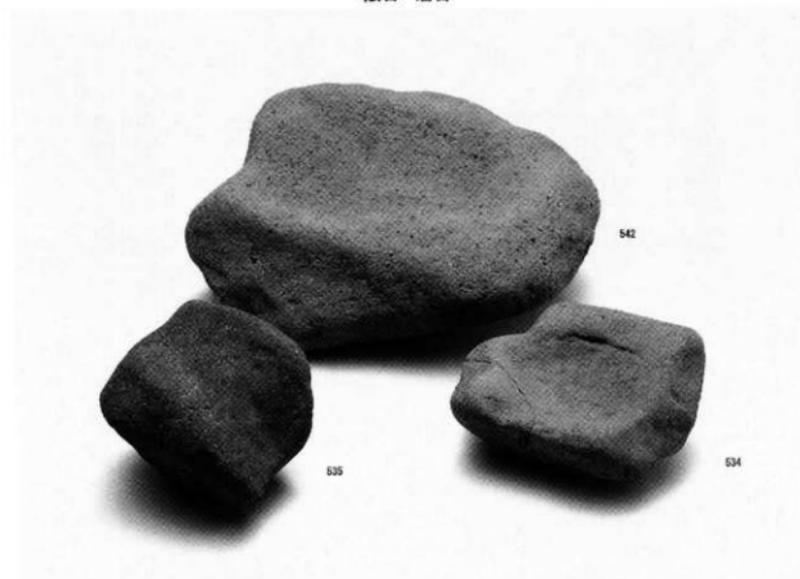
石斧・石ヒ



石鏃・石錐・スクレイパー類



敲石・磨石



台石・石皿



591

13号住居跡出土土器 (1)



592

13号住居跡出土土器 (2)



594

13号住居跡竈出土土器



597

包含層出土土器



596



597



598



599

石鏃



599

刀子形

報告書抄録

ふりがな	うめのきざわいせき							
書名	梅ノ木沢遺跡Ⅰ（縄文時代以降編）							
副書名	第二東名建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	長泉町-3							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第194集							
編著者名	笹原千賀子／岩名建太郎／及川 司／鈴木里江							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261（代表）							
発行年月日	平成20年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
うめのきざわ 梅ノ木沢	静岡県駿東 郡長泉町 東野83-6 他	342		世界測地系		2001.4 ～ 2003.2	8,325 ㎡	道路建設 （第二東 名建設工 事に伴う 埋蔵文化 財発掘調 査）
				35°11'16"	138°52'59"			
				日本測地系				
				35°11'04"	138°53'10"			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
梅ノ木沢	集落	縄文早期～後期	竪穴住居跡、土坑	野島式土器・清水柳E類土器・諸磯b式土器・加曾利B式土器、石鏃、打製石斧、石ヒ				
		弥生～古墳	竪穴住居跡	土師器、磨製石鏃、刀子形石製模造品				
		奈良・平安	竪穴住居跡	土師器、駿東型甕				
		中近世	溝状遺構、円形土坑、掘立柱建物跡	寛永通宝				
要約	縄文時代早期～後期、弥生時代末～古墳時代、奈良・平安時代にわたる遺跡である。尾根に挟まれた谷中に立地する遺跡のためか、小規模な集落が長期間にわたって営まれてきた。縄文時代は、晩期を除いて各時期に出土遺物があるが、全体的に打製石斧等の生産具が非常に少ない点の特徴である。弥生時代以降では、周辺に集落の発見がないこと、石製模造品の出土や土器の器種組成の偏りから、祭祀関連の遺跡としての検討も必要である。							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第194集

梅ノ木沢遺跡 I

(縄文時代以降編)

第二東名No.143-2地点、CR35地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年9月30日発行

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266

印刷所 松本印刷株式会社
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL 0548-32-0851(代)

